生き方・人生

２０１３～２０１５年

２０１９年１０月編集発行

私のブログ「田舎暮らし・人生創造・浅野誠」、その後継版「沖縄南城・人生創造・浅野誠」では、「生き方・人生」テーマにかかわる記事が多い。それらを編集して、冊子のようにして，このＨＰに掲載したのは、次のものだ。

「若者の生き方シリーズ」　１　人間関係　大人側の若者への対し方
２　学ぶ・働く・お金・文化スポーツ・旅移住
３　進路創造・仕事
４　若者の人生創造

「人生・生き方シリーズ」　１　人生後半期の人生創造
２　人間関係・家族・移住・多文化
３　社会のあり方と生き方――スローライフ――

以上は、２０１３年３月までの、旧ブログ「田舎暮らし・人生創造・浅野誠」掲載のものである。

今回からは、２０１３年4月からの新ブログのなかで「生き方・人生」カテゴリーで掲載した記事について、掲載順に作成することにする。その第一号となる今回は、「２０１３～２０１５年」記事だ。それ以降は、追って編集発行する予定だ。

目次　（ブログ掲載の新→旧の順に配列）

「テーゲー」「あいまいさ」を大切に　2015 年 11 月 16 日
「決断しないの」「やるの　やらないの」「どっちにするの」などと迫られて困る時　2015 年 11 月 13 日
高齢者人生　島田裕巳「死に方の思想」　2015 年 11 月 01 日
中部地区公民館研究大会での私の「指導助言」発言内容　2015 年 10 月 24 日
日本生活指導学会第３３回大会で感じたこと考えたこと　2015 年 09 月 20～26 日
　３．コミュニティ　地元つながり
　２．多様な生き方の創造へ
　１．人々の生き方
　※　次の２点は、本巻のテーマとの関係が深いが、「地域おこし　これからの社会・世界　２０１３～２０１７」(2018 年 3 月編集刊行）に収録したので、参照されたい
　広井良典「ポスト資本主義」岩波新書２０１５年を読む　2015 年 09 月 30 日～10 月 9 日
　山下祐介「地方消滅の罠―「増田レポート」と人口減少社会の正体」ちくま新書 2014 年を読む 2015 年 9 月
小池龍之介「しない生活　煩悩を静める１０８のお稽古」幻冬舎２０１４年を読む　2015 年 08 月 20 日
杉田真衣「高卒女性の１２年――不安定な労働、ゆるやかなつながり」大月書店２０１５年を読む　2015 年 08 月 16 日
礫川全次「日本人はいつから働きすぎになったのか　<勤勉>の誕生」平凡社２０１４年を読む　2015 年 03 月 23 日～29 日
　３．勤勉と働きすぎ　勤勉と怠惰
　２．「勤勉」と「働きすぎ」の混同
　１．明治三〇年代に「勤勉な農民」が多数派になった
年寄りの生き方　2015 年 02 月 03 日～03 月 11 日
　６．健康寿命を越えてからの生活構想
　５．過去の思い出と再会　７０歳代以降のつながり作り
　４．老前整理
　３．周りから「敬老の心」をもって扱われる時の対応
　２．自分の体の弱点・いたわり方を知る
　１．年寄りの生き方　援助協力を頼むワザと姿勢がポイント　ラクラクホン
児美川孝一郎「キャリア教育のウソ」を読む　「ストレーター」用語が使われている　2015 年 02 月 11 日
沖縄の長寿問題　2015 年 01 月 23 日
藤田孝典「下流老人　一億総老後崩壊の衝撃」を読む　2015 年 01 月 6～08 日
　２．生活保護　下流老人に陥る危険性　経済的事情で大学進学断念の増加
　１．身近で我が事の問題
「富裕層」について考える　2015 年 01 月 3～07 日
元大学教員の退職後生活　2014 年 12 月 30 日

保坂隆「自分らしい“人生の終い方”」２０１４年三笠書房を読む　2014 年 10 月 04～7 日
イケダハヤト「新世代努力論」朝日新聞出版２０１４年を読む　2014 年 09 月 26 日～10 月 2 日
澤田佳世「戦後沖縄の生殖をめぐるポリティクス」（大月書店２０１４年）を読む　2014 年 09 月 17 日～22 日
生活指導学会報告　2014 年 09 月 04 日～08 日
　３．全体会　「生活変容」
　２．私の「地域起こしと人生創造――沖縄県南城市での事例をもとに――」の発表
　１．沖縄の若者の生き方をめぐって
長沼博之「ワークデザイン」を読む　2014 年 08 月 30 日
チキリン「未来の働き方を考えよう」を読む　私の考えと実践と共通　2014 年 08 月 22 日
「オムツ党走る」　こんな面白いものを見るのは久しぶり　2014 年 08 月 04 日
佐藤幹夫「ルポ高齢者ケア」（筑摩書房２０１４年）を読む　2014 年 07 月 16～19 日
藻谷浩介・ＮＨＫ広島取材班「里山資本主義」角川書店２０１３年を読む　2014 年 06 月 04 日
五木寛之「新老人の思想」幻冬舎２０１３年を読む　2014 年 05 月 13～１５日
　３．死　医療　『逝き方上手』
　２．後半期の人生
　１．老
生き方を変える・創る　2014 年 04 月 26 日～2015 年 11 月 30 日
　５６．家族などの人間関係を豊かに創造する
　５５．若者たちの人生創造への挑戦
　５４．一本筋の、一つきりの人生ではない　いくつもの職業を経験
　５３．標準の流れでやっていける流れが制限され縮小されてくる
　５２．大衆的青年期と標準コースの設定
　５１．宿命人生から作る人生へ
　５０．日本本土を追いかける顔と独自創造の顔の二つをもつ沖縄における変化
　４９．これまでの標準とは異なるありようの創造へ
　４８．経済成長が止まる　移行における激動
　４７．高度経済成長時代　人生コースの標準化
　４６．連載の今後　権力権威に従う生き方
　４５．研究者の人生その４　アイデンティティ　テーマ変化　年齢
　４４．研究者の人生その３
　４３．研究者の人生その２
　４２．研究者の人生その１
　４１．人生研究へのアプローチ
　４０．世代別の検討
　３９．仕事と余暇・「余生」など
　３８．仕事と仕事以外の二分論

３７．「定常型社会」の生き方　広井良典「定常型社会」を読む
３６．効率主義と手作り・創造の生活
３５．効率主義による生活支配から脱け出る
３４．時間感覚　季節感覚
３３．人間関係の創造
３２．政治参加
３１．生き方と政治
３０．やり過ごす　雑　やる気
２９．幸福を追求する　幸福である　幸福でいる
２８．「新しさ」ではなく「親しさ」を
２７．楽しい不便　情報量の減少をプラスに考える
２６．する　しない　しなくてもいい　テーゲー
２５．する　いる　がんばる　分かち合う　あきらめる
２４．しないこと　いること　死　農　医
２３．する　いる　しない　休む
２２．「しないこと」リスト　自由競争から退く
２１．職業と家事育児介護の区分対比の問題性
２０．職業と余暇・余生という二分論
１９．多様な活動の中の一つとして職業を位置付ける
１８．人生のなかで職業が占める時間は２割以下
＜特別＞　辻信一「「しないこと」リストのすすめ」（ポプラ新書２０１４年）を読む
１７．商品金銭過剰依存からの卒業
１６．不要のものを買って商品に支配される
１５．商品金銭過剰依存、右上がり成長への囚われ
１４．自然に合わせる　自然に逆らう　自然と関係ない
１３．自然の流れと波長を合わせて生きる
１２．自己治癒力と医療
１１．自己の身体という自然　自分自身で運用管理する身体
１０．自然共生型と自然活用型
９．標準依存症からの卒業　自然との関係
８．現在進行中の大転換　「自己責任」「再帰的個人」
７．（続々）１９６０年代高度経済成長期の大転換と次の大転換
６．（続）１９６０年代高度経済成長期の大転換
５．１９６０年代高度経済成長期の大転換
４．第二次世界大戦前後の大転換
３．創造が必要な転換期なのに、これまでの延長線上で考え動く人たち
２．人生創造　標準型　個人化

１　連載スタート
医師が人間に還る　「神様のカルテ№２」　数年ぶりの映画鑑賞　2014 年 04 月 03 日
時間に合わせて行動、それとも、行動に合わせて時間がついてくる　2014 年 03 月 14 日
早口で話す人には、気になる人がいる　2014 年 03 月 08 日
山崎亮「コミュニティデザインの時代」（中公新書２０１２年）を読む　2014 年 03 月 04 日
加藤彰彦（野本三吉）先生最終講義　2014 年 02 月 27 日
橘木俊詔・迫田さやか「夫婦格差社会」（中央公論新社２０１３年）を読む　2014 年 01 月 18 日
「上から目線」　榎本博明・立花薫「「ゆるく生きたい」若者たち」（廣済堂出版２０１３年）を読む
2014 年 01 月 03～06 日
ダグラス・ラミス「経済成長がなければ私たちは豊かになれないだろうか」（２００４年平凡社）を読む
2013 年 12 月 31 日
「浅野誠人生・生き方シリーズⅢ　社会のあり方と生き方―スローライフ―」をＨＰにアップロード
2013 年 12 月 02 日
向谷地生良「べてるな人びと　第３集」（一麦社２０１２年）を読む　2013 年 11 月 27 日
ヴィルジニー・レッソン「２０３３年地図で読む未来世界」(早川書房２０１２年) を読む 2013 年 11 月 21 日
「ソトコト」９月号 を読む　2013 年 11 月 07～８日
２.「最近のシェアハウス事情」「ミールシェアリング」「参加論」
１. 特集「人とつながる家」
阿部真大「地方にこもる若者たち」を読む　2013 年 10 月 23～11 月 01 日
７.「同化」ではなく「分離」「統合」へ
６.「人の話をきちんと聞く」「ギャル的マネジメント」
５. ハイポコミュニカティブとハイパーコミュニカティブ
４.「新しい公共」と「結社」
３.「Ｊポップを通して見る若者の変容」
２. 地方若者の人間関係と「地元」
１. ショッピングモールと地方若者
竹内常一・佐藤洋作編著「教育と福祉の出会うところ」山吹書店２０１２年を読む　2013 年 10 月 14～16 日
３.「逃げる」こと　「距離をとる」こと
２. 若者たちの人生創造
１. 所有欲求と存在欲求
人生・生き方シリーズ２　『人間関係・家族・移住・多文化』　ＨＰに掲載　2013 年 10 月 10 日
過剰な繁忙・ストレスを避ける裏ワザ　2013 年 10 月 09 日
「生活指導研究」３０号を読む
８. ストレスを減らすこと避けること　2013 年 10 月 07 日
７. 40 代 50 代夫婦の問題　2013 年 10 月 06 日
２. ４０代５０代教師のストレス・コーピング　2013 年 09 月 30 日
乾彰夫編『高卒５年　どう生き、これからどう生きるのか』を読む　2013 年 09 月 03 日～８月２９日

３．沖縄の若者たち
２．コミュニティと人生創造
１．高卒若者達が「大人になる」三類型
「人生後半期の人生創造」ＨＰにアップロード　2013年08月08日
徒然草から学ぶ清水義範「５０代から上手に生きる人ムダに生きる人」三笠書房２０１３年　2013 年 08 月 04～10 日
３．友情は男性の若い時代を起点にするのか
２．遺産　大病　老後以前に好きなことを始める
１．老人の学習
「私の現在までの人生について発見したこと、考えたこと」　看護大学レポート　2013 年 07 月 22～26 日
宇野重規・田村哲樹・山崎望『デモクラシーの擁護――再帰化する現代社会で』ナカニシヤ出版２０１１年　を読む　2013 年 07 月 06～９日
３．社会の再帰性　個人の再帰性
２．若者の人生創造と「外からの」枠
１．再帰性と教育実践の自己展開サイクル
人生後半期生き方　2013年05月28日～2013年06月25日
１１．人生の各ステージに、自分なりのテーマをつけよう
１０．レール・システム・商品・金銭などへの過剰依存からの卒業
９．人間関係を豊かにする中で、自己を豊かにする
８．解放と創造　「青年期」再現を求める人生後半期
７．ストレス過剰への対処　ルーティン化した行動　依存
６．身体的円熟と精神的円熟のバランス
５．精神的円熟　加齢＝弱化とは限らない
４．身体との付き合い方の私の苦い経験
３．身体の円熟と身体との付き合い方の円熟
２．私は実年齢以上に（＝老けて）見られてきた
１．実年齢以下に見られるのがいいか、以上にみられるのがいいか
沖縄大学地域研究所『琉球列島の環境問題』高文研２０１２年に触発される　2013 年 05 月 20 日
「一住宅＝一家族」とは異なるありようを追求する建築家たち　2013 年 04 月 28 日
人生後半期の私流の人生創造　2013 年 04 月 16～20 日
２．転職などを機に「第二の人生」「第三の人生」へ
１．『人生後半期』登場の背景にある平均寿命の伸びと職業形態の変化
日銀金融緩和≒バブルとスローライフ　2013 年 04 月 09 日

「テーゲー」「あいまいさ」を大切に　2015年11月16日

（１３日記事の続き）

「決断しないの」「やるの　やらないの」「どっちにするの」などと迫られて困った時に大事なのは、「保留」すること、「待ってください」「考えさせてください」ということだ。

それでもなお迫ってくるときは、話題を変える事、その場から立ち去ること、その人とはできるだけ関わらないことが必要になることもある。

それでも、その人が「逃げるな」「ごまかすな」などとさらに追っかけてくることもある。そういうことで、相手を自己の管理下支配下に置こうとすることも多い。相手を従わせることで、自分の優位さを誇示したり、自己満足にひたることさえあるのだ。

その際、当人の自己判断を許さないことに狙いがあることがある。そのことで、権威主義、依存症、思考停止を作りだし、無条件服従をつくりだそうとするのだ。そうした関わりを、「相手のためを思ってやっている」とか「愛だ」とかいう人さえ結構見かける。

「保留」すること、「待ってください」「考えさせてください」ということを、沖縄流にいうと、「テーゲー」にすることに通じる。結着をつけないで保留し、「しばし温めて」おいて、より適切な対応を考えるととらえるのだ。その「しばし」が長期になることがあってもかまわない。

「テーゲー」に似た言葉に「好い加減」「あいまい」がある。「テーゲー」にしておく間に、いろいろと考えを広め深め、「適切な加減＝いいかげん」を探し出す。

ところで、決着を迫る際に、ＡかＢか、「はい」か「いいえ」かという二分法が使われることが多い。二つの選択肢しかないと迫るのだ。だが、選択肢はそれ以外にあるかもしれない。あるいは二つの間には多くのグラデーションがあるかもしれない。あるいは、二つの選択肢がでてくる基準とか場とかの外に、よりよき選択肢があるかもしれない。二つの選択肢が袋小路を生み出してしまい、矛盾対立を深刻化するかもしれない。

だから、「テーゲー」「あいまい」ということには、深くて広い豊かさが含まれているといえるかもしれない。

もう２０年以上前になるが、国際的文書のなかに「あいまいさに対する寛容さ」を尊重するという文言に出会って、強い刺激をうけたことがある。国際的な対立には、二者択一を迫ることで戦争に至るほどの深刻な事態を生み出すことがある。それを避ける意味で「あいまいさに対する寛容さ」の尊重は不可欠なのだ。とくに、強者が決着を迫ることが多いなか、弱者が「あいまいさ」を保持することを尊重することは、対立紛争解決には必要なことなのだ。

もう一つの対応策は、他の人に「困っている」と話し、相談することだ。

迫る人は、しばしば相手に「これはあなたと私だけの秘密の話だから、人に話してはダメだ」ということがある。いじめではよく聞く話だ。「人に話したらどうなるかわかっているだろう」と口封じをする。秘密にすれば、安全かといえば、逆にエスカレートしがちだ。独裁者なども、秘密を乱用する。

ところが、「秘密にしろ」という本人が、他に人にしゃべりまくっていることがある。「秘密」と言ったことを

忘れていることさえ多い。

私の個人的体験だが、小学生の時、いじめられていた。そのことはだれも知らないだろうとおもっていたが、数十年後のクラス会で、クラスメートみんなが当時から知っていたと聞いて驚いた。

ともかく、困ったときは、他者にどんどん話し、一緒に知恵を出し合うことだ。

「決断しないの」「やるの　やらないの」「どっちにするの」などと迫られて困る時

2015 年 11 月 13 日

親が子どもに対して
教師が生徒に対して
リーダーがメンバーに対して
夫が妻に対して、妻が夫に対して　（恋人同士でも）
　など、いろいろな場面で

「決断しないの」「やるの　やらないの」「どっちにするの」などと迫られて困ってしまうことがある。「待ってください」といっても、「待てない」「いいわけはダメ」と言われてしまうこともある。相手の言う通りにしないでいると、「あいまいにするの」「いつまで放っておくの」と叱られることもある。

自分自身に対しても、「あいまい」な自分を「優柔不断でだらしない」といって許せないこともある。

こうした決断を迫る人には、力がある人や自信たっぷりの人、あるいは外見・権威・評価・順位・勝負にこだわる人が多い。パワーあふれて迫る人もいれば、感情的に迫る人もいるが、なかには理路整然とリクツを語って説得（折伏？）する人もいる。

こうした人自身が、そうしたありように疑問を持つことは少ない。善いこと正しいことを他人のために、あるいは目的目標達成のためにやっているのだ、と自信を持っている。

そのためか、決断をもとに何かをしたが、うまくいかなかった時には、自分の指示の問題点の検討に戻るよりも、相手側に「頑張り・やる気が足りなかった」「力不足だったから、もっと力をつけよう」などと言ってしまう。うまくいかないことが、決定的な事態を引き起こすと、「責任逃れをする」「どこかに雲隠れする」などで、悲劇さえ生んでしまうこともある。

若い時には、こんな傾向を帯びていたが、経験を経るなかで、歳とともに少しずつ「穏やかに」なってくる人もいる。私自身も、３０代ぐらいまでは、よくこんな迫り方をしたものだ。５０歳代でも覚えがある。最近は、ないだろうが、無意識にしているかもしれない。

こうした形で迫られると、「果たしてそうなのかなあ」と疑問をもちつつも、その人の指示に従って「決断」してしまうことがある。あるいは、その人の判断に委ねてしまうことがある。任せたけど、「それでいいのかな」「私の考え感じとは、ちょっとずれているな」という気持ちを残し「愚痴る」ことも多い。

「その人任せ」にして、うまくいけば、「やはり、言う通りで確かだ」と、その人の評価を高める。
うまくいかないときは、後悔の気持ちを残すことがしばしばだ。そして、その決断を正当化しようとしたり、「その人の言うとおりにしたけど」と責任転嫁の言い訳をしたりしてしまう。

こうしたことへの対応については、次回書こう。

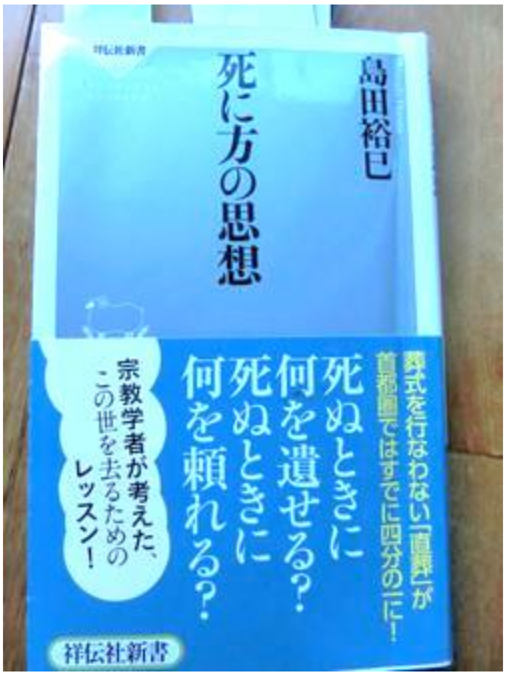
高齢者人生　島田裕巳「死に方の思想」　2015 年 11 月 01 日

島田裕巳「死に方の思想」祥伝社２０１５年という書籍のタイトルが気になって、読んで見た。いくつか示唆的な箇所を紹介しよう。

「いつまで生きられるかわからないから、とにかく生きていようと、先のことを考えずに生きていくのが、昔の人生でした。それがいまでは、九十歳くらいまで生きるから、それまで何とか生き延びなければならないと考えながら生きていく人生に変化しています。」　ｐ２１

「日本は、長く生きられる社会になっています。逆に言えば、なかなか死ねない社会であり、死ねないということと自殺の増加は関係があるのではないでしょうか。少なくとも、単純に経済の悪化だけを自殺の原因とするわけにはいかないでしょう。」ｐ８３

「昔の社会は急激に大きく変わらないので、経験をしてきた人の知恵が大きな意味を持ちました。けれども、現代は経験がどんどん更新されてしまい、個人ではなくて社会全体に蓄積されてゆきます。芸能や特殊技能を持っていれば別ですが、老人の価値は残念ながら年を重ねるにつれて低くなってしまうのです。
すると、老人にはかなりのストレスが溜まります。」ｐ９８



「現代人の多くは仕事から引退し、余生は何とか年金で生きていくことができるでしょう。けれど、何も残せないままに死んでいくのです。
すると、「自分の人生とはいかなるものだったのだろうか」と考えざるをえない。「ご先祖になる」という強い実感を持ちながら死んでいく人生とは、まったく対照的です。」ｐ１５６

「都市化とそれに伴う「一代家族」において、われわれはご先祖様として祀られるチャンスをなくしてしまったのです。」ｐ１５７

「そもそも定年とともに、ぷっつりとそれまでやってきたことが途切れてしまう人生でよいのでしょうか。働き蜂として、働ける間は活躍の場があるけれども、ひとたび働けなくなると不要な人間になるというコースなのですから。

多くの人たちは働き蜂コースに乗ってしまうのですが、そうなると、最後は社会的に不要になるということが見えているわけです。

いわゆる「いい学校に行って、いい会社に行って」、けれどそういう人のほとんどは偉くはなっていけません。その会社の社長にはなれるかもしれませんが、それが働き蜂の最高限度です。けっして女王蜂にはなれないのです。

食いっぱぐれることを恐れて、何とかそうならないようにと考えると「働き蜂コース」を選んでしまいます。」

ｐ１６２－３

従来の流れの中で、高齢者人生や死を考えるわけにはいかなくなりつつあるのだ。「働き蜂コースに乗って」定年まで一生懸命働いて、残りの人生を余生として過ごす、というわけにはいかなくなりつつある。「働き蜂コース」は、私が言ってきたストレーターコースと同じだ。

そして、長寿がもたらした、定年から死に至る期間の長期化ということだけでなく、老人の「有用性」「関係性」においても、従来スタイルが通用しなくなっているのだ。

加えて、年金などの社会保障が、大変化する危険性がいよいよ現実のものになりつつある。さらに、社会のありようそのものが、持続できるのか心配な状況になっている。

そうしたなかで、人生創造一般にどどまらず、高齢者の人生創造が独自のテーマをもって登場しつつある。それは、高齢者自身だけでなく、高齢者への道を歩む４０代５０代のテーマでもある。

このブログでも、人生後半期の人生創造ということで、多くを書いてきた。といっても、高齢者の人生創造というテーマへの取り組みは芽だし程度で、本格的ものはこれからだ。このことを考え実践することが、私の高齢者人生の大きな柱の一つになるだろう。いつか連載したいと思う。

中部地区公民館研究大会での私の「指導助言」発言内容　2015 年 10 月 24 日

左写真は、交流会での指笛合奏

下右写真は、西原町さわふじ未来ホール

２２日午後、西原町さわふじ未来ホールで開かれた会に、依頼があって参加した。完成して１年ほどのホールは町役場と一体になった建物で、とても素晴らしい。ここは、１９７６～１９９０年に私たちが住んでいた小波津団地から徒歩で１０分ほどの所であり、サトウキビ畑だった。我が子たちは、このあたりを徒歩で３０分余りかけて西原小学校に通学していた。隣にある公民館が、当時唯一と言ってよい建物だった。娘は、学校からの帰路、毎日のように公民館に立ち寄り読書していたと記憶している。

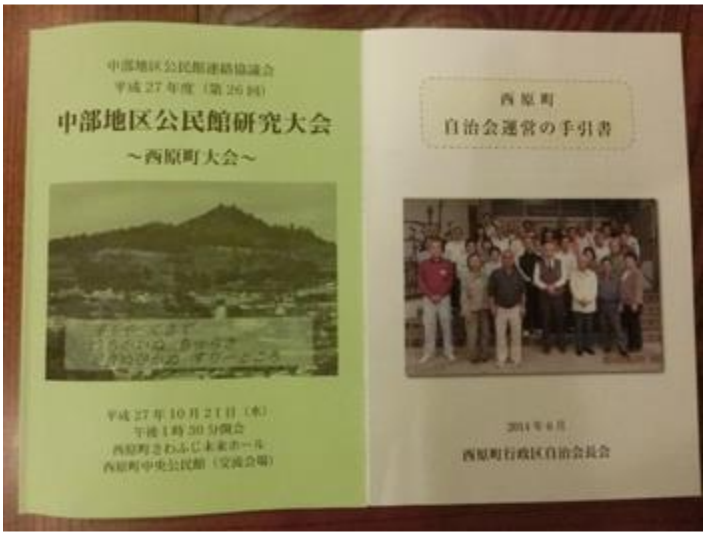
この大会の参加者は、中部地区（恩納村を含む）の公民館関係者たちであるが、ほとんどが各字の区長さんなど集落公民館からの参加者だ。全部で、２００～３００人ほどだろうか。ロビーには、西原の各字の公民館活動のポスターなどが貼られ、雰囲気を盛り上げている。

そのなかに、西原町行政区自治会長会「西原町自治会運営の手引書」が置かれ、集落運営に強い興味を持っていたので、一冊いただいた。一問一答で、５５項目が並んでいる。「６　アパート・マンション居住者の加入率が低い」「１３　親の自治会への関心が低く、子ども会が作れない」「１９　限られた会員だけが協力している」「３０　自治会記念誌・字誌の発刊方法」「独居・障害を抱える高齢者への支援体制」「４０　地域にひろばや公園がない」「４４　雨水対策・測候対策を望みたい」「５０　広報チラシが多すぎる」・・・・

まだ目次しかみていないが、なかなか便利で有益な冊子のようだ。

下写真は、大会冊子と「西原町自治会運営の手引書」

さて、会は、開会行事、基調講演（島袋正敏さん「地域自活と自立を求めて）、事例発表１　奥間自治会「地域防災を活かした新たな公民館活動」、２　宜野湾中央公民館「公民館におけるサークルとの共存、育成と活用について」、交流会という流れで進んだ。



私は、事例発表のあとの質疑応答が終えたあとに、１０分ばかり「指導助言」の発言をした。

おおよそ、こんなことを話した。

現在、南城市で市史の一環として、全集落７１の「暮らし（民俗）」を調査する活動に参加しているので、本日の集落公民館を中心とする諸発表・発言などは、私にも大変有益でありがたかった。沖縄の集落における諸活動には、素晴らしいアイデアが満ちており、全国の社会教育研究者たちが大変強い関心をもち、研究調査を３０年以上にも

わたって行い、何冊も本を出している。他府県にはない優れた組織・活動だからだ。

ある研究者の著書にヒントを得て私なりにいうと、先進国においては、１００年前、２００年前から、地域のコミュニティ（共同体、シマ）から「離陸」し、自然からも「離陸」し、そのことで、金銭・商品を中心にした右上がりの大量生産・消費の社会をつくりあげてきた。しかし、それはいまや行き詰まり、停滞縮小が始まっている。そこで、コミュニティ（人間関係）や自然への再着陸が大きな課題として登場してきている。

その点では、沖縄は大きな宝物をもっている。このような流れとは距離をおいて、自然との関係を保ち、地域における人間関係・コミュニティを大切なものとして持ち続けてきたのだ。その拠点として、シマ・集落公民館があるのではなかろうか。

そのなかで、多くの人々がＵターンＩターンしてきている。そして、若者も地元志向が強い。それだけ、沖縄にシマに愛着を感じているのではないか。

「全国○○位」ということに固執して、順位を上げるという営みが広く行われているが、その発想から卒業して、沖縄独自の宝物を活かし発展させる取り組みを推し進めたい。その点では、集落・集落公民館が大変重要な位置にある。

無論、これまでのコミュニティ（共同体）が人々を縛りすぎるので、そこから逃れたい、都市に出て、「自由」になりたいという気持ちを持つ人が多い。そして、自由参加のつながりを作っていきたいと考え、実践する人も多い。その点では、縛りを感じるようなコミュニティのあり方の検討が必要だろう。と同時に、そうして作った自由参加のつながりが、地域・コミュニティに関わるような工夫も重要になっている。この二つのつながりのありようを工夫創造していくことが今日の重要な課題となっている。

自由を求めながら、結果的に孤立・「ひきこもり」になってしまう人もいる。あるいは、地域に無関心になる人もいる。つながりといっても、会費や授業料を支払うという金銭で結着をつける発想も見られる。その点で、公民館などを足掛かりの場として、多様なつながりを作り出していくことが、今日の重要課題となっているのだ。

仕事起こし、娯楽、芸能、ものつくり、子育て協同（保育・学童保育・ファミサポなど）、防災、地域作業などの多様な活動を創造的に展開してほしい。数年前に読谷の社会教育諸団体とともに、多様で豊かな活動をつくるアイデアつくりのワークショップをしたが、実に豊かな発想が満ちている。

そうしたアイデアをもとに、新たな活動を創造していくことを期待したい。

その際、教育委員会系列の中央公民館と、自治系列の集落公民館とが、壁を壊して連携していける体制を築くことがとても重要になる。また、集落公民館では、保育園とか高齢者福祉施設とか、他集落とか、多様なところとつながり、協同する実践が創造されている。

そうした新しい創造活動がさらに発展することを期待したい。

日本生活指導学会第３３回大会で感じたこと考えたこと　2015 年 09 月 20~26 日

３．コミュニティ　地元つながり

学会では、多様な実践例が登場するが、登場する当事者たちは、多様なアソシエーションと多様なコミュニテ

ィを含んだ関係の中にいる。たとえ孤立していると見えても、そうした関係を意識して存在している。そうしたなかで、近年、コミュニティとのかかわりが焦点になる例が目立つようになってきた。たとえば、最新刊の『生活指導研究』の打越論文や羽間論文には、若者・少年の「地元つながり」が登場してくる。

かつて、「地元」は、古い体質のものとして、批判的まなざしを向け、そこから脱け出ようとする営みの対象とされることが多かった。実践者のなかには、そうした視点を無意識に持つものもいた。だが、事実として、地元と呼ばれるコミュニティ的な色彩をもつものが重要な意味をもつ例が登場しているのだ。

無論、コミュニティという用語は多義的であり、必ずしもローカル・コミュニティとか、かつての「共同体」とか「集落」「町内会」「自治会」といったイメージと限らないが、これらの実践例には、地縁的な要素を持つつながりの中で語られることが多い。

また、かつては、コミュニティとか地域とかいうものから「離れて（都市をはじめとする大海に出て）」、そこで新たなつながり（アソシエーション中心に）を創りだしつつ、自己を形成していくというストーリーが前面に出やすかった。しかし、近年では逆に「地元」「地域」に「戻り（着陸して）」、つながり（コミュニティ的色彩が濃い）を回復しつつ、自己を形成していくストーリーを前面に出す事例によく出会うようになってきた。

それらには、理念的な社会動向（社会運動）めいたものがあるというわけでないかもしれないが、そうした動きが作りだしつつある事実に注目して、実践展開することが求められつつある。

残念ながら、生活指導実践を展開する諸専門家たちは、地縁的なものを作りだしていく条件に乏しいことが多い。職場の定期的な転勤などがその例であろう。

しかし、福祉・医療・教育などの対人援助職には、そうした地域性が重要ではなかろうか。専門家自身が地域的つながりのなかで生きることが求められているといえないだろうか。その点での検討を求めたいものだ。

同じように、かつて盛んに使われた、実践を主導する対抗的な二極の理念に基づく実践構図についても、そこからはみ出る実践例が増えていることに注目する必要があろう。その二極には、標準と例外という構図もあるだろうが、そういう整理把握でいいのかが問われることもある。

というのは、二極に収斂しない実践事実・当事者事実が、多様に出現してきているからだ。そうした事実が生み出そうとしていることの意味と可能性について考えていく方向が重要になってきている。それは、ズレ・ネジレ・揺れとかいう形でも登場してくる。そうしたものを、二極構図とか「標準―例外」構図ではない読み取り方のなかで、当事者と専門家が共同で新たな物語を生み出すような実践が期待されるようになってきている。

それは、今日の社会変化の特質を反映してもいるだろうと、私は考える。

２．多様な生き方の創造へ

社会における揺れ・多様さを反映して、揺れ・多様さを個人の中に持つ状況が広がる。そのなかで、揺れつつも、ストレーターコースだけでない多様な生き方が広がる。そこには、右上がり経済成長追求に対応するよりも、人々と自然と共生する要素が色濃いものが見られる。人々と自然と豊かにつながりつつ、ゆったりと穏やかに生きていくのだ。若者だけでなく、団塊世代に見られる地元志向・田舎志向の拡がりはその例だろう。

大会のある報告者が、ご自身の不登校・ひきこもり状態を、長い年月をかけてゆっくりと共同関係を創りだしつつ越えていき、そしてその経験をもとに、同じような問題に直面している人たちを支援する活動に参加している体験を紹介していた。そして、その方の親自身が、企業戦士として行き詰っていたことが並行していたことをも紹介なされていたことが、とても印象的であった。もう一人の親は、大いに悩みつつも、当人に伴走しながら、新たな創造活動にかかわっていく流れの紹介も印象的であった。

そうしたことは、従来のありようの組み替えとしても表れる。まず、ストレーターコースなど標準化され権威化された生き方とつきあう関係から距離をとり、別の生き方を探っていくことがある。

そして、関係の組み替えとしても進行する。たとえば、親子関係を権威主義的なものからそうでないものへと組み替える例は、いまやごく通常のこととなっている。それは、子どものテーマであるだけでなく、親の側のテーマともなっている。高齢社会のなかで、三世代・四世代が共生する関係が増えてきているが、その関係は、これまでのようなタテ関係よりも、ヨコ関係の色彩が濃くなりつつある。たとえば、世話・ケアは、タテ関係的な性格を薄くし、ヨコ関係的なものへと移りつつある。

他方で、その転換がうまくいかずに人間関係を避けて、あるいは避けれられて、孤立傾向を強める例も多いが。それらは、「強い個人」を前提とする競争関係よりも、「弱い個人」を前提とする共生関係の色彩を強めている。友達のような親子関係については、賛否両論があろうが、こうした進行を反映しているといえるだろう。

これらのことは、たとえば、ピアジェやエリクソンが示したような発達構図・人生構図が前提としていた社会関係の変化でもあり、これからの社会関係をいかに創造していくかという課題と結びついた発達構図・人生構図創造という課題ともなる。

たとえば、世代特性を語る時、子どもや若者には、「立派な大人になる」「なりたいものなる」成長のための営みを求める見方が強い一方で、高齢者には、存在自体に価値があり、それまでの人生の蓄積を生かすという存在論的な見方がよくなされる。そして、両者の対抗・協力関係が語られる。だが、この世代特性は絶対的なものではない。

若者にあっても、成長中心志向というよりは、「いること。生きていること」自体にまずは価値があるという発想が重視されてきている。逆に高齢者にあっては、若い時のありようを絶対化しないで、新たなありようを模索追求することを重視することが期待されてきている。

１．人々の生き方

第３３回日本生活指導学会は、９月５～６日岡山大学で開かれた。創設以来かかわってきたが、三分の一世紀にもなる。大会のほとんどに参加した。今後、何回ぐらい参加できるだろうか。当然だが、参加者の顔ぶれも年ごとに変わる。少なくなった看護関係の方、多くなった矯正教育関係者が目についた。

学会は広義での生活指導にかかわる研究を学際的に展開するのだが、創設の１９８３年と比べれば、大会で話題になることには、大きな変化が見られる。それは、社会変化に伴う実践変化に対応している。

そのあたりについて、感じたこと考えたことを「人々の生き方」にかかわって少しばかり書こう。

学会創設の１９８０年代前半までは、私が名付けたストレーターコース型人生が強力な標準となっていた。それは、高度経済成長のなかで絶大なものとなってきた企業中心（学校中心）人生を投影していた。
それに対して批判的立場をとる人の考え方は、民主的な生き方の追求という形を取ることが多かった。たとえば、子ども・若者たちに対して、民主的主権者になることを期待する実践であった。だが、ストレーターコース型人生というありようへの批判的検討は微弱だった。

実際、学校を中心にストレーターコース型教育は、「隅々」にまで貫かれていく。そこから「はみ出る」「脱落」するものは、「落ちこぼれ」「非行・問題行動」「登校拒否・不登校」など「例外的」なものと見なされ、「正常」に戻るように対処するシステムが浸透していった。
それに対して、多くの生活指導実践者は、かれらの生き方の中に重要な何かを見いだし、ストレーターコース型に戻すのではないありようを模索しはじめるようになる。それにしても、強力なストレーターコース型の渦から脱することは、なかなか困難であった。
それでも、多様な専門分野を越えて学会に集まった人々は、多様な見方を突き合わせる中で、連携協力関係を模索するとともに、生き方創造の新たな事実と意味とを見いだして始めていた。
とくに、１９８０年代にはすでに兆しが見えていたが、１９９０年代半ば以降明瞭になってくる社会変化は、生活指導の実践と研究にも大きな変化をもたらした。
ストレーターコースは「狭き門」になっていくが、それだけに競争が激化していく。そして、その結果を社会のありようの問題ではなく、「自己責任」として当人の問題にしていく風潮が広げられていく。そうした動向は、人々の生き方をめぐって、難題をますます拡大深化させるとともに、それらが心理的様相を色濃く帯びるようになってきた。そんななかで、「発達障害」という把握が急激に普及していく。

そうしたなかで、多くの生活指導者たちは、諸問題が個人の自己責任に由来するというよりも、社会変化のなかで生じたものであり、それを個人の自己責任として対処することが、事態改善を難しくさせている事実を、当事者とともに丹念に読み取り、多様な共同関係を築きつつ、対応する取り組みを広げていった。それらは、旧来のストレーターコースに戻す実践ではなく、生き方を新たなに創造するものとして提出していくものであった。

小池龍之介「しない生活　煩悩を静める１０８のお稽古」幻冬舎２０１４年を読む

2015 年 08 月 20 日

店頭で、タイトルと項目タイトルにひかれて買い、読む。
なかなか面白い。興味をひかれた項目タイトルをいくつかあげてみよう。
・ものごとに集中するには、頑張りすぎず、だらけすぎず
・「どうでもいいことで不毛な言い争い」の愚を避ける
・自分の見解を変えるとき、なぜ疚しく感じてしまうのか

・釈迦は論争をふっかけられ「自分には見解がない」と答えた
・相手のほうが間違ってる証拠があっても追いつめない
・「こういう自分でありたい」と渇望するから苦しくなる

これらの項目タイトルは別にして、項目の中の本文には同感するところが多い。
私が、こうしたことに同感できる考え方をするようになったのは、まだ１０年なるかならない前からだ。ところが、著者はまだ３０代で、「３０代で、よくぞこうしたことに気づけるな」と感心させられる。私のそのころは、ギラギラしていて、この逆だった。
おそらく、著者が修業を積んだ禅宗僧侶であり、釈迦などの経典に造詣が深いからだろう。それでも、「あとがき」にこんな記述があり、納得するものがあった。
「この連載をした時期の中盤から後半の途中くらいまでの間は、私自身が苦境に立たされていたころでありました。その時期の文章には、ちょっとした諧謔は込めつつも筆者の苦渋がいくらか滲み出ているようで、そのぶん身に迫る叙述になっているのではないかと思われます。」ｐ２３８
上に並べた項目には、この時期のものが多そうだ。

非常に読みやすいが、それはかなり難しい議論を、経典などを使いつつも砕けた文にしていることからくるものだろう。その点では、かなり高度な知的な書だ。逆にいうと、著者をこのように達観させた感性的身体的なものを直接には表現していないものとなっている。私自身も著者と同じ年齢時期には、かなりの頭でっかちだったし、知性で感性をコントロールする志向性が強かった。
最近、ギラギラしている若者に出会うと、そのエネルギッシュな素晴らしさに感動する。と同時に、エネルギーやリクツだけでなく、感性身体性でも追求するのは、いつごろになるのだろうか、などと思ってしまう。この時期は、積極的に切り開いていくのが中心になるためだろう。ゆっくりと熟するのを待つという時期でないのだろう。
だが、これは、個人の年齢進行の問題というよりも、今日の社会全体の焦りを滲ませるありようの問題なのかもしれない、と思う。
ところで、本のタイトル「しない生活」は、本書の内容とマッチしていない。むしろ、著者が「あとがき」で紹介しているように、本書のベースになっている新聞連載タイトル「心を保つお稽古」とか、著者が最初に考えた「弱さのお稽古」「弱さを内省するお稽古」というタイトルのほうが、マッチしているだろう。

杉田真衣「高卒女性の１２年――不安定な労働、ゆるやかなつながり」大月書店２０１５年を読む

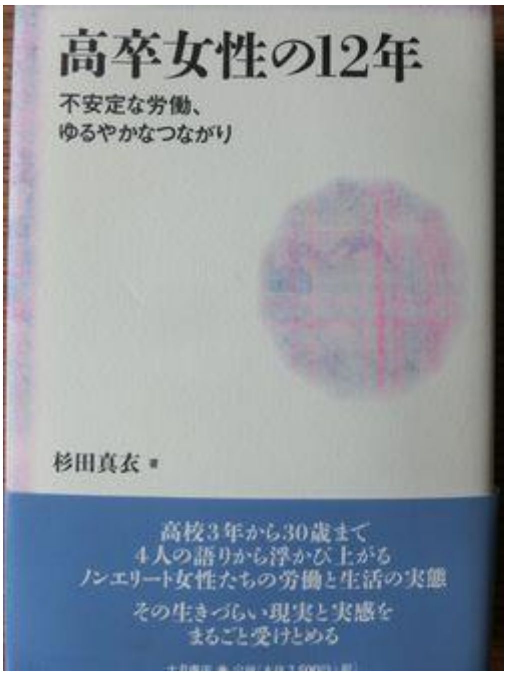
2015 年 08 月 16 日

新刊本を著者からいただいた。著者たちは、これまでも１０年余りにわたって、かなり多くの同一高卒者を継続的にインタビューして、今日における高卒者の人生創造の実像を明らかにする報告書や著作を公表してきた。それらについては、このブログでも何度かコメントをしてきた。

本書は、それらの調査のなかの数人のノンエリート女性に焦点化して、高卒後の多様な展開を明らかにするとともに、それを分析したものである。分析結果は、サブタイトルの「不安定な労働、ゆるやかなつながり」に象徴的に表現されている。

かれらは、私がいうストレーターコースを歩んでいない。ストレーターコースから外されたというべきかもしれない。あるいは、そうしたコースをイメージして歩んでいないというべきかもしれない。

これまでも繰り返し指摘してきたが、ストレーターコースを歩む若者は、数%もいるだろうか。それは、ストレーターコースが縮減されてきた１９９０年代半ば以降のことだけでなく、それ以前からもそれに近い状態がかなり広汎に見られた。とくに女性においてはそうだった。



男性においても、実はそうであった。今、話題の甲子園で野球をしている若者たちを例にとれば、彼らにおいても、ストレーターコースを歩むのは、少数派どころか、例外的存在である。私は体育学部学生を２～３０００人教えてきた。そのなかで最も多いジャンルの一つは野球だが、彼らのほとんどが、ストレーターコース以外の進路を歩んでいる。学業をもとにしたストレーターコースだけでなく、プロ選手や野球部顧問ができる教師の道など、野球をもとにしたストレーターコースを歩むのは、１%もいるだろうか。

少し脱線したが、こうした非ストレーターコースを歩む若者にたいして、実業高校は別にして、多くの場合、ストレーターコースしか用意していなかったのが、これまでの学校であった。ストレーターコースを標準化し、それに沿うことばかり求めてきたのだった。親をはじめとする大人たちも、そうした状況に近かった。

そうではなく、本書が提示しているような、多くの労苦を伴いつつ多様な生き方を試行錯誤している若者たちが、自分たちで人生を創造していくことをサポートできる大人たちのありようの追求が現実的課題となっている。しかし、多くの場合、そこから逃避し、若者たちの「自己責任」に任せている現状があろう。

そうしたところから脱け出ていく道を探り創造していくうえで、本書は、重要な手がかりを与えるであろう。その点で、著者たちが次にどのようなものを提出するのか期待している。

礫川全次「日本人はいつから働きすぎになったのか　＜勤勉＞の誕生」平凡社２０１４年を読む

2015 年 03 月 23 日～29 日

３．勤勉と働きすぎ　勤勉と怠惰

仮説１２　高度成長期に、日本人労働者は働きすぎるようになり、その傾向は、今日まで変化していない　ｐ２１７
仮説１３　近年の過労死・過労死自殺問題には、日本人の勤勉性をめぐるすべての難問が集約されている。ｐ２２５
仮説１４　日本人は、みずからの勤勉性を支えるものが何であるかについて、深く考えようとしていない。ｐ１４２－３

これらに対する回答として、「終章　いかにして「勤勉」を超えるか」が書かれている。
その小見出しに、「「怠惰」は許されないのか」ｐ２２８、「怠ける勇気、怠けの哲学」ｐ２３８という言葉がある。
それらでは、勤勉の反対語、ないしは対語として、怠惰が使われている。
問題を倫理ないしは道徳として捉えようとする人は、「怠惰」になることを拒否したり、「怠惰」と見られることを嫌い、「勤勉」から逃れることが難しい。身体がいうことをきかないときまで「勤勉」であるように頑張るということになる。
こうした枠組みから超えるためには、｢勤勉—怠惰｣という対語の囚われから脱け出ることが必要なのだろう。それは、前回紹介したことにかかわっていうと、「働きすぎ」と「勤勉」との混同から脱け出るということだろう。「働きすぎ」を止めることは「勤勉」をやめ「怠惰」に陥ることとは異なるのだ、という論理を使い、異なる倫理、道徳を生み出すことになるだろう。「働きすぎ」を止める倫理、道徳が必要なのだ。
このあたりを深めてみたいと思う。

思いついたことを並べよう。
・「働きすぎ」には、長時間労働の象徴される量的過剰と同時に質的過剰もある。
・「勤勉」にする時間と、そうでない時間を区分する論理にはどのようなものがあるのか。区分することは難しい面があるが、それでもなお区分し、自分の持ち時間を自己のコントロール下に置くことの意味と方法を考える
・それらの例として、他のことで楽しむ時間、休む時間、自然の流れのなかで過ごす時間などがあげられる。
・生活の必要量をこえては仕事をしない、あるいは、自然および自然の流れを生命・生活の必要量以上にはこわさない
・自然（自己の身体を含む）を大切にする道徳、過剰を抑える道徳、これらのことと勤勉の道徳との折り合いをつけるありようの探求
・集中の時間と拡散の時間　緊張の時間と弛緩の時間
・楽しむ活動と楽しめず苦役と感じる時間　　これらと仕事の時間とそうでない時間との関係
などなど。考えたい問題は多い。

２．「勤勉」と「働きすぎ」の混同

仮説７　「明治三〇年代に入ると、日本の農民の多くが勤勉化した」ｐ１４７

———そこで重要なのは、次の指摘だ。

「農民を「勤勉」に駆り立てたものは、いわゆる「倫理的な雰囲気」としてのエートスではなかった。むしろそれは、当時の農村に蔓延しはじめていた、「非倫理的な雰囲気」としてのエートスであった。すなわち、生存競争に生き残るために、ひたすら自家の利益を追い求めようとする雰囲気であった。」ｐ１５３

———二宮をモデルにするような「倫理的な雰囲気」を作りだす政策を修身の時間などで学校教育で浸透させようとしたのだが、それが中心ではなかった、というわけだ。

言い方を変えると、資本主義的な競争のなかで生き抜くために「勤勉」になり、その後付けの理由として「倫理」＝修身徳目としての「勤勉」が貼りつけられたというのだろう。

仮説８　大正時代の農村には、すでに、働きすぎる農民があらわれていた。ｐ１６４
仮説９　大正時代の農村には、なお、勤勉でない農民が残存していた。ｐ１６４

「明治末以来、全国の農村で、農家と農家の間の競争が激化してゆくにともなって、「もやい仕事」の比重が小さくなっていったと思われる。」ｐ１７１

———「もやい」は、沖縄での「結」だ。沖縄でも同様な状況が広がり始める。

次の指摘は決定的に重要だ。

「「勤勉」というのは、美徳だが、「働きすぎ」というのは、美徳であるはずがない。私たち日本人は大正時代から今日まで、そのことについて「真剣に反省した」ことは、一度もない。」ｐ１７３

「「勤勉」が強調された結果、「勤勉」と「働きすぎ」が混同され、「働きすぎ」を「勤勉」の一態様として、肯定的に捉えるような状況が生じた」ｐ１７４

「厳しい生存競争に直面している農民や、厳しい労務管理の下にある労働者が、やむなく「働きすぎ」に陥る状況に対し、歯止めになるような方策が存在しなかった」　ｐ１７４

仮説１０　戦時下、産業戦士と呼ばれていた労働者が置かれていた状況は、今日の労働者が置かれている状況と通じるものがある　ｐ１９１
仮説１１　日本人の勤勉性は、敗戦によって、少しも失われなかった。ｐ２０３

「企業への「参加意識」を高めた労働者は、みずから進んで労働し、会社のために働くことを「生きがい」と感じるようになってくる。「我が家は楽し」ならぬ「我が社は楽し」の世界である。日本の高度経済成長を支えたのは、このように、働くことを「生きがい」と感ずる労働者の存在である」ｐ２１６

———会社に限らない。学校—愛校心、郷里・地域—愛郷心、さらには国—愛国心という形へとつなげていくイデオロギーが浸透する。こうしたものを「生きがい」の源泉にするという特徴があるのだ。それに異議申し立て

するのは、反道徳だとされ、異議申し立てを困難にする。
　現代にかかわる「仮説」の紹介と、「勤勉」と「働きすぎ」の混同については、次回に紹介コメントしよう。

１．明治３０年代に「勤勉な農民」が多数派になった

　店頭で出会った大変興味深いタイトルの本だ。２０年以上前にも、近世日本では、勤勉とか働きすぎとは異なり、休日を楽しんでいた状況を示唆する本を読んだが、この趣旨のものはそれ以来ぶりに出会う。
　新書版で読みやすい。
　内容は、著者が、次々と「仮説」を提示する形で作られているので、その仮説を並べてみよう。

仮説０　人々を勤勉に駆り立てるものは、その社会、あるいはその時代のエートスである。ｐ２９
仮説１　日本では、江戸時代の中ごろに、農民の一部が勤勉化するという傾向が生じた。　　ｐ２７
仮説２　江戸期の日本では、すでに勤労のエートスを導くような文化が成立していた　ｐ３５
仮説３　江戸時代の中末期、浄土真宗の門徒の間には、すでに勤労のエートスが形成されていた　　ｐ９１

　———　岐阜県の私の実家は、浄土真宗地帯にあり、こうしたエートスに、幼少期の私は包まれていた。

仮説４　日本人の勤勉性の形成にあたっては、武士における倫理規範が影響を及ぼしていた可能性がある　ｐ１０１
仮説５　明治二〇年代以降、少なからぬ日本人が、二宮尊徳の勤勉思想から、勤勉のエートスを学び、勤勉化していった。　ｐ１３７

　———　なお、二宮が生存中にそうなったというのではなく、彼の死後、「明治国家が、そのイデオロギー政策に、尊徳の思想と人物を取り込んだことによって、尊徳本人が果たせなかったその夢が、かなりの程度までに実現されてゆくことになった」ｐ１３７と書かれている点にも注目したい。

仮説６　「浄土真宗門徒における勤労のエートスは、日本の近代化に積極的な役割を果たした」ｐ１４１－２

　———北海道移住や海外移民には、そうした人々が多かったことが指摘されている。

　「明治期のある時期を境に、「勤勉でない農民」と「勤勉な農民」の比率が逆転し、「勤勉な農民」が多数派

となった　（中略）　「ある時期」は、明治三〇年代（一八九七ー一九〇六）であったと捉えている。」ｐ１４４

「江戸期を通して、農民の休日は漸増してゆく傾向にあったという。（中略）多いところでは、年間百日にも及んでいたらしい　（中略）　江戸期に休日が漸増していったのは、農民が、経営技術の進歩によって生じたユトリを、休日という形で享受しようとしたということであろう」ｐ１４８－９

「おそらく、明治三〇年代に入ったあたりから、農民の休日が減少に向かい」ｐ１４７

―――沖縄でも、近世には、農民たちの諸行事に対応する休日の多さを、王府が縮減させる指示を出していたことを思い起こさせる。

年寄りの生き方

2015 年 02 月 03 日～　2015 年 03 月 11 日

６．健康寿命を越えてからの生活構想

寝たきりや認知などによる介護が必要でない「健康」状態での寿命を示すのが、「健康寿命」ということになっている。

その「健康寿命」イコール寿命を実現するために「ポックリ逝く」ことを望む人は多い。私は、そうであってもいいし、そうでなくてもいい。というより、そのことについて考えたことがない。

それよりも、「健康」でなくなり、要介護状態になる、つまりは健康寿命を越えてからの生活の構想を考えておく方が現実的だと思っている。

そろそろ、どうしたらいいか考える必要があると思っている。だからといって、積極的に考え始めたわけではない。それについて考える機会があれば利用するくらいだ。

相続、老人ホーム、墓・・・　などいろいろとある。

大型スーパーに老人ホームのコーナーがあったので、立ち寄ってパンフレットをいただいたのは２年ほど前。

先日の南城散策で、売り出し中の墓地に出会ったので、これまたパンフレットをもらった。「予習」だといって。散策で老人ホームに出会うことは多い。南城は、そういう施設のメッカなのだろうか。

そういえば、我が家もユニバーサルデザインだ。建築家の方がそのように設計してくださった。

老前整理もこうした準備作業の一つだろう。

足腰を鍛えておくのは、この準備なのか、それとも、その前の健康寿命延長作業なのだろうか。

７０代ぐらいの方と話していると、どこの老人ホームがいいか、値段はどうか、食事はどうか、などという話題も出てくる。「※※さんが、〇〇ホームは、～～～が問題だから、△△に移った」という話を聞くと、リアリティが増してくる。

実際にホームに暮らしている人を訪問すると、「ここはよさそうだな」「ここはちょっと狭いな」「ここは職員が明るくていいな」などと思うようになってきた。

こんな「研究」は、今のところ、切羽つまっているわけでないから、現実感がないためか、少々無責任に楽しんでいる感じでもある。

いつか現実的になるだろうと思う。家族介護で家族を疲れさせないようにしたい、という気持ちはある。

こういう類の話をすると、「まだ早すぎる」といわれる。でも、こうして話をしている方が、「健康寿命」が長くなるような気がする。

準備なしに思い付きで始めたこの連載は、今回で終了する。いずれ「本格的」にやりたいとは思っている。

５．過去の思い出と再会　７０歳代以降のつながり作り

私は、過去を思い出すことをする方ではないと思う。過去より現在・未来の方が好きだからだ。過去のつながりよりも、現在につながりを大切にする。あるいは、新しい出会いの中で、未来のつながりを作りだしていくという感じだ。

だから、現在のつながりは、圧倒的に地域・沖縄でのつながりが多い。そんなこともあってか、同窓会の類に出たことは数回にも満たない。出身校とは遠く離れたところに住んでいるためもあるだろう。

それでも、老前整理で写真整理をしていると、否応なしに過去を思い出せられる。このブログで「私の人生・生き方」の連載を書いている時もそうだ。

過去の記憶は、何かのきっかけがないと思い出しにくい。思い出したくないことでも、何かのきっかけで思い出すことが多い。

写真整理をしていた晩に、我が子が夢に登場してきた。滅多に見ないタイプの夢だ。年を取ったからかな、とも思う。

過去を思い起こすもう一つのきっかけは、旧友・知人との出会い、とくに彼らが我が家を訪問してくれた時だ。卒業生の訪問も楽しいし、かつての仕事・研究をとおしての旧友との出会いも楽しい。

訪問していただくことがほとんどで、私の方から訪問することはほとんどない。だから、そろそろ旧友訪問を計画してみようかな、という気持ちも芽生えてきた。沖縄在住ならたやすいが、他府県在住であれば、この１０年ぐらいの間に計画しないと、実現性が急激に低下しそうだ。

これもまた、一種の「老前整理」かもしれないと思う。旧友訪問の旅を年一回は無理としても、２～３年に一回ぐらいはしていいかもしれない、と思うようになっている。

過去のつながりとは別に、現在のつながりを作り広げつつ、これからをともに生きる人を作ることを大切にしたい、というのが、私のポイントだ。別に同世代でなくてもいい。これから私が迎える７０代以降というのは、それが決定的に重要である感じがしている。６０歳ぐらいまでは、仕事中心のつながりだったが、そうではなく、とても広い意味での人生のつながりといったものをさらに作り出していきたい。

それは多様な分野で並行する。

無論、旧友とか卒業生とか過去のつながりを新たな形・物語で復活させるのもいい。私より少し若い世代が退職前後にある。そんな彼らとの新しい物語を作ることも、楽しいことのようだ。

７０代以降のつながりを上手くやっている人たちからも大いに学ばなくては、と思っている。

４．老前整理

２年ほど前に、本で「老前整理」という言葉を知った。老後になって整理する意欲や判断力が弱まる前に、つまり老前に身の回りのものを処分整理するというわけだ。

それ以降、せっせというか、少しずつというか、進めている。どちらかというと、捨てられず溜めこんでしまうタイプなので、作業はゆったりしたものだ。

衣類でいうと、衣類箱を現在６箱もち、クローゼットと棚にそれなりに持っている。それらをすべて整理して季節順に着ていく「システム」をつくり、ようやく衣服の全体を掌握できた。ほとんど着てもいないものを捨てることはできないので、たとえば、二か所以上修復できない箇所ができたら捨てるという原則を作ってやっている。今朝も三着リサイクルに出した。

すると、いろいろなことがわかる。

第一次沖縄生活→愛知生活（そのうち一年間はカナダ生活）→第二次沖縄生活、というように寒暖差が激しいところで生活してきたので、残っている衣類に特徴がでてくる。愛知生活の際には、暑さ向けの第一次沖縄生活の衣類が着ないまま残っていたが、それらが第二次沖縄生活の中で、ほぼなくなってきた。でも、しっかりした衣類は、まだ３点ほど残っている。いいものは、３０年間という長さをものともしないのだ。これらは、まだ１０年は着られそうだ。

今は、愛知生活そしてカナダでの寒さ対策用の衣類が残って、やや困り気味だ。頑丈にできているものが多いので、とくにそうなる。外出着がとくにそうだ。ズボンなどは、着古して普段着でつかえるのでいいが、ブレザーなどは何着も残っている。本土旅行も激減したので、着る機会も少なく、あと１０～１５年はもちそうだ。

ということで、新しいものを買うのは、下着を除くと、１年に夏物中心に１～２着程度だ。

私にとっての、最大の老前整理は、書籍であり、研究資料だ。まさに１０～２０年計画を立てて、少しずつ進行させている。年間数百冊は、贈呈などで整理を進めている。まとめて引き取ってくれるところがあればありがたいが。

写真整理は、思い出が詰まっているので、作業量の割に時間がかかる。旅先の景観写真などは捨てやすいが、人物写真は、決断がなかなかしにくい。でも、忘れていた人を思い起こしたりと楽しくはある。その人が夜の夢にでてきたりする。

１０年ぐらい前から、デジカメ中心になって、アルバム式でなくなったのは、ありがたいことだ。

こんな風にして進めているが、計画の柱は、５年以上経過したものの第一次整理、１５年以上経過したものの第二次整理、２５年以上経過したものの「記念物のみ保存」という３段階で、進行させている。無論、これらの

年数を徐々に縮め、いずれは第一次、第二次、記念物の区分もなくして、すべて記念物だけになる予定だ。

先ごろまでは２０００年までの第二次整理そしていた。それが終わったので、今は２０１０年までの第一次整理を進めている。２０１６年初めまでに終える予定だ。

こんな老前整理は、「捨てる」「手離す」ものが多いので寂しい気分もあるが、捨てて身軽になりせいせいするし、ものによっては忘れることができるという意味で、気分もよくなる。

３．周りから「敬老の心」をもって扱われる時の対応

前に、電車で席を譲られる時のことを書いた。他にも多い。

・卓球練習の後片付けで、重いものを持とうとすると、若い人にその仕事を「奪われる」時

・長時間授業で休憩時間に一息入れていると、受講生に、「先生」というよりも「おじい」に対するトーンで、声をかけられる時。重いものを持って駐車場まで行こうとするとき、同じく受講生に「運びますよ」と手伝いを申しだされる時

・行事で、「乾杯の音頭」をとるように言われる時。

数年前まで、こうした時、「抵抗」を覚えて、「まだ若いですから」と返していた。多少ムキになることもあった。子どもに、「私は、ニイニイに見えるか、オジサンにみえるか」と、「オジイ」を外した二者択一で質問をすることもあった。

最近では、こうした申し出には素直に応じて「ありがとう」といって、手伝ってもらったりする。年相応になってきたと感じる。

「敬老」扱いには、無理に抵抗することをしないようになってきた。といっても、「敬老」扱いを要求することはもっての他だ。身体が対応できない時は、静かにその作業を遠慮すればいい。

時に「年功序列」的で過剰な「敬老の精神」を出されることがあるが、その時は、嫌味を感じる。

５０代６０代の方々は、こうしたことへの対応に慣れているが、多少過剰なこともある。私と２，３歳しか違わず、同世代なのに、私にこうした扱いをする。若い人になると、おおざっぱな老人扱いだ。学生に私の年齢を推理させると、誤差は１０歳ぐらい以内だ。子どもになると、誤差が２０歳ぐらいまで開く。

学生とは、かれらの祖父との比較談義を楽しくするようになってきた。

世の中全般を見ると、だんだん、年寄りに対して「敬老の心」で対応するのが少なくなっているようだ。そのほうが、年寄り側としても気楽な感じがする。

「年寄り」の爆発的増加は、従来の年齢区分を成り立たなくさせている。年齢差よりも個人差の方が大きくなってきている、ということもある。

そんな意味では、個々人がそれなりの「年寄り」像をつくる時代だろう。

さて、私はどんな「年寄り」像になるだろうか。機会を改めて書くことにしよう。

２．自分の体の弱点・いたわり方を知る

前回書いた「年寄りの生き方」は、ふと思いついて書いたものだが、面白そうなので、しばし連載してみることにした。

今回は、身体のことだ。ようやく「年寄り」の自覚ができてきた私だが、小さい時に生死をさまよう病気をして以降、虚弱体質でしょっちゅう病気ばかりしてきた。つけられた病名は、１０指に余る。気管支炎、顔面神経痛（のちにチックとわかる）、リュウマチ（のちに関節炎の誤診と分かる）、・・・。大学入学時の医療的検査は、私だけ数日も受けた。

２０代のころは、せいぜい５０代までかな、と思っていたが、それを通りこしてしまった。

身体のことで、たくさんの苦労をしただけに、自分の体のことにとても詳しくなった。西洋医学だけでなく、東洋医療、民間医療などもたくさん経験してきた。自分で試し、継続している治療法健康法もある。鼻うがいが代表的なものだ。我が庭畑はハーブ薬草に満ちている。

年寄りの方々は、こうした体験が多いと思う。特に「病気持ち」の人の経験は大きいと思う。身体に自信のある人は、意外にご自分の体のことをご存じないかもしれない。徹夜するなどということは、２０代が最後だった私には、５０代でも徹夜して仕事するという人には驚かせられる。

自信に溢れている人はかえって、病気になると大変だ。病気を認め受け入れるのが難しいのではないだろうか。そのためか、４０代５０代の働き盛りで、ぽっくり・・・という事例を聴く。

沖縄県の平均寿命の低下が話題になっている。しかし、別に記事でも書いたが、６５歳以上の人の平均余命は、依然として男女ともに全国一位だそうだ。若い人たちが早く旅立たれる例が多すぎるのだろうか。

ということは、強い人が残り、年寄りが強いということもできるかもしれないが、自分の体を知り抜き、身体との付き合い方に慣れた方が残っていると、私は考えてしまう。無理をしないことを知っているということではないだろうか。

薬草の話題になると、昔はおじいおばあが薬草に詳しくて、多くのことを習ったという、その道の専門家がおっしゃる。だが、そうした知識知恵がしぼんできたように思う。

そして、近年では、健康寿命という言葉が広がっている。そして、伸びた寿命を健康に活動しつつ、いかに過ごすかで、多様な試みがあちこちで見られる。

それは「余生」というものではなさそうだ。「余生」というと、「余分なもの」という語感がついてくる。「余生」というなら、「本生」があるのだろうか。歯を食いしばって生きる「本生」を終えて「余生」を迎えるという発想だろう。

私も、２０年ぐらい前には、そんな発想が残っていた。しかし、「人生後半期」という考え方に思い至った時、「本生」と「余生」ではなく、「人生後半期」として捉え、それを充実して生きるための構えについて考えるようになった。

１．年寄りの生き方　援助協力を頼むワザと姿勢がポイント　ラクラクホン

初めて出会う人が、私を「おじい」と認めるようになった。「おじい」といわれても、私は否定せずに、素直に受け止める。そしてその人たちが、何かを手伝おうという気持ちを持っていただけるのを嬉しいと感じるようになった。

しばし前までは、「おじい」といわれ、援助の申し出があると、ちょっといやな気持になることがあった。たとえば、電車で座席を譲られる時に感じた。ここ何年かは、電車に乗ることがないので、最近の経験はない。でも、今では、譲られれば、ご好意を素直に受け入れるだろう。

携帯電話の話。数年前だったら、タブレット型かスマートホンを買っただろう。でも、今はそれらに見向きもしない。老眼鏡が必要になるから、面倒なことが第一の理由だ。旅に出ることが、数えられるほどに少なくなったことが第二の理由だ。旅先や出先で寸暇を惜しんで、それらを使うなどは今の私にはありえない話だ。繁忙を極めた１５年ぐらい前なら、飛びついていただろう。２５年前には、超小型のワープロを旅先で常時使用していたくらいだ。

今は、自宅のパソコンで十分だ。私のパソコンのディスプレイは、４６×３０センチの大きいものを使い、画面を拡大しているので、老眼鏡は不要だ。

携帯電話を、1月2日に買い替えた。といっても、5年間使ってきたラクラクホンという、どう考えても「年寄り」向きの、キーが大きく単純操作のものを、新しいものに乗り換えただけだ。機能にそんなに変わりはない。というか、新しい機能を使いたいという気持ちがない。

使用に困ったときにはラクラクホンセンターに電話して相談もできる。同年代の人では、かなりの人気だと思う。学生が、私のものを見て「私のおばあも使っている」と話してくれた。出会った人が同じものを持っていると、親しみを感じる。

前の機種の時、外国でも使えるという説明を聴いていたが、ヘルシンキで使えなくて、迷子寸前になったことがあった。今回確かめると、ラクラクホンにはその機能はないとのことだ。ラクラクホンでそんな質問する人はいなさそうなので、調べるのに手間取ったが。

店員がいろいろなサービスを紹介するが、希望がないので、遠慮する。それでも、何かに4つ以上加入すると、何千円か安くなるというので、おすすめ通り入る。それは一か月したら解約すればいい、という説明だ。

ということで、一か月たったので、解約しにお店に出かける。すべて店員にお任せする。店員も慣れたもので、そこで操作してくれる。こういうのを自分でやるのがおっくうになるだけでなく、できるかどうかこころもとない年だ。遠慮せずに店員にお願いする。ついでに、画面をうろうろするマークを消すこともお願いする。

こんな話がいくつもあるようになった。1年余り前デジカメを買う時も、店員に機種選びと設定をお願いした。使い始めて、マニュアルを見ようと思ったが紛失していた。

日進月歩の器具は、自分でなんとかできる年齢ではない。援助してくれる人にお願いするのがいい。コンピュータについては、２０年前から援助者を確保してきた。当時は、情報科学専攻の学生だった。それから、何人か変わりながらも、「顧問援助者」がいる。

年寄りは自分でできることは自分でやることが前提だが、そうでないことまで何でも自分でやろうとするには無理がある。他の人の協力援助を素直に受け入れたい。と同時に、協力援助を頼める関係と、頼むワザと姿勢を持つことがポイントだと思う。

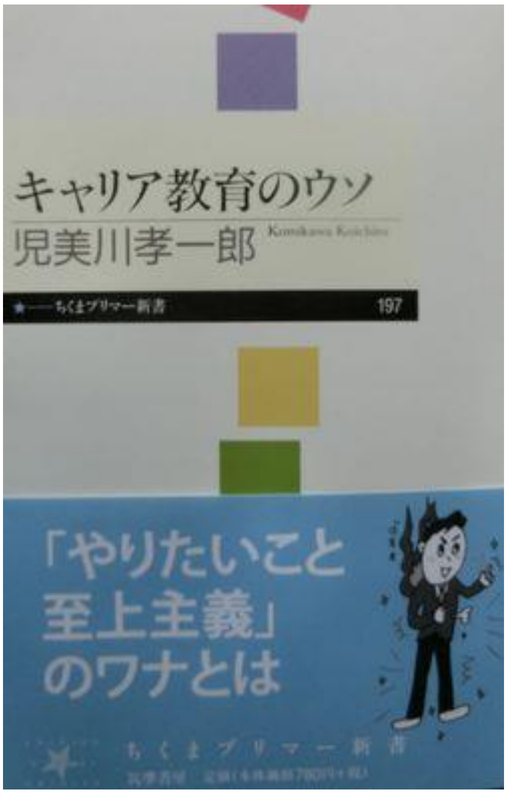
児美川孝一郎「キャリア教育のウソ」を読む　「ストレーター」用語が使われている

2015年02月11日

筑摩書房から２０１３年に出た本だ。

びっくりしたことからまず書こう。私が、１０年以上前に作り、ずっと使い続けてきたストレーターという用語が登場していることだ。

１０年余り私以外の誰かが使っているのに出会わないので、いつものように、私は「一匹狼」研究者で、あまり関心がもたれていないのだな、と思っていた。他にも、「教育実践の自己展開サイクル」は一度も使っていただけず今日に至っている。「研究的実践者」「実践的研究者」という用語は、結構使っていただいた。



児美川さんは、学校時代から就職３年ぐらいをめどの若者対象に使っておられる。そのためか、「かつての日本社会においては、ストレーターこそが多数派であったし、それが社会的な「標準」でもあった」（P26）とお書きになっているが、私の用語使用法は、定年を迎えるまでを対象としているので、かつての日本でも多数派ではなかったとみている。

といっても社会的な「標準」とされたことには間違いなかろう。それに囚われて、多くの人々が苦労してきたし、いまだに、それが「標準」だとして学校教育は展開し、保護者もそれを望み、若者もそれに囚われている。

そうした流れにのっていかない、のっていけない若者を「自己責任」において、その道を歩むことを求めるものとしてキャリア教育が展開されており、そこには「ウソ」が溢れている、というのが本書の中心をなしているといえよう。

そんな点で、私が、ここ１０年余り書いてきたことと響きあう点

が多くある本だ。読者対象として、若者を想定されているようで、読みやすく分かりやすい本だ。学校教員をはじめとする教育関係者あるいは若者の進路問題就職問題などに関心をお持ちの方にも有益だろう。

ちょうど今、私は、「浅野誠ワークショップシリーズ№.７　楽しいワークショップ」（仮題）を作成中だ。その末尾に、「社会創造・人生創造とワークショップ」という３万字ほどの文章を作成中だ。そこでもストレーター問題を含めた問題提起を書いている。

このタイトルが示すように、社会創造と人生創造を重ね合わせ、さらに発見創造・共同・体験（実践）を中心に進めるワークショップと結びつけて書いている。

多分、２０年余りしてきた人生創造ワークショップについて書くのは、これが最後になるだろう。万が一あるとしたら、人生後半期に焦点化したものだろう。４月初めには完成するので、こちらもお読みいただけたら幸いだ。

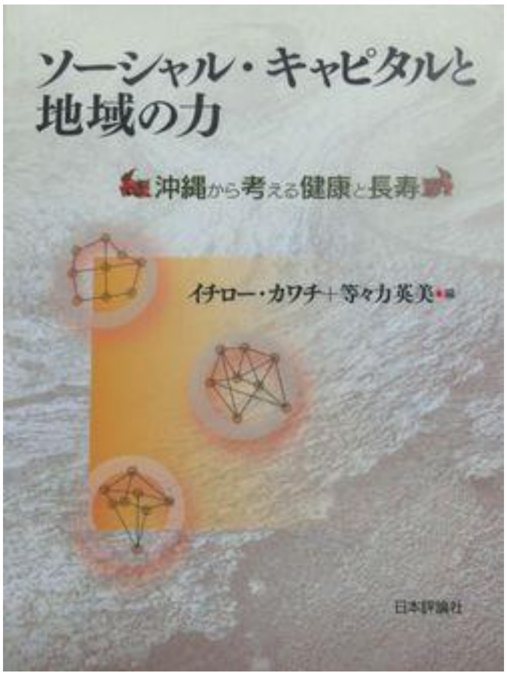
沖縄の長寿問題

2015 年 01 月 23 日

店頭で見つけたイチロー・カワチ、等々力英美編「ソーシャルキャピタルと地域の力　沖縄から考える健康と長寿」（日本評論社２０１３年）を読んだが、示唆されることが多かった。

イチロー・カワチさんは、医療とソーシャルキャピタルについての世界的なリーダーと言える人だし、他にも、この問題でのリーダーである近藤克則さん、稲葉陽二さん、加えて日米の研究者、特に琉球大学グループが加わるという、この分野では先駆的な人たちが執筆する研究書だ。中味も刺激的だ。

詳細は同書をみていただくことにして、本書から示唆を受けたことをもとに、私なりに考えたことを書き綴ろう。



１）まず、男女ともに長寿日本一を誇っていた沖縄の男女が、その位置から落ち、とくに男性に至っては、日本の平均値以下となっている。

だが、注目すべきことに、６５歳時点での平均余命は、依然として男女ともに一位だということである。ということは、４０代５０代という働き盛りの、特に男性の死亡率の高さが、平均寿命を著しく押し下げていることを問題にしなくてはならないことになる。

２）上に述べたことの原因の一つとして論点にあがっているのは、１９５０年代末から食生活がアメリカ型の脂肪分などが多いものへと変化したことである。そうした食生活の激変に子ども期に遭遇した層は、１９５０年代１９６０年代に生まれた人たちだ。かれらは、体重増加だけでなく、４０代５０代になる１９９０年代２０００年

代に、メタボといわれるような問題をもつようになってきたのだ。

３）また、上に述べた年齢層がストレスなどを抱え込み、自殺あるいはメタボ促進の条件を増幅させているという示唆も注目される。ストレスの背後には、高失業率、低所得などがあるという。また、経済的格差の大きさにも言及されている。

４）また、沖縄の長寿には、模合や結に象徴されるソーシャルキャピタルの高さが寄与してきたことが述べられるが、それが近年弱くなってきていることが危惧される。

５）これは、同書と直接にはかかわらないことだが、ここ数十年間に長寿信仰と呼ぶべきものが社会的に普及し、「長寿に向かって奮闘努力すべきだ」という風潮が強力になった。

だが、それ以前の平均寿命５０数歳以下の社会で作られた諸習慣というべきものが、平均寿命８０歳という激変に対応しているかどうかという問題がある。ソーシャルキャピタルも、平均寿命８０年に対応したものを作り上げる蓄積はまだ少ないのではないか。

ところで、中年層青年層、とくに男性と「人生計画」について語り合うと、「８０年も生きるということを考えてはいない」と応答されることにしばしば出会う。

そんな点では、長寿信仰が今後どうなっていくのか、どうしたらよいのか、という問題が存在しているようだ。

藤田孝典「下流老人　一億総老後崩壊の衝撃」を読む　2015年01月6～08日

２．生活保護　下流老人に陥る危険性　経済的事情で大学進学断念の増加

生活保護制度は、単語は知られていても、その中身は意外と知られていない。たとえば、保護のなかには、生活扶助・住宅扶助・医療扶助・教育扶助・介護扶助・葬祭扶助・生業扶助・出産扶助の８つがあることは、私も知らなかった（ｐ２０６）。それらのなかの、もっぱら生活扶助しかイメージせず、医療扶助がかなりの比率を占めていることも知らなかった。保護を受けている高齢者が病気になった時に、大変有効なのだ。保護を避けて、保険証をもたず、治療断念して死期を早めたり、孤立死に至る人が多い中、生活保護は重要な制度だ。

その生活保護が本人申請を基本とするため、申請へのハードルが高くなり、保護が必要なのに、申請しない人が大変多いという。「保護が必要な人々が実際に生活保護を利用している割合を示すもの」ｐ１４１として、生活保護の「捕捉率」という用語が使われているとのことだ。それが、ドイツ６４．６％ フランス９１．６％などと対照的に、日本では、「厚生労働省などの調査によると、現在の捕捉率は概ね１５～３０％前後である」ｐ１４１とのことだ。

憂慮すべき事態だ。

もう一つ、私が気づかなかったこととして、日本の住宅政策が、「持ち家取得のための優遇政策（住宅ローン減

税など）は充実してきた一方で、低所得者が民間賃貸住宅を借りるための支援や軽減措置がとられることはなかった。」ｐ２０９ということがある。私の推理だが、政策が住宅産業の要求に従うことを軸にして作られ、社会的弱者に向けたものでなかったためだろう。公営住宅も不可欠だが、日本は他の先進国に比べれば、かなり少ないのではなかろうか。

こういう記述がある。「貧困は見えないのではなく、見ようとしていくこと。すでにわたしたちの周囲にあるという前提で制度を考える必要がある。そして、下流老人の問題を「自分事」として考えるよう意識を変えていくことから始めたい。」ｐ２００

なるほどと思う。本書を読むと、下流老人に陥る危険性は例外的な人ではなく、一部の富裕層を除けば、だれにも可能性があるとのことだ。たとえば、私の年金額は２００万円なのだが、都市生活では厳しい額とのことだ。病気・事故・事件などなにかがあると、私も下流老人に陥る危険性をもつのだ。田舎暮らししているので、なんとかなっているのだろう。

しかも、年金額は減少傾向にある。加えて、経済状況の悪化で、スーパーインフレなどがあれば、実質年金額が大幅下落する危険性もある。

加えて、若い世代に非正規者の増加が著しいなかで、「国民皆年金制度は、雇用の不安定化によって、緩やかに終焉を告げている。これに代わる社会保障を構築しなければ、若者の老後が「時限爆弾」のように、社会へコスト増をもとめてくることだろう。」ｐ２１１といわれる。確実に「時限爆弾」が破裂する時期が近づいている印象だ。

こうした下流老人の激増の進行の前に、老人になる２０年ほど前の親の世代の貧困化の進行が、子ども世代の大学進学を押しとどめ、大学の存続に重大な問題をもたらし始めている。

普通の家庭にとってとりわけ大きな支出は、住宅費と教育費である。そのなかで、切縮めることになりやすいのは大学進学の断念である。かつてのように給費制度の奨学金がごく普通にあった時代と異なって、今は貸与制が中心となっている。事実上の教育ローンだ。だから、返済に苦しむ卒業生が爆発的に増加している。

このことは、日本では、大学進学が保護者の経済力に依存していることを示している。その結果、経済事情で大学進学できない子どもが激増するだろう。１８歳人口減少が、大学入学者数の激減になることを危惧する声が聞かれた２０００年ごろ、私は、親の経済力の低下が、入学者激減につながるという予測を提起したが、それが当たり始めている。

大学教育への公費支出が大幅増加しないなかでは、従来型の大学ではやっていけなくなり、大学の大変化、もしくは大学に代わる何かの創出が必要になってくるだろう。

本書のなかでも述べられているが、人々の平均所得の低下がすすみ、国に借金が大幅に累積しているなか、企業の内部留保（預貯金）は大幅増加している。そのあたりに、大きな問題構造が存在しているように思う。

また、余りにも金銭依存商品依存症体質が広がっているなか、そこからの脱却が不可欠だとおもうが、それはまた別に論じる必要があろう。

１．身近で我が事の問題

朝日新聞出版から昨６月に出されて、１１月に１３刷となるほど、すごい本だ。帯には「２０万部突破」と書かれている。軽い本と思いきや、重い本だ。それだけ真面目に受け取らざるを得ない人が多い深刻な問題だからだろう。

５０代までは数百万円という平均的収入だった人が、病気、認知症、子どもの問題、事故事件などで、生活保護水準以下に生活になり、生活保護をうけないで、ホームレスになる、孤独死するなどの事例が次々に出てくる。生活保護を受けても悪徳業者に絞り取られる例もある。

私自身の周辺にも「下流老人」になっている人、なりそうな人がたくさんいるのに、それに気づいていないことを気づかされた。そして、「現在の若者の多くは下流老人と化す」ｐ２１３という指摘も、このままでいけば、そうなるだろうと思う。さらに、私自身にも、そうなる危険性が存在していることを感じてしまう。

そうしたことに気づかず、「他人事」だと思い込まされている実情が広汎にある。さらに多くの人が「自己責任」だという発想にまき込まれている実情を感じる。

ということで、刺激が大きいだけでなく、学ばされることの多い本だ。

いくつか学び考えたことを並べていこう。

「これからの日本社会に、もはや中流は存在しない。いるのは「ごく一握りの富裕層」と「大多数の貧困層」の２つであろう。（中略）わたしたちは全員が緩やかに、しかし確実に貧困に足を踏み入れている。」ｐ１１０

「現時点での高齢者は、高度経済成長の追い風もあり、資産形成に有利な条件も整っていたために、圧倒的に恵まれた世代と言える。つまり、現在の高齢者はこれから高齢者になる青年層に比べて、相当に豊かなはずである。それにもかかわらず、すでに、下流化が起りはじめていることの深刻さを、わたしたちはもっと危機感をもって受け止めなければならないのではないか。」ｐ１１７

指摘の通りだ。現在のペースでいけば、一世代を２５年と計算すると、世代代わりの２５年後には、明らかにそうなることは、現在のアラフォーを見ればよく分かる。彼らの親世代がアラフォーの時と比べれば、経済力が歴然と異なり、相当に弱いのだ。非正規雇用だったら、なおのことだ。

そして、豊かなはずの日本の６５歳以上の高齢者についての、次のデータは驚く。私も知らなかったことだ。

６５歳以上の高齢者の就業率（平成２５年時点）

・日本　　　２０．１％

・アメリカ　１７．７％

・ドイツ　　５．４％

・フランス　２．２％　　　p165

世界的に例を見ない深刻な率だ。こうしたデータでは、「アメリカに次いで」が多いが、ここでは、アメリカの先を行っているのだ。
私の周辺でも、６０歳代の人のほとんどが就業している。それは、健康で仕事を持ててよかったと単純に喜ぶべきことではないのかもしれない。

「富裕層」について考える　2015年01月３～07日

最近、山野良一「子どもに貧困を押しつける国・日本」（２０１４年光文社）を読む。子どもの貧困について、よく分かる本で、大変有用だ
そのなかに、こんな調査報告の紹介がある。
「これは、全国の小学２年生、小学５年生、中学２年生の保護者（6288名）を対象にした、朝日新聞社とベネッセの共同調査「学校教育に対する保護者の意識調査」の結果のひとつです（2012年実施）。
「所得の多い家庭の子どものほうが、よりよい教育を受けられる傾向」があることについてどう思うか聞いたところ、「当然だ」「やむをえない」と回答した人が５９．１％いたそうです。４年前の調査では、この数字は４３．９％であり、約１２％も増加しています。」Ｐ２１５

「自己責任論」の浸透が背景にあるようだ。だが、ジニ係数に象徴される格差拡大が、親世代から子ども世代へと「相続される」傾向を色濃くもっていることは、本書にも紹介されている諸調査が明らかにしている。こうしたことは、先進国のなかでは異常な部類に属するものだろう。それらの例は、大学進学率の違いに象徴的に表れている。沖縄県の大学進学率が飛びぬけて低いのは、県民所得の低さ、経済的理由で大学進学を断念する子どもの多さが、理由の重要な位置にあるはずだ。
にもかかわらず、教育と所得との連関を「当然」「やむをえない」と受け止める傾向の多さ、さらに増大は、深刻な問題だと思う。序列競争感覚の強さ、あるいはつながり感覚よりは自己責任感覚の強さを反映しているのだろうか。

ところで、近年注目されるようになった貧困問題とは対照的にだが、富裕層の問題に焦点を当てた本を、私は読んでこなかった。出版点数が少ないかもしれない。貧困層とは対照的に富裕層に関心が寄せられていないのかもしれない。ジニ係数が高くなり、中間層が減って貧困層と富裕層とが増えているといわれるが、その富裕層については知られていないようだ。
「みせびらかし」消費をする富裕層についての中国や韓国の例をメディアで目に触れることはあるが、日本の例の報道は少ない。目に触れないような構図があるのかもしれない。ここ２０年余り富裕層向けの減税など優遇措置が進んでいるが、そのことは、ひっそりとおこなわれているようで、人々の眼には触れにくいのかもしれな

い。富裕層の消費が、海外とか、国内でも外からは分かりにくい姿で行われているのだろうか。

そうしたなかで、富裕層がどういう生活をし、どういう感覚で生活をし、その価値観や倫理はどうなっているのか、貧困層と同様に、もっと話題になっていいように思う。このことについては、私の情報量が少なすぎる。

近年、「アジアの富裕層を沖縄観光に呼び込め」というスローガンをよく目にするが、私には違和感がある。金持ちの「物見遊山」としての観光ではなく、庶民が世界発見と休養を兼ねた観光は大切だが。

たとえば一泊数万円以上するホテルに泊まるというのは、庶民の贅沢とは次元が異なると思う。といっても、私たちが、アジア旅行するとき、地域によっては、現地の人に私たちが「富裕層」とみなされることがある。

そんな意味では、富裕層とは比較のものだろう。だから、民間大企業の５０代ぐらいだとよく見られる年収１５００万円ほどの人でも、自分は「普通」だと思い、「富裕層」ではないと思っているかもしれない。だが、年収平均５００万円以下の人にとっては、明らかに「富裕層」だろう。

私の経験からいうと、１５００万円以上は富裕層だろうし、１０００万円から富裕層に含めていいかもしれない。子どもを大学に出すために、受験専門の中学高校、その準備の塾に通わせるのに、基本的な生活費まで切縮める必要がない年収といっていいかもしれない。今日の日本では、そうした教育費を負担できるかどうかが、富裕層かどうかの大きな分かれ目のように思う。

沖縄でも、そうした層があることは確かだが、私の近辺では、大学進学となるとかなり無理をするか、長時間アルバイトなど学生本人の負担がかなり高くなるのが実情だ。

こうしたなかで、富裕層が貧困層のことを他人事のように見なすとか、その存在を知らない事態が広くある。たとえば教職科目を受講する大学生たちが、教育実践のプランを立てるとき、受験専門校出身の自分の体験をもとにしてしまい、生徒の経済負担問題が頭の片隅にも存在していないことが結構ある。そのため、貧困層の生活に触れることなしに、教員になった時、大変とまどう。

だが、近年では、経済的には多様な子どもたちが一緒になって生活し活動する機会が少なくなってきている。家族の経済力で、居住区が分かれている事態が広がっているからなおさらだ。

政治家にしても、経済的に苦境にある人々の生活ぶりを知らないで、政策を進める例は、近年一層多くなっている感じがある。

その点では、平均県民所得全国最下位の沖縄での生活事情を知らない政治家も多いかもしれない。「お金で基地を押しつける」ことにつながる論理は、そんなところから生まれるのかもしれない。

基本的な生活とか教育とかは、世帯収入にかかわりなく保障されるようなあり方が追求されないと、子どもたちの未来は、親の収入次第で決まる傾向が強い今日の状況は、いつまでも変わりがないように思う。

景気回復を史上命令とする論理の中で使われるものに、景気回復すれば、大企業が儲かり、それが中小企業にも回り、従業員にも回り・・・という「したたり落ちていく」という理論があるが、結果的に大企業とその従業員止まりになる現実がある。富裕層が、貧困層や非正規従業員などの生活について知らないと、なおさらそうなっていきそうだ。

と同時に、富裕層でない人が富裕層の生活について知ることも必要だろう。

相互に無知であることが社会の格差を広げていくことにつながりやすくなろう。

元大学教員の退職後生活

2014 年 12 月 30 日

先日、沖縄大学の忘年会があった。初めてご招待を受け出席した。語り合うのは、現職の人より退職後の方々が多かった。客員教授・名誉教授の方々で、客員教授は、私のように他大学を退職された方々が中心だ。
そんな語り合いのなかで、元大学教員の退職後生活について思いを巡らした。

★　退職後、非常勤講師などの教育活動にかかわるのは、ほとんどが６０代までだ。私も、沖縄大学は今年が最後になることが、この時わかった。他の２大学は、まだ続きそうだが、何年間になるかは未定。
その年限は、大学によって一律に決められてところ。決められていても、例外規定があるところ。はっきりしないところ、とマチマチだ。これまで私が出会った非常勤講師の中で、最高齢は７３歳ぐらいだった。
当人の事情も大きい。もう大学授業はしたくない人、依頼される限り続けたい人、やりたいが、心身の事情で出来ない人、などとこれまたマチマチだ。週１～２回ならできるが、それ以上は無理だ、という人もいる。
私の場合、現状では、週２回を限度に、依頼されるならお受けしている。もう少ししたら、週１回が限度になりそうだ。主として、体力の問題だ。４０～６０人の若者相手に９０～１８０分対応するのはなかなか大変なのだ。１８０分というのは、私は２コマ連続で担当する場合が多いからだ。

★　研究生活の継続　退職して、会議をはじめ大学業務がなくなって、むしろ意欲を湧き立たせて、奮闘なさっている方も多い。文系は可能だし、理系でもフィールドワーク中心の人は可能だ。東北震災調査に何度もでかけておられる７０代の方にもお会いした。実験室が必要な方は、制限が大きいだろう。
むろん、研究にも体力が必要なので、限りはある。それでも、バウマンのように、７０～８０代になって、より一層著作執筆をしている人もいる。大田堯さんなどは、９０代になって書籍を出された。
体力気力がかかわるだろうし、専門分野による差異も大きいだろう。
私の場合は、研究生活に注ぐ時間は、今が一番多いかもしれない。できれば、この状態を１０～２０年継続したいと思う。

★　社会的活動　著名な人の場合、社会的影響力もあって、諸組織にかかわったり、新聞報道登場などで活躍したりする人は多い。地域で多様な役割を果たす人、ＮＰＯや社会福祉法人などで活躍する人も多い。

★　現職時代とは全く異なる世界に飛び込んでいく人。本当にやりたかったことが眠ったままになっていたので、自由に進められるようになり、新たに展開するという人もいる。

★　ゆったりした生活を楽しむ人。趣味・旅行・移住など多様だ。家庭菜園を楽しむ人もいる。海外生活を送る人。年間をいくつかに区分して、２カ所以上で暮らす人もいる。

★　家族介護・孫育ても含めて、親しい人との関わりを中心に生活を組み立てる人。

ほとんどの方が年金受給で経済的には安定しているので、多様な選択ができる点は恵まれている。民間大企業退職者のように、富裕層を構成するわけではない。だから、「豪勢」な生活というわけではなく、むしろつつましい感じであるが、恵まれている文化資本の活用にシフトしているのが特徴だろう。

保坂隆「自分らしい“人生の終い方”」２０１４年三笠書房を読む

2014 年 10 月 04~7 日

店頭で見つけた最新刊本だ。「終い方」には、「しまいかた」というふりがながついている。著者は６０歳代に入ったばかりだが、仕事柄多くの事例を見ておられるためか、私には共感できること、教えられることが多い。表紙にある語句を並べると、「医者と一緒に考える」「おおらかに「そのとき」を受け入れる６４の準備」「『穏やかな死』をどう迎えるか」

「死」「人生の終い方」というよりは、「死」にいたるまでの「生き方」をメインにしているという印象。「はじめに」の文がそのことを示している。

「自らが生と死の境目にたどりついととき、「ああ、私の人生は決して悪くなかった……」「いろいろあったけれど、自分なりに精一杯やったな」と思えること、納得できること。そして、大切な人の笑顔が思い浮かび、感謝の気持ちがあふれる。そんな「人生の終い方」こそが、有終の美だと思うのだ。そんな死を迎えるためには、何をすればいいのか。

簡単なことだ。「今」をしっかり生きればいい。他人から見てえらいだとか、立派だとか、そんな評価はまったく気にする必要はない。人生の主人公は常に自分であり、自分らしさを貫くことが幸福につながるのである。

（中略）

責任のとれる範囲で、自分のやりたいことをやる。自分に正直に生きる。それこそが、悔いのない生き方、引いては「自分らしい人生の終い方」につながるのではないだろうか。

（中略）

病気と上手につきあいながら生きる術も、「自分らしい人生の終い方」には欠かせない。

（中略）

充実した人生の先には、必ず穏やかな死が訪れる。だからこそ私は、みなさんが笑顔で自分らしい毎日を過ごせるようになることを、心から願っている。」Ｐ３－５

なかなかいい。私の希望期待でもある。もっとも１０年前の私だったら、こんな風には全く考えなかっただろう。この１０年間の気持ちの変化は大きい。

本文中、私が共感したり、新発見したりしたところをいくつか紹介しよう。

「人生の残り時間と向き合うことが、今こうして生きている時間を輝かせることにつながるのだ。」Ｐ１７

どれだけゆっくりペースになろうとも、私なりの仕事ができるのは、想定外のことがなければ、残り２０年プラスマイナス１０年ぐらいと予想して、今後の人生計画をたてつつある。仕事の中心は、私のメインである研究作業だ。

淀川長治の名言　「死は人間卒業、自殺は人間廃業です。」　Ｐ３０

なるほど、と思う。
次は、１００歳を過ぎたころの加藤シヅエの言葉
「一日十回感動すること、それが長生きの秘訣です。そして、一日に十回は感謝するの。感謝は感動、健康、幸せの源なのよ」　Ｐ５１

今の私は、こんなには感動感謝していない。でも、感動感謝とは縁遠かった１０年前よりは倍増しているだろう。

高峰秀子は、老後の生活の基本的なポリシーのいくつかのトップに「動じない」と書いているが、
「「動じない」とは「考えても仕方がないことは考えない」と覚悟を決めて生きること。こうすれば、何事に対しても平常心でいられるのだとか。」P56 と紹介している。

なるほどと思う。私は長い間、この逆のことをしてきて、思い悩み「動じてきた」。この流儀はいい。参考にしよう。

「長生きが人生の目標になったのでは本末転倒。大切なのは「生きて何をするか」ではないだろうか。
長生きにこだわり、健康のことばかり考えてガード一辺倒の生き方をするより、一日一日を攻める気持ちで生き切ることの方が、はるかに充実した人生といえる。(中略)
長生きのことなど気にもせずに伸び伸びと自由に生きている人は、たいてい長寿を全うするものだ。
むしろ、年など忘れて生きることこそ、長生きの秘訣かもしれない。」P59

超ナルホドだ。私も、そうしたい。

「心身の機能が下り坂に向かう高齢期に注意してほしいのは、「何事もほどほどに、欲張りすぎない」ということだ。
欲張りすぎと頑張りすぎをやめるだけで、老後はぐっと楽しいものなる。」P61

ウチナーグチでいうと、「テーゲーにやる」だ。かつては、「きちんとやってきた」私も、だんだん「テーゲー」になってきた。いいことだろう。

「かつては、洗練された年のとり方を尊び、それを老成モデルとして据えていた日本の生活文化。それが時代の変化と共に方向性を見失い、今や老後になっても年のとり方が分からない人が増えているという。（中略）

アンチエイジング・ブームの今、それとは対極にある美しい年のとり方にも思いを巡らせてみたいものだ。」P123

アンチエイジング反対を声高に叫び、熟することを大切にしようといってきた私には、拍手喝采の文だ。

末期がんで亡くなる姿が映画化された砂田氏の話。

「「死」は必ずしも生の中断ではなく、「生き切る」ことでもあると感じる。最期の夜、砂田氏が妻に感謝の気持ちを伝えると、「私も一緒に行きたい」という言葉が返ってきた。まさに「自分らしい人生の終い方」という表現がふさわしい死だと深く感じた。」P189

私もそうありたいものだ。

といっても、これらのことの何％ができるだろうか。当面は半分を目標にしよう。

イケダハヤト「新世代努力論」朝日新聞出版２０１４年を読む

2014 年 09 月 26 日～10 月 2 日

店頭で見つけた最新刊の本だ。私が、中高年に対して送り続けているメッセージと響きあうものが多い。著者のメッセージは、若い世代自身に送られている。そして、かつての「努力論」をいまだに奉じている旧世代の人々への批判でもある。

「プロブロガー」でもあり、１９８６年生まれというから、とても若いが、内容はかなり深い思考に支えられている。

「「恵まれた世代」は判っていない。これがぼくらの価値観だ」というサブタイトルが、本書のメッセージの性格の一端を表現している。

それは、１９６０～１９８０年代という右上がりの時代を生きた「恵まれた世代」が「努力すれば報われる」というメッセージを若い世代に送っていることの問題性をつくものだ。

それは、その世代の問題として当てはまる人が多いことも確かだが、その時代標準とされた考え方だし、本書が話題にしている働く現場だけでなく、学校教育や家庭教育などでも標準とされた考え方だ。だから、その考えについていけない人たちが沢山いたし、私のように、その考え方から卒業するのに時間がかかった人もいよう。

この世代は、染み込ませられたこの考え方から卒業するのに多大なものがあり、むしろ、それに気づかない人の方が多いだろう。だから「頑張り」「努力」不足ととらえてしまい、「働きすぎ」から卒業できないのだ。そして、リストラや定年で強制終了させられたときに、茫然としてしまう例が後を絶たないのだ。

その点でいうと、若い世代は、学校教育や家庭教育で、この考え方を押し付けられたとしても、心からそれに染まりきっているわけではなく、むしろ、本来の自分の姿に返れば、「あっさりと対処」できるかもしれない。「あ

っさりと」と書いたが、若い世代にとっても、「卒業し切れない」ものがある。そこで、著者は「卒業していく」ための考え方振舞い方を本書で提示しているともいえよう。
　それは、多くの人にとって、かなり新鮮なものだろう。人によってはショックな提示になるかもしれない。「恵まれた世代」のなかには、怒りをもって反論するかもしれない。
　しかし、私は、これは世代論である前に、時代変化論なのだ。つまり「右上がり」的思考や振舞からの卒業を社会全体がどのようにやっていくか、という課題なのだ、と思う。

　私がインパクトを受けた文を並べつつコメントしていこう。

「努力すれば報われる。頑張れば、夢は叶う。そういう古い考え方は、もうやめませんか。」Ｐ５
「「努力すれば報われる」という考え方は、根本的に傲慢だということです。僕らはそんなにパワフルではありませんし、社会はもっと複雑なのです。」Ｐ２６
「傲慢」とは鋭い言葉だが、なるほどと思う。私がよく語る収入のことにも次のように触れる。

「ぼくの周りは「身の丈にあった収入があればいい」と考える人々であふれています。」Ｐ３８
「個人として節度のあるお金の使い方をしている人は、クールに見えます。一方で、お金で評価を買うような人間は「中身のない人間」「欲にまみれた人間」として映り、「ダサい」のです。」Ｐ３９
「「私はこんな生き方をする。お金は必要最小限でいい。だって私は自由だから」という声をあげる若者、そしてそれに同調する若者は増えています。その叫びと実践は「お金を稼ぐことが難しい」時代を生きる、若者たちの自衛策なのです。」Ｐ４９
　お金にあふれ、お金にまみれる都市事情を背景にもった発言だと感じるが、私が住む沖縄の田舎でも、お金にまみれない生活をするしかなく、お金に囚われることが少ない自由な生き方をしている人が結構いる。

「時間、場所、人間関係、お金などに縛られない生き方・働き方」を指して「ノマド（直訳すると遊牧民）」とよんでいると理解すれば」Ｐ４１
　これは、１９８０年代に使われた意味でのフリーター（フリーランサーに似た意味）と同じだろう。当時、私は、関心を強く持ち、その時の印象から、２００３年に定職をやめてから、「フリー」または「フリー研究者」という用語を日常的に使用してきた。ノマドというと、あちこちに動くというイメージが強いので、最近の私は、以前と比べたら、動くことが激減したので、今の私にはノマドは「ちょっと違うかも」という感じだ。

「「承認欲求」持つこと、つまり「誰かに認めてもらいたい」と考えることを恥ずかしいことだ、悪いことだと考える若者は、意外なほど多いです。
　この不思議な羞恥心、罪悪感は、「空気が読めない（ＫＹ）」という言葉が流行るメンタリティと裏表になっているのでしょう。つまり、自分を殺して周囲に合わせる（空気を読む）ことを常識として内面化してしまうと、「私は誰かに認めてもらいたい」という「自意識過剰な欲求を肯定することが難しくなる、ということです。」Ｐ５６

こうしたことは、以前から存在する。増えたということか。それとも、ＫＹと結びつけて考察するのか。あるいは、社会関係・人間関係からの距離を大き目にとるということなのだろうか。いずれにしても、私は、存在感が薄く「合わせて生きる」若者の多さが、以前から気になる。
それでも、私のワークショップで、承認されることで喜ぶ若者が多いし、そのことが当人の人生史のなかで希少で貴重な体験となって、自己を変化させていく若者に出会うことは多い。

「努力はスキルだ」Ｐ６８
「「努力というスキルを身に付ける機会に恵まれなかっただけだ」と考えます。運が悪かっただけです」Ｐ７３
「努力できない人がいたら、その人が努力できるようになるまで手を貸してあげる。自分が努力できない人だとしたら、まずは自分ではなく、経験してきた環境の問題だと考えてみる。」Ｐ８５

面白い見方だと思う。そして「なるほど」と思わせられる。「努力」を態度とか姿勢とかのレベルではなく、「スキル」からとらえるのは、教育論としても面白い。

「競争から降りてみると、いかに自分がくだらないことで苦しみ、ときに他人を苦しめていたかがよくわかります。」Ｐ９２
「成功と競争はあまりにも強く紐付きすぎていますが、考え方は人それぞれ。」Ｐ８２
「誰かが失敗しているのを見たとき、または、自分が失敗してしまったとき、「単に運がわるかっただけだ」とあきらめることです。一見無気力な考え方のようですが、これは自分にも他人にもやさしくなれる考え方です。」Ｐ１００
「自分の力だけで成功を勝ち取ったと信じ込む人のうちには、他人に「努力不足」を押し付ける傲慢という悪徳が、すくすくと育まれていきます。」Ｐ１０１

こういう表現を私はしてこなかったが、共感できる言葉・文だ。
また、こうした見方考え方で、困っている若者に対して、有効なメッセージになる可能性が高いものだ、と思う。

「あなたは何かを犠牲にして努力をしていませんか。家族、自分の時間、自分の哲学、健康、本当にやりたいこと・・・そうしたものを犠牲にして取引する努力は、たいへん不健全です。」Ｐ１０５
「努力や犠牲はダメです。ぼくらが本当にすべき努力とは、「没頭」と表現できるようなタイプの努力です。」Ｐ１０６

私が青年期だった１９６０年代は、私だけでなく周りにも「自己犠牲」的な雰囲気が強く存在した。と同時に、「やりたいこと」「やるべきこと」といったものを重視する動きも併存させていた。そのなかで、「頑張る」「努力」が溢れていたのだ。

「「成功を狙わない」というのは甘い考え方に響くかもしれませんが、「成功を狙う」という態度自体が、成功を呼び寄せないと思います。すばらしい結果というのは、常に、「楽しんだ」結果として生まれるものです。趣味でもビジネスでも、「楽しみながら全力を尽くす」というのが、健全で持続可能な成功の秘密だとぼくは考えています。逆にいうと、何かを我慢して、犠牲にしながら生きている人は、長期的に成功することが困難だと思います。」Ｐ１１０

「没頭」という表現は絶妙だ。合わせて「楽しむ」ということは、私の場合、人生後半期になって、ぴったりとくる言葉になっている。そして、これらは、個人一人のレベルだけでなく、人間関係レベルで語られているところがいい。

「自他を犠牲にしない健全な成功というものは、いつでも「楽しんだ結果」として、いつの間にか成し遂げられるものなんだと思います。努力して努力して、すべてを犠牲にしてようやく成功した・・・という話を人々は好みますが、そういうやり方だと、成功しなかったときに絶望的になってしまいます。たとえうまくいかなかったとしても、「ま、やってて楽しいしそれでいいや」と割り切れるようになるのが、これからの時代の健全な努力なのです。」Ｐ１２０－１２１

「自分の努力には必ず意味がある。自分の人生には必ず何らかの意味がある。そういう前提が、自他を苦しめることにつながるのです。まず最初に押さえておきたいのは、世界はそもそも「非意味」であり、意味を見いだすのはぼくらの眼である、ということです。そういう事実をワンクッション挟んだ上で世の中を観察すれば、努力が実らなかったときに、「あぁ、自分の努力には意味がなかった・・・」と無駄に絶望することもなくなるでしょう。」Ｐ１３３－４

私自身の失敗した時のことを振り返った時、「無意味だった」とがっかりすることがしばしばだった。そんな思考に囚われている人にとって、「非意味」とか「意味を見いだす」という捉え方は、説得力があるし、リアリティがあるといっていいかもしれない。失敗を「意味を見いだしきれていない」「まだ見つけていない」状態だととらえるのは、なかなかいいアプローチだ。

次の記述も興味深い。

「明るい未来を実現させるためには、ぼくをはじめとする「恵まれた個人」が、「私は恵まれている」という自覚を持ち、「だから、私はこの恵みの循環に関わる」という決断と表明を、意識的に行っていく必要があると考えます。」P147

「恵まれているあなたが、恵まれない誰かを助けようとすることは、巡り巡って、いずれ弱者となりうるあなた自身を助けることになるのです。あなたが誰かを助ければ助けるほど、あなたがもしも困ったとき、誰かがあなたを助けてくれる確率が高まります。」P151

本書が示す発想の展開が、どういう時代を反映し、どういう時代をつくるのか、しばし考えていきたい。

澤田佳世「戦後沖縄の生殖をめぐるポリティクス」（大月書店２０１４年）を読む

2014 年 09 月 17 日～22 日

店頭でみつけた本で、「米軍統治下の出生力転換と女たちの交渉」がサブタイトルである。この時期のこれらの問題は、ブラックボックスに近い状況、ないしは推理レベルに置かれてきたが、それを明るみに出した本だ。

また、人口を扱う書籍は、統計処理を中心にしたものがほとんどだが、優れた政策分析を加えるだけでなく、数十人にのぼる当事者へのインタビューをふまえた研究は圧巻だ。そのことで、数字レベルのみならず、当事者の行為というか実践というか、それらのレベルでの解明がなされ、リアリティを豊かにもつ研究となっている。そして、政治政策レベルだけでなく、家族の中で多様なやりとりレベルでの解明が研究の特色を作りだしている。その際、ジェンダー視点で鋭く切り込んで「生殖をめぐるポリティクス」を究明している点が、本書の中心点な特質だともいえよう。

そうした研究は、人口や生殖といった問題だけでなく、恋愛・結婚などを含んだ家族形成・健康・教育・人生創造など多様なレベルの問題にまで照射するものとなっている。このように、いろいろな点で画期的な本であるので、本書の扱う専門分野以外の方たちにもおすすめしたい本だ。

いくつか紹介しつつ、感想めいたコメントをしていきたい。

１）まず政策展開についてだ。分厚い本書の終章には、要約文があるので、その箇所を紹介しよう。

「沖縄が米軍統治下におかれた時代、日本では中絶が実質的に合法化され、家族計画が国策として推進された。しかし、戦後の沖縄は、優生保護法を軸にすえた人口抑制と生殖管理の歴史を「国民国家・日本」と共有することなく、しかしながら日本の後を追うように出生力転換期を迎えることになる。沖縄における優生保護法の立法化と「廃止」の背景には、「過剰人口」を問題視し出生抑制による人口統制を企図する琉球政府と、「過剰労働力」を問題視し移民排出による人口抑制を目論むＵＳＣＡＲとの抗争があった。「本土並み」の経済発展と琉球民族の「質的向上」を目標に優生保護法を希求する琉球政府に対し、ＵＳＣＡＲは、中絶に反対するＵＳＣＡＲ婦人クラブや米国世論、および人口抑制という新たな植民地支配の技法を批判する国際世論を前に、沖縄人口に対する「軍事的中立主義」を貫き優生保護法を「廃止」した。こうしたＵＳＣＡＲの「軍事的中立主義」は、ヤミ中絶を戦略的に「黙認」することで、実質的には出生抑制による沖縄人口の抑制に「加担」していたといえる。ＵＳＣＡＲと琉球政府間の権力関係の非対称性は、出生力転換期沖縄の人口と生殖をめぐるポリティクスを左右した。戦後沖縄は、中絶および避妊・家族計画に関する日本の国内的潮流に与することなく、妊娠しない／出産しないための手段と権利へのアクセスが法的・社会的に制限された、優生保護法なき固有の出生力転換過程を経験することになったのである。」Ｐ３３２

「その後、沖縄の出生力転換は、優生保護法なき「民間」主導の家族計画への道のりのなかで展開した。その道程には、ヤミ中絶の蔓延や多産、不妊手術の多用による女性の「健康被害」を問題視し避妊普及に奔走した助産婦たちがおり、各種女性団体や職業団体の女性リーダー、およびＩＰＰＦや日本の家族計画団体の支援による沖縄家族計画協会の設立があった。沖縄家族計画協会の主要事業として受胎調節実地指導員が養成されると、指導員たちは、沖縄の長男願望や男性・年長世代の抵抗、くわえて身体に対する女性自身の無関心さとむきあい、

集団指導と個別指導を組みあわせながら受胎調節実地指導を行っていく。沖縄において家族計画の知識と手段は、こうしたジェンダーや世代などの権力関係と対峙しながら、助産婦を中心とする受胎調節実地指導員、医療関係者を含む沖縄家族計画協会関係者、および各種メディアや家族・友人ネットワークを介するなかで普及していった。

こうしたなか、優生保護法なき沖縄の出生力低下は、一九五〇年代はヤミ中絶を主な出生抑制手段として、六〇年代半ば以降はその手段を徐々に避妊に転換させながら実現した。」Ｐ３３３

沖縄教育史に関心をもち、さらにそれに不可欠だと思っている産育史・人口史にも関心をもつ私だが、本書で示されたことは、１００％新鮮な情報だ。今後の私の作業にとても有益だろう。

ここでも触れられている、この時期の助産婦をはじめとする医療福祉関係者の尽力は並のものではない。そして、それを中心的にになった女性たちが、その後の沖縄女性像形成に強力な財産を残し、今日に至るまでの沖縄女性パワーの豊かな源流の一つだといえよう。

だが、それが意外と過小評価されている。その点に関わる記述も含めて、紹介コメントをさらに続けたい。

「日本の家族計画の国策化が一九五一年に開始したのに対し、沖縄家族計画協会の設立は一九六五年と、その差は約一五年となっている。一方、ＴＦＲが２．０を割りこみ「少子化」時代が幕開けしたのは、日本では一九七五年、沖縄ではその一五年後の一九九〇年である。家族計画普及開始の「遅れ」と同じ年数をもって、沖縄の出生率が日本を追って低下していることは示唆に富む。

（中略）

日本では、「適正人口」の実現に戦前は移民が、戦後は出生抑制が重用された。一方、沖縄では、戦前も戦後も移民によって人口調整がはかられている。こうした米軍統治下沖縄の家族計画と移民政策との関係性、さらに家族計画よりも移民政策が主張される背景には、戦後冷戦体制下において、沖縄が日本および米国を中心とする国際政治の最周縁部に位置づけられたことが影響している。」Ｐ３３４－５

「近代社会では再生産の制度としての家族に対し、国家は国民の再生産を、市場は労働力の再生産を、家族は家の継承者の再生産をその機能として期待する。しかし、日本から「切り捨て」られ米軍政下にある沖縄の家族と生殖の場に、「国民」や「労働力」の再生産は期待されていない。そこに期待される機能は、家の継承者の再生産に収斂される。沖縄の生殖の機能は、家父長制的な家族編成原理をもつ家族の領域へと疎外されていくことになる。

米軍統治という政治体制は、中絶と避妊の法的・社会的制限を通じて、沖縄の女たちの子産みの営みを規定した。米軍政下の沖縄で、女たちは中絶と避妊へのアクセスを法的・社会的に阻まれながら、厳格な父系継承主義のもと男児出産の強固な役割期待を生き抜いた。戦後沖縄の女たちは「あたりまえ」に孕まなければならず、産まなければならず、より正確には男児を産まなければならなかったのである。」Ｐ３３５

「女たちは教育・就労・結婚・出産・育児といった各ライフ・ステージで、自らの人生を交渉のうえに「選択」し多種多様な人生行路を生きながら、子産みをめぐる意識と行為を多様化させている。戦後沖縄では、女性をと

りまく社会構造が変化するなか、高学歴化と被雇用者化を背景に、少産動機をもち「少なく産む」ことを実践する女たちが徐々に増加した。また、米軍統治と米軍基地の存在が、沖縄の女たちに構造的暴力としての望まない妊娠を強要した。そこには、婚姻内外での出生抑制に対する切なる需要が確認される。一方、生産年齢の男性が「不足」した戦後、強固な父系継承主義と明治民法の存続を一背景に、沖縄における男児の社会的価値は高まりを見せた。こうしたなかで、沖縄の女たちは、「男児を産まなければならない」という男児出産の性役割や「子どもをもっことはあたりまえ」とする子産み規範と交渉し、ヤミ中絶や不妊手術、避妊による出生の調整を「選択」してきたのである。」Ｐ３３５－６

専門外なので、正確なことを言える資格はないが、優れた分析だと思う。いくつかコメントをしておこう。

「強固な父系継承主義」の分析は興味深い。では、これがいつから始まったのだろうか。士族の場合、家譜とのからみで、１７世紀末より明確な形をとってきただろう。では、士族外ではどうだったろうか。地割制下にあった農民の場合、家の子どもという要素をもちつつも、シマの子どもという要素を多分にもっていた。家や門中といった要素が高まるのは、地方役人層にあっては１９世紀だろうし、一般農民にあっては、土地整理や明治民法とのからみで、２０世紀へと移る時期であったのではなかろうか。

さらに、首里王府による宗教支配策の展開のなかで、母系制システムが父系制システムへと軸足を移していくことも、視野に入れなくてはならないだろう。

だから、沖縄は「強固な父系継承主義」をもともともっていたとはいいがたいだろう。時代時代の政治支配が、深く絡んでいたのだろう。このあたりも専門外ではあるが、沖縄教育史を考える上では、最低限の検討理解が必要だ。こうした点にもかかわって、澤田さんをはじめとする方々が研究に手を付けていただけると嬉しい。

また、「戦後沖縄では、女性をとりまく社会構造が変化するなか、高学歴化と被雇用者化を背景に、少産動機をもち「少なく産む」ことを実践する女たちが徐々に増加した。」は、学校教育での成功を支える家族という「教育家族」の成立と普及の問題でもある。私は、沖縄では１９６０年代に広がり始め、１９８０年代には一般化したとみている。

と同時に、本書が明らかにしているように、他府県の「教育家族」のモデルとなった核家族・専業主婦というあり方ではなく、働いて現金収入を得つつ、母親・主婦役割も展開した女性たちのありようが、沖縄における教育家族の特性を作りだしただろうことをいかに解明分析していくか、という課題にもつながっていくだろう。

その点では、１１７ページあたりの、沖縄では専業主婦が成立しがたい事情についての分析は興味深い。

もう一点、引用のなかの国家が「国民」や「労働力」の再生産を期待していないという叙述にかかわってだが、国家が期待しないとしても、沖縄住民が「国民」や「労働力」の類を期待した面が、「男児を産む」ことを含みつつ存在したことの検討も必要だろう。

生活指導学会報告

2014年09月04日～08日

３．全体会　「生活変容」

大会２日目午後の全体会は、「変容する<生活>の実相をみつめる――歴史的転換期における「生活変容」への生活指導論的アプローチの試み――」というタイトルのもとに、西本勝美「「空間」、「手入れ」、そして「生活のかたち」」、喜屋武幸「国策に翻弄される地域の生活と教育～新基地問題に揺れる辺野古の苦悩と葛藤」の二本の問題の提起がなされ、かなり難しいが興味深い討論が展開した。
そのなかで、私なりの注目点を含めて、当日行ったコメント的な発言を記そう。

人々の生き方・生活のありようにかかわるものには、多様なレベルのモノ・コト・ヒトがある。そのなかで、人々の内在的継承的でないものによる強い影響が急激に訪れることがある。沖縄でいうと、基地・戦争・政治的軍事的支配がある。たとえば、１７世紀初めの薩摩支配の開始、琉球処分、沖縄戦と米軍支配の開始がよく知られている。
と同時に、緩慢であるにしても根底的な影響をもたらすものがある。沖縄でいうと、１９００年前後の金銭・商品経済の浸透があるし、戦後、とくに「復帰」以降、金銭・商品経済の圧倒的支配がみられる。辺野古問題を含む近年の沖縄の基地動向には、急激かつ緩慢な、双方の強い影響があり、人々を翻弄し続けているとも言える。
それらは、人々を自然から引き離し、都市的生活を否応なくさせるという面を持っている。西本が引用した桑子敏雄流にいうと、「空間の履歴」「人間の履歴」を断絶させ、自然の（自然な）流れに合わせた生活を破壊していくものだった。

そうしたありようから回復し、自然との付き合い方、西本流にいうと、「手入れ」をしながら、自然との関係を築いていくことを求める動きがある。
西本の場合、その自然のなかで、農業的自然がぬきんでて強調され、人間関係については慎重な評価が与えられる。「「人間関係」に還元される理論と実践は、必然的に市場原理に絡め捕られざるをえない」とまで評価される。私の場合、「自然と人々とつながる田舎暮らし」という表現を使ったが、自然のみとつきあうのではなく、人々といかに関係を築くかに焦点を当てている。
金銭商品経済にあまりにも支配され過ぎた今日の状況を、自然・人間関係を含めた生き方・生活の創造をいかに展開するのか、という重大な課題に、人々自身が直面している今日である。辺野古問題を含んだ沖縄はその鋭い問いの前に立っているといえよう。

２．私の「地域起こしと人生創造――沖縄県南城市での事例をもとに――」の発表

学会の２日目午前に行った私の発表の一部を紹介しておこう。

地域起こしと人生創造　――沖縄県南城市での事例をもとに――　　　２０１４年８月　　浅野誠
１）私の研究史　　　（略）

２）社会分析と人生計画

・社会変動と生活変動と人生変動

　これまでの右肩上がり発想の流れでいくのか、物量的過剰を認識して、豊かさの中身を変える発想でいくのか

・社会変動と地域おこし　　ハード型・誘致型からソフト型・自立型へ

　地域起こしの中心に、子育て教育・福祉・医療・コミュニティ形成が座るようになってきた

藻谷浩介・ＮＨＫ広島取材班『里山資本主義』（２０１３年角川書店）

広井良典『人口減少社会という希望―コミュニティ経済の生成と地球倫理』（２０１３年朝日新聞出版）

・老年期・高齢期把握　　アンチエイジングからサクセスフルエイジング

エイジングの受け入れと「熟」　　多世代協同へ　　　　　　　五木寛之『新老人の思想』（幻冬舎２０１３年）

・人間関係（社会資本）つくりとコミュニティつくり　社会資本論・コミュニティ論の流行

　そこでのコミュニティは、地域つながりを軸にしたアソシエーション型が多い。

３）こうした課題に取り組む地域における専門家とクライエント　　（略）

４）田舎（農村）へのＵターンＩターンをどうみるか

・南城市の人口増　　　直接的には、アパート増

　　那覇など都市地域へ通勤する若い家族　　南城市内に実家をもつ例が多い。

　　いざという時のサポートが期待できる。生育地とのつながり（クラスや部活の仲間、青年会など）が濃厚

・移住者の多様性

本土からの移住者　　アパート・借家から始まり、一戸建て住まいへ　　都会へ戻る例もある

東北からの移住者もいる。

　那覇などからの移住

　Ｕターン者　　三世代同居もあるが、近接地に別居する例は多い。

　　仕事にあてがある場合もあるが、あてがなく、「なんとかなるだろう」という人も多い。起業に至る例も多い。

　　　典型例――ＩＴ技術者で、大都市での苦節体験から田舎に戻り、精神的身体的に回復しつつ、地域起こしにかかわる新たな仕事に就く例。　２０代３０代Ｉターン者にも多い。

５）南城の特性

・田舎・自然

・インフラ　道路　下水道　住宅　保育　学童保育　整備が急速に進む

・人間関係

　伝統的コミュニティ（シマ　字）　血縁（門中など）　老人会など地縁性をもった組織　アソシエーション

・雇用増　　第一次関連産業　観光産業　例琉球王国村

・文化・イベント　観光・カフェ　　　　　「文化が主導する地域づくり」

　高齢者施設　障がい者施設

　地域おこし　地域活性化で知られてきている

６）組織と企画・小規模財政、行政改革（保育園の民間委託　職員削減など）　縮小可能性と一括交付金

・多様な企画

アガリティダプラン　中学生が審査

シュガーホール第二次活性化計画　　新人演奏会　オーケストラ　沖縄芸能　ミュージカル

エコミュージアム構想（尚巴志活用マスタープラン）

半島芸術祭　クラフトフェア　オープンガーデン　尚巴志マラソン　青年芸能祭

・諸団体・諸組織

観光協会　老人会　女性組織　農協　青年会　シルバー人材センター

花野果村・軽便駅・高原の駅など農家の直販店　　起業

社会福祉協議会　福祉施設　福祉組織

７）私がかかわるもの　かかわったもの　　（略）

８）浮かび上がってくる検討分野

・生き方・生活の単位としての地域（字レベルと市レベル）

・充実した生き方・生活を保障促進する地域とは

・諸分野と相互関係

生産・雇用・職業・仕事起こし　　生活（衣食住）（地産地消、買い物）

子育て・教育　　福祉　　医療・癒し　　自然　　防災・安心安全　　文化・余暇

・自治体の役割

・地域と個人のアイデンティティ

・地域での取り組み・活動　　対人援助職としての専門家に必要なこと・やりがい

９）焦点的問題

・仕事おこし　とくに対人サービス業務　医療福祉・観光・地域おこし関連業種

地域産業である農業と、第２次第３次産業とを結びつける第６次産業の創成

第６次産業とサービス産業とを結びつける。

・住みたくなる・住み続けたくなる魅力　　自然・人間関係・インフラ・文化・仕事

・諸分野の連携活動の先導例つくりとその意味付けと紹介

例　文化と福祉　シュガーホール・シルバーコーラス

学校教育と文化　シュガーホール・出前授業

・これから他分野との連携に取り組む分野

例　医療・保健　　ケアリングコミュニティ　　福祉文化　　防災

・「コミュニティつくり」　従来のシマの新展開

シマヤーつくり　小谷マーイ　シュガーホールの出前企画

新たなコミュニティ創生　　結成参加型で地域とのつながりをもつコミュニティ

大橋謙策編著「ケアとコミュニティ」（２０１４年ミネルヴァ書房）

１０）地域起こしのキーパーソンたち　インタビューをもとに　　（略）

１１）これらのなかでの私の高齢者人生
健康回復から健康維持へ　　加齢（＝熟）の受け入れと対応
４分野　　１）研究　　２）大学授業（週２～３コマ）など　　３）地域とのかかわり　　４）畑庭作業など
２）が減少し、３）の比重が高まる。　１）４）は、しばらくは維持できよう
５）終末期の準備が必要。　　まず、老前整理などから

１．沖縄の若者の生き方をめぐって

　これから数回にわたって、８月２９～３１日開催の生活指導学会のなかで、私が参加した分科会などについて、報告コメントしていく。
　まず課題研究Ａ「青年期生活指導実践――他者と共に生きることの学び」分科会で、コメンテイターを務めた私のコメントを中心に紹介していこう。
　この分科会では、「南城市における若者の現状について」（喜瀬斗志也)、「暴力を統制する」（打越正行）の二つの報告をもとに討論が進行した。双方とも、沖縄の若者をめぐるものだが、置かれた状況がかなり異なる。
　そこで、私は「論点地図」というタイトルをつけてコメントした。

　二つの報告が対象とする若者の位置（沖縄の中での位置、世界の中での位置、これまでの本分科会での位置）はどうか。各々の共通性と特殊性はどうか。
１．若者たちの現在認識と将来構想はどうか。
２．地域のなかで、人間関係のなかではどうか。
３．地域の共同体とのかかわりはどうか。青年会には、多種がある。たとえば、戦前来のもの、戦後スタートのもの、最近形成のものなど多様だ。
４．直接かかわる社会の特性と変動のなかではどうか。

　私が関心をもついくつかの点
１．「沖縄の下層若者」という表現が報告の中に登場するが、「下層」の意味は多様であり、「下層」という枠で言い表せるもの、そうでないものがある。また、エイサーが話題になったが、エイサー集団にも多様なものがある。山城千秋が紹介した浦添内間青年会（『沖縄の「シマ社会」と青年会活動』（エイデル研究書２００７年))、あるいは、地域密着型（例　道ジュネー）とサークル型（ヨサコイソーランなどに類する）などの違いもある。
２．地域おこし・地域創造への若者のコミットには多様なアプローチがある。
３．若者相互の人間関係には、旧来の共同体型と、結社型（多様な形がある）とが存在する。人間関係の希薄化がいわれるなかで、それにもかかわらず、多様なものが作られている。

４.「地域との関係性が希薄な若者」といわれるが、地域との関係性が強くても、１０代半ばで疎遠になっていく若者がいるし、その程度の差異も大きい。進学就職などによる居住地移動の有無が大きくかかわる。
５．地域アイデンティティ（沖縄アイデンティティと生育地アイデンティティ）の濃淡も強くかかわる。沖縄と生育地とがひきつけるものの検討も必要だろう。職探しが困難でも、収入減であっても、沖縄にとどまる、あるいはUターンする若者がかなりいることをいかに分析するのか。
６．地域での仕事起こし、仕事探しのありようの検討が必要だ。
７．地域での家族形成・分解過程の検討も必要だ。
８．ジェンダー視点も重要だ。女性の困難と強さと、それとは対照的な「立ち遅れる男性たち」が目につく。
９．仲間相互、あるいはＤＶなど、人間関係と暴力が問題となっているが、そのありようと濃淡の分析が求められる。報告は、暴力依存を自己抑制することに焦点をあてている点が注目される。それは、広く男性の課題ともなっている。また、それは「強さ」へのこだわりからの卒業という課題とも重なる。「強さ」にこだわる人の多くは、いずれ強さに頼れなくなる。そうした時点でどうするのか。アイデンティティを「強さ」に求めるという体質を問うていく必要がある。
１０．１０代後半から３０代前半までの長い試行錯誤期間というのが、ごく普通の時代になっている。
１１．沖縄建築業が話題になっているが、職人不足人手不足の中で、建築業の現状分析が必要だろう。
１２．エイサー、ヌーバレー、ミュージカルなど、地域の多彩な芸能にかかわる大量の若者たちの存在に注目したい。
１３．若者にかかわる実践者たちは、以上述べてきたことにどのようにコミットしていくのだろうか。

長沼博之「ワークデザイン」を読む

2014 年 08 月 30 日

しばし前に紹介したチキリンさんの本と同様に、これまた店頭のビジネス書棚で見つけた本だ。２０１３年阪急コミュニケーションズ刊で、副題は「これからの＜働き方の設計図＞」とある。

経営コンサルタントを営む１９８２年生まれの著者だ。大変化過程にある最近のビジネスや働き方の動向をよく見ながら、大胆な提起をする。クラウドソーシング、メイカーズ革命、オープンイノベーションなどと、私にとって初見の用語が続出で、ついていくのに苦労する箇所も多いが、刺激的な内容に興味がわくところが多い。

生産やビジネスのありようの大変化で、終身雇用制に象徴される旧来の働き方とは異なるありようが急速に広がってきているが、新しいありようとして、「パラレルキャリア」という働き方・生き方を提案する。

「これまでの「働く」構造」は、ゼロサムゲーム――消費社会―

―２０世紀の仕事のインフラ（リアルのみ）――大組織――一つのキャリア・終身雇用――「タスクのあり方」論理的、計算的、単純作業的――個別スキル、と積みあがるものだったという。

それに対して、「これからの「働く」構造」は、互恵的社会貢献競争――生産社会――２１世紀の仕事のインフラ（リアル×ネット）――チーム・小さな組織――パラレルキャリア――「タスクのあり方」創造的、構造的、接触的、貢献的――個別スキル、と積みあがるものになるという。Ｐ９１

この二つの対比のなかの「消費社会」と「生産社会」の組み合わせについてだが、「消費社会から生産社会へ」と移っていくわけだが、その特質の一部を紹介しよう。

エンジン	生理的欲求・尊厳の欲求	→	自己実現の欲求・貢献の欲求
価値観	消費・勝ち負け	→	生産・共生
主役	大企業	→	個人・チーム　小さな組織
個人の強まる側面	消費者・投資家	→	生産者・市民
生産モデル	大量生産	→	多品種適量生産
スタート	お金	→	コミュニティー　（ソーシャル・キャピタル）

Ｐ１６３

こうした変化のなかで、「仕事力」が、「問題解決的」「分析対応的」なものから、「機会発見的」「環境適応的」「予見力」に移っていくという。「与えられた問題に答えるという入試的、テスト的なもの」から、「「問題を定義」するところから始め、自ら未来を予測し、的確な優先順位をつけ」るようなものへと変わっていくという。

直接は触れていないが、学校教育にも重要な問題提起になっている。

そして、今日は、「本業を１つ持って、生涯それだけをやり続けるというキャリアプランではなくなっている」といい、「現役のビジネスマンが現在の本業は続けながら、同時に本業以外にチャレンジする」「パラレルキャリア」を提起する。Ｐ５３

そして、「パラレルキャリアは、「副業」よりももう少し大きな概念を指す。なぜなら、必ずしも「お金（報酬）」だけが目当てではないからだ。自身のスキルの向上や、使命と感じられるような活動に取り組むことをも含んでいるのが、パラレルキャリアという生き方なのだ。」Ｐ５４と述べる。

そういわれると、私自身も、専任大学教員時代も、専任を退職して以降も、パラレルキャリアのありようだったようだ。

本書の中身の受け取りについては、多様でありそうだが、こうした変化が起きており、それが若者たちにも広がっており、そうした動向を見据えた働き方論・人生論が求められているのは確かであろう。そのことに貴重な一石を投じる本であることは、これまた確かであろう。

チキリン「未来の働き方を考えよう」を読む　私の考えと実践と共通

2014年08月22日

店頭見つけた、チキリン「未来の働き方を考えよう　人生は二回、生きられる」（文藝春秋２０１３年）。

驚いた。私がここ１０年間主張していることと重なっている箇所が続出するからだ。私自身がモデルになって書かれたのではないか、と一瞬思ってしまうほどだ。著者自身も、私がいってきた「人生後半期」スタート時点に転職している。

大きな違いというと、ビジネスエリートの道からの転職であり、主要な読者想定がビジネスに関わる人たちということだろう。ビジネス界でも、大きく変化していることを反映しているのだろう。

また、ブログで積み重ねてきたことがもとになっていることも私と共通している。といってもアクセス数が、私の数十倍なので、半端ではないことだ。

私の主張と共通している点をいくつか紹介コメントしよう。

「年金ももらえないのにさっさと引退してしまうなんて、誰にもできることではありません。だからといって、みんな政府の言われるままに働く期間を５年延ばし、６５歳まで今の働き方を続けるのでしょうか？　なにかもうちょっと自らの手に、働き方に関するコントロールを取り戻す方法はないのでしょうか？」Ｐ２

———私の主張でもあり、５６歳で退職した私がやってきたことだ。退職はちょっと遅すぎたと思うが。

「次々と発売される若者向けの新しい働き方、生き方の本は、日本の現状とその先行きに対する彼らなりの判断と決意の表れです。それは「我慢していままでと同じ働き方を続けても、おそらく報われることはない。だからいっそ、自分たちが生きたいように生きよう！」というメッセージなのでしょう。」Ｐ１８－９

————同感

「渋滞の高速道路を何百キロもマイカーで走って遠出するゴールデンウィークや、ビーチでリラックスしようと飛行機に乗って海外まで移動する夏休み、（中略）癒しではありますが、大量消費時代の遊び方そのものです。」Ｐ４５

———我が家近辺では、大量消費型観光ではなく、滞在体験型で安価な形でいらっしゃる方が増えているのを実感している。

「大組織に一生囲われて生きる「安泰だけれど４０年以上中断できないキャリア」と、「５年働いて数か月休む」、「１０年働いて２年間留学する」、「３年働いて、半年は専業主夫」といった自由度がある間欠泉的キャリア。みなさんはどちらを、好ましい働き方だと思われるでしょう？」Ｐ１０５

———間欠泉的キャリアという表現がいい。振り返ると、私の３１年間の専任生活も、勤め先を３つ体験し、途中で１年間の研修生活（東京とトロント）を２回することで、事実上の間欠泉的キャリアだった。

「いままでは、一生懸命働き、よりたくさん稼いで、より豊かな生活を目指すことが一種の“常識”でした。しかしこれからは、必要生活費をできるだけ抑え、働く期間を最短化するという逆転の発想で人生を設計することも、ひとつの選択肢となります。」Ｐ１２０

————　これまた私のしてきたことだ。「二人で月１０万円で暮らす」テレビ番組に出たような生活をするから、経済的に専任生活を長く続けなくてよかったのだ。

「従来の働き方は、２０代で就職した後６５歳まで４２年間働き（中略）定年後は寿命まで余生を楽しむというものでした。しかし今後は、職業生活をふたつに分け、職業も二回選び、前半と後半で異なる働き方をするのだと、考えるのです。」Ｐ１２８

――――４０代で区切り、人生前半期と人生後半期をつくる私の２０年近く前の提案と、まさに共通している。

「これまでの定年制度は、４０年以上も猛烈会社員を続けてきた人が、定年でいきなり働かなくなる、崖から飛び降りるような引退でした。」Ｐ１５２－３

「ゆるやかな引退」「いろいろなプチ引退」「半年だけ働く「シーズン引退」」「週に２，３日だけ働く「ハーフ引退」」「好きな仕事だけを引き受ける「わがまま引退」」Ｐ１５２－５

――――私の主張と実践、そのものだ。

他にもたくさん共感できること、私の主張と実践と共有する箇所がある。

こんなありようが広がることを期待したい。

「オムツ党走る」　こんな面白いものを見るのは久しぶり

2014 年 08 月 04 日

２日（土）、国立劇場おきなわ　小劇場で観劇。

「老い」の問題という、難しく重いことを、とにかく楽しく面白く、深みをもって表現。

・開場前から長い行列。並ぶのがいやな私は、すぐ横で催されていて田里朝直展を見たあとで、入場。開演３０分前なのに満席状態。空いていた一番前のかぶりつき席に座る。

・観客は、私が平均年齢ぐらいか。５０代～７０代が多いが、圧倒的に女性。なんでだろう。

・有料老人ホームが舞台。登場する老人は、８０代から９０代初めの女性４人プラスアルファ。なぜか男性がいない。男性がいると、もっとややこしくなるかもしれないが。老人たち相互のやり取りと、職員とのやりとり、さらに家族とのやりとり。

・役者は、パワー溢れる４０～５０代の実力者たち。恵美子の教え子でもある、泉&やよいも、大活躍以上。

みんなともかく上手い。ほとんどがウチナーンチュだ。

・ウチナーグチ満載だし、地名や施設名なども、身近なところばかり。観客との呼応をぐんと盛り上げる。これが新しいウチナー芝居になるかも、などと思ってしまう。

・舞台上の威勢よい生演奏で、元気よくコミカルな舞台を進める音楽。時には、介護職員として演ずる。

・陰鬱になったり、ただ時間が流れるだけに陥りがちな状況を、明

るくコミカルな元気さで進めることが、こうした場で生きる高齢者への強いメッセージになるのか、それとも、まだ向老期にある元気な６０代から７０代前半へのパワフルなメッセージになるのか。
・途中で、ここに生きる老人たちの気分に馴染んでしまっている自分にハッと気づくこともあった。
・こんなに楽しく印象深い舞台を安価で提供してくれた関係者に感謝したい。
・満席になるほどの会場をみると、沖縄の文化芸能への強い期待が広い底辺で支えられていることを感じる。

佐藤幹夫「ルポ高齢者ケア」（筑摩書房２０１４年）を読む　2014 年 07 月 16～19 日

沖縄でも都市地区を中心に。旧来のコミュニティの弱体化が進行し、つながりを失う人々が増加している。新たなつながり形成が高齢者ケア問題の中心的課題に一つになっているようだ。
従来の枠組みを超えて、つながりを広げ深めるようなケアシステムの構築が課題になっているように思う。個人的犠牲や営利企業への依存を超えた協同システムが望まれる。
しばし前に、このブログでも紹介した「里山資本主義」や「ケアとコミュニティ」の本などを読んで以降、地域つくりとケア・医療・福祉などとのからみに関心を高め、店頭で見つけた本書を読む。
柏市の超高齢社会に対応するプロジェクト、新宿区の孤独死防止対策、池袋・山谷の高齢弱者への支援、熊本県の認知症への取り組み、群馬上野村の過疎地域再生、石巻の復興と医療の取り組みなどが描かれている。高齢で身体上うまくいかなくなった際、個人として医療に依存し、これまで見られるような介護にたよったりしていくという視野だけではわからない世界を広く見つめさせ、今後のありように大きな示唆を与える事例が続出する。
いくつか注目した記述を紹介コメントしよう。

まず新宿の在宅医療にかかわる英医師の言葉だ。
「それぞれの世代の高齢期の過ごし方は同じではなく、大げさにいえば、人類史上経験したことのない人生観を構築していかないわけです。それぞれの人たちが実験の人生を送る、自分の人生を通じて実験していくことになる。第二の人生までは、つまり定年まではある程度同じだけれども、そこから先の、たとえば年金制度、社会保障制度、医療や介護の枠組みなどは、それぞれの世代で大きく違うものになる。いま八五歳の人たちの経験が、七五歳、六五歳、五五歳とでは、同じようにはなりたたないですね。」P87
「自分たちの世代の問題は、自分たちの世代で区切って片付けてほしい。自分たちでやってもらうのが原則ではないかと私は思います。全部は出来ないだろうから、当然、サポートはしますよ。しかし下の世代に頼りながら老後を過ごす、という発想は、もう成り立たないと思います。」P87-88
「それぞれが、もっと高齢期に対して主体的になる必要はないか。他人任せにして行き当たりばったりではなく、自分で責任をもって自分の高齢期を生きてほしいし、そのためには情報収集をしないといけない、勉強しないといけない。下の世代に介護、年金、社会保障を頼れるのはいまの恵まれた高齢者だけであって、団塊の世代にもう同じことはできない。」P88

これからの高齢者にとって厳しい表現かもしれないが、ある意味でまっとうな主張だろう。そして、高齢者が

「定年までの人生のプラスα」ではなくて、高齢期自体を自分で支え創造するものだという主張には共感する。さらに、既存モデルに過剰依存して、創造的姿勢を貫ききれない事態への警告ともなっている。

私自身も、７０歳以上における生き方論については、まだ「初心者」であるので、今後一層深く創造的に考えていきたい。そのきっかけになる本である。

東北大震災後の高齢者ケアにかかわってきた石巻「開成包括ケアセンター」の長医師の発言は、示唆に富む。

「東北地方に関しては、医師が圧倒的に売り手市場です。とにかく医者が足りないという事情があるにしても、それ以上に、地域住民が医療にこういう要求をする、医師にこうしてほしいと求める、そういう文化はないのです。逆に医者のほうは、長い間、売り手市場という慣習や文化のなかでやってきた。都市部になると悪い意味でもサービス業になりますが、それは東北にはほとんどない。」P238

こうした事情は、全国各地に存在するようだ。沖縄も例外ではない。「医師がいばっている」というよりも、医師を含めた医療関係者と、地域住民がともに地域医療、健康福祉問題を考え実践するという蓄積が少ないことに問題構図の出発点がある。

そうしたなかで、長医師の次のような提案は注目されよう。

「都市部のような制度の整備がほとんどなされてこなかった。それでも東北がやってこられたのは、地域の結束力があったからこそである。ところが、それが被災によって一気に解体されてしまった。六〇歳を過ぎ、七〇歳を過ぎて、みんあバラバラになってしまった。」P241

「地域の問題は地域で解決をするという住民参加型のコミュニティづくりが、長医師の構想であった。「少額でも地域にお金を配分し、それをどう使うかという議論は、コミュニティ形成にとても有効です。（中略）仮設の方も下駄履きヘルパーのような活動をする。本来であったらまだ仕事をしている人たちが相当数いるのだから、ヘルパーになれば賃金のいくらか出る仕事になります。ヘルパーにはならないけれど、時々なら近所の人の世話をするという人もいていいし、いろいろと考え、被災者のなかで支え合う仕組みをつくる。そこに少しお金を乗せる。介護保険のサービスが受けられる人はいいが、受けられない予防レベルの人の、ちょっとした生活上の支援をどうするか。保健師だけではとてもフォローし切れないから、住民同士の支え合う仕組みを、制度として国に認めてもらわないといけない。」P243-4

「長医師によって強調されてきた参加型のシステムや、支え合いの互助づくりは、おそらくこれからの地方自治の、大きな課題になる。被災型のみならず、人口減と高齢化の著しい現状にどう対応するか、日本の自治体がその対策を迫られている。そのためにも右肩上がりの成長幻想からいかに早く脱却できるか、そこが生命線となるのではないか。」P245

藻谷浩介・ＮＨＫ広島取材班「里山資本主義」角川書店２０１３年を読む　2014 年 06 月 04 日

店頭で、面白いタイトルにひかれて購入。読んでみると、１０年前から私たちが沖縄でやってきたことと重なり響きあうというのが最初の感想だ。多くの読者には驚かれるような内容かもしれないが、私には、書いてあることが、すんなり入ってくる。私が「沖縄田舎暮らし」（アクアコーラル企画２００７年）で書いたことと似通っているのだ。

無論、放送番組向けの取材をもとに作成されたものだし、タイトルにあるように、経済システムとのかかわりを意識している点も異なる。ちなみに、本書は、ＮＨＫ広島でしばらく前に番組になったが、この６月には全国放送にもなるようだ。

私たちがしていることと共通点が多いというものの、対象地域が異なるし、アプローチも異なるので、当然ながら、初耳のことも多い。

各章のタイトルを中心にいくらか紹介しておこう。

第一章　世界経済の最先端、中国山地　　原価ゼロ円からの経済再生、地域復活

帯には、「木屑で発電し、石油・石炭の値段に左右されない地域経済を営む町がある」とも書かれている。

第二章　二一世紀先進国はオーストリア　　ユーロ危機と無縁だった国の秘密

帯には、「オーストリア等ではエネルギー革命が起き、木材が今後の経済を握った。」と書かれている。「鉄筋コンクリートから木造高層建築への移行が起きている」という見出しでの本文のなかに、強度も耐火性もある集成材の話がでてくる。大変興味深い。

中間総括　「里山資本主義」の極意　マネーに依存しないサブシステム

本文のなかには次のように書かれている。

「「里山資本主義」とは、お金の循環がすべてを決するという前提で構築された「マネー資本主義」の経済システムの横に、お金に依存しないサブシステムも再構築しておこうというものだ。」Ｐ１３８

私がしばしば言ってきた「金銭・商品過剰依存からの卒業」ということに通じるものだろう。

第三章　グローバル経済からの奴隷解放　費用と人手をかけた田舎の商売の成功

第四章　“無縁社会”の克服　福祉先進国も学ぶ“過疎の町”の知恵

第五章　「マッチョな二〇世紀」から「しなやかな二一世紀」へ　課題先進国を救う里山モデル

最終総括　「里山資本主義」で不安・不満・不信に訣別を　日本の本当の危機・少子化への解決策

本文のなかにある、現在男性平均寿命一位の長野県が、「戦後早くから、家庭にまで出向いて食生活などを生活習慣の改善を指導し、大きな生活習慣病を防ぐ「予防医療」が取り組まれてきた。加えて、長野県が日本有数の里山の県であるということも無視できないのではないか」Ｐ２９３は、沖縄県も参照していいことだろう。この引用の直前に、「米国流の食生活」「車社会」の沖縄が平均寿命が下がったことが書かれている。

沖縄は、田舎から脱け出て、都市化の方向を歩み、１９６０～８０年代に他府県が追求した「マッチョな二〇世紀」思考・志向を持つ人が結構多い印象があるので、本書には参照すべき点が多いと思う。

最近、この種の本が増えてきた。私も意を強くしている。

五木寛之「新老人の思想」幻冬舎２０１３年を読む　2014 年 05 月 13～１５日

３．死　医療　『逝き方上手』

著者は、長寿・延命治療など、これまで肯定的にとらえられてきたことへの疑問を以下のように鋭く提出する。

「少子化も問題だが、それより重要なのは、「人が逝けない」社会、ということだろう。昔の老人は、よく「お迎えがくる」ということをいった。そこには死という覚悟だけではなく、一種宗教的な感覚があったような気がする。（中略）今は、それはない。「浄土」もなければ「地獄」もなく、ただ無限の虚無が口をひらいて広がっているだけだ。これでは、人は死ねない。死は不毛であり、なんとか引き延ばしたいタブーである。そして近代のヒューマニズムは、命の持続を無条件で肯定する。医療も、薬剤も、介護も一つの産業である。こうして、「逝けない」社会がどこまでも増殖していくのだ。」　Ｐ６７－６８

「晩年に待っているのは介護によって生かされる生活である。胃ろう、透析、睡眠療法、人工呼吸、その他の延命治療の進歩発達とともに、「逝けない人びと」がこの列島にあふれ返ることになるだろう。（中略）人工的、経済的に「生かされる」立場の私たちの未来は、当人たちにとっても決して明るいものではない。」　Ｐ６９－７０

「人生の目的は長寿ではない。医学の任務は延命ではない。」　Ｐ７５

「長寿が無条件で幸せであったような時代は、すでにとっくに過ぎてしまっている。百歳以上の高齢者が五万人をこえる昨今、長生きははたして幸福か、という疑問が浮上してくるのは当然だろう。

人には「去りどき」というものがあるのではないか、としきりに思われてならない。（中略）「ハッピー・エンディング」、もしくは「ナチュラル・エンディング」という考え方がずっとこのところ頭を離れない。」Ｐ１３７～８

すでに紹介した「ナチュラル・エイジング」とならんで、「ナチュラル・エンディング」は、とても共感できる言葉だ。また、『逝き方上手』Ｐ２１３というのも、含蓄が深い。２０年以上前に生活指導学会で、「世話され上手」という言葉を聞いて「なるほど」と思った時と同様だ。

「人には「逝きごろ」というものがあるはずだ。それが果たして何歳ぐらいだろうか、と、しきりに思う今日この頃である。（中略）

長命、長寿ということを、必要以上に美化するのはまちがいだと思う。マスコミには、とかく元気な長寿者を誇大にクローズアップする風潮がある。それによって老いに対する幻想がはびこり、おのれの現実との落差から絶望におちいる人も多い。生命を尊重するということは、人間を自然の一部として覚悟することだ。そこに目に見えない感動も、アイデンティティーも存在するのではあるまいか。」Ｐ２１７－２１９

「なるほど、なるほど」の連続だ。そのほかにも、随所にそういった文がある。いくつかを紹介しよう。まず、昨年末の記事で紹介した小林弘幸さんと同様の表現で「あきらめる」が次のように語られる。

「諦める、ということも重要だ。私は「アキラメル」という言葉を、「明らかに究める」の意味で使ってきた。どうしようもない現実を、正面から目をそらさずに見よう、という立場だ。」　Ｐ１４８

さらに、以下の文もおもしろい。

「その国の未来を確かめたいなら、その国の子供たちの姿を見よ」という言葉が大声で叫ばれた時代があった。今は逆だと思う。その国の未来を占いたければ、その国の老人たちの姿を赤裸々にみつめてみることだ。」Ｐ１４９

「私は消費税よりも、贅沢税とでもいうような税金を作ればいいと、ずっと思ってきた。」Ｐ２５

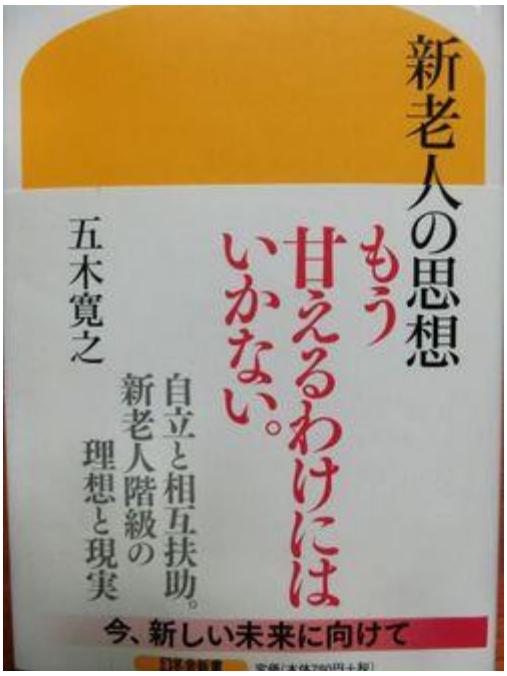
「思い出もまたゴミの一種である。思い出メタボになっても仕方がない。昨日までのことは、すべて忘れてきょう一日を生きるしかないだろう。」Ｐ１７３

私は、調子が悪いときに、「思い出メタボ」というか「思い出依存」になりがちだった。ストレスから逃れるためにで、身体的にメタボになるのと同じようなものだ。幸い、現在は、「メタボ」ではなく、たまに「思い出」を楽しみつつ、いつも楽しく「きょう一日を生き」ている。

２．後半期の人生

私は、１０数年前から、人生後半期の人生について語ってきたが、五木も似た問題について、以下のように述べている。

「今後、高齢者が当然のように国や家族の保護を当てにすることはできなくなるだろう。（中略）その心構えは、高齢者のレッテルをはられた時点ではもうおそいのだ。せめて五十歳を過ぎたら将来の見取図を作っておくべきではあるまいか。」　Ｐ６１



「人生五十年の前半と、後半五十年の生き方は、まったくちがう。人間の生き方は一つだ、終生変らぬ歩調で歩めばよい、などといったところで、そうはいかない。なぜかといえば、加齢、高齢化によって人間は変化するからである。そこには未知の世界がひかえているのだ。それが私のいう「新世界」である。」Ｐ１４１

「六十歳から百歳まで四十年。（中略）

その数十年をどう生きるか。これまでの人生論などは、ほとんど役には立つまい。一種の余計者として生きなければならない。

そこを前向きに、プラス思考で生きることがすすめられている。趣味に生きるとか、ボランティア活動に参加するとか、新しい分野の勉強にはげみ、資格をとるとか、さまざまだ。

つまり、定年後も現役意識をもって生きよ、というのである。」Ｐ７３－４

「新老人の生態は必ずしも一様ではない。一様ではないが、共通したものがある。

一つは、まだエネルギーがあること。退職後であろうと、精神的、肉体的なエネルギーがのこっている。人生においてリタイア感がない。社会的にも活動意欲をおさえることができない。

二つ目は、百歳社会の未来に不安と絶望感を抱いていること。いま七十歳の人は、あと三十年を生きなければならないのだ。その最後のシーズンが、どれほど悲惨なものになるかを、すでに知ってしまっている。」　Ｐ７１－２

私の人生前半と後半の区切りは、仮に４５歳にしたが、著者のように、５０歳、６０歳をメドにするのもありえよう。

その人生後半期を考えるときに、１）職業・収入　２）ヒト・モノ・コトにたいして役立てること　３）自分の生活について、世話を受けること　４）さらに、自己認識・自己受容　といったことで分けてみてはどうだろうか。これらには、「下り坂」になるものも多いが、そうでもないもののある。円熟することで、新たな形で有用な働きをすることもあろう。「定年後も現役意識をもって生きよ」という場合、これらのなかの１）２）が中心になろう。

それにしても、私の人生後半期論は、これまで主として、１）２）を中心に語ってきたので、３）４）について深めていかなくてはならないと思う。その点で、著者の提起には、ヒントになることが多い。

前回述べた「若さ」「アンチエイジング」は、３）４）を避けることにつながりやすい。「弱者であること」「下り坂であること」を素直に受け容れ、それに対応することも欠かせないことなのだ。そのためには、著者がいう「見取図を作る」などの心構えが求められよう。

１．老

この４０年ほど、小説などの文学からは遠ざかっていた。１０代のころは、小説家志望さえあった文学好きなのが、大変化してしまった。

だから、五木寛之という名前は知ってはいても、作品を読んだことがないのはいうまでもない。しかし、店頭で見つけたこの本は、大変面白い。そして、私の考えと一致、ないしは共鳴するところ大だ。

その核心的な箇所をまず紹介しよう。

「老化を悪とする文化がある。そして死を敗北とみなす思想がある。わたしたちは二十一世紀に、それまでとはちがう文化をつくり出さなくてはならない。それは老いることが自然であり、死もまた当然とする文化である。（中略）死をケガレとして忌む歴史は今も続いている。生が勝利で死は敗北という感覚も、まだ克服できていない。老いに対する恐れと不安感も根づよい。自然死も、平穏死も、死そのものを肯定する文化をつくり出すところからはじまる。（中略）喜んで死を受け入れる境地に達せよというのではない。（中略）

死を悪として見る文化、そして老いを屈辱として恥じる文化からの脱出こそが、私たちにいまつきつけられている直近の課題なのである。」　Ｐ２０６－８

「命ど宝」と、この考えが対立しているわけではない。「命ど宝」は、無理やり死に追い込む、命を粗末にすることに対しての言葉である。五木は、死を敵視しないことをいっているのだ。

「老い」についての次のような考えに、これまた私は大いに共感する。

「私は自分の実感から、六十歳で人は十分に老いていると書いた。どれほど栄養状態が良くなろうと、どれほど保健衛生思想が普及しようと、人は老いる。六十歳をこえて、まったく自己の老化を認めないというのは、あきらかに傲慢というべきだ。」　　Ｐ２２

「老化は自然に進行しているのだ。その自然の劣化を認めることができないこと、それ自体が老化なのである。」Ｐ７７

「年をとると自然の老化があらゆる面で露呈してくる。それを少しでもくい止めようと、アンチエイジングという発想が流行しているらしい。しかし、老化は自然の成りゆきであって、病気ではない。アンチ、アンチと騒ぐよりも、むしろナチュラル・エイジングを考えるべきではないだろうか。」Ｐ１３０

「「養生」はいわゆる「健康法」とはちがう。アンチではなく、自然に老いるための工夫だ。したがって、いくら「養生」にはげんでも、ずっと元気というわけにはいかない。年齢以上の老化を避けるだけの話である。」Ｐ１３０－１

「＜養生＞も＜健康法＞も、百点満点の体調をめざすものではないだろう。その歳なりの自然な老化こそ目標であって、不自然な元気が目的ではないはずだ。」Ｐ１３１

「私は、やはり生きていることは、それだけでも大変だと思わないわけにはいかない。息をするのも大変だ。（中略）すべてこの世に存在すること自体が大変なのだ」Ｐ１３３

若さを自慢したり、若さをほめたり、そのためにアンチエイジングを追求することに頻繁に出会う。その場合、「若い」のではなく、「未熟」なのではないか、と思ってしまう。「青くさい」といっていいかもしれない。「老い」とは「熟」することだ、と私は思う。そんな考えの私だから、五木のこれらの文には大喝采だ。

生き方を変える・創る　2014 年 04 月 26 日～2015 年 11 月 30 日

５６．家族などの人間関係を豊かに創造する

人類史上長い間、血縁地縁などの人間関係は、選んだり作ったりするものというよりは、生れ落ちてすぐに、そこに存在するものとして、いわば宿命的なものとして、だれもが受け止めて過ごしてきました。災害事故事件などがなければ変更するものではなく、災害事故事件などの時は相互の助け合うものとしてありました。また、そうした人間関係から離れて一人で生きていけるようなものではありませんでした。

しかし、「有史時代」以降、そうでもない例がわずかだとしてもみられるようになりました。また、そうした家族や地域共同体などの宿命的なものを、時の支配者が活用統制してきました。そうしたなかにあって、それらが個人を縛るものと感じる人もでてきて、そこから脱出しようとする人も出てきます。

とくに近代、日本でいうと明治以降、沖縄でいうと２０世紀に入るころから、それまで生活していた地域から出て、都市へ出る人、なかには遠方まで出る人、移民する人が増えていきます。それらの人には、それまでの地域や家族とつながりを続ける人もいますが、なかには、それらとのつながりを切る人も出てきます。また、つながりを続ける人でも、それらのつながりを過剰で煩わしく感じる人も増えていきます。そして、結果として、人間関係そのものを薄くし孤立していく人も出てきます。

孤立するのではなく、新たな人間関係をつくる人もたくさんいますし、その方が一般的でしょう。地縁的なつながりが薄い都市でも、気の合った人相互で、あるいは利害関係を共有する人たちとの間で人間関係を作ります。さらに遠方に居る人たちとの間にもつながりを作る人が増えていきます。

家族にしても、それまでの家（イエ）とか親の指示ではなくて、「両性の合意」で結婚し家族をつくることがごく当たり前のことになってきます。

こうして人間関係は、宿命的というより、共同創造するものとなっていきます。しかし、この経験の歴史は短く、知恵の蓄積が浅いので、かなり試行錯誤になっているようです。それだけに、関係をつくるのをあきらめて孤独を味わっている人もいるようです。また、人間嫌いとか対人恐怖とか「ひきこもり」になっている人もいるようです。とはいえ、孤独で生きていくのは大変です。周りの人の援助を受けながらでも、人間関係をつくっていく「練習」を積み重ねて、つながりを広め深めていきたいものです。

私がいろいろと行っているワークショップの多くのは、その応援になる願いを込めています。

長くなったこの連載も、ここで終了したいと思います。ですが、このブログのタイトルには「人生創造」が含まれていますので、いずれ新しい装いでの連載をすることになるでしょう。その時も、よろしくお願いします。

また、御希望御提案などがあれば、遠慮なくお寄せ下さい。

５５．若者たちの人生創造への挑戦

振り返って、日本の若者、とくに私が生活している沖縄の若者たちをは見ると、これまで述べてきた標準枠が、タテマエとして存在し意識はしていたとしても、実際には、そうではないありようの中で生きている人が多数のようです。その中で、いくつもの人生を積み重ねています。

いくつか例を書きましょう。

受験専門高校を卒業して、専門学校に通うも、自分のやりたい分野ではないとして退学し、添乗員など非正規で旅行業関係の職につき、その後東京に出て同じような仕事をしてお金をためて、半年の外国暮らしを経て、再び東京で非正規の仕事について、試行的だが意欲的な人生を作りつつある若者。

実業高校を出て、専門分野を生かして大都市に就職したが、自分に合わずＵターンして、地元就職をし、少年時代からの趣味を生かす仕事で張り切っている若者。

大学卒業後、東京のＩＴ関連作業に就き、数年働くが、ブラック企業に近いところで、心身共に傷つき帰郷してしばし休養し、地元の臨時職をした後、地元でＩＴ支援を中心とする会社を起業して活躍している若者。

こんな試行的な人生を送りつつ、３０代に入るころから、適切な仕事を見つけ、家族も持つようになるという例に結構出会います。

このように、多様な挑戦が身近のあちこちに広がっています。２０歳ごろまでの学校教育のなかで歩んできた標準コースと、そうした標準枠を越えた挑戦との間には距離がありますが、人生をやり直す、あるいはいくつもの人生挑戦を展開する若者が増えている、というかむしろその方が普通になってきているようです。まさに人生創造の大きな波、本格的な波がうねり始めているようです。

その意味では、かつての標準枠の流れではない生き方を若者自身が作りだしています。そうした動きは、多様な人々との協力協同の中で展開しているという特徴もあります。また、多世代協同や多様な経験の持ち主が集まる中で、仕事起こしに向かう人も結構います。それは、都市だけでなく田舎でも進んでいます。地域起こしと結び合う仕事起こしです。

先に述べたように、社会が流動的で先行き不透明な中で、標準枠に頼って生きること自体が危険さえも伴う状況が生まれています。人生上の困難にぶつかった時、枠に沿った流れに身を任せても、上手くいくとは限りません。むしろ危ないかもしれません。そうした中で、多様な人々の助けを借り、多様な人々と共同しながら、新たな人生を自分なりに作っていくことが否応なしに求められる時代です。そうしたことに挑んでいく主体性積極性が今ほど期待されることはないかもしれません。

そうしたなかで、激動をくぐり抜け、自分たちなりの「安定」を引き寄せることが求められているようです。

５４．　一本筋の、一つきりの人生ではない　いくつもの職業を経験

標準枠の流れに沿う人生では、「人生は一つしかない」、少なくとも「職業人生では転職せずに、最初の勤務先

で貫きとおすことが絶対だ」という感覚になります。

しかし、考え直してみましょう。職業人生は一つしかないのでしょうか。職業だけではありません。家族形成など人間関係にしても、健康と病気の問題にしても、山あり谷ありで、失敗もあれば成功もあるという人生の方が普通です。

そこで、一つの人生ではなくて、いくつもの人生を組み合わせたものとして人生があると考えてはどうでしょうか。

話は少し脱線気味になりますが、戦前から生きていて、戦争と戦後を迎えた人は、戦前と戦後を一つの一貫した流れで人生を考えることはできません。

夫が兵士になったので、家業の農業を一人で担わなくてはならなくなった女性、戦火の中で逃げまどう日々、そして、米軍支配のなか送った収容所生活から帰ろうとすると、畑を基地にとられ、家業をすることができずに、軍雇用員になったり、小さなお店を開いたりして子育てをするといった、いくつもの人生を、十年そこそこの間に経験した人たちがいます。

そういったなかで、近所・家族・知り合い同士で助け合いながら、人生を歩んできた人が沢山いますし、それが当たり前でしょう。

その世代の次の世代にしても、たとえば、集団就職で遠方に就職し、何年か働いた後Ｕターンし、いくつもの仕事を転々とし、４０代になってやっと定職めいたものを得たが、年金が少ないので、７０代になっても職を求めている人が結構います。

こうした多様な人生を経験しているだけに、我が子には安定的な仕事についてほしいということで、「医師は無理としても、公務員・教師」になってほしいと願う親がたくさんいます。

しかし、それらは「狭き門」です。加えて、近年教師は激務の仕事となり、休職や途中退職が沢山出ています。公務員にしても、近年リストラが進み、難関になっています。

こうして「安定的」な仕事に就くのが難しくなっている現実があります。そして、１９８０年代から話題にのぼっている過労死さえ生むような働きすぎが、依然として、というよりも、最近とりたてて問題になっています。

沖縄県は、長時間労働のうえに所得最下位状態です。さらに加えて、経済格差が大きい県です。

そうした問題に行政として社会として、さらには個人として、どう向き合い対処していくのか、を考えなくてはなりません。

ワーク・アンド・ライフ・バランスといわれながらも、現実的に有効な対処がほとんどなされていない現実があるのです。

こうした問題を考える時、よく話題に上るのが北欧社会の事例です。医療費や教育費の個人負担がないことはよく話題に上ります。大学生も授業料がないどころか、いろいろな手当てが支給されています。高額な授業料に加えて、奨学金とは名ばかりで実際は教育ローンで、卒業後の返却で苦労している人が多数にのぼる日本とは対照的です。

こうしたことだけでなく、働き方にも大きな違いがあります。２０１１年秋に、フィンランドで教育界・経済界・労働界の方々にインタビューする機会がありました。そのなかで、次のような職業人生があることが分かりまし

た。

職場は５年単位で変わる。それには勤務先の変更もあれば、同じ勤務先のなかで職場が変わることもある。あるいは、同じ職場であっても、プロジェクトが変わることもある。

変わる際に、１年の休養期間がある。完全休養もあれば、教育機関で学ぶこともある。休養期間の所得は、共済組合、失業保険、社会福祉制度などからのもので、勤務期間とほぼ同様のものが得られる。

社会人の教育機関が充実しているので、２０歳前後の大学生だけでなく、３０代、４０代の社会人学生が沢山いる。高卒で直ちに大学入学するものもいるが、社会人になってから入学する人が多く、最終的には８０％近くの大学進学率になる。

フィンランドの国際学力テストでの高得点が話題になってきましたが、一つの要因は、競争をあおり、テストで追い立てる学習がなく、点数の上下格差がとても小さい事にあります。１５歳の時に、自分の希望と判断で、もう一年学校に残って学習する人がかなりいます。そうしたことが不利になることはありません。

中卒で自動車修理の仕事に就いた人の話を聞きました。フィンランドでは、働きながらの研修制度が充実していて有用な資格を取れるのも、一つの特徴です。

その人はその後、働きながら夜間高校に行きます。そしてかなりの期間修理工として働いた後、大学に行きます。さらに、大学院に行き、博士号を取ります。そして、現在博物館の学芸員をしているとのことです。

こうした話を聞いて、一人がいくつもの人生を積み重ねているのだな、と思います。職業人生に限って言うと、５年単位で変わるとすれば、そして途中で学校に通うとすれば、数回以上の人生を積み重ねるわけです。

５３．標準の流れでやっていける流れが制限され縮小されてくる

１９９０年代半ば以降、このストレーターコース、つまり標準の流れでやっていける人の数が激減していきます。「幸い」終身雇用制の企業に就職したとしても、「仕事・会社が合わない」「自分の希望するイメージとは異なった」「会社での人間関係がうまくいかない」「転勤命令を受けたが、家族の都合で対応できない」「病気になった」など、いろいろな事情で退職する人が多く出てきました。

「七五三」といって、就職後三年ほどで退職する人は、大卒で三割、高卒で五割、中卒で七割という事態が、一九九〇年代からいわれてきました。本人の都合もあるでしょうが、会社の都合、あるいは両者のマッチングがうまくいかないという事情が存在しています。あるいは、会社の倒産・リストラという事情もあります。

狭いながらもあった標準の流れに沿っていける枠が、１９９０年代半ば以降さらに激減し、非正規が激増します。企業が正規雇用を減らし、賃金が安い非正規雇用を減らしたのです。そして、終身雇用で定年まで働ける枠も減らされます。その結果、派遣社員が増え、フリーターが増えます。しかも、うまくいかないのは「自己責任」だという言葉が飛び交うようになりました。狭くなった枠に入り込もうとする努力が求められ、それを支援するものとしてキャリア教育が行われたりします。

そのなかで、上手くいかない時も、個人としての努力工夫を中心にして解決していくことが求められます。そんななか、非正規雇用のままでは結婚出産もできない事態が広がっています。結果的にそれが少子化につながり

ます。また、そのなかで女性の労働力化が必要だということで、保育所や学童保育の充実を図る施策も行われていますが、待機児童が依然として大量に存在しています。

こうして、標準枠の有効性が低下するなかで、一人一人が自分の人生を創造をしなければならない時代、あえていうと強制される時代に入ってきました。

それは、一面では、自分の人生は自分で決め創るという積極的な面があります。と同時に、潜在的な失業状態にある人が多く、希望通りの仕事につくことができるかというと、かなり厳しい様相が見られます。また、小中高校（大学）と、流れに沿って生きることが強く求められてきて、それに順応してきたのに、就職段階になって自分なりにやりなさいといわれても、なかなか対応できない、ということがあります。

また、自分なりに自己責任でやりなさいといわれ、さらに強い競争的な環境があるなかで、他の人とともにやるとか、他の人に助けを求めるということに消極的になってしまいがちです。

そして、学校での標準枠が強い中で、試行錯誤的なことがしにくい環境が強められています。標準枠の流れに沿えなかったとき、どうしたらいいか、ということは、ほとんど教えられていないのです。もっぱら「失敗するな」「遅れるな」「外れるな」と指導されてきたのです。

だから、標準枠に沿えなかったとき、標準枠から排除された時、標準枠が無効になった時、どうするのか、ということは、自分一人で対処するしかないと思うのが多くの人の現状なのです。リストラによる転職・病気・事故などに出会ったら、助けがないと思うしかない人が大量にいます。

５２．大衆的青年期と標準コースの設定

第二のステップは、１９６０年代の高度経済成長の時代です。大都市地域や大工業地帯では、それより早く始まりました。産業構造が激変し、第一次産業から第二次産業あるいは第三次産業への大量移動が進み、農業などの家業を継ぐ例は少数派になりました。

１９６０年ごろ５０％を越えた高校進学率は急速に上昇し、７０年代に入ると、全員就学に近いところまで至ります。大学進学率も上昇し、エリート大学からマス（大衆）大学といわれるほどになります。２１世紀に入っていわれるようになった、誰もが行くという意味でのユニバーサル化というほどではありませんが。

こうして職業は、家業を継ぐ宿命的なものではなく、本人自身が決めるものとなりました。職業だけでなく、結婚・出産といった家族形成も当事者の合意・選択・決断のなかで進むタテマエが浸透していきます。つまり人生全体が自分の選択・創造するものとなったのです。そうしたことを集中的に行う時期は青年期ですので、その青年期が、第一ステップの時期のように、裕福な一部の人に限られるのではなく、タテマエとしてすべての青年に保障されることになったので、それを大衆的青年期と呼んだりもします。そして、それを保障するために、１０代半ばで職業に就くのではなく、それを猶予（モラトリアム）し通学を継続してどのような人生を送るのか考え、それを準備する期間がセットされることになったのです。

そのなかで、中学・高校・大学が就職斡旋をする機能を肥大化させていきます。中卒、そしてのちには高卒生

の工業地帯への集団就職が「金の卵」といわれながら進められたのが象徴的でした。そして、中学は、子ども・若者のその後の進路を決める第一ステップとしての選別機能を果たすようになります。

１９６０年頃までは、農業をしたいから農業高校、商業の進路に行きたいから商業高校へという進路選択が、まだ多く見られましたが、１９６０年代に入ると、中学時代の学業成績と高校入試成績の結果による振り分けが一般化し、高校の序列化が進行します。将来、何の職業に就きたいかという本人希望による選択という形は薄れていきます。

そういう中で、就職に至る「標準的」な流れが形成されていきます。先にも述べたストレーターコースです。こうした流れをストレーター・コースと名付けたのは、２０００年代初め、フリーター叩きが、盛んになされたことへの皮肉を込めたからです。「フリーターになるなというが、ストレーターだって危ないぞ」というメッセージを込めたのです。

フリーターという言葉は、１９８０年代後半にもよく使われましたが、それは標準コースに縛られて生きるのではなく、自分なりの創造として生きるというものでした。その点では、ここ百年の「自分で作る人生」への大きな流れが、実際の所は、「標準」に委ねて（縛られて）生きる結果に陥っていることへの批判にもなっていました。ところが、１９９０年代半ばから非正規の仕事が激増し、正規採用を希望しつつも、やむをえず次々といろいろな仕事を移りながら仕事をしなければならない人たちのことをフリーターと呼ぶようになりました。そして「フリーター叩き」が広がり、「フリーターにならないように」という言動も広がったのです。

それに関わって、「では、狭き門になってきた流れに沿って生きることが、いいことなのだろうか。自分なりに人生をつくることを放棄しているのではないか」という問いかけを含んで、「ストレーター」という言葉を、私は作ったのです。実際、企業に就職して、ストレーターとしての人生を歩み始めた人の多くが、数年で転職するという事態が広がっているのです。ストレーターとして歩み始めたが、うまくいかない時に立ち往生せざるを得ない人が大量に出現したのです。標準的な流れは、そうした現実には対応できません。

話は戻って、１９６０年代になると、こうした流れが標準化されていくようになり、その流れに乗るための競争が激しく展開されるようになっていきます。その流れは、１９７０年代になると、例外を許さなくなるようになります。「農業や職人の家業を継ぐから、学業はそこそこでいい」などといっていると、白眼視されるようになっていきます。

こうした流れが標準化されてくると、自分の人生を自分なりに選択・創造していくのだ、といっているわけにはいかなくなってきます。

５１．宿命人生から作る人生へ

人類史を見ると、その９９％は、人生は出生時にほとんどが決まっていたものです。不可避と思われるような外部からくる事態が、個人だけというのではなく、集団全体のありようを激変させることはありました。たとえば、火山の噴火、氷河期の襲来などといった自然の激変、あるいは、動植物との「紛争」、さらには近隣部族との争いといったこともあったでしょう。ですが、個人によって異なるというものではなく、個人が属する集団全体

の問題でした。

有史時代に入り、何十人どころか何百人何千人という単位の集団が形成され、集団内部に多様な役割を持つ小集団が形成されるようになると、集団全体が一様の人生コースを歩むという状況に変化が起こります。農業集団、戦闘集団、職人集団、祭祀管理集団といった小集団のいずれに属するかで、人生コースが分かれていきます。さらに、出生時の位置だけでなく、生育過程で生じる役割変化に伴う人生変化もでてきます。とくに国家が形成されると、国家によって管理指示される人生が現れてきます。

といっても、属する小集団のなかでは、固定的な人生コースに沿うことが普通であり、一生の間に変化が何回もあるという訳ではありませんでした。

こうした変化は、近代の資本主義時代に入ると、劇的なものになっていきます。出生児に属する集団によって、その後の人生の大枠が決まっているという人生、いってみれば「宿命」としての人生から、自分で選択し創造する人生へと変化していきます。それには三つほどのステップがあるようです。

第一のステップは、１９世紀後半の明治維新以降、沖縄では２０世紀に入りかける時期以降に表れます。不完全だとしても封建的身分制から解き放たれ、職業の自由、居住地の自由を誰しもが享有するタテマエに移行します。タテマエと書いたのは、そうした自由を享受できる条件に恵まれた人は、そう多くはないからです。富裕層にとってはそれが可能でしょうが、一般民衆にとっては「高嶺の花」であったり、自分で希望するよりは、既存のものから追い出されてそうさせられてしまうことが結構あったりしたからです。たとえば、農家の次男三男には、不本意にも都市労働者にならせられてしまった人が多くいます。

また、明治国家が作り上げた家族制度による強力な縛りが登場しました。家長の権限が強く、親決めの結婚も多く、女中扱いされる嫁さえいたのです。親・夫・子どもに奉仕し従うことが求められたのです。また、長男は家業をつがなければならないという強い縛りがありました。

５０．日本本土を追いかける顔と独自創造の顔の二つをもつ沖縄における変化

最近、しばしば行っている「沖縄の教育は、途上国？　先進国？　沖縄独自？」という討論を行うと、なぜかどの会場でも、参加者は三つに分かれます。

二つに絞られることはこれまでありませんでした。中間を選ぶ人もいますし、途中で考えを変える人も結構います。そして、選んだ理由もその時の参加者によって大きく変化します。たとえば「沖縄独自」を選ぶ人にしても、その理由が随分異なります。

そのなかで、実に多様な捉え方があることを発見し、新たな思考のきっかけを得る参加者が多いのが特徴です。

こんな討論ができるほど、沖縄は多様な特質を持っているという点に特質があるといっていいかもしれません。それは、沖縄が豊かで多様な地理的歴史的社会的特性を持っているからに他なりません。そしてまた、沖縄に住む人々の豊かな多様性を反映しているといえるかもしれません。

地理的というと、孤島であるがゆえの孤立性にともなう厳しさを思い浮かべるかもしれませんが、海を通して

多様な地域と交流交易を展開するという有利さがあります。また、亜熱帯気候がもつ豊かさが存在し、固有生物種の多さ、自然環境の美しさが、世界各地からの観光者を引き付けています。

また、アジア地域との関係、とくに日本・中国などとの関係で政治的軍事的に要所とされ、世界覇権者としてのアメリカが強い関わりを持っています。

そうした地理的特性と結び合って、歴史的にも実に多様な特性をもっています。「沖縄人はどこからきたか」ということがよく話題になりますが、単純な回答はなく、おおまかにいうと、多様な時期に西日本を中心に多様なところから断続的にやってきたといわれます。

そうしてやってきた人々が沖縄内の多様な地域で、相互に交流対抗しつつ歴史を刻むと同時に、おのおのが海外の多様な地域との交流交易を重ねてきた歴史をもっています。

沖縄諸島内で、統一的な権力が形成されるのは１５世紀前半、そして奄美・先島を含めて沖縄全体が統一的なまとまりをもつのは、１６世紀に入ってからだといわれています。

その後も、海外の多様な地域、多様な人々との多様なかかわりで進んできました。そのなかでも、日本本土との関わりの比重はかなり高いものですが、日本本土の権力機構とのつながりはあっても、支配服従関係がつくられたのは、１７世紀初頭でした。そして中国政権との関わりは、冊封朝貢という独特なものでした。

こうしたなかで、沖縄独特のありようが展開してきました。とはいえ、１７世紀初頭以降、薩摩支配つまり間接的な日本支配以降、それらの支配が、沖縄のありように新たな構造を作りだしました。

そして１９世紀後半の近代日本国家による直接支配が始まると、沖縄住民を日本国民に同化する政策が展開されます。これらの中で、「沖縄」から脱け出て「日本国民」になる志向が広がります。

こうして、沖縄独自を志向するのか、沖縄独自のありようを否定し脱出しようとするのか、この二つの間を揺れるなかで、進行することになります。音楽芸能の世界では前者が強く。教育の世界では後者が強くなりました。日本向き、沖縄向きだけでなく、さらに西洋向きも加わる分野が広く見られます。衣食の世界などはまさにそうです。たとえば、沖縄の風土のなかで歴史的に蓄積されてきた沖縄風に加えて、中華風和食風、戦後になるとアメリカ風の色彩が加わる食事の世界は、まさにチャンプルーになっています。

さらに、沖縄戦そして米軍支配が、日本が沖縄を犠牲にするありようをつくります。こうしたなかで、沖縄における激動と安定が展開してきました。沖縄における高度経済成長は、１９６０年代には本土とは異なる形で兆しがあらわれましたが、１９７２年以降、日本の大きな枠組みのなかで進行してきました。

そのなかで、沖縄否定のうえに本土に追いつけをすすめるのか、沖縄独自なのかという二つのことが、新たな形で進行していきます。

そして、世界のウチナーンチュ大会がシンボル的ですが、海外との新たなつながりも広がっていきます。と同時に、基地問題などをめぐって新しい局面を含みつつ、沖縄における激動の時代が進行しています。

４９．これまでの標準とは異なるありようの創造へ

この激動の時代にあって、そして、いつどのように再び「安定」の時代を迎えられるか、見通しが立たない状

況にあって、標準や人口などいろいろな面での縮小傾向減少傾向の現実、さらには大災害などの襲来可能性などを踏まえて、新たな社会のありよう、生き方を創造する動きが広がりつつあります。

それらの動きをみると、以下のような特徴をみることができます。

まず、量的豊かさから質的豊かさへと転換することがめざされています。大量生産大量消費へとつきすすんでいたなか、１９８０年代になると、多品種少量生産という言葉が生まれ広がっていきます。また、「生活の質」という言葉が広がり、「ゆとり」という言葉も生まれます。

がむしゃらに突き進むというありようから、その中身を問うようになってきています。そんななか「自分らしさ」「個性」「オンリーワン」という言葉が広がります。そのなかで、金銭や商品の所有や購入の量ではなくて、どのようなものを持っているのか買うのかに関心が移行していきます。金銭や商品を中心にした経済資本中心から、どのような質のものを持つのかという文化資本ということに関心を移す人が増えていきます。さらには、どのような人たちとどんなつながりをもつのかという社会資本への関心が高まります。

と同時に、金銭・商品の消費を中心に考えるよりも、どのようなものにかかわりをもつのか、どのようなものを作りだすのか、ということへと関心を移す人が増えます。

次に自然と人間との関係の問い直しについて考えましょう。大量生産大量消費の高度経済成長の時期は、「生産の基礎となる自然、そして自然資源は無尽蔵で、どれだけでも活用消費できる」という前提を立てていました。また、猛威を振るって人間社会に襲いかかる自然は、制御する対象であり、征服する対象でした。

しかし、そうした自然の捉え方や人間と自然との関係についての捉え方の問い直しが始まっています。たとえば、無尽蔵と思われていた石油などの資源に限界があることがはっきりしてきただけでなく、石油などをもとにしたエネルギー消費が、二酸化炭素排出による地球温暖化をもたらし、それが地球環境を激変させて甚大な災害をもたらし、人間の生活そのものを破壊し縮小させることが明るみになってきました。

科学技術がその対策を講じることができるし、いざとなれば地球外脱出をはかればいいなどという発想は、無責任極まりないというだけでなく、現実性にきわめて乏しいことでしょう。「秘策」として登場したはずの原子力が、「想定外」の災害を作りだし、地域全体の人間生活と生命そのものを危機に陥れています。

沖縄の自然環境にかかわっていうと、まず地球温暖化によるサンゴの生育環境の縮小、海水面上昇による津波・高潮による災害の危険性が拡大しています。また、工場・ホテル・公共施設・住宅・基地・空港などのための未曽有の埋め立て進行が、自然環境を大きく変えています。そのことが沖縄観光の魅力の一つである自然資源を破壊しているといわなくてはなりません。観光開発が観光魅力を下げるという面を強くもっているのです。

次に、人間相互の関係のありようの変更と新たなありようの模索が展開しています。伝統的で固定的な人間関係よりも、個々人が自主的に選択創造するものとしての人間関係の比重が高まってきています。

しかし、それが孤立傾向さえ生んでいることを先にも指摘しました。人間関係を自主的に選択創造するという前提を崩さずに、孤立傾向に陥ることを避けるために、個人が人間関係をつくる意欲・力量を高めることが必要です。と同時に、そのことに慣れていない人たちのために、それをサポートする営みが大切です。ファミリー・サポート・グループなど、近年急激に広がっているＮＰＯ組織やボランティア組織に、そうした役割を果たそうとするものがたくさんあります。また、企業の中に、そうしたことをサポートすることを中心にしているものさえ広がっています。

そうした動きの中では、経済成長追求の中で蔓延した競争的関係を弱め、人間相互のつながりを強める方向が追求されているといえるでしょう。したがって今日の現実は、競争的なものと共同的なものとが併存し、両者がせめぎあっているといえるかもしれません。

４８．経済成長が止まる　移行における激動

兆しはそれ以前から見えていたのですが、９０年代に入ってバブル崩壊といわれるころから、経済成長が止まり始め、安定の時代から激動の時代への変化が明らかになっていきます。

当時は、またしばらくすれば、再び経済成長が来るといわれていましたが、「失われた１０年」とか「失われた２０年」とかの表現が物語るように、以前のような「安定」的な経済成長の時代ではなくなります。無論、その事実を受け入れられず、経済成長を求め続ける人たちもいます。

また、こういった変化を受け止め、経済の「縮小」「定常化」として、今後の在り方を論じる人もいます。あるいは、量的な成長ではなく、質的な転換が必要だと論じる人もいます。

質的転換を求める動向は、日本以外の先進国では、従来とはかなり異なる戦略を模索追求する動きとして顕著になっています。「知識基盤型社会」という表現もそうでしょう。１９８０年代からいわれている小品種大量生産から多品種少量生産へのシフトもそうでしょう。開発創造業務重視傾向もその動向を示すものでしょう。

経済だけではありません。政治の分野でもそうです。１９９０年代に入って、日本の政治は、従来の「安定期」にはない大きな変動を始めましたが、それが今日まで続いているだけでなく、「安定」への落着点が見えていません。世界的にいうと、４０年余り続いた１９８０年代までの東西対立の構造が激変し、アメリカ一強かのように見える時代も長く続くわけではなく、中国・インドをはじめとする新興国の経済力政治力の上昇傾向が続き、世界の経済政治軍事の構図の変化が予想されます。加えて、世界各地に広がるテロ動向は、将来予測をこれまでの枠組みで行うことを難しくさせています。

こうした変化は、人口増大から人口減少への転換、さらに高齢社会の深化など社会構造の変化と並行しています。そのなかで、縮小傾向をはらんだ経済を拡大させようとするのと同じ発想で、減少傾向にある人口を増大させようとする人がいます。縮小傾向減少傾向の現実を受け止めつつ、生活を質的に豊かなものするためのありようの追求ということがテーマに浮かび上がってきていない状況があります。

すでに始まっている人口減少は、限界集落といった言葉があらわしているような事態が、各地で進行しています。都市部でも、インフラの維持ができない、空き家増大が問題事態を引き起こすといった形であらわになり、現実対応が必要なのに、予算不足による対応不能の拡大が各地に表れています。高度経済成長型施策のツケとして財政破綻した夕張市のような事態が例外とはいえないようになってきました。

また、多様な形での巨大災害が想定されるようになってきています。２０１１年の震災・津波・原発が、事前想定をはるかに超えた大変な事態であったことが今後の巨大災害の可能性を衝撃的に認識させました。

最近、２０１１年災害に匹敵する、ないしはそれ以上の災害が次々と想定されはじめています。たとえば地球温暖化に伴う海面上昇・異常気象は、何をもたらすのか、安易な想定にとどめるわけにはいきません。そういうなかで、災害を伴う自然環境の変化にかんする歴史研究が注目を浴びています。沖縄を例に挙げると、大津波が、信じがたいほどの人口減少をもたらしました。

そうしたなかで、政府機関などの想定を信じ、その指示に従っていれば、安心安全なのか、といった問題が浮上してきました。原発では、原発促進の立場の人ばかりの「安全だ」という発言が報道され、苦い思いどころか、致命的な事態に追い込まれた人がたくさん出てきました。

災害ではありませんが、それに匹敵するか、それ以上の事態として、戦争があります。沖縄戦では、大量の人が亡くなりました。地域によっては、半数以上の人がなくなりました。そのなかで、くりかえしますが、日本軍の命令に従って日本軍についていった人の大半が死に、自分たちの判断で独自に行動した人が生き残ったという話をしばしば聞きます。

こうしたなかで、「お上」の指示通りに行動すれば、安全安心なのかという疑問符が広く共有されるようになりました。そうしたことは、先に述べたような高度経済成長期に標準化された人生コース、ストレーターコースについても、疑問符をつけることが広がってきたことにも表れています。偏差値の高い高校大学に進学し大企業に就職しさえすれば大丈夫なのか。個人の希望を抑えて、そのコースを歩めば幸せなのか、といった疑問です。

ところで、こうした激動的変化のなかで、人々のつながりが弱くなり、孤立気味の人が増え、「無縁社会」的な様相が強まっています。そのなかで、他の人の不幸に手を差し伸べようとする人が広く見られる一方で、他の人とのつながりを切る人、あるいは、自分だけの豊かさを追い求める人もいます。

それらと並行して、人々の間の格差がますます広がり、社会問題化しています。格差は、所得や貧富の問題にあらわれるだけでなく、いろいろなことを享受できる機会の差としても現れます。教育を受ける機会が、家族の所得差に左右されるのがその典型です。さらに、有用な情報を得られるかどうかでの格差も開いています。また、つながりの格差さえも問題になっています。学力差が社会的つながりの差との関係が大きいとか、健康や寿命の差がつながりの差に対応しているという指摘も、強いインパクトを与えています。

４７．高度経済成長時代　人生コースの標準化

第二次世界大戦の時期と戦後は、沖縄・日本での激動の時代でした。地域や国が激動する中で、個人の生活・人生も激動的でした。戦中は国家の命令に従って生きなければならないので、個人の人生としては激動的でないと思われるかもしれませんが、社会全体が激動しているわけですから、個人も激動しています。そんななかで、沖縄戦末期に、大きく強い枠であった日本軍の命令指示通りにするか、それからそれるかで、命の明暗を分けた例が続出したことが注目されます。強い権力権威に従ったことで命を落とし、それからそれることで命を救ったわけですから。

そして、戦後復興の時は、生活と人生そのものが、先を読めない状況の続出でした。そのなかで、枠のなかで権力権威に従うだけではどうにもならず、自分たちなりの判断をして人生を創造していくしかない時代でもありました。

その後、１９６０年代に入ると安定期に入っていきます。この１９６０年代から１９９０年代はじめごろまでは、大量生産大量消費の時代、経済成長追求の時代と言われています。

経済成長追求の時代は金銭と商品を中心にして日々が回っていく時代です。とりわけ１９６０年代の高度経済成長の時代がモデルとなり、たんに成長するだけでなく、「高度に」成長することが、「安定」的な社会を作ると見なされた時代が長く続きました。その発想を持つ人々が今日までの日本の政治経済の主導権を持っているので

す。成長を持続させるために、国が未曾有の借金を積み重ねても追求するということになり、大量の借金が、後世代のツケに回されています。国が倒産状態になったギリシャとは桁違いの借金を日本がもっている異常事態なのです。

この時代は、当初いわゆる先進国だけの話でしたが、１９８０年代ぐらいから発展途上国と呼ばれる国々にも広がり、いまでは、中国インドをはじめとする東アジア地域などの経済力が、これまでの先進国に追い付きつつあります。それらの国では、１９８０年代の日本をモデルにする国もありました。教育システムがとくにそうでした。

この時期の日本に定着した子ども・若者が歩む標準コースのことを、私はストレーター型人生と名付けました。つまり、

中学卒業→できるだけいい会社・高校→できるだけいい会社・大学
→できるだけいい会社→会社内出世→定年退職

というものです。「できるだけいい高校・大学」は、「より偏差値の高い」という意味になり、「できるだけいい会社」というのは、大企業で安定的で待遇のいい会社を指していました。沖縄など大企業が少ない地方では、医師・教員・公務員への就職も標準コースに加わります。米軍支配という辛酸をなめた沖縄でも、他府県よりやや遅れて１９８０年代には、このストレーター型人生が標準型になったようです。

このなかで、高校大学が序列競争下に置かれ、子ども若者も序列競争のなかに生きていくことになります。友達と仲よくやっていきたいと思いつつも、点数の上下で友達を見てしまう傾向が芽生え強まっていきました。たとえば、どこの高校に通っているか卒業したかで、人間を評価してしまう感覚が育っていきます。愛知県などでは、すでに１９６０年代からそうでしたが、沖縄県でも１９９０年代になると、その傾向が濃くなってきました。

このコースが標準化されると、男性の多くは、このコースを定年まで歩み続けようとします。しかし、女性は、大企業正社員になれる比率が大変低いうえに、「寿退社」といわれるように、結婚出産を機に退職し専業主婦となって、夫と子どもたちの世話に専念するのが標準とされます。だから、このコースが標準化されたといっても、標準コースを歩む実数は半数にはるかに及ばない１０％になるかならないかぐらいのものでした。大企業といえるものが数社に満たない沖縄では、数％になるかならないかです。

そして、不登校や中退などのように、このコースから外れる、ないしは遅れをとることは、「一生の不覚」のように受け取られるようになりました。そのなかで、「将来何になりたいか。なりたいものなるために、その分野の進路を選ぶ」などといって実業高校に入るのは得策ではなく、偏差値の高い普通高校に入るのが断然いいという判断が広がります。将来の職業選択について考えることは、偏差値を上げる学習の後回しになったのです。

１９７０年代には、ほんの少しとはいえ残っていた「たとえ学校の勉強ができないとしても、自分には職人的な生き方がある」というものは、１９８０年代になると滅多に登場しなくなります。自分独自の生き方をしようとしてもそれを許さないありようが広がったのです。そのことに抵抗しようとしても、うまくいかず心身症的な異議申し立てになってしまう例が増え始めます。

こうしたなかで、学習目的が高得点をとって序列のなかでより上位になることだというようになり、学ぶことの楽しさ喜びが苦しみになるなかで、子どもたちの学習意欲の低下が問題になってきます。職場の仕事でも学校の学習でも、大きな流れに沿って効率よく速度を上げていけるかどうかを定められた基準で判定される序列競争のなかに、人々が徹底的に置かれるようになります。

ところで、ほとんどの一般庶民が通う学校の歴史は、世界的に見ても長いところでせいぜい２００年ぐらいで

すし、日本・沖縄では１００年少々ぐらいです。その学校をどのようなイメージで作るかが、創設当初論議されたわけですが、結果的に、日本では軍隊生活のイメージが強いものとなりました。西欧では、大工場イメージが強いところが多いようです。こうして、兵士ないしは工場労働者養成が、学校の大きな目的とされたのです。１９６０～１９８０年代の日本では、軍隊生活のイメージよりも工場生産のイメージが強くなりました。ベルトコンベアを使う大量生産のイメージです。流れに沿って、不良品を出さずに、効率よく生産する人を養成するイメージです。沖縄でも、そうした色彩が強くなってきましたが、時代が少しずれて、今日まで続いているだけでなく、今日、そのピークを迎えているという印象さえ受けます。

皮肉なことに、「最近は個性がない」ということが言われ、「個性を伸ばそう」という主張が言われ始めるのも１９８０年代後半以降です。そして、序列が希望通りに行かない人に対して、「個性がある」という言葉が慰めとして使われることさえでてきました。

さらに近年では、学校間競争・都道府県競争・国家間競争などが、全国学力テストやＰＩＳＡテストなどで激しく行われるようになっています。そのなかで、強力な枠組みが子どもたちを縛り、「個性」などとは事実上いってはおれない事態が広がっている地域や学校があります。

４６．連載の今後　権力権威に従う生き方

この連載も、1 年半続いた。少々息切れしてきたかもしれない。でも、書き尽くせないというか、まだ着手していないものが結構ある。

そんなテーマをいくつか並べてみよう。

・金銭・商品への過剰依存を減らす生き方の方法
・右肩上がり成長信仰から自由な生き方をどうつくるか
・平和を追求し平和的な生き方を追求する
・楽しむのか、犠牲にするのか
・自分の体・心の特性を知り、それらと調和しながら生きるには
・自然とともに生きるとは
・健康観　病気との付き合い方
・死に方　人生の終わり方
・心の持ち方　スピリチュアリティの問題

何か、まとまりそうなことができてきたら、再び連載したい。

連載は、何回もしていって、私自身の「人生の終わり」まで続けられたらいいなあ、と思う。

この２月に「浅野誠ワークショップシリーズ№７　楽しいワークショップ」の第６章に書いたものは、本連載に関係が深い。しかし、同書を持っていない方には目に触れにくい。そこで、連載の終わりに、関連個所を数回に分けて掲載することにしよう。

１．社会創造

ａ．権力権威に従う生き方

ニュースなどに触れていると、社会はいつも激動しているような印象を受けます。その激動への対処に追われて、繁忙の日々を過ごしている感覚の人が多いようです。「貧乏暇なし」なんでしょうか。

ということで、立ち止まって振り返るゆとりさえない感じなのでしょう。と同時に、「社会の大きな流れに合わせて頑張っているのに、どうしてうまくいかないのか」と歯ぎしりしている人も多そうです。なかには、社会の激動的な流れに翻弄されたままで「何のために生きているのか」という疑問が飛び出てきてしまう人もいそうです。

そこで、「この激動的な流れの正体は何なのか」をつかみたくなり、正体を解き明かすものを求めたくなります。ですが、解き明かそうとするもの自体に色々あって、定説的なものはなさそうです。見つけたとしても、せいぜい数年先の短期の見通しを語るだけで、確信を与えるようなものにはなかなか出会えません。

そのなかで、「見通しを提示する権力権威に従うよりは、人々自らが社会創造に参加する時代ではないだろうか」と考える人も出てきています。それは、「従ってきた権力権威に責任をとらせて、権力権威に従った自分自身の責任を取らないのではまずいのではないか」という考え方にもつながります。ユダヤ人虐殺にかかわった人が、「上の命令に従っただけだ」という言い逃れをしましたが、「それでいいのだろうか」という問いかけは大変重要なものでした。同じような問いかけが日本でもなされ、そのことが戦後民主主義の発展定着にかかわっています。

そうしたファシズムや戦争などの時の個々人の行動に類似した問題は、現在の私たちの周りにはないでしょうか。現在進行形の問題について、そのことを意識しないで、後になって「あの時、～～～すべきではなかったのではないだろうか、それをしなかったのは、権威権力ある人に従ったためだ」という言い訳が通用するでしょうか。

ですが、こうした権力権威に従う「他人任せ」「長いものには巻かれろ」は、ごくありふれたありようです。それが当たり前だった戦前だけでなく、いまでもその傾向が広く見られます。

激動の時代と対照的なのは、安定の時代ですが、安定の時代には、その時代の枠組みのなかで枠組みに沿いつつ自分なりに落ち着いた生活を送ることになります。その枠組みは伝統とも呼ばれることもあります。といっても安定の時代にも、社会のなかに不安定な部分があったり、安定している多数の人のための犠牲的な役割を担わされたりする人がいます。ですから、安定のありようの変更を求める営みが当然あります。

現代でいうと、かなり少数の「富裕層」は安定しているかもしれませんが、かれらとて１０年以上先のことには強い不安を持っている人が多いでしょう。

こんなことをふまえると、「今日の激動の時代を生きていくためには、ごく当たり前になっている権力権威に従うのでいいのでしょうか」という問いかけを是非持ちたいものです。そして権力権威に従いっぱなしではなく、自分なりに思考判断行動し、社会創造に参加していきたいものです。

では激動をどう捉えればよいのでしょうか。捉え方には、いくつかのアプローチがありますが、ここでは、経済と生活、そして教育と人生を中心に考えていきましょう。　（続く）

４５．研究者の人生その４　アイデンティティ　テーマ変化　年齢

研究者には二つのアイデンティティがある。収入を得ている職・地位にかかわるアイデンティティと研究にかかわるアイデンティティとである。両者の関係と比重がどうなっているかで、状況が変わる。職が研究と直接かかわらない場合は、研究をすすめるうえで労苦が耐えない。両者が深く結びつけば幸いだろう。
私のように年金中心生活になると、事情は大きく変わる。

１３）研究テーマ・研究分野を変える
研究分野・テーマの変化の経験はよくあることだ。テーマに比べれば、分野の変化は少なく、研究者人生を通して変化がない人もいる。テーマの変化は、１０年単位、数年単位、場合によっては１年単位と、よくあることだ。分野にしてもテーマにしても、当人の考えに基づく場合と、研究世界の事情に基づく場合とがある。
また、複数の分野・テーマが同時並行することもよく見かけることだ。その方が、多様な視点をもって総合的な追求ができる点でいいということもある。いわゆる「専門バカ」に陥らないうえでも、必要でさえあろう。

１４）職を変える
職を変えることには、研究以外の職から研究職に変わる場合とその逆とがある。遅くから研究職に変わる場合、もともと研究職希望だったが、チャンスに恵まれずにそうなってしまった場合と、他職を経験するなかで、研究職への誘いがあり、それを受けた場合とがある。
研究職から離れる場合には、転職の場合と、私のように退職とがある。

１５）年齢的分岐点
これらの変化には、年齢的な分岐点があるが、それは個人によって大きく異なる。とはいえ、多くの人が分岐点になりやすい年齢がある。
たとえば、５０歳前後には、研究組織や職場での重要な役割の遂行が求められることが多い。それが、それまでの研究の継続に差しさわりが出る事さえあり、決断が迫られたりする。また、身体的事情が浮上することが多い年齢でもある。
また、６５歳以降になると、退職が迫られ、それまでの研究環境が消滅することも多い。理系では実験施設などの使用ができない、大学教員では大学が提供する研究環境そして授業や学生指導から離れるといったことがある。それを機に、研究そのものから離れる、あるいはそれまでの分野・テーマとは異なることを開拓するといったことも多い。

私の場合、大学教員職を辞した５７歳から、大きな転回？展開？をしてきた。その数年前から前兆が表れたのだが。研究者としてのアイデンティティが強い私の場合、また多様な分野・テーマに興味をもつ私の場合、これからも新たな人生創造として、研究者人生をどうすすめていくだろうか。その際、近年では、Make することよりも Become することを大切にしている私なので、今後の予測はつきにくい。

４４．研究者の人生その３

９）自営業的性格　個性と共同作業

研究者は、行政システムに乗っているというより、「一国一城の主」的な性格をもちやすい。現代風にいうと、自営業だ。身近なことでいうと、確定申告が必要な人が多い。しかし、税とか金に無頓着すぎる人が結構いる。確定申告は義務というよりは権利であり、自主申告を基本とする民主主義的な性格をもっているのに、それとは縁がないと思っているのかもしれない。

自営業であるということは、自分自身に責任を持つと同時に、研究・研究対象にかかわって、自由な立場を確保しつつ批判的精神をもつということである。くだけていえば、なんでも疑問をもちつつアプローチするということだ。

だが、それは、孤立しているということではなく、ネットワークをもち、共同作業としても展開するということだ。

１０）そのネットワークや共同作業の場としては、勤務先である大学や研究所などだけでなく、多様な学会や研究会といった組織がある。インターネット網が日に日に充実してきている最近では、ＳＯＨＯ的な展開も可能なので、それらへの所属を減らして研究を展開することもできなくもないが。

それらの組織が肥大化して、権力性をもつ例もないわけではない。しかし、それらの組織は、独立性を保ち、研究機関としての誇りと自信をもって活動展開することが求められる。

近年、それらの大学・研究所・学会などでの実績つくり、くだけていうと「業績つくり」に追いかけられる姿が目立つ。研究者としての批判的精神研究的精神が希薄で、まさに業績つくりの論文が増えている。博士課程をもつ大学院では、博士号を出すことが要請されるなかで、博士号の水準低下を嘆く声が聞かれる。

分野によっては、研究者バブルというべき事態があるといわれ、研究職が「狭き門」になっている分野は多い。研究的な視線・課題意識をもって、研究的な方法をもって遂行する業務が、社会変化に伴い増加しているなかで、研究者数よりも、職の少なすぎが問題にされるべきであろう。

なかには、それらの大学・研究所・学会での「出世」を追求する生き方をする人も結構いる。

１１）研究のやりがい・楽しさと厳しさ　自由な創造と自由競争

こうした研究的な業務は、やりがいがあるだけに楽しさと厳しさが伴う。そのやりがいは、自由で創造的な業務であることに由来することが多い。厳しさは自由競争的な色彩が強いがゆえに、結果を求める、というか求めすぎるなかで生まれることが多い。研究の持つ緊張より以上に、過剰な自由競争的性格が厳しさを生み出しているとも言えよう。

１２）男女差がないことをはじめとして、スタートラインは同じで、結果を残せるかどうかは当人次第、といわれるが、実のところジェンダー的問題性が、強く存在する。あるいは、研究者として成長確立過程にある若年層研究者にとっては、当人の経済力が大きな比重を占める。アルバイトなどで生活資金を稼ぐことに追われて、研究時間がうまく確保できない悩みを持つ人は多い。場合によっては３０代まで自分の生活費を得るのに精いっぱいで、家族を扶養することが求められない条件が前提になる場合が多い。そのため、男女を問わず単身者であることを余儀なくされる例に溢れている。

４３．研究者の人生その２

５）大学教員の場合は、授業を中心にした教育活動と研究活動が車の両輪に相当するといわれてきた。そして、学生が自分で学習研究をする構えと力があることを前提として、教員は自らの研究成果に基づいた情報を受講生に提供する、というタテマエでの教育が長く続けられてきた。

だが、それは現在、大学院とか学部の専門ゼミや卒論の一部で通用する程度であり、大部分は通用せず、空洞化している。そこで、授業時間を１５回確保し学生の出席などをきちんと管理して、学習効果をあげるような教育活動が、大学教員に要請されてきている。教育スタッフの数や教育予算の増額はなされないで、そうしたことが要請されているので、悲鳴をあげる教員は多い。

結果的に、教育活動における負担増は著しく、研究活動は夏休みなどの時だけにして、平日は断念するような人も出てきている。

大学教員楽勝人生などというイメージとは程遠い事態が当たり前になっている。これについて、どうしたらいいかについては、いろいろなところで繰り返し書いているので、今回は割愛しよう。

６）社会的活動と研究

大学教員もそうだが、研究者の役割として研究成果を社会に還元することが、長くいわれてきた。そして、そうした社会的活動で活躍する人は多い。行政組織などに要請されてするだけでなく、自ら提案して、そうした活動を起こす人も多い。

勤務先が、そうしたことを承認するだけでなく、促進するところも多いが、対照的に、全く自主的に行う例も多い。勤務先が、それを押さえつける例もある。

社会的活動が研究そのものと深く結びついている例も多い。なかには、それに時間とエネルギーの多くを注いで所属機関での業務遂行が少な過ぎになり問題視される人もいる。

７）行政管理的業務と研究

大学や研究所などでは、近年リストラなどで、行政実務的業務にかける時間が増加しているといって嘆く人が多い。また、４０代後半以降になると、職場の年齢構成もあって、管理業務に就かざるを得ない人も多い。なかには、喜んで就く人もいる。

大学教員における教育業務と同様に、この業務は、研究とはかなり異なる面が多く、研究を圧迫したり、不慣れによる労苦が絶えなかったりしている。とくに精神面でそうだ。そのため、体力的にも曲がり角の年齢にさしかかるので、業務遂行のために身体を壊す人も多い。

８）経済的困難さがつきまとう

「研究者は好きなことができていい」と外部の人には思われがちだ。しかし、経済的困難にあえぐ人は多い、というか、そうした人が増加しており、むしろ困難を抱えた人の方が多いかもしれない。まず、定職を得る時期が、３０代になる人がかなり多い。それまではアルバイト、臨時職、期限付き採用が多い。最近では、奨学金返済に苦労することが普通になっている。

定職を得ても、給与が周りが思う程高くない。それに研究分野によっては、自前で研究費をまかなうことも多い。世帯をもつとすれば、共稼ぎは不可欠だろう。加えて、別居しないと勤務継続ができない例も多い。また、単身を余儀なくされる人も多い。

そうこうしているうちに、６０代にさしかかるが、在職２０年以上という年金受給資格獲得まで働き続けることが心配になる人も多い。

４２．研究者の人生その１

生き方・人生は、その人が置かれた様々な条件によって大きく変わる。それぞれが興味深い。そして、同じ条件にあっても、個人の特性による違いがある。

ここでは、研究者を例にして考えてみよう。個人特性を除いた諸条件について、どんな課題と傾向が生まれてくるかを、おおざっぱに見てみよう。

１）研究の専門分野による違いが大きい。自然科学と社会科学・人文科学との違いは大きい。また、研究対象のフィールドをどこに置くかでも、違いは大きい。

教育現場の実践と深くかかわって研究してきた私の場合、現場教師との研究会、学校現場との緊密な関係を持って進めてきた。現場教師から出される実践上の課題・疑問に応えられるかどうかということに緊張の焦点をもって研究を進めてきた。そして、時には、私が提案する教育実践を自分自身ができるということを前提に進めてきた。

そうした研究対象・研究分野とのかかわりをどのようにもてるかどうかは、研究者にとって決定的に大きい。特定の実験設備を必要とする分野では、その設備の存在が決定的だ。研究先（就職先）は、その設備を使用できるところに限定される。私の知人は、世界にいくつもない設備が不可欠なので、それが存在する国々を渡り歩いている。

２）身体能力との直接的なつながりはそれほど高くないので、身体的ハンディをそれほど苦にしなくていい場合が多い。自分自身はできないけど、研究し指導することは出来るということで、特定のスポーツ分野の研究をしている人がいる。

体力的衰えがあったとしても、研究遂行上では、それほどハンディを感じず、むしろ経験を蓄積し円熟してきたことを有利に使う人も多い。７０歳代８０歳代になっても、各地に出かけるなど体力を使う活動が困難だとしても、研究上の活動を旺盛に展開している人は多い。

３）研究上の年齢区分は難しい。２０歳代３０歳代は「修業時代」、４０歳代５０歳代は「現役バリバリ」、６０歳代以後は、「悠悠自適」で、後代へのアドバイスなどという図を、描けるような分野はそれほどない。２０歳代が研究の最前線だという分野さえある。

大学教員とか研究所研究員とかとしての定年があっても、研究者としての定年はないことが通例だ。給料をもらうことがなくなるかどうかの違いだろう。逆に、研究者としての活動を縮小停止して、勤務先の管理的行政的

業務に比重を移したり専念したりする例を結構見かける。

４）研究者が、研究による収入だけで必要な生活費を得ることは、少数の例外を除くと難しいのがごく普通だ。収入を得るために、なんらかの「職」を得て、その「職」のなかで、研究をすすめることが通常だろう。

現在の私のように、定職なしに研究活動をしている人の多くは、一定の年齢以上の人だろう。無論、若いうちから、なんらかの蓄えや、収入活動をしなくても収入が確保されていて、研究活動をしている人もいないわけではない。

しかし、多くの人は、生活費を得るために、なんらかの定職につくなどをしているだろう。なかには、近年の大学院生のなかにかなり見られるように、奨学金という名の借金をして研究活動をしている人もいる。また、研究者志望であっても、適職が得られず、研究者の道を歩むのを断念ないしは延期する人も多い。無論、研究だけをする職を得る人もいないわけではない。

研究者のなかで、定職を得ている人の代表的なものは大学教員だろう。

４１．人生研究へのアプローチ

人生研究には、いくつものアプローチがある。そのうちの身近なものの一つは、小説などの文学作品、あるいは聞き取りなどのドキュメンタリーなものなど、一人ないしは何人かに焦点をあてた体験物語のような類がある。ナラティブ型といってもよいだろう。

もう一つ身近なのは、統計資料を駆使して、統計事実の集積をもとに論じるアプローチがある。高齢者に焦点をあてて例を並べてみよう。

・７０歳の平均は〇〇という特徴をもつ。

・５０代までに趣味を持っている人は、老後が充実している

・認知症の増加は、○○歳ぐらいからだ

そうした平均的傾向に基づいて、医療保険や年金などの制度が構築されている。また、自動車免許の高齢者マーク使用は何歳からと定められる。老人会加入年齢は〇〇歳からと決められているところも多い。

そうしたものに「追っかけられて」「自分もいよいよ○○歳なのだから、～～しなくてはならない」と気づかされる人も多い。

「男性の平均寿命は〇〇歳だから、８０歳まで生きた自分は長生きの部類に入るのだろう。９０歳まで生きた自分は昔ならとても珍しがられたが、いまでは、どこにでも見られるように珍しがられなくなった。」という人もいる。

だが、このアプローチは、個人差を問題にしないから、「自分の場合は異なる」という感覚を持つ人がとても多い。

もう一つ、思想的というか、規範的なアプローチがある。古代インドで行われた人生を「学生期」「家住期」「林住期」「遊行期」の４つの時期に区切るありようもその一つだろう。エリクソンの心理社会的発達理論における「成

熟期・老年期　（統合性　対　絶望)」なども、その一つかもしれない。
　私がこの連載で書いているのも、このアプローチに近いだろう。

　いずれのアプローチにしても、近年の人々の生活・人生の大きな変容を考える時、従来の枠組みでは対応しきれない事態が広がり、新たな枠組みの必要性が高まっていることを示している。
たとえば、
　・年齢にもとづく指摘は、５０歳以上になると、個人差があまりにも大きく、共通したことが言いにくくなっている。１５歳から３０歳ぐらいの変動も激しい。
　・収入を得るために仕事をするということが、人生上の位置で高いところにあった、ここ１００～２００年ほどのありように大きな変容が起きている。
　・人口的に言っても、増加一途であった時代から、減少へと向かい始めている。
　・経済成長を追い求めるよりも、定常経済ないしは経済縮小へと向かい始めている。
　・「無限の自然」ではなく、「有限の自然」であり、これ以上自然をむさぼっているととんでもないことになるという危機意識が広がってきている。
　こうしたなかで、これからの生き方・人生のありようをいかにしていくか、という問いと試行的実践が広がっている。うねりのようになってきたことを感じる。
　それらを背景に、人生論・生き方論の新たな枠組み創造へと向かいたいものだ。

４０．世代別の検討

　一年余り続けた本連載も、まとめが近づいてきた。だが、まとめることよりも、今後考えていくべき課題にかかわって、いくつか書くことにする。
　まず生き方の問題は、世代別に大きなちがいがある。その世代別アプローチの一つとしての、人生サイクルの各時期の生き方について、私のこれまでの仕事を振り返ろう。

　子ども時代は、生き方を自ら考えていけるようになるための準備期間とでもいえよう。成人として生き、自ら生き方を創りだすための力量を育む時代だ。それには、子どもにかかわる大人たちが担う部分が大きい。
　その点に関わって、私は１９８０年代前半にいろいろと書いた。それらを集約するものとして、「子どもの発達と生活指導の教育内容論」（明治図書１９８５年）を刊行した。
　次に、若者時代の生き方については、１９９０年代後半から００年代前半にかけて、数多くの「若者の人生創造」に関わるワークショップを展開し、いろいろな書き物をしてきた。ひとまとめのものとしては、「<生き方>を創る教育」（大月書店２００４年）を刊行した。そして、その後も、いろいろと書き綴った。それらは、私たちのホームページ「浅野誠・浅野恵美子の世界」に電子出版形式（無料）で掲載した「若者の生き方シリーズ」全４冊に収録した。
　次に、人生半ばの方々を対象にしたものについては、００年代から今日に至るまで書き続けている。本連載もその一環に位置づくだろう。それらについては、同じくホームページ「浅野誠・浅野恵美子の世界」に電子出版

形式（無料）で掲載した「人生・生き方シリーズ」全３冊に収録した。
　そして、高齢者対象のものについては、１０年代にいろいろと作業を始めた。一部は、本ブログおよび前ブログ「田舎暮らし・人生創造・浅野誠」に収録している。しかし、どちらかというと、今後の作業課題だ。

　こうして振り返ると、私自身の加齢に伴って、対象年齢が高くなっている。自分の体験をベースにした作業だから当然のことだろう。これらの作業には、ライフサイクルをめぐるエリクソンなどの仕事を参照、ないしは検討することが必要だろうが、未着手に近い。

　世代別の生き方についてのもう一つのアプローチは、最近よく耳にするコーホート（年代）別のものだろう。１９４０年代生まれ、１９５０年代生まれ、１９６０年代生まれ・・・といった区分で考えていくものだ。これについて、私は少しは触れてきたが、本腰を入れた作業を行っていない。
これには、個人におけるレベルと、社会におけるレベルとを交差させた作業が必要だ。たとえば、大量生産大量消費時代への移行と言ってもよい１９６０年代の社会のなかを青年期として過ごした１９４０年代生まれの人々の生き方について考え、その後の１９７０年代以降にどういう生き方を作っていったのか、その人たちが２０１０年代にある今日、どのような「歴史的課題」に直面し、「後期高齢期」とみなされる２０２０年代に向けてどのような生き方をしていくのか、といったテーマでの検討作業だ。
　このように見てくると、これらの作業課題が改めて大きいことを感じる。

３９．仕事と余暇・「余生」など

　前回、生活の糧（収入）を得る仕事を中心にした人生・生活の二分論について考えた。
　今回、余暇（娯楽・趣味・スポーツ・旅）や休養、さらには食事・睡眠・療養などについて考えたい。また、「余生」と呼ばれる「おまけ」の期間がある。
　これらの余暇・休養などを、仕事で生まれた疲労を回復させ、再び仕事に向かうエネルギーを補充するものという考え方がごく普通に行われている。これまた仕事中心論だ。そのことを「余生」に引き寄せていうと、「もう仕事を続けられなくなったから退職する」「まだ仕事を続けられるのに退職させられるのは、おかしい」「私は生涯現役で頑張る」という言い方もよく聞く。退職後を「第二の人生」というのも、その類だろう。

　では、余暇・休養・「余生」などは、仕事の付属物・つけたりなのだろうか。
　私は、それ自体として意義深いものがあり、仕事と優劣をつけるのはおかしいと考える。そして、仕事とこれらのものを区分するのに、「収入の有無」「社会的有益無益」などの基準が使われているが、それらで二分するのを問い直してよいのではなかろうか。と考える。
　「収入の有無」で二分するのは、多少は理解できる。それでも、単純にはいかない、シルバーボランティアに有償のものがみられるように、結構有償のものがあるからだ。
　「社会的有益無益」は基準として使えることが少なすぎ、有効でないだろう。たとえ、全く個人的に有益だからしているというが、それで個人として充実感を得ることで、人間関係社会関係にプラスをもたらすことは日常

的に見かけることだ。

どの市町村にもありそうだが、文化協会といったものがあって、高齢者を含めた人々が集まり、趣味的活動を多様に展開する事例によく出会う。絵画・書道・盆栽・写真・手芸など多様な活動を展開し、展示会なども開かれる。そのことで、当人たちだけでなく、友人知人親族たちが集まって鑑賞するとか、展示物を公共の場に飾るとかはよく行われている。それらは、人間関係社会関係に大変有益なものをもたらしている。

また、料理を楽しむ人も多い。料理を自分なりに工夫して、健康と生活の充実を得るだけでなく、共同料理をして、料理のレパートリーだけでなく人間関係を豊かにする例は、あちこちにある。ときには、それが地域の名産物となり、地域起こしにつながることも聞く。

また、散策や旅に出て、自然との一体感を味わったり、歴史と文化を発見したりすることも、個人としてだけでなく社会的にも有益なことが多い。

さらには、災害地に出かけてボランティアをしながら、社会的にも個人的にも、充実したものを得る例は、近年とくに増えている。中には、職業と結びついた得意技をボランティアで生かす人は多い。

こう考えて来ると、職業だけでなく、こうした活動をどれだけ豊かにできるか、ということは人生の中の大きなテーマだろう。そして、職業とこれらを結びつけて展開できれば、より有効であろう。そうした生き方を創造する時代なのだ。

かつて地域の共同体が活発だったころは、地域での生産活動は、娯楽・行事や祈り・共同作業などと深く結びついていた。それが共同体の解体と並行して、仕事とそれ以外に分離分割されてきたが、それらを再び新たな形で統合していこうとする動きが広がっているのではなかろうか。多様なボランティア活動やＮＰＯ活動の豊かな展開は、人々のそうした志向性を反映しているように思う。

３８．仕事と仕事以外の二分論

今日では、日々の生活、また人生全体において、仕事が中心位置に座り、仕事と仕事以外の二つに分けて考える二分論が、広く行われている。

日々の生活においては、仕事時間とそれ以外の時間、週単位でいうと、仕事日（勤務日）と休日といった二分論である。人生においては、「生産人口」とか「労働人口」とかいわれるものに該当する年齢時期と、それ以前の子ども時代とそれ以後の老年期とに分ける二分論だ。それらは「常識」に近いものがある。

だが、まず仕事が中心位置を占めることでいいのかな、という問いかけがある。人間として生きる・生活することが中心で、そのために仕事について、生活の糧を得るのではないか、という考え方も広く見られる。また、ハンナ・アーレントのように「活動」を中心位置に置く考え方もある。市民としての政治活動を含む社会活動をもっと重視すべきとの声も多い。

夫と子どもに尽くすという、核家族の専業主婦のありようへの問い直しが広く行われている。その際、家事をどう位置つけるかをめぐって、シャドウワークという考え方が、ジェンダーの視点から問い直されてきた。これも収入目的の仕事中心への問いかけだろう。

また、子どもや高齢者が仕事についていないとしても、「非生産人口」「非労働人口」に数えることに疑問を出す人もいる。

別の角度から見てみよう。

仕事を、残業だけでなく、勤務場所ではない自宅に持ち帰ってすることの是非、あるいはそれが残業になるかどうか、ということも大きな話題になる。長時間労働を背景に生まれる過労死は、世界的に有名になった日本の特徴的なこととなっている。

その点では、労働法制が整い、その実質化がかなり進んでいる欧米の多くの国では、勤務時間と時間外とを峻別するありようが確立している。定時に勤務を終えるのは当然なことだし、有給休暇はいうまでもなく、長期休暇取得は当然視されている。対照的に、日本では、有給休暇の行使率は低いし、サービス残業が常態化しているところも多い。

それは勤務時間問題だけでなく、生活全般に関わってくる。長距離通勤や単身赴任を余儀なくさせる配属など、当人だけでなく家族までもが強い影響を受けるありようは、日本では珍しい問題ではない。その点で、欧米とはかなり異なる問題群が存在する。

以上の話のほとんどは、雇用—被雇用の関係のなかで生じている。では、農業も含めて自営業ではどうだろうか。自分自身の選択判断で設定しているから、問題は少ないとはいいきれない例も多いようだ。長時間開店に対応する商店や２４時間対応が必要な畜産業のように、長時間労働を強いられ、休日をとることにも制限が強いケースも多いようだ。

以上の問題とは別の角度の問題が存在する。仕事は、「生活の糧となる金銭を得るために、やむをえずしているものだ」という考え、だから、「勤務時間外まで、勤務先によって拘束されるのはおかしいし、自宅にまで仕事を持ちかえらないとできないような勤務は不当だ」という考え方がある。

その一方で、強制がなくても、働く人本人がそうしてしまう、ということをどう考えるか、ということがある。「自分が好きで、やりがいのある仕事についているから、別に問題はない」という捉え方だ。自営業だと、そうしたことは大いにありうることだ。

３７．「定常型社会」の生き方　広井良典「定常型社会」を読む

今回は、最近読んだ広井良典「定常型社会」岩波新書２００１年の紹介コメントをしよう。広井さんの本は、何冊かすでに、このブログでも紹介してきた。今回の本は、「読み残してきた」もので、広井論の復習にもなった。

「先進諸国における男性の生涯の就業期間と非就業期間の年次推移を見ると、諸外国において「非就業期間」の長さが着実に増加し、近年ではそれが「就業期間」よりも長くなるに至っている（つまり人生全体の中で「働かない期間」のほうが長くなっている）のに対し、日本に限っては非就業期間の伸びがほとんど見られない傾向にある。要するに、「（高齢化が進んでいるにもかかわらず）極端に（男性の）就業期間が長い」のが日本の特徴である。（中略）

最近の日本でしばしばなされる。"生涯現役" という議論に基本的な疑問を感じることがある。それはそうした場合に念頭に置かれるのがもっぱら（カイシャ勤めの延長的な）「賃労働」であることが多いからだ。生涯現役というのは、少なくとも賃労働ということに限ったことではなく、ボランティアや様々な社会的活動を広く含むものであるはずだし、さらには「隠居」といったこともひとつの価値ある生き方ではないだろうか。私はむしろ、「賃労働」や「生産」の価値ばかりを強調する議論をそろそろ卒業し、また日本でも（中略）深刻化し始めている若年者の失業問題の実態をも視野に入れ、引退ということや、賃労働以外での社会参加に価値を見出せるような社会への転換を図っていくべきではないかと考える。」ｐ６２－３

―――最近では、「再雇用」などという形で、長年勤めてきたところに、６５歳まで低給料で働き続ける人を多く見かける。そのため、定年退職が実質６５歳という人が増えている。なかには、それを「蹴って」、自分なりの楽しみを追求する人も見かける。

私は、長年、「人生後半期」「一つではなく、いくつも人生をする」といってきたが、本書で述べていることと響きあう。私も「生涯現役」という言葉に違和感をもつ。そうしない人がまるで「敗北者」であるかのように、語る人さえいる。一つのことを貫き通すことが、同一職場・職業を指すとすれば、それは「人生の貧困」を意味するのではなかろうか、とさえ思うことがある。

私自身、５６歳で専任としての３１年間の大学教員生活を終えた。自分で定年を区切ったといっていいかもしれない。そして、以下に出てくる第二第三にかかわる生き方をスタートさせた。その際、大学教員希望の若者の就職難も気にしていた。

次は、「定常型社会」には、三つの意味があるという、わかりやすく興味深い記述だ。

「　「定常型社会」の３つの意味とその条件／根拠
定常型社会の
・第一の意味「マテリアルな（物質・エネルギーの）消費が一定となる社会」（＝脱物質化）←情報化（情報の消費）や「環境効率性」の追求を通じて
・第二の意味「（経済の量的拡大を基本的な価値ないし目標としない社会」（脱量的拡大）←「時間の消費」を通じて
・第三の意味「〈変化しないもの〉にも価値を置くことができる社会」←「根源的な時間の発見」を通じて　　　　　　　　　　　　」ｐ１６１

―――よく整理されていて、わかりやすい。このなかの第二と第三に関わって、次のように書かれている。

「地域その他において（中略）介護・福祉や自然保護などの活動に関して、個人が自発的に参加しネットワークをつくり、互いに支え合ったり喜びを共有し合ったりするような、様々なボランタリーな活動が急速に広がっている。そこで共有され、また参加した個人に充足感を与えてくれるのは、いわば「市場／経済」の時間とは別の流れ方をする「時間」なのではないだろうか。あるいは（中略）今後大きく広がっていく分野として「自然との関わりを通じたケア（または癒し）」ということがある。そこで人々が様々な自然との関わり（園芸、庭造り、農作業、森林浴、身体運動など）を通じてふれあいまた発見しているのは、いわば「自然の時間」ともいうべき

別の時間の層なのではないだろうか。」ｐ１５６

―――まさに、この１０年余りの私の生き方が書かれている。そろそろ、私なりのこの１０年余りの中間まとめが必要な時期が来ているようだ。

３６．効率主義と手作り・創造の生活

前回書いた効率主義には、科学技術の成果活用という基盤がある。その科学技術と結びついた合理主義・効率主義が、現在の私たちの生活が強く深く浸透している。感情・気持ち・気分とかやりたいこととかよりは、合理主義・効率主義が日常生活を支配している感じだ。

人間にとってやりたいことがあって、その必要から科学技術が発展してきたのに、それが逆転したかのようだ。

そのためか、無駄の多い生活、あるいは何もしない生活は、何かまずいこと悪いことをしている気分にさせられる。時間を無駄にしているといわれそうになる。その代表的なものとして、睡眠や休息がそう見なされることがある。今はあまり聞かないかもしれないが、四当五落、つまり睡眠５時間では「落ちて」４時間では「合格」するという、大学入試学習の話だ。私などは、８時間眠らないとやっていけなかったので、「落ちる」タイプだ。

効率主義だと、細かく計算をして計画をたて、それをきちんと実行するということになる。そのため、実際の生活には、効率主義からみれば、無駄が多い。だから勤勉に努力せよという話になる。

重要なことは、創造ということになると、効率主義とは距離があることである。場合によっては対照的になる。創造は、細かく計算した計画にもとづいてできるものではなく、計算外想定外があるから、創造になるのだ。

創造のベースにあるのは、手作りだと思う。そして試行錯誤だと思う。その際重要になるのは、想像とか物語つくりだと思う。そして、休養だと思う。

私は、思考が止まった時、なお頑張ろうとするよりは、休養し気分転換して、思考が再開しはじめるのを待つ。あるいはひらめきが出てくるのを待つ。そんな時、庭畑作業や散策は最高だ。だから、毎日している。雨の日も傘をさして散策することがある。卓球も最高にいい。無心に近い状況で、身体の動きに任せて、球をたたいていると、ストレスはなくなる。

そんな過程には、効率主義はない。散策は、決まったコースを歩くよりは、道を発見しながら、コースを作りながら歩くことが多い。畑作業は、「何をしようか」と、することを見つけながらしている。そして植物の要請を発見しながらやっている。

それらには、感性・感情・気持ちといった類に近いものがある。私の人生前半期は感情を抑え込むべきだと思っていた。だが、抑え込めない時があって、困惑したり爆発させたりしていた。

しかし、人生後半期は、少しずつ感情・気持ちを大切にするようにしてきた。そして、その方が創造的になれることに気づいてきた。

効率主義は問題だとしても、効率は大切だ。だから効率主義にならないように、効率を上手に扱う必要がある。生活を例にして考えてみよう。現代では、効率性の高い商品で組み立てる面と、自分で工夫して手作りで創造し

て組み立てる面とがある。この両者を、自分の願いに合うようにからませたい。

効率や商品に従属して生活がまわるのは、商品や効率の奴隷になる状態だ。手づくりで創造する中で、適切に効率的な商品を使うようにしたい。なにせ、手作りや創造というのが、最大の贅沢、豊かさだと思う。いくら商品や効率性をもっていても、創造がなければ、貧しい生活だと思う。

３５．効率主義による生活支配から脱け出る

商品・金銭に過剰に依存する生活は、効率主義が支配する生活とも言えよう。それは、自分で作るより、お金で商品を買った方が効率的だ、ということになりがちだ。時間の無駄が省けるし、安価だし、面倒が省けるし、という具合だ。

面倒で、効率的でないもののトップは、人間関係なのかもしれない。人間関係さえ効率的にするために、金銭・商品に変えていった方がいいということになる。スマホなどをとおしてのヴァーチャルな人間関係に依存するのが、その例だろう。

商品購入についていうと、ネットで購入し、購入先と直接出会うことを省けるということで広がっている。スーパーでの購入も、それに近いものがある。マニュアル通りの効率的な対応がレジ係に要請され、買い物客に合わせた個別対応は極小化される。商品についての店員と客との相談も極小化される。最近、客自身がレジをするシステムに出会った。

商品売買における効率化は、人間関係を省くということなのだろう。

人と待ち合わせするという時に、人と会う目的を越えて、決められた時間に従うことを優先させてしまうことがある。人と出会う集まりに出かけるときでも、まずは時間通りに会場に着くことが意識にのぼってしまう。小学生のころから、そうした習慣が作られる。

そんな習慣は、時計を持ち歩くか、どこにでも時計があるといった頃以降の話だが、いまではそれが当たり前になってしまった。その結果、時間を守ることに追われ、人との出会いがそれに従属するようになった。

これは、数年前までの私自身だった。今は、徐々にそれから解放され、テーゲー（おおざっぱ）な時間とのつきあいになってきた。

手帳などでのスケジュール管理についても、同じことがいえる。いくつもの日程がかちあうために、スケジュール管理が必要になるような生活が溢れている。

予定外のことが出てきた時、それを楽しむよりは、嫌う傾向が強くなっている。

そこで、効率性が求められる。だが、効率的であることは、豊かさ・幸せと結びつくのだろうか。大量処理、時間に合わせた効率的な処理は、人々の暮らしから無駄を追いやったが、かえって時間に追われる生活を生み出したのではなかろうか。そこで、工夫しやりくりしてやっていく手作りよりも、規格品既製品による生活を生み出した。

そして、なぜか、効率的であることが贅沢であり、富と結びつく、という錯覚が作りだされているのではなかろうか。

豊かで贅沢だということは、自分と、他者との人間関係に合わせた手作りの時間をかけたものであり、それは効率とは正反対のゆったりとしてスローなものだと思う人が、最近増えてきた。

私の生活は、だんだんにそれに近ずいたきた。

それは無理だという人でも、一日中、忙しさと効率性に追われるのではなく、せめて一日に半分でも、そうではない生活にしたい。あるいは、週にせめて２日は、年に１００日はそうした日にしたい、と考えているのではなかろうか。その点では、欧米のかなりの国で、５時以降は勤務しないということで割り切った生活、あるいは、夏季休暇を２か月きちんと取り、休養地で暮らすということをしているのは、一つの参考になろう。あるいは、経済戦争下でない国で、自給自足に必要なものを得る以外は働かない生活をしている地域の人々のありようも参考になるだろう。

３４．時間感覚　季節感覚

私たちは、当たり前のように時計やカレンダーで自分の生活を管理している。しかし、１００年も前では、時計やカレンダーは、限られた人たちが使用していただけだった。それ以後、急速に普及し、今や時計・カレンダーが溢れている。５０年前に１００００円した腕時計は、当時以上に正確で多機能なものが、今では１０００円以下で取得できるし、ケイタイやスマホで代替している人も多い。カレンダーも溢れて、年末になるともらい過ぎて困るほどで、いまではその配布が自粛されつつあるほどだ。

地球温暖化などによる異常気象が拡大しているが、寒暖に対応できる衣類も多種類販売され、活用されている。エアコンに代表される簡便で効率的な気候対応機器が、取得可能な価格で普及している。夏２４度、冬２０度といった室温設定での生活のなかで、体が、季節の流れではなく、機器による温度管理に対応するようになっている人が多い。

そうした類の商品の広告が溢れ、メディア誘導（支配）による商品で季節対応をする生活が進行し、メディア情報依存症とでもいえる事態が広く見られる。

だが、そうした人工環境によって、人々の時間感覚・季節感覚は、より高度になっているどころか、それらへの依存が進む中で、そうした感覚が鈍くなっているようだ。

たとえば、夜明けで明るくなって目覚め、身体が活性化し、暗くなってくるとともに休養ペースになっていくという流れが、人工環境への対応へと切り替わっている。人工環境への過度の対応が、自律神経とか体内時計とか温度感覚とかの身体機能での異変を広げているようだ。人工環境との結びつきが深まるのと反比例するかのように、人間と自然との距離が広がってきている。身体も自然であることを忘れ、ロボットのような人工物であるかのようだ。

そうしたなかで、自然との結びつきだけでなく、人工環境との結びつきにしても、当人自身の意思判断に基づいてなされるというよりも、巨大なシステムの流れによって管理され、当人の管理活用能力は低下しているのではないか。

時間管理・季節対応のありようは、生き方の中軸にある問題だと、私は考える。さらには、自分の身体管理・

精神管理も生き方の問題である。こういう用語はないのだが、自分の年齢管理も、生き方の問題だと思う。
　こうしたことが自分自身の管理ではなく、人工システムによる管理へと移行し、それが過度に深化する中で、自分自身の管理能力の低下が進行し、身体的異変を大量に生み出している。年齢についていうと、若さ至上主義・長寿絶対善的な感覚が、余りにもはびこっているのではないだろうか。そのなかで、アンチエイジングの営みをするのが当たり前にされつつある。そして、自分の身体の自然な流れを受け入れられなくなっている人があまりにも多い。
　こうしたことの背景には、近代の雇用労働の一般化、そして軍隊や工場の一般化、その要員養成としての学校の一般化がある。加えて身体に関しての病院・薬など医療への過剰依存状況などもある。
　歴史的に見ると、暦・時計管理は、支配にとっては重大テーマであったのだが、今や、巨大システムに基づいて行動する個人が、自分の時間管理を徹底させている。その結果が、逆に管理能力の極度の低下を招いているのだろう。こうした雇用労働、軍隊、学校、医療などによる、時間の過剰管理が進行しているのだが、その現状があまりにもありふれているので、それを異常だと感じる感性も低下している。
　そうしたなかで、近年広がっている「スロー」だけでなく、おおまかさ（テーゲーさ）、無計画（いきあたりばったりで流れに任せる）などといったことも、見直してみる必要がでてきているようだ。

３３．人間関係の創造

　人間は、誰しも社会の中で生きるわけだが、その社会の中心に人間関係があると私は考える。そうでないありようとしては、システムとしての社会を中心にして生きる、あるいはカネやモノの関係を中心にして生きることがある。
　モノに焦点化した場合には、カネやシステムにつながるモノなのか、ヒトにつながるモノなのか、どちらの比重が高いのかが問われる。たとえば、お店でモノを買う時に、売り手の人と、どういう会話をしながら買うのかは、私にとって大切なことだ。できれば、知り合っている人から買いたいし、あるいは買うことを通して、売り手と知り合いになりたいと考える。

　先日の私のお出かけで出会った人との例を書こう。
　まず市役所国民健康保険係に、マッサージ補助券をいただきに行った際、職員の人と、那覇市では財政難のためにこの制度が縮小廃止に向かっているが、南城市はそうならないように願うことを会話。その時に、市役所で働く人で卓球仲間である方から、声をかけられる。彼女は、この制度を知らなかったという。そこで、雑談。
　次は、スーパー内のクリーニング店。顔なじみの店員と、「急に暑くなった」ことなどの雑談。
その次は、園芸店。米ぬか袋を買うが、レジ機械がうまくとどかないので、レジ係りのお手伝いをしながら、会話。パン屋では、他の方とかちあい、その方が少量だったので、「お先にどうぞ」という。
　こんな風に、行く先々で会話。会話をしていて、お金を出すのが遅れてしまったことがある。何か話をしないと、気が収まらない感じになってしまう私。

　そんな会話には物語がついてくる。無論、すごく短い物語だが、それがふとしたきっかけで進展することがあ

る。それが積もり積もって、かなりの物語になることもある。
そんな関係を築くために、できるだけ顔を突き合わせる場面を大切にしたい。
システム化機械化の進展のなかで、顔を突き合わせた会話が物語になることが少なくなってきた。効率が悪いという理由で、人間を介在させないで、モノとカネとの関係だけで終わらせるシステムが、どんどん顔をきかせている。
同じことは、人間と自然との関係にもいえる。自然との直接的な関係を減らし、モノ・カネ・システムとの関係に代行させることが増えている。道路を例にとると、草が生えているような土の道路を歩くことがとても少なく、むしろそれを避けることが増えている。私は逆に舗装されていない道を歩くようにし、動植物や景観を楽しみながら歩く。

こうした人間関係には、コミュニティともいわれるような地縁的なものをきっかけにするもので、当人の希望とはあまりかかわりなく成立するものと、アソシエーションともいわれるような、当人の希望に基づいて関係をつくるものとがある。近年では、コミュニティ的関係のわずらわしさから、希望する人だけとつきあうアソシエーション的な関係の比重が増している。しかし、希望する人と付き合うのも、かなり面倒なことたと感じ、結局は孤立気味になる人が増えている。小さい子どもなら、「一年生になったら友達１００人つくる」といっていたのが、年を重ねるにしたがって、友達つくりの難しさを感じ、友達が減ってくる人が多い。
コミュニティ的なものとして、クラスメイトのつながり、近所のつながり、職場のつながりなどが多いが、そうしたものをきっかけに友達作りをすすめたい。その広い基盤の上にアソシエーションをつくりたい。無論、コミュニティ関係を越えたところでアソシエーション的なつながりをつくることも進めしたい。
近年、インターネットやスマホを通しての友達作りが増えている。それも、一つの有効なアプローチだろうが、それがかえって、気づかいを増やし、困ったことを起している例が、子ども若者に多い。
そうした時に、協同作業が重要なきっかけを作ることが多い。私のワークショップ型授業は、協同作業を通して受講生同士がつながりを深めることを、重要な前提条件にしている。大学で同じ授業をとったとしても、ほとんどがつながりあわないことが結構多い状況を変えていきたい。大学授業でなくても、あらゆる機会を通して、つながりを豊かにしたい。
その際に、出会った相手が、競争相手勝負相手ではなくて、協同相手になるようにしていくことが大切だ。「他者に勝つ」ではなく、「他者とともに生き」ていきたい。

３２．政治参加

生き方と政治ということでは、個人の政治へのかかわりのありようが重要になる。代表者を選ぶ選挙で投票することは重要だが、それだけに済ませるわけにはいかない。代表者を介しての意思表示だけでなく、自ら意思表示することを機会をとらえてする。意思表示にとどまらず、みずから政治に参加し、討論や企画立案に関わり、政策の執行に関与することも大切にしたい。
それらは、縁遠いというわけではない。結構、日常の世界に存在していながら、当人が気づかないでいることがある。特に地方自治体の諸活動にはそうしたものが多い。地域の水・道路・ゴミといった問題、そして年金、

医療、保育、学校などの問題に関わらない人の方が珍しいといえるほどだ。

私自身のかかわりでいうと、南城市文化センターシュガーホールでは、市民参加型企画という模索を始めており、市民からの提案参加を期待している。また、尚巴志活用マスタープランでは、市内各地に多様な形でのエコミュージアム展開を市民参加型で始めている。

実際、多様な形での市民参加がすすんでいる。

政治というと、政党や官僚たちだけがかかわるものだという意識を越えて、市民自らがかかわるものだという意識をもった活動展開が期待されるのだ。

無論、そうしたものに組織がかかわる。その組織は、政党などの政治団体だけに限定されない。多様な組織が存在する。政党のようなハードな組織もあれば、ゆるやかな組織も多い。市民たちがつくる組織には、きちんとしたものもあれば、一回きりの討論広場のものもある。最近では、ＮＰＯ／ＮＧＯや協同組合の類が多様な形で存在している。

以前は、利益誘導がからみ、利権政治に関わることへの拒否反応を示す人もいたが、金にまみれた政治ではまずいという感覚が市民のなかに育ってきている。沖縄でも戦後、とくに近年では大きく変化してきている。

南城でも、そうした方向に進むことへの期待と実践が広がっていると思う。

ところで、政治の問題は、実は軍事の問題を含んでいる。戦争は政治の延長だとは長く言われてきたことだが、日本にしても沖縄にしても、人々は軍事については無知に近い。軍隊は住民を守るものだと思っていたら、住民を巻き込んで、日本本土を守るために沖縄を犠牲にすることだったとは、ほとんどの人が全く知らなかった。同じことが現在ではないだろうか。米軍は沖縄を守るのだろうか、という疑問について説明できる情報を持っている人がどれだけいるだろうか。話題の海兵隊が海外に出かけていって戦争するために置かれていることをはじめとして、沖縄米軍の軍事について、私たちはどれだけ知っているのだろうか。平和を大切にしているから戦争・軍事について知らなくていいというものではない。平和を愛するからこそ、軍事・戦争に関与し、「参加」して声を上げることが重要なのだ。「参加」は、軍隊に直接関与すること以前に、軍隊のありようについての意見表明意思決定に関与することなのだ。

政治についてしっかりとした知識をもちしっかりした判断をし、しっかりと参加することは、民主主義社会に生きる人にあっては、市民としての必須資格なのだ。

３１．生き方と政治

生き方というのは、一人一人にかかわる身近なことなので、大きな問題にかかわる政治とは縁遠いという感覚をもつ人がいまだ多いかもしれない。しかし、政治が、人々の生き方を強力に決めてきた歴史的記憶がつながれてきている。戦争がまさにそうである。

否定的に政治をとらえる人は、できる限り政治を避ける生き方をしようとするかもしれない。しかし、避けていても、政治の方からやってくることが多い。

そして、現代は民主主義の世の中である。民主主義は、よく知られたリンカーンの言葉でいうと、「人民の、人民のための、人民による」政治である。このなかの「人民の、人民のための」ということであれば、民主主義でなくても、「リーダー＝政治的指導者＝しばしば支配者」に任せればよいということで、選挙という代表者選出に民主主義をとどめる人が結構多い。

それを越えて、「人民による」、つまりは政治参加を果たし、別の言葉でいうと、民主的主権者として振舞うことが必要だ。それは選挙での投票にとどまらず、発言・投書・集会参加・要請行動など、多様な形で行われる。

それは、地元自治体レベル、国レベル、地球レベルと多様なレベルで展開される。そうした民主主義的な行動をとる人たちを、広く市民と呼ぶようになっているが、それには住民・市町村民・国民・地球市民というように、多様な呼び方が並存している。

市民として多様な人々とつながりながら行動することが、現代を生きる人々の生き方の不可欠な要素となっているのだ。

民主主義の初歩的段階には、人々が慣れないこともあって、利益誘導や権威主義がはびこる。典型例は、「票」を「売買」する買収だ。あるいは巨額の献金とひきかえに、献金者に有利な施策を展開するのは、広く行われ続けている。また、人々の暮らしにプラスになる政策をするかどうかは、選挙の重要な争点になっている。だから、多様なロビーイストが登場する。

あるいは、「私（たち）に任せなさい」ということにつながる権威主義的なものがはびこる。対抗する勢力も権威主義的になることが多い。いまではマスメディアを活用する宣伝戦という形で、権威主義が展開することが多い。

いずれにせよ、市民個人の、あるいは市民が提携協力して政治参加するありように強い問題が生じる。そうしたものは、国家・自治体への依存を強めるが、そうではなく、自分たちが共同でつくるものとしての国家・自治体というあり方をいかに増大するかがテーマとなってきた。

最近では、専門用語として、「ミクロポリティクス」とか「生政治」とかがよく使われる。人々の身体を含めた生活のありよう、人生のありように、政治が直接かかわってくることが日常的になっている。そうしたことに対して、多くの人が「受容」「あきらめ」という流れで受け止める傾向、受け止めざるを得ない事態がいまだに強い。そこからどう抜け出していくかも、民主主義政治にかかわる生き方の問題である。

また、政治機関政治組織が直接かかわることでないにしても、家族関係のありよう、ジェンダー問題などには、政治的なものが強く影を落とすものが多い。性別役割分業、夫婦別姓、同性婚、扶養義務、家事、相続などには、こうした問題が深くかかわる。多くの人が、避けて通れないこうした問題を抱えている。

こうしてみると、生き方の問題は政治と深く結びついていることがわかろう。

３０．やり過ごす　雑　やる気

昨年 12 月から始めて長くなった辻信一「「しないこと」リストのすすめ」の紹介コメントも、ようやく 9 回目の今回で終わりだ。今回も、驚かせるものを紹介する。

そんな世界で、あなたにできる最良のことは、「やり過ごす」コツを覚えることではないか。電車をやり過ごす。バスをやり過ごす。テレビの番組をやり過ごす。ゴミの収集をやり過ごす。会議をやり過ごす。締め切りをやり過ごす。面倒な人間関係をやり過ごす。昇進のチャンスをやり過ごす。

恋愛や結婚の機会をやり過ごす。心配はいらない。また機会は訪れるから。どっちみち、駆け込み乗車のような恋愛や結婚に、多くを期待することはできない。

一台やり過ごして、駆け込み乗車のような人生に歯止めをかけようではないか。

Ｐ７４

―――「チャンスを逃すな」という言葉とは対極的だ。競争・スピードが求められる現代では、「チャンスを逃していないか」という不安が付きまといがちだ。そうしたありようへの大胆な挑戦だ。だが、人類史上では、「やりすごす」ゆったりしたありようがほとんどで、「チャンスを逃すな」というせわしいありようは稀だっただろうと思う。現代では「チャンスを逃すな」があまりにも強調されるので、それが当たり前だと思わされているのかもしれない。

そもそも雑談、雑役、雑益、雑音、雑貨、雑務、雑学、雑誌、雑種、雑念などといった「雑」なるモノやコトがなければ、ぼくたちの暮らしはずいぶんと寂しいものになるだろう。粗雑、雑駁、雑多、煩雑、複雑であることを許さない人生は空しい。

「雑」を抱きしめることによって、ぼくたちは非効率を抱え込むことになる。一見、苦労は増えるように見えるが、じっは、そこにこそ、モリスの言う「仕事の歓び」や「美」が、そして「生きる理由」があふれているはずだ。　Ｐ１３５

―――私もやっとのことで、「やり過ごす」「雑を抱きしめる」ことが少しはするようになってきたのかな。

モチベーションは「やる気」と訳されることが多い。「やる気」がなくなるとどうなるか、といえば、それでもしばらくは嫌々「する」か、結局は、「しない」ことになるのだろう。「すること」リストについて悩んでいる人の中にも、モチベーションが上がらない、つまり、「やるべきこと」を「やる気」になれない、ということが起こっているはずだ。「すること」リストをいかにこなすか、こなさせるか、という視点から言えば、モチベーションを高めることこそが大事なのだろう。しかし、「しないこと」リストをつくるぼくたちから見れば、モチベーションが上がらないということは、むしろ、「やる意味」や「する理由」の不在を敏感に感じとったということであり、それ自体が、大切な兆候であり、メッセージなのだ。

Ｐ１４９

―――　まさに逆転の発想だ。この視点から見直すことは有益だろう。

私の場合、「やる気」になれない時は、「熟するまで待つ」というのが、このごろのやりかただ。待っても熟さないものは、やらないのだ。

私が知らなかったななおさかきさんの次の詩は、刺激的で面白い。これを最後にして、紹介コメントを終えよ

う。

詩人ななおさかき
「さわやかでたのもしい経済社会への道」として、次の１０項目が並んでいる。
１　ぎりぎり　必要なものだけを　求めよう
２　工場製品でなく　手づくりを
３　スーパーマーケットでなく　個人商店　または生協に　つながろう
４　虚栄と浪費のシンボル――誇大広告を　まずボイコットしよう
５　最大の浪費　ミリタリズムに　かかわらない
６　生活のすべてに　もっと　工夫と創造を
７　新しい　生産と流通のシステムを　試みよう
８　汗と思いを　わかち合う　よろこびから
９　真の豊かさとは　物と金に　依存しないこと
１０　野生への第一歩――よく笑い　よく歌い　よく遊ぶ
　Ｐ１６１－２

２９．幸福を追求する　幸福である　幸福でいる

今回紹介する辻さんの文は、私だけでなく、多くの人にとっても衝撃だろう。

クルマスによれば、この「追求するものとしての幸福」という考えは、欧米はもちろん広く現代世界に広まっている。日本でも、「し合わせ」という言葉からやってきたという古来の「幸せ」観は影をひそめ、幸せとは、それを得るためにがんばって努力するもの、必要なら戦いとらねばならないもの、というアメリカ的な考えが一般的になってきている。
そこでは、積極的な行動なしに「幸せ」という価値を実現することはできない、と考えられている。ある状態に留まって満足しているとか、幸せという目標を目指さないでいるとかは、消極的な態度として非難の対象にさえなる。本人が「これで私は幸せなんです」と言ったとしても、人々は「それは自己満足にしかすぎない」などと言ってなかなか納得してくれないだろう。
クルマスは言う。「幸福の追求」という視点から見ると、「幸せの不追求（幸せを追求しないこと）が幸せにつながる」という考え方や態度は、受け入れがたいものだ、こうして「幸福追求の権利」は、いつの間にか一種の義務のようなものに転じてしまった、と。
「幸福の追求」が義務化した社会では、かつて多くの伝統社会で重要視された「節度」「控え目」「謙遜」「慎み深さ」「質素」「妥協」などの言葉で表される態度が、消極的であるばかりか、時には非道徳的でさえある、と見なされるようになる。逆に、今あるものや、持っているものでは満足しないことこそが「正しい」のだと多くの人が感じる。　Ｐ１８８－９

「幸せとは何か」という問いに、「幸せを追求すること」と答える。不思議なのは、現代人の多くが、こういう変な答え方を変と思わないことだ。

そこにはたぶん、ゲームに参加するような感覚があるのではないか。つまり、「幸せの追求」というゲームに参加するとなれば、幸せを追求していればいいわけで、その追求の対象である幸せとは何か、などと問う必要はない。

こう言ってもいいだろう。そのゲームで必要なのは「幸福を追求する」という「すること」であって、「幸福である」とか「幸福でいる」とかの、「であること」や「いること」ではない、と。　Ｐ１９０

――――　辞書で調べてみた。「広辞苑」によると、「しあわせ（仕合せ）」には、次のような説明語がならんでいる。めぐりあわせ。機会。天運。なりゆき。始末。幸福。好運。さいわい。
ついでに、漢字の「幸」を、「角川新字源」でみると、「わかじにせずにながらえることから、「さいわい」の意をあらわす」と書かれている。

確かに、幸せは、「追求する」ものではなく、どちらかというと、「やってくるもの」ものようだ。

「幸福を追求する」となると、目標とするレベルがきちんとあって、そこに達すれば「しあわせ」だというだけではなく、次のレベルの追求をしなくてはならない、というように無限に続く印象を受ける。物質的追求、便利さの追求でそうであることは、まわりの現実を見ているとわかりやすい。そして、かりに多少なりとも満足できるレベルに達すると、そこから落ちることを心配して、さらなる「幸福の追求」をしなくてはならない感じだ。

１０年以上前に私の退職をめぐってのおしゃべりで、こんな話を出た。年収１０００万円以上ある人だが、「まだお金が足りない」から、もっと働き続けなければならないとおっしゃっていた。私から見ると、お金をじゃんじゃんお使いになられる。「お金」をめぐる「幸福」には、無限のレベルがありそうだから、現実に「幸福」に達することはあり得ないようだ。一流会社では、常に利益追求をし、拡大していないと、競争に負けるという観念が通用しているようだが、この方の話は、それと同じだ。

なかには、「今の仕事以外に他にすることがない」という方もおられた。「今の仕事」しか「幸福」を味わうような生き方イメージをお持ちにならないのだろうか。だったら、それはそれでいいのだろうと思う。でも、その方は、「今の仕事はいやだから、できればやめたい」とおっしゃっていた。だったら、おやめになればいいと思う。

「幸福を追求する」、という以上に「幸福を追求しなければならない」という観念に囚われてしまっている人がごく普通になってしまった。競争的な「ゲーム」感覚なのかもしれない。

道徳の視点からいうと、現在の自分のありようを否定してより一層高いありようへと向上するよう、不断に努力をして、追求していくということだろう。

そうではなくて、「いる」「ある」ものとしての幸福というありようの提起は、すごく衝撃的であり魅力的だ。

私も、少しはその方向へと軌道修正することを始めたかなと思う。

２８．「新しさ」ではなく「親しさ」を

辻信一さんの「「しないこと」リストのすすめ」（ポプラ社２０１４年）に強力な刺激を受けて、紹介しつつコメントを書き込む連載を続けてきたが、ようやく残り３～４回となった。

次の指摘も、これまで、そして現在も隆盛を誇っている社会観人生観への強力なパンチといえるだろう。

「留まるな、動き続けよ」という要請が、ぼくたちをますます窮地に追い込んでいるのではないか。なぜなら、「留まること」を知らない者に、意味のあるつながりをつくり、育み、維持することはできないだろうから。留まることなしに、「共に生きること」は難しい。

「留まること」への恐怖は、「今、ここ」に対する軽蔑から生まれる。それはまた、時間とはひとつの方向に向かって流れるという直線的な時間観や、歴史というものが常によりよいものへ向けて進歩するものだとする進歩史観に基づいている。つまり、ぼくたちはみな、今よりももっとよい「いつか」をめざし、ここよりももっとよい「どこか」に向かっている、という観念だ。

こう考えると途端に、ぼくたちが生きている「今、ここ」の風景はしなびて、貧相に見えてくる。

Ｐ１５２－３

―――私も、「今よりももっとよい「いつか」をめざし、ここよりももっとよい「どこか」に向かっている、という観念」を長い間もってきた。そのことに気づいたのは、人生折り返し点になったころだ。

アメリカの農民作家ウェッデル・ベリーはこう言っている。これまでの科学技術文明の時代にもてはやされてきた知性とは、「新しさ」を追求し、「今、ここ」とは違う時間と空間ばかりに関心を寄せるものだった。しかし今我々が必要としているのは、「親しさ」の知であり、「今、ここ」にこだわる「留まる者たちの知恵」だ、と。

単純なことだ。動けば動くほど「共に生きること」はますます難しくなり、加速すればするほどつながりは壊れる。つながるためには、そして共に生きるためには、まずは立ち止まること、相手を待つこと、あるいは相手に「待ってもらうこと」、そしてその上でさらにしばし留まることが必要だ。相手が人間であれ、人間以外の生きものであれ、また自分自身であれ。もしぼくたちが「共に生きること」を人生の本質的な価値だと考えるなら、もう一度、その相手とおり合いのつくところまでスローダウンしなければならない。（中略）

「止まること」には時間がかかる。「留まること」にはもっと、「共に生きること」にはさらに時間がかかる。しかし、そもそもそんな時間を過ごすことなしに、人生は果たして生きるに足るものだろうか。ライフ－イズ－スロー、つまり、生きるとは本質的にスローなプロセスなのだ。

Ｐ１５３－５

―――「新しさ」ではなく、「親しさ」ということには強烈な印象をもった。私は「新しがり」だからだ。そして、「「今、ここ」にこだわる「留まる者たちの知恵」」「つながるためには、そして共に生きるためには、まずは立ち止まること、相手を待つこと、あるいは相手に「待ってもらうこと」、そしてその上でさらにしばし留まること」という文も含蓄が深い。

私だけではない。日本全体が「今よりももっとよい「いつか」をめざし、ここよりももっとよい「どこか」に向かっている、という観念」に溢れてきた。ゆったりしていることが魅力だとされる沖縄でさえ、戦後はそうした道を歩んできた。といっても、沖縄の「ゆったりさ」は惑わされつつも、なお生命力がある。

さらにまた、現在の社会のありように批判的な人でも、こうした観念に溢れている。そのためもあってか、今の私のようなゆったりした生活・人生の送り方に疑問のまなざしを見せていることを感じることもある。

私の生活・生き方・人生については、このブログなどでいろいろと書き綴っているが、もう少しわかりやすくまとめていくことが求められているのかもしれない。その作業に、本書はとても上等な参照文献となる。

２７．楽しい不便　情報量の減少をプラスに考える

以下に紹介する辻信一さんの指摘は、私の実感と重なる。とくに沖縄田舎暮らしを始めた１０年余り前からは、自分のことを書かれている気分にさえなる。

「何かが便利で楽になったせいで、もともとあった快楽が失われたり、人々の幸福度が下がってしまうこともよくある。ＧＮＰ（国民総生産）をもじったＧＮＨ（国民総幸福）を提唱したことで知られるブータンでは、現に、便利なものが揃っているはずの都市より、不便な田舎のほうがずっと幸福度が高いようだ。

もちろん、不便がいつも楽しいとは限らない。でも、「楽しい不便」というものがあることを知っておくのは大事なことだ。」　　Ｐ１１９

「時間を節約するためにコンピュータや携帯という便利を手に入れて、かえって忙しくなったりもする。育ち盛りの子どもに不用意に与える便利は、試行錯誤しながら学ぶという大切なプロセスを奪うこと。子どもに限らず、便利への過度な依存は、人間のさまざまな能力の低下や、アイデンティティや生きがいの喪失にもつながる。

だから、やっぱり、「楽しい」を「楽な」から区別しておいたほうがいい。「楽しさを便利と取り換えてしまわない」と考えるのがキャンプのようなアウトドアの遊びだ。（中略）アウトドアとは「楽しい不便」。不便と楽しさ、がそこでは裏と表のようにピッタリとくっついている。」　Ｐ１２０－１

―――コンビニもなく、「買い物難民」地図に出ている我が家周辺は「楽しい不便」にふさわしいかもしれない。死語に近くなっている「自給自足」がちょっぴり残っている。「不便」を厭う人は、那覇などの都市地域に移る。那覇と我が家周辺との中間地点に最近増加しているアパートに住む若者も多い。他府県から移住してきたかたの多くは、都市地区に住むが、「楽しい不便」が好きな方は、我が家周辺に住む。

それは、自然がいいだけではない。人々とのゆったりしたつながりを好むからだ。

「あの「ＫＹ」と言われる、空気が読めない人、いや、空気を読まない人になるのだ。「聞き流し」や「うわの空」といったメンタル・ブロック（心のバリア）を使ってもいい。とにかく使える手は使って、情報の洪水に対する堤防を高くする。まずはインプットの絶対量を減らすことだ。最初は、「知らなくていけないこと」を見逃しているようで不安だし、それでまわりに遅れをとるのではないかと心配にもなる。

でも大丈夫。情報の絶対量が減れば減るほど、あなたの心は冴えてきて、「聞かなければならないこと」や「聞きたいこと」が、「聞かなくてもいいこと」からますますはっきりと区別できるようになっていくのだから。

もちろん、時間もたっぷり節約できる。その時間を、あなたは本当に言いたいことを言ったり、本当に聞きた

いことを聞いたりすることに使えるようになるだろう。そして、お互い、「言わなくてもいいこと」や「聞かなくてもいいこと」をわきまえている大切な人々と過ごすことができる。そう、それは同じコミュニティに属する者同士ならではの、信頼に基づく本当の意味のコミュニケーションだ。」　Ｐ１３８－９

―――　前段は、そうだと思う。溢れかえるほどの過剰がある都市的生活から脱け出ると、メンタル・ブロックを使わなくても、情報量は激減する。加齢も、こうしたことを気楽に受け止められやすくしてくれる。ともかくゆったりなのだ。大都市から訪問者がいると、浦島太郎的気分になる。

それだけに、都市的生活に「気楽に」にグサッとコメントできることもあろう。また、情報量不足と感じたら、尋ねればいいし、調べればいい。その点ではインターネットは助かる。そして、週に１回ほどの授業での学生との付き合いも、私にとって、はやりの情報を得る上で、有用な場だ。

後段の記述は、そこまで「真剣」にならなくてもいいのではないか、という実感だ。「言わなくてもいいこと」や「聞かなくてもいいこと」なども雑然と混じっているのが、私の現状だ。それも、ゆったりと交わされれば、いつか意味をもつかもしれないし、もたないかもしれない。そんなことを気にせずに、コミュニティのなかでの付き合い・会話があるのが実情だ。そんな我が家周辺でも、コミュニティとのつきあいを好まない人もいるが。

２６．する　しない　しなくてもいい　テーゲー

長くなっているが、引き続き辻信一さんの「「しないこと」リストのすすめ」で共感し触発されたことだ。

「「ああすべきだ」とか、「こうでなければいけない」といったたくさんの強制で、ぼくたちの日常は幾重にも縛られている。それらにいつも対抗して、「あれもしない」、「これもしない」とがんばってばかりいては、しまいにくたびれ果ててしまう。

そんな時、「する」と「しない」の間に、「しなくてもいい」というオプションをそっと差し挟んでみるのだ。

たとえば、「肉を食べなくてもいいかな」と自分に問いかけ、「いいんじゃない？」と自分で答える。「しなければいけない」の反対は、「してはいけない」ではなく、「しなくてもいい」だ。当たり前とされていることの中に、「本当にしなくてはいけないこと」なんて、じつは、それほど多いわけじゃない。

「しなければいけない」を「してはいけない」で突っぱねる代わりに、「やっぱり、……しなくちゃだめ？」とまずは自分に問いかけてみるのだ。すると、「……しなくてもいいよ」という優しい声、が聞こえてくる。きっと。」
Ｐ１１０

―――オール・オア・ナッシング思考に浸されて、そこから脱け出ることに２０～３０年かかってしまった私には、とても同感される記述だ。

「しなくてもいい」ということは、別の言葉を使うと、「する」「しない」のどちらかで白黒つけるのではなく、ファジーのままにしておくということだろう。ウチナーグチでいうと、「テーゲー」だ。「テーゲー」を悪い意味で使う人もいるが、私はどちらかというといい意味で使う。私がすすめるワークショップでも参加者に、「テーゲー」で行くことを勧める。「ファジー」「てーげー」で保留にしておいてもいい。保留にしておいて、いつか何か

が生まれるかもしれない。生まれないかもしれないが。

「たとえば環境問題では、問題を解決するためにあれをしよう、これをしようという声は賑やかだが、何かをやめようという意見はあまり人気がないばかりか、「後ろ向き」だとかネガティブ・アプローチなどと非難されることもある。そして、そもそも「すること」の過剰が引き起こした問題に対処するために、さらにあれやこれやの「すること」を積み重ね、結局、問題をかえって増やしてしまう場合も少なくない。

どうやらその背景には、「すること」のほうが「しないこと」よりも優れている――さらに、「する」が「いる」よりも上等だ――という偏見があるらしい。「しないこと」リストをつくるというのは、こうした足し算モードから脱け出して、引き算モードへとシフトすることを意味する。それが足し算モードのままになっていると、がんばって「しないこと」リストを増やそうとしてまたストレスが増える、などという変なことにもなりかねない。」Ｐ１１２

―――なるほどと同感する。「肩の力を抜く」とは、こういうことかと思う。

２５．する　いる　がんばる　分かち合う　あきらめる

辻さんは次のように語る。

「今、ここ」の自分を丸ごと受け入れることができればこそ、明日の自分があるというものだろう。そして明日の自分を抱擁する用意、があればこそ、「今、ここ」の自分もある。こう言ってもいい――「今、ここを生きる」ということの真意は、「すること」だけではなく、「いること」を大切にしようとする態度だ、と。

現代社会は数々の否定の上に成り立っている。その中でも特に重要なのが、「今の自分」の否定であり、「いること」の否定だ。教育でもマスメディアでも「今の私は（少なくとも十分には）よくない」と思わせるようにぼくたちを仕向ける。そのメッセージはこんなふうだ。「君はそれなりにやっている。しかしそれで十分だと思ったら終わりだ。よりよい明日があり、よりよい未来の君があるのだから」

「がんばる」という言葉が異様なほどに多用されるのも、「今の自分」の否定と関係があるだろう。「今の自分」はこうして、刻々と、そしていつまでも、「すること」によって乗り越えなければならない存在となっていく。

Ｐ９０－９１

―――全く同感の話だ。私自身、１０～２０代のころ、「今の自分」の否定で生き、「がんばる」ことをしてきた。その後の３０～４０代でも、そんな色彩を濃く持っていた。しかし、２０年ほど前から、そこからの「卒業の旅」に出始め、今日に至っている。

そもそも仕事とは、社会に必要とされる「すること」の総量を社会のメンバーが分かち合って担うこと（ワークシェア）だったはず。その原点へ戻っていくべきなのだ。必要な仕事を分かち合うことになれば、ひとりがする仕事の量は減る。給料は減るかもしれないが、時間は増える。システムに奉仕するための「する」時間は減り、

自分のための「いる」時間や、家族やコミュニティとともに「ある」時間は増える。
　　Ｐ１０７

――「必要な仕事を分かち合う」　これこそが人間にとっての仕事イメージだった。少なくとも人類史のほとんどがそうだった。しかし「有史時代」以降、とくにこの１００年で「仕事」概念が変わり、「私有」「競争」の言葉が「仕事」と結合した。

「がんばって……」の後には、「する」が続く。がんばって仕事を終わらせる、がんばって残業する、がんばって業績をあげる、がんばって試験に合格する。どれも、「すること」のために普段以上の力が発揮される様を表している。こうして、「すること」の過剰が日々つくり出されている。
「がんばって……」の後に「する」は来ても、「いる」は来ない。「すること」の過剰は容易だが、「いる」ことの過剰というのはちょっと考えにくい。「がんばる」を合言葉にする現代日本社会とは、「すること～ばかりが重視され、過多となり、その分「いること」が疎かにされている社会だということが、ここからもうかがえる。
　Ｐ１５７

――過剰なのに、不足していると考え、過剰だと意識しないのが、現代の特質だろう。

「しないこと」リストをつくるにも、「すること」をあきらめることが必要になる。「すること」をあきらめるとは、それが「できない」、「しなくてもいい」、「しないほうがいい」などと明らかに認めることを意味するだろう。「すること」をあきらめないでやるにしても、それをする本人である自分の中にあるはずの弱さや限界を否認せずに、認め、受け入れるほうがいい。つまり、自分の能力に応じて、自分らしいペースで、ともに暮らす人々との居り合いをつけながら、「すること」のために［いること］を犠牲にすることなく。
　　Ｐ１６０

――「がんばる」ことから長期の「卒業の旅」に出て、ようやく今ごろ、ここに書かれているような雰囲気になかに自分を置くことに近づいてきた。「長かったなあ」――これが私の実感だ。

２４．しないこと　いること　死　農　医

今回も、辻信一「「しないこと」リストのすすめ」のなかの含蓄のある文を紹介しつつ、コメントしていこう。

「「しないこと」リストをつくるというのは、要するに、「いること」リストをつくることだと言ってもいい。人間は「すること」ばかりではなく、「いること」のためにも生まれてきたのだ、と。（中略）
「する＝幸せ」や「しない＝不幸せ」という思い込みを捨てて、今、ここに生きていることの幸せに気づくのだ。今まだ手に入れていないものに情熱を注ぐ代わりに、今、ここにあるものをいとおしみ、ありがたく思う。現在の自分への不満足や苛立ちをエネルギーにして前に進もうとするような生き方から、むしろ一刻ごとの満ち足り

た気分を淡々と積み重ねるような生き方へとシフトする。」Ｐ１９１－２

　　―――不足・欠如などを嘆き、それに対する不満などを原動力に頑張ってきた生き方を、人生前半期にしてきた私だが、「一刻ごとの満ち足りた気分を淡々と積み重ねるような生き方」へと、ほんの少しずつだが、シフトしてきた、この２０年間。そのシフトは、シフトしようとして「する」ものではなさそうだ。そうなってしまうという「いること」の「ありかた」へとシフトしているという変化のようだ。今の私は、１割ぐらいそうなってきたのかな。

　そのありようの究極ともいうべき死についての、次の文は含蓄が深い。

　「死んでもなお、死者として、あるいは霊魂となり、あるいは先祖となり、神となって、生き残った者たちの意識の中にズッシリとした存在感をともなって「いること」を続けるのだから。死者とは、「すること」の世界を抜け出て、「いること」に特化した存在だと言えるかもしれない。」Ｐ２０２
　　―――　死者は、後に残される人に、命令・指示・要求などを出さずに、「こんな人生を送った人です」と記憶だけを残せばよいのかもしれない。

　農と医に関わる、以下の指摘も興味深い。

　「「咲く」「降る」「赤くなる」「回る」はみな、「すること」や「させること」とは異質の、「なること」だ、（中略）
　さまざまな領域で、今、「何をするかより、何をしないか」という発想が重要性を増している。
　たとえば、耕さない、肥料や農薬を用いない、草や虫を敵としないことを特徴とする自然農。かつては自然の制約の中で、そのリズムに従って、生態系に寄り添うように地域ごとの暮らしのスタイルをつくってきた人間が、やがて新しい科学技術を梃子に自然の制約を取り除いて、逆に自然界をコントロールするようになった。そして、近代的な農業や畜産や養殖では、植物や動物という生きものを、「なる」ものから「つくる」ものや「生産する」ものに、「育つ」ものから「育てる」ものに、「大きくなる」ものから「大きくする」ものに変貌させてきた。」Ｐ２０７

　　―――私の畑は、「耕さない、肥料や農薬を用いない」などと、ここに書かれてあるような流れのなかにある。それは、畑をめぐる水・空気・微生物などの自然の流れをしやすいようにするということであり、そのなかで生まれる野菜・果物などを、循環の一環として享受し、その残り物を再び畑に返すという流れだ。

　「代替医療に詳しい上野圭一氏によれば、自然に花が咲き、雨が降るのと同じように、「治る」という現象が起こっていく。とはいえ、人それぞれの状態によってその力がなかなか働きにくいことがある。その時、専門家が援助し、補完することを治療という。つまり、「治す」という他動詞的な医療のほうが、本来は補完的な役割だったのだ。ところが、現在の近代医療の世界では、本末転倒してしまって、「治す」が主役になって、「治る」のほうが片隅に追いやられている。」ｐ２０８

　───無理な生活をして病気を作り、それを「治そう」とし、「治る」ことを抑えてしまう、という流れがあまりにも多い。自然の流れに合わせ、「治る」という結果をもたらす生活をすることが基本なのだろう。無理を蓄積してきた私は、人生後半期になってようやく「治る」型の生活の比重を高められるようになってきたようだ。

２３．する　いる　しない　休む

　前回に続いて、辻信一「「しないこと」リストのすすめ」を紹介しながら、コメントしよう。

「「する（ＤＯ）」の反対は「いるＢＥ」だ、と。とすれば、「しないこと」とは実際には「しないで、いる」ことであり、だから「しないこと」リストは「いること」リストに他ならない。

　（中略）この社会では、「すること」ばかりが前向きなこととして評価され、「しないこと」は後ろ向きと見なされ、疎んじられる、と。言い換えれば「すること」ばかりが重要視され、「いること」、まずそこに「存在していること」が軽視されているのだ。

　（中略）老子は教えている。ナスナカレ。「すること」を止めれば止めるほど、あなたは未来についての不安から自由になり、今ここにこうして生きて「いること」を、まるごと存分に楽しめるようになる．それが豊かさであり、幸せというものではないのか、と。」　Ｐ５４－５５

　───私の前半生の生き方は、「すること」の連続だった。そして、心身ともに疲労を蓄積し、人生半ばは、そこからの転換であり、その重要な場として沖縄があった。

「「休む」ということは、つまり、「すること」を休止し、「しないでいる」状態を保つこと。大雑把に言えば、休むとは「しないこと」だ。

　「すること」の多くは空間への働きかけであるのに対して、「しないこと」はその働きかけの休止を意味する。その休止によって、「する」は「いる」に転換する。空間との関わり方だけでなく、同時に時間との関係にも変化がある。「する」では、空間が主で時間が従だが、「いる」では、時間が従属的であることをやめて、いわば、中心に出てくる。（中略）

　「すること」が過剰なこの世界の中で、自然界は損なわれ、壊され、多くの人が疲れ、傷つき、困り果てている。」Ｐ１８１－２

　───沖縄でも、「すること」の過剰が進む。３か月余りの戦争時の巨大破壊とは形が違うが、戦後は基地建設と「経済発展」という形での巨大な破壊が、７０年にわたって進んできた。

「空間の拡張ばかりをめざすような生き方に歯止めをかけて、時間と空間とのバランスと調和を取り戻す新しいライフスタイルのことだ。「いること」と「すること」のバランス」　Ｐ１８３

「丸山（真男）は、「である」価値から「する」価値への重点移動としての近代化が、日本においてどういう形をとったかを次のように要約している。
近代日本のダイナミックな「躍進」の背景には、たしかにこうした「する」価値への転換が作用していたことはうたがいないことです。けれども同時に、日本の近代の「宿命的」な混乱は、一方で「する」価値が猛烈な勢いで浸透しながら、他方では強じんに「である」価値、が根をはり、そのうえ、「する」原理をたてまえとする組織が、しばしば「である」社会のモラルによってセメント化されて来たところに発しているわけなのです。（『日本の思想』）
丸山によれば、「する」社会へ向けて突進しながら、同時に「である」社会にこだわり続けるという、文明開化以来の日本人の行動様式における分裂が、集団的な「ノイローゼ症状」をもたらした。（中略）この病は軍国主義の日本では鳴りをひそめていたが、天皇制や「国体」という支柱が取り払われた後の戦後日本で、また「爆発的に」蔓延することになったのではないか、と丸山は見る。」　Ｐ１８４－５

―――沖縄でも「する」ことへの猛突進が展開してきたが、と同時に、「であること」「いること」を大切にすることも強力に生きている。そして、この両者の間のせめぎあい状況が続いている。それが、「集団的な「ノイローゼ症状」をもたらしているのかどうかについては、あらためて考えたいことだ。

２２.「しないこと」リスト　自由競争から退く

数ページ前の記事で書いたが、辻信一「「しないこと」リストのすすめ」ポプラ社２０１４年（２００９年旧版）は、共感するところ大の本だ。本書を紹介しつつ、触発されて考えたことを添える連載をしばし続けることにする。
　まず「しないことリスト」にかかわる個所だ。

「「自由競争」というのがこれまでの時代のキーワード。しかし、よく考えてみれば、これはじつに奇妙な言葉だ。なぜなら、社会そのものを競争の場と考える社会では、競争に参加しないという自由は、許されないか、著しく制限されるのだから。しかも、競争という一種のゲームに参加する者には、同じルールに従って、決められたゴールに向かうことが強制される。
その結果、私たちは大いなる不自由を抱え込むことを強いられる。
この競争という名の不自由こそが、現代日本人の不毛な忙しさの原因だろう。同じルールに従って同じゲームで勝敗を競う者たちの「すること」リストは、どれも似たり寄ったりの「しなければならないこと」リストになるしかない。そこでは、私の「すること」リストのほとんどは「他のみんながしなければならないこと」だ。」Ｐ３５

「必ずしも効率的に仕事をしようとすること自体が問題なのではないようだ。では何か問題なのだろうか？　それをめぐって競争すること。またその競争のせいで、せっかく節約した時間を、一向に「しなければならないこと」リストの外に、振り向けることができないこと。（中略）

では、どうすればいいのか。その答えは効率競争に歯止めをかけることだ、とぼくは思う。「すること」をめぐる終わりなき競争に、終わりをつくる。そのためには、まず、「すること」リストの横に、「しないこと」リストを置いてみることだ。

「しないこと」リストが、「効率」と「競争」に振り回されてきたこれまでの人生に代わる、あなたの新しい人生への入り口になるといい。（中略）

というわけで、「しないこと」リストをつくってみようではないか。」　Ｐ３７－３８

コメント１　「同じルールに従って同じゲームで勝敗を競う者たち」ということは、その人たちの人生そのものがそうなっている、ということに通じる。職場だけでなく、職場に送り込む学校がそうなってはいないのだろうか、さらに家族さえ、それを支えようとする例があまりにも多い。

私がいってきた「ストレーター人生」は、まさにそれそのものだ。そこには、自分なりの人生はない。あるいは個性はない。あるとしたら、「同じルール」のもとでの「勝敗」が作りだす序列位置の個性だろう。

コメント２　「しないこと」を人生レベルでいうと、自由競争から「退くこと」である。あるいは自由競争と「距離をとること」である。無論、現在の社会では、「自由競争」に多少はつきあわないと、必要な収入は得にくい。とすれば、必要なだけ得られたら、それ以上は付き合わないことだ。

それは、辻さんのいう「節約した時間」を、「しなければならないことリスト」には使わないことだろう。

コメント３　「しないことリスト」をつくり実行することは、自分の時間、そして人生を、自由競争が提供ないしは強制するありようから飛び出て、自分の意思・判断で、自分の時間・人生を作っていくということだろう。

コメント４　「しなければならいリスト」と「しないことリスト」との間の区切りをつくることは、「しなければならい」ことをするリスト時間に限度を設定することである。そして、それをきっかけにして、さらに「しなければならいリスト」そのものの再検討に入ることである。そして、自分なりの「人生創造」へと歩みだすことだ。

２１．職業と家事育児介護の区分対比の問題性

今回は、ａ職業とｂ家事育児介護の関係を考えてみよう。家父長制や性別役割分業の発想に強く影響を受けた人は、ａが主でｂが従だという発想に囚われている。そして、この発想は、昔から誰もがもっていた「不変」のものだと思い込みがちだ。

男はａで、女はｂだという家父長制に囚われた発想は、明治期に広がったが、それ以前は、士族社会では一般的だったかもしれないが、農民ではそうとは言い切れない状況が広く存在していた。夫は職場で妻は家で家事という性別役割分業は１９６０年代から広く見られるようになった歴史の浅い存在だ。

人類は長い間、まずは生存を支えるものとしてのｂがあり、そのｂの要請に対応するものとして、ａが分化してきたのではなかろうか。だから、男もｂを行ってきたのだ。ｂをする力量ということでいうと、近年になって、男はそれを弱めてきたと捉えてはどうだろうか。

また、ｂはやむを得ずするもので、できる限り減らすべきものだとする発想も根強い。近年の洗濯器や電気調理器などの家事向け機器の開発普及、レトルト食品の普及、また衣食住の外注化などもそれと結びついている。衣服を修繕して使うよりも、「使い捨て」にするなども、その例だろう。そして、ｂの簡便化で得られる時間を、生活のゆとりに使うよりも、ａの時間に振り向けることが多い。

私は、ｂの位置をａと比べて、より高めたいと思う。人生上やりがいのあることの重要な不可欠なものとしていきたいのだ。そして、ｂを楽しみつつ、やりがいのあるものとしての位置を再現したいと思う。そのなかで、ａとｂとを二分し対比する発想を少しずつであっても乗り越えていきたいものだ。

これらは、私自身の体験とかかわっている。確かに繁忙の中、ｂにかかる時間を減らしたいと思ってきた期間は長い。必要に迫られてｂをやってきたともいえる。だが近年、少しずつだが、ｂが楽しみ、やりがいを感じるものとなってきた。とくに、料理については長くそう感じてきた。それには、時間のゆとりが出てきたこともある。ゆとりが少なければ、そうはならない実情があるという点では、まだまだ不十分な位置づけに終わっている現状ではある。

私だけではない。高齢者には似た事情が多そうだ。男性向けの料理教室の賑わいぶりはその一例だろう。

経済の定常化ないしは縮小の時代は、こうした検討と多様な試行が求められているといえよう。

２０．職業と余暇・余生という二分論

前回述べてきたａ職業に重きを置く発想につながって、ａ職業と、それ以外のｂ家事育児介護、ｃ学習、ｄ趣味・休息、ｆ社会的活動とを対比的にとらえる発想が、広く見られる。とくに、ａとｄｆとを対比的にとらえる発想は、職業は有用なもので趣味・休息・社会的活動は有用とはいえないものだとか、金銭的収入を得られるものとそうでないものととらえることも見かける。後者はむしろ、金銭的支出を伴うものとさえとらえられやすい。そしてそれらは、『無駄で余計なもの』でできるだけ減らしたいものとさえ見られる。

そして、６５歳までを労働人口とみなし、６５歳以上を非労働人口と区別する発想も同じようなものだ。そして、社会保障予算の都合で、その６５歳の区分を引き上げようとする動きもある。

以上述べたような、ｄｆを余暇にするもの、あるいは余生にするものとして、ａ職業と対比的にとらえる発想が広く見受けられる。

だが、このように二分していいのだろうか。むしろ、前回述べたように、この両者を統合して活動として捉える発想にもとづき、そのなかの金銭的収入を得る部分を、ａ職業と位置付けるという発想が重要だと思う。

また、両者が入り組んで存在し、区分出来ないようなものも多いだろう。また、６５歳まではａで、６５歳からはｄｆだなどというものでもない。同じように、在学するときはｃで、卒業してからはａだという二分論もまた検討しなおす必要がある。

年齢区分をするとしたら、両者がすっぱりと二分されるようなありかたではなく、ａｃｄｆが同時並行的に進行するとか、重点が交互に代わるといった形が現実的だろう。そうできない時、たとえば６５歳までａに没頭してきた人が、６５歳になってどうしたらよいかわからないといった事態を生まれてしまう。

私がしばし滞在したフィンランドでは、ａ職業についてみると、数年間隔で勤務先や職場が代わり、その移行の際に、休息や学習のための長い期間があるとか、あるいは、５０代、さらには６０代までａｃが並行する事例を見受けた。　そして、学校→職業という区切りも高卒大卒という時点の一回だけでなく、複数存在するようだ。職業→学校という事例もある。

こうなってくると、人生ステージが、ａ職業の終了の６５歳で区切られるという形ではなくなってくる。６５歳よりは、身体や精神が使えなくなる時期まで、ａｂｃｄｆを行う時期として視野に入れる。そして、ａ職業を始める２０歳前後から、数年～１０数年間隔で数回以上の人生ステージを持つということになる。

私周辺で、脱サラしてフリーランスとか工芸とかで人生創造に挑んでいる人たちの人生イメージはこうした色彩が濃いように見受ける。小さな自営業を始める人にもそうした例は多い。こう書いている私自身もそういう類だろう。

こういった視点で、人生を捉えなおし、人生を創造する時代が広がっているように思う。

１９．多様な活動の中の一つとして職業を位置付ける

前回使った分類でいうと、ａ職業、ｂ家事育児介護、ｃ学習、ｄ趣味・休息、そしてｆ社会的活動を含めて，ｅ睡眠・生理的必要時間、ｇ戦争災害病気の二つ以外のすべてをくくって［活動］とし、［活動］のなかにａｂｃｄｆといったいろいろなものがあると考えてみるのは有効だろう。

ａを仕事のなかの収入を得る目的のものと規定してみると、そういう形になった歴史は意外に短く、１５０年あるかなしかだ。だから、ａ中心の 人が増えた職業中心社会ともいうべき今日のタテマエは、意外と歴史が浅い。

職業中心社会のなかで、働き過ぎつまり職業過剰依存状態の人が大量にいる。過労死とかストレス過剰で要治療状態になる人が続出していることが、それを示している。そこで、収入のための労働つまりａの職業に使う時間を、年間１５００時間以内、せめて２０００時間にしてみてはどうだろうか。

会社の指示命令で２０００時間以上になることを止めるようにするだけでなく、自分の意思でそうなることをやめてはどうだろうか。

豊かになることとは、ａｂｃｄｆ全体が豊かになることで、ａだけが豊かになることではない。ｂｃｄｆを豊かにするためにａをしていると考えている人が多いはずだ。そしてまた現実には、本末転倒になっていると悩んでいる人が多いはずだ。この問題を、近年ではワークライフバランスという言葉で表現しているが、私がここで論じているライフには、多種多様なものがふくまれているだけでなく、そのライフから生まれ、ライフに従属するものとしてワークがあるというぐらいに考えてはどうだろうか。

日本の現状を見ると、ａ中心の人では、ｃｆが少ない。性別役割分業意識に囚われた男性には、ｂも少ない人が多い。そしてａ過剰な人は、ｄｅさえ切り詰めている。結果として病気になり、ｇに時間がとられてしまう。

参考のために、私の現在の生活がどうなっているか紹介検討してみよう。ａは、収入の半分以上を年金に依存しているため、年間５００時間足らずだ。執筆や読書などの研究時間が多いのだが、それはａｃｄｆの混合で、合計１５００時間余りだ。ｂは、ｄの要素もある畑庭仕事も含めて、１０００時間ほどだ。ｃは研究時間のなか

に分類済だ。ｄは、畑庭仕事を除くと１０００時間になる。ｅは、４５００時間だ。ｆは、研究時間や職業時間に含めた部分を除くと、２００時間ほどか。ｇは、ゼロに近い。合計すると、年間の時間総計のほぼ８７６０時間になる。

働きすぎだった約２０年前は、ａとｃｆとが結び合っていたが、総計３２００時間、ｂが６００時間、ｄは、５００時間、ｅは４２００時間、ｇは病気がちだったので、２００時間ほどだ。働きすぎ時代と現在との違いは大きい。

職業中心社会、職業中心人生から脱け出た後に創造する人生は、ａ職業、ｂ家事育児介護、ｃ学習、ｄ趣味・休息、ｆ社会的活動、といった多様な活動の併存のなかで展開し、ａ職業はこれらの中の一つとして展開することでありたい。

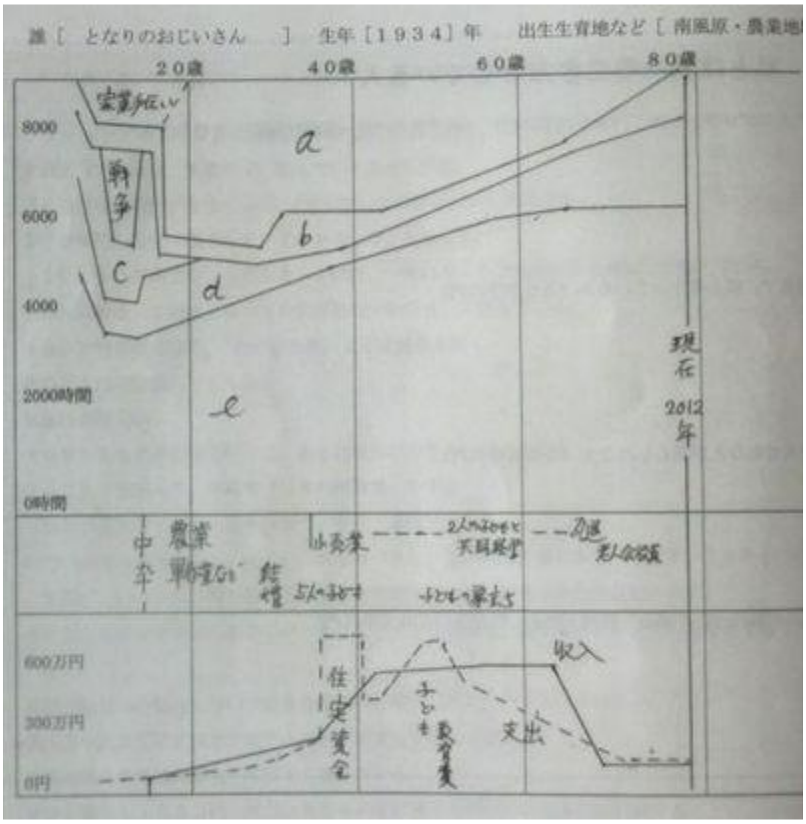
また、ａのありようについてみると、大量生産に対応したマニュアル依存型や流れ作業型受身型から、創造型物語型への移行が焦点となる。やりがいのある活動にひきつけた職業の創造ということでもある。ｆの社会的活動の一環としてａを行うという性格が強くなる。自営業にしても会社に所属するにしても、そうした業務へと変えていくということであり、労働者協同組合などは、そうした性格が濃厚だ。

それは、人生のなかで重要なものの一部分としてａ職業を位置付け、豊かに展開するということである。ｆとの違いは、生活費を見あう有給の業務であるか、無給ないしは有給ボランティアとして行うかどうかの違いになってくる。

ｂの家事育児介護にしても、個人的作業ではあるとしても、社会的に有用なものとみなしながら行う側面を意識するのだ。

１８．人生のなかで職業が占める時間は２割以下

私が行う定番のワークショッププログラムの一つに「〇〇さんの人生」というのがある。写真はその記入例だ。ワークショップ参加者が、どなたかにインタビューして作成してもいいし、自分自身のことを書いてもいい。３０歳の人なら、３０歳までは実際を書き、３０歳以降は「つもり」「希望」を書けばよい。書かれたものを素材に話し合いがすすみ、人生・生き方を考えるきっかけ・ヒントになることを願ってしている。２０歳前後の学生が対象の場合、親など年長世代にインタビューして、自分なりの人生を考えるきっかけになるだろう。



一年は、８７６０時間だが、それを、ａ職業　ｂ家事育児　ｃ学習　ｄ趣味・休息　ｅ睡眠・生理的必要時間のどれにどれだけ配分しているか、年齢の進行に沿った変化を、上段の欄にグラフにして記入する。

表の下段には、収入と支出の変化を記入する。表の中ごろには、卒業・就職・結婚・出産・引退などのエポックを記入する。

当たり前のことだが、ｅがとても多い。ａとｂとのいずれが次にくるかはいろいろある。このほかに、ａｂには分類できない社会的活動ｆや戦争災害病気ｇなども、分類項目に入れた方がよいかもしれない。

８０歳まで生存するとしたら、一生は、７００８００時間。そのうち、かりに２０歳から６０歳までの４０年間、ａに従事するとしたら、年間１５００～２０００時間で、６００００～８００００時間、年間３０００時間の過労死に至りかねない労働時間でも１２００００時間だ。人生の総時間のうちの１割前後、多くても２割には届かない。

ｃは、学校通学期間だけという人が多いこと、生涯学習・社会教育といわれながらも、現実にはとても少ない比率に抑えられていることが一般的だ。

ｂは、ジェンダーを如実に表わすことが多い。ｂには介護も含まれよう。

ｆは、近年とても少ないのではなかろうか。ボランティア、協同作業、政治的行政的な活動、地域行事、ＰＴＡなどへの参加、自主組織への参加などがあるのだが。これらが人生のなかに位置づいていない人がいるかもしれない。

ｇを想定していない人が多そうだが、意外に多い。災害だけでなく、入院とか認知症など要介護状態まで含むと、かなり膨らむ。

こうした多様なものが併存しているが、ａだけが人生ではなく、人生のなかの一部であることが分かってくるが、ａを人生の中心に考える人は多いし、そう見なすべきことが当たり前にされている。

このあたりを改めて考えるために、次回、これらのａ～ｇという分類について考えてみよう。

<特別>　辻信一「「しないこと」リストのすすめ」（ポプラ新書２０１４年）を読む

※　連載記事ではないが、連載の中で繰り返し取り上げたので、ここに加えておこう。

著者の本を読むのは、３～４冊目だ。刺激的であるし、共感するところが多い。そして、現在、このブログに連載している「生き方を変える・創る」と響きあい、交叉し合うところが多い。そこで、より詳しくは､その連載の中で紹介コメントしていくことにしよう。

ここでは、おおまかな本紹介にとどめる。

２００９年に出版された「スローライフのために「しないこと」」を改題、再編集したものということだが、私は、その本を読んでいないので、今回初めての出会いになる。

本の帯には、
「明日　できることは　今日しない。」
「「効率」と「競争」に振り回されてきたこれまでの人生に代わる「しない」という自由な生き方へ。」
「辻信一の「しないこと」リスト　　寝る間を惜しまない　食事に仕事を持ち込まない　人も自分も急かさない　新しいことは何も学ばない　必要以上に空気は読まない」
「「すること」リストから「しないこと」リストへ」、「あれもしなければ、これもしなくちゃ……。「すること」リストの増殖に際限はなく、あなたはいつもそれに振り回されている。しかし、「すること」ありきの人生は果たして幸せなのだろうか？　まずはその隣に「しないこと」リストを置いてみよう。あなたの人生に自由と生きがいを取り戻す、引き算の発想を伝える。」などと、
「それ何？」と感じさせる刺激的な言葉が並ぶ。
私も店頭でそれにひきつけられて購入したのだ。

著者は、スローライフの生き方を唱導し実践する人だ。私も私流のスローライフを１０年ばかり試行錯誤でしているが、著者はすでに２０～３０年以上実践し、相当に深い考えを展開しておられる。
ここで書かれていることを参照しながら、私の考えと行動に深みをつけていきたい。無論、置かれた位置、生活する場、生活史が異なるわけだから、異なるアプローチ、異なる課題意識、異なる実践形態になっている。その異なるところが、新たな実りを生み出すだろう。
それらを、私のブログ連載にも生かしていけるようにしたい。

１７．商品金銭過剰依存からの卒業

前回述べた過剰依存というのは、裕福な人だけの話ではない。お金に困っていそうな人にも、当てはまることがある。お金の使い方に慣れていない若いころ、月一回の収入があった時、すぐにたくさん使い、半月経つと残り少なくなり、最終週あたりになると、カップラーメンが中心の食事になる人がいた。
また、飲み物は、自動販売機かコンビニでの購入がほとんどだという人がいる。私の場合、卓球の練習・試合、長時間授業の時は、ペットボトル持参になる。ただし、我が畑で栽培したハーブのティーを入れる。外で買うのは、不足した時や持参を忘れた時で、１０％にも満たない。カナダにいた時、学生たちの多くは、マイ・マグカップ持参で、販売している飲み物を注入していた。
残念ながら、日本では、ペットボトルに依存している人が余りにも多すぎるのではないだろうか。このような過剰な商品依存状態はあちこちに溢れている。

収入にしても、年間１千万円以上というのは、過剰ではないだろうか。格差拡大の中で、２００万円以下の人が溢れているのだが、対照的に１０００万円以上の人もかなりいそうだし、増えているかもしれない。高度累進

課税だった以前では、かなりが所得税になったが、緩められて高額所得者の実質収入がますます増加する傾向にある。年間１千万円以上の部分は、寄付か税にまわすなどというアイデアはどうだろうか。

２０年近く前、私が大学で専任の仕事をしているころ、専任の高額収入分を、同じ職場の低額収入の非常勤講師の給与にまわしてはどうかと提案したが、相手にされなかった。時給換算すると、専任教員は、非常勤講師の数倍なのは、余りにも不合理ではないだろうか。格差拡大のこのごろ、ますますそう思う。

だから、過剰状態の見直しが必要だろう。そしてそれで金銭支出が減るだけでなく、環境負荷まで減るのではなかろうか。また、過剰な商品金銭依存をやめるとともに、物品（商品）を支配する（つまり管理活用する）力・技を高めることが重要だ。そのことで、商品に使われることから卒業したい。

まずは、商品購入前に、自前調達と商品購入との二つがあることを前提にして考えることだ。また、購入前に、すでに持っているものをダブって買わないようにチェックするとか、既存品を有効利用するとか、知人との融通を考えるとか、ベランダ菜園で自家栽培を試みるとか、物品管理利用のいろいろな技を高めることが有効だ。

硬い話になるが、フランスの社会学者のブルデューが、経済資本と並んで文化資本という言葉を作りだした。金銭依存の人は経済資本依存の人で、文化資本をあまり持っていない人だろう。物品を活用する力・技を豊かにすることは、文化資本を高めるということでもあろう。

収入を多くすることを目指すことが必要な人も多いが、物品を活用する文化資本を高めることが必要な人はもっと多いのではないだろうか。身近なことでいうと、急発進急停止をやめ、適度な車間距離を保ち、通常道路では、４０～５０キロで走行するというだけで、ガソリン消費量が激減する体験をしてみてはどうだろうか。私は、長年そういうタイプの運転できたが、ここ２年ほど、それをより一層徹底したら、さらに１０％減少した。このチャレンジは結構楽しい。

もう一つは、物品の共有・共同使用ということだ。経済資本・文化資本という用語と並んで社会資本という言葉があるが、わかりやすく言うと、人間関係資本だ。それが結構役立つ。共同購入・隣近所との余りものの交換・フリーマーケットの活用・図書館利用なども、その例だろう。

環境負荷を高めがちな経済資本の活用とは対照的に、文化資本・社会資本を高めることは、環境に優しい。経済資本の指標であるＧＤＰ，ＧＮＰばかり追いかけるのではなく、文化資本・社会資本にかかわる指標をもっと活用した「豊かさ」を追求してはどうだろうか。

別の記事で、広井良典さんの著作を紹介コメントしたが、そこで出てくるブータンのＧＮＨ（国民総幸福）という指標、そして高知のＧＫＨ、荒川区のＧＡＨなどがその例だろう。

１６．不要のものを買って商品に支配される

商品金銭経済の日常生活への浸透が進む中で、不要不急のものを買ってしまうことがよく起こる。店頭で思わず買ってしまうという衝動買いや、商品宣伝にのって買ってしまう、という経験を多くの人が持つようになる。お金が不足している人でも、「クレジットで買える」ということで、借金地獄に陥る人もいる。

そのきっかけにはいろいろあろう。実に巧みなテレビショッピングや通信販売などに乗せられて買ってしまう

ことも多いが、「○○さんが買ったから」「みんなが持っているから」「持っていないとみんなについていけなくなるから」といったことをよく耳にする。有用さ便利さなどを求めて買うことが含まれているかもしれないが、「他者についていく」「他者に負けないために」という心理が働いている。昔話かもしれないが、冷蔵庫・クーラーなどといった家電製品は、「他の家にもあるから、我が家でも買おうか」となった家が多いのではなかろうか。それを「流行」という言葉で説明することもある。

そんな風に、商品購入＝商品所有が、他者との競争と結びついていることが多い。そして、なかには、競争が自己目的化して商品購入をしてしまうことさえある。

教育「商品」でも同じようなことがある。「あの子が行ってるから私も行きたい」と、おけいこ事や学習の塾通いを親にせがむ子ども、逆に親の方が子どもに勧める例もある。

そうしたものなかには、「みせびらかし」の消費といえるものもある。商品所持と社会的地位・名誉とを結び付けることも多い。１０数年前、愛知県にいて自動車購入を検討していたころ、「大学教師の自動車は外車が当たり前なんだけど、こんな国産車でいいですか」といわれて目を白黒させたことがあった。周りの大学教師たちのなかで、「見せかけ」にこだわりそうな何人かは、確かに欧米製の高級外車を持っていた。

衣食住でも、過剰時代に入り、高級レストランで外食などいったことが広がってから、もう何年になるだろうか。最近のグルメブームなども、その傾向を含んでいるだろう。

数十年前には、小太りの方が裕福に見えるということで好まれ、痩せ型は貧乏の象徴だと見られたことがあった。さすがにメタボ問題が出てきた最近では、そういう感覚は減っただろう。逆に、ダイエットが流行になって、拒食症増加の一因にさえなっている。健康食品ブームも以上述べてきたような傾向を帯びている。

さらに、リスク回避のための保険商品購入にさえ、その傾向が見られる。また、老後資金には数千万必要という情報がばらまかれることさえあり、それだけの預貯金を持たない人を不安にさせたりする。

子ども・若者の進路をめぐっても、そうした例は多い。学業で好成績を収め、競争で勝ったことを自信・自慢にしている若者が、就職活動の時や職業に就いた時に、実際に必要とされる実力と、自分のもつ力との違いの大きさに気づき、自信喪失する例はよくある話だ。

こうしたなかで、商品によって作られたものを基準にして、あるいは商品所有の多い少ないで、自分自身を評価してしまう癖が染みついてしまうのだ。

商品氾濫のなかで、商品を見分け、商品をうまく活用する技が成長するどころか低下し、商品に支配される生活状態が広がってきたようだ。重要なことは、商品を支配する（つまり活用する）力・技をもって、それらを活用することで、生活を豊かにすることであって、商品に支配される人間になることではない。しかし残念ながら、商品化過剰の中で、そうした人が増えているようだ。

商品化過剰から卒業するために重要なことのもう一つは、他者との競争関係はりあい関係ではなく、相互依存関係を豊かにすること、それを促進する社会つくりをすすめることにかかわることだろう。その人間関係の中では、商品購入を競争的に促進するのではなく、むしろ商品活用の力量を相互に高めあうことが軸になってくるだろう。

１５．商品金銭過剰依存、右上がり成長への囚われ

前回までの自然との付き合い方から、経済との付き合い方へと、話題を移そう。

ここ１００～２００年の間、とくに、ここ５０年の間、人々は、金銭の形で収入を得、金銭による商品購入で生活する比重を劇的に高めた。今や、生活の１００％近くが金銭・商品で回っていると言える人々が、人類の多数を占めるようになった。

出産育児から始まって、日常生活、そして死に至るまで、ほとんどのことが商品購入の形で進められ、商品金銭依存が極度に進行し、商品金銭依存症といえるほどにまで至った。空気・水のように、生活をめぐるあらゆるものが金銭商品の形で存在することが当たり前であり、あらゆるものの価値も金銭で測られるという認識がごく当たり前のものとなっている。世界的規模から日常的生活レベルまでそうなってきたのだ。

そして、１９６０年前後から１９９０年頃までの経験から、経済成長し、そしてそれを背景に商品金銭使用で前年より物質的に豊かになることが当たり前と考えがちである。成長が止まったとしても、それは一時的なものであり、再び経済成長になると考える。また、経済成長させなくてはならないと考える。生活は前より豊かにならなくてはならないと考える。

だが、１９９０年代からは、そうした経済成長が長期にわたって止まっているのに、成長を追い求める思考は広く継続的に存在している。人々の思考も制度も経済成長にあわせて作られている、といっていいだろう。それだけに経済が止まっている現実との開きがますます広がっている。

その意味で、右上がり経済成長思考・制度からの卒業が求められてきている。にもかかわらず、政策的なバブルによって、経済成長を続けているような錯覚に人々を誘い、一層の商品金銭依存症を強め、慢性的危機どころか破局的状況さえ作られようとしている。膨大な財政借金がそれを象徴している。このままいくと、破局的危機がますます近づいていくわけだが、そのことを直視することを避け、破局と責任を後世に転嫁しようとしている。

そうならないためには、１９６０年頃以降の右上がり経済成長のありようからの卒業、さらには、１００～２００年前から始まった金銭商品への過剰依存を前提にしたありようからの卒業が求められている。

これらの時代は、「過剰」が覆い尽くした時代であった。不要不急のものさえ買い込み、「見せびらかしの消費」といえるものさえ広がった。こうした政治的経済的社会的な制度としての過剰、そして人々の暮らしレベルでの過剰にたいして、節度をもったありようを創造することが求められているのではないか。

過剰の時代は、年々ますます「豊か」になる人々を作りだす一方で、格差と貧困に苦しむ人々を大量に生み出してきた。それでもなお商品金銭依存を右上がり成長思考で追求することは、格差と貧困を拡大することになろう。

今日の生き方問題は、こうした問題にいかに対処するか、という問いと結びついていることが重要な特徴をなしている。

１４．自然に合わせる　自然に逆らう　自然と関係ない

人間は、採集狩猟経済→農業経済→工業経済・・・という道を歩んできた。そのことで、食に焦点をあてれば、飢えから解放され、日常生活で定期的な食事とそれにもとづく生活リズム・生活スタイルを確保できるようになった。同じことは衣住など、他の生活についてもいえることだ。加えて、便利さを確保向上させてきた。たとえば、運搬や移動にかかわる便利な道具を活用でき、また人間間の交流にも便利な手段を駆使できるようになった。

それは、自然のなかで、自然が「自然と」与えるものだけで暮らすのではない物質的豊かさを獲得させるものであった。そして、自然災害といわれる、自然が人間に与える脅威をも軽減させ、物質的に豊かな生活を回復させる力をもった。

それらの営みは、自然を「自然な姿」で維持するというよりも、自然に人間の手を加え、改変する営みであった。たとえば、森林地帯や干潟地帯を田園地帯に変える。あるいは、河川や海岸に堤防などを築き、人間と「自然のまま」の場との間に境界を作りもした。

そうした姿は、「自然に合わせて生きる」という面よりも、「自然を改変して、時には自然に逆らいながら生きる」という面を増大させるものとなった。そのなかで、「自然に抗する」とか「自然を克服・征服する」という思考が、ごくフツーのものとして通用するようになった。

そしてさらには、自然と直接にはかかわりが見えないようなありようが広がる。工場生産は、そうした性格を強く持っている。また、金銭・商品への過剰依存状態のなかで、たいていのものは、金銭による商品購入、そして、労働の対価としての金銭受け取りで、日々の生活が回っていくようなイメージを強くもつようになる。

さらには、人間関係もまた、商品としてのサービスの売買と結びついて展開する比重が高まる中で、金銭や商品との関係なしには人間関係をイメージしにくくなってきている。そうしたところでは、人間関係が自然との関係をも持つというイメージは希薄になる。人間関係が商品生産販売消費のなかに組み込まれがちになっているのだ。さらに情報化時代といわれるなかで、ヴァーチャルな人間関係が広がる。たとえば実際の人間関係よりは、ＳＮＳでのヴァーチャルな関係に振り回される若者・子どもが広がっている。

こうした傾向は、まずは長期間にわたってゆっくりと展開してきたが、産業革命以降、とくに、ここ２０年余りの期間では、急激な進行というべき事態が一般的に見られるようになってきた。

「自然に合わせる」と「自然に逆らう」動きとは併存してきたのだが、今では「自然に逆らう」どころか、「自然の存在」への感覚自体が希薄になり、「自然とは関係ない」という状態になりつつある。

そこに突然かのごとく出現する自然災害が、人々を驚かせる。同じような事態が戦争にも見られる。科学兵器化が進行するなかで、また情報統制が進行する中で、戦争が遠い世界のように、あるいはゲームのように感じる傾向さえ強まっている。ところが、突然、戦争ないしは戦争的なものが、人々を襲い驚かせる。

こうして、人々の生活・生き方にかかわる自然との関係、さらには人間関係のいずれもが抽象化し、自然とは関係がないと思い込み、金銭・商品売買によって、人生・生活が進んでいるかのごとき事態が蔓延するようになった。

さらに、自己の身体が自然存在であることを忘れ、商品売買の営みの対象のような身体が広がっている。売薬やサプリメントへの過剰依存や「健康産業」の繁栄がそれを象徴しているようだ。

１３．自然の流れと波長を合わせて生きる

昔から長寿志向は存在したが、今日では西洋医学の発達と人々への「指導力」の強まりのなかで、寿命の伸びが進行しており、そのことが西洋医学主導の長寿志向を生み出しているとも言える。よく言われる延命措置もそうだろう。身体にいくつもの管を取り付けて生命維持を続けるのがその例だろう。

あまりに過剰なそうした措置に対して、尊厳死の考え方が強まり、胃ろうなどの措置を止める動きも広がっているようだ。また、「健康寿命」という考え方も広まっている。

といっても、アンチエイジングという発想はごく一般的だ。私は、エイジング（加齢）に抵抗（アンチ）するのではなく、エイジングを受け入れることが重要だと思う。自分の身体が置かれた条件の範囲内で、ベストを尽くすことが重要だと考えたい。自分の体をいたわりつつ、自分の体相応の行動をとるということだ。

加齢は、身体を弱めていくが、対照的に人生経験の積み重ねによって、人間的に熟していくということでもある。熟することを多様な場面で活かしていくことが重要だ。

そして熟しながら、死に至る流れを受け入れていくのだ。

こうしたことは、自然の流れである。自然としての自己の身体の流れを受け入れ、それに寄り添っていくと考えたい。

ところで、実年齢に比べて年少に見られることと年長に見られることと、どちらを好むだろうか。圧倒的に年少に見られることを選ぶ人が多いだろう。だが、それは近年の社会的動向の中で作られたステレオタイプのような気もする。若く見せるための化粧品・サプリメントなどが大量販売されている。

だが、若く見られるということは、人生経験不足で未熟だと見られることかもしれない。むしろ、年長に見られた方が、人間的に実年齢以上に優れたものをもっていると見られるからかもしれない。そう思うと、年長に見られる方がいいことかもしれない。年長に見られるほどでもなく、年齢相応に見られることが妥当かもしれない。

私個人は、１０代後半から年長に見られっぱなしだった。２５歳の時に、４０歳に見られたこともある。最近は年齢相応に見られることが多い。といっても、人生後半期になると、見かけ年齢に一喜一憂するよりも、その人なりの個性があることのほうが重要なように思う。

以上述べてきたことは、自然の流れに寄り添って、自然の流れと波長を合わせて生きる、ということである。

自然の流れを単にモノ・コトとして捉えるのではなく、「生きている」ものとして捉え、自然の存在と自己の存在（人生）とを一体化して捉えるということでもある。

食を例にとろう。可能な限り、収穫直後のものを、加工や調味料添加をできるだけ少なくし、素材の良さを取るという考えを取りたい。発酵食品なども、生きているものを取るという考えでもあろう。

生活リズムも、できる限り、自然の明暗などの波長にあわせたい。身体運動は、長年の人類の流れに基づいて、自然と響きあうものにしていきたい。

ストレスについても同様である。自然が感じるストレスと同調するようなストレスを中心としていきたい。

人間関係形成も自然の流れと結びつけることが重要だろう。その点で、コミュニティという言葉が持つ、自然的な条件、特に地理的条件を示唆するものを大切していきたい。そして、自然の流れと同様の流れの中で、多様

な世界との交流をつくり、人間関係を形成していきたい。その点では、数万年かけてアフリカから世界各地へと移動したホモサピエンスのありようを継承したい。

話が広がりすぎたようだ。

１２．自己治癒力と医療

西洋医学を中心とする医療の発展が医療依存を強めて、自己の身体の運用管理力を高めるよりは低めているようにみられることは残念なことだ。豊かに得られるようになった医療情報や医療支援を生かして、自己の身体の運用管理力を高め、さらには自己治癒力を高めるというのが、基本の道筋ではなかろうか。

たとえば、健診での検査で、自己の身体での情報をえることで、自己の身体の運用管理がどうなっているかを知り、必要な措置をとっていくという道筋が本道だと思う。だが、それよりも健診情報をもとにした医療措置のほうが優先される状況がある。健診データの多くは、本人が読み取ることが難しく、医療機関に読み取り判断をゆだねるようになっている。データが専門用語で書かれているので、やむをえないといってしまえば、それまでだが。

最近では、データが本人にも渡されるようになっているが、その読み取り方、活用の仕方を習得しなければ、宝のもちぐされになる。

なかには、データ情報を知らされてもどうしようもないものもある。例えば、私は、善玉コレステロールの値が低すぎるという健診結果が毎年のようにでる。ではどうしたらいいのか、と医師に聴いても、書籍を読んでも、その対処策はほとんどでてこない。悪玉コレステロールの減らし方情報はあふれるほどあるのと対照的だ。なかには、悪玉コレステロールの減らし方情報で、善玉コレステロールの増やし方の代用をしているものもある。

また、日本の医療機関は検査のやりすぎだとよくいわれる。医療費抑制という点でも、あるいは検査による身体のダメージを抑制するためにも、検査のやりすぎを避けることは重要なことだろう。ＣＴスキャンなどは、画像診断で大変重要な役割を果たすようだが、放射線量が多いことをはじめ、身体の負担も多そうだ。

いずれにしても、本人自身の身体管理運用力を高め、自己治癒力を高めるためにどうしたらよいかに一層の力を注ぐべきだと思う。それと並行して、医療や検査など医療的支援が活用されるべきだろう。

私が一番気になるのは、働きすぎなどで、自分の身体と精神を過剰にいじめていることに手を付けずに、過剰に、健康ドリンク、アルコールそして医療に依存することが目立つことだ。

自分の身体ではどのくらいのどのような働き方がいいのか、ということを自己判断とコントロールできるような力量をいかに育てるのか、という問い方が重要だろう。

こうしたことを考えると、軽い病は、身体が発する注意信号だととらえ、身体の管理運用能力の向上のきっかけにしたい。

たとえば、風邪にかかった時、体力低下抵抗力低下はないのか、温度管理を含めて生活上の問題はないのか、疲労蓄積などの働き方暮らし方の問題はないのか、と探りたい。

安易に投薬に頼るよりは、休息と栄養摂取による体力回復をもとにした自己治癒力向上で対応することを基本にしたい。たいていの人は、そうした注意信号的な軽い「持病」をもっている。それを自己治癒力向上に生かしたいと思う。

こう書いている私自身、このような捉え方をするようになって、１０年になるかならないかぐらいだ。それ以前は、頑張りが足りないと、自己に鞭打つ感覚で、身体と付き合っていた。１０年前までは持病をいくつも抱え、毎年数回３９度以上の発熱を繰り返していた。最近になって、ようやく自己管理ができるようになり、ここ３年ほど、桜島の火山灰を吸い過ぎた時以外は、発熱していないという画期的なことになっている。

１１．自己の身体という自然　自分自身で運用管理する身体

自分の身体もまた、自然の一つだ。自然のなかのメンバーとしての身体があるともいえよう。

この自分の身体を管理運用するのは、自分自身であるという点で、大変特徴的な存在だ。無論、胎児期乳幼児期には、接している親をはじめとする他者による管理運用の比率が高い。最近の流行言葉でいうと、ケアされることを多分に含む。しかし、年齢を重ねるなかで、自分自身の意思判断で管理運用する比率が高くなっていく。

今回は、その自分の身体が不調にあるときに、どう対処するか、あるいは不調に陥らずに、適切に生活・行動するために、どうするかということに焦点をあてて、自分の身体という自然への対し方を考えてみよう。

百年以上前に、西洋医学が伝えられ、普及し始める以前とそれ以降では大きな違いがある。

それ以前では、自分自身と身近な人々によって対処が行われた。医を業とする人にかかるのは、限られた人だった。近隣に、その方面に詳しい人がいて、その助言にもとづいて、薬草や灸などのいわゆる民間医療を活用することもあったろう。なかには、祈祷師に依頼することもあったろう。

そうしたなかにあっては、自分自身の日常的な管理運用が重要であり、「養生」と呼ばれたりもした。したがって、自分の体のことは自分自身が一番知っている、といえただろう。そして、身体にいい食とか薬草とかについての知識は、当時の常識であったろう。集落から離れた山野で怪我をしたときの応急措置なども常識だったろう。

西洋医学が入ってくると、西洋医学以外の医術的なものは、隅に追いやられ排除さえされ、西洋医学が医についての独占的位置を確保する。医と国家権力が結合したとさえいえるかもしれない。西洋医学によって追いやられた東洋医学・漢方・針灸・マッサージ・民間療法などが見直され、ブームに近い状態になるのは最近のことだ。

西洋医学の独占的といえるほどの高い位置が見られるのは、欧米諸国と比しても異常なほどである。私が１９９９年に１年間滞在したカナダなどでは、多様なオールタナテブ（代替）医療が、健康保険で支払われる医療費の半数以上を占めることを示すグラフが医療機関に掲示されているのを見て驚いた。街中には、針あん摩など代替医療の広告があふれていた。

日本では、医師は高い位置に置かれ、医師の命令は絶対的なものとして受け止められる状況さえ作られた。医師がよく説明をして患者の同意を得るという、インフォームド・コンセンサスがいわれるようになったのは、ごく最近のことだ。

そうした中で、人々の間には、医師や薬などへの絶対的服従に近い姿勢が作られてきた。それは、医師や薬へ

の依存ともなる。処方された薬だけでなく、売薬の使用で、薬漬けの例が珍しくなくなる。ＮＨＫに、若い研修医が参加して、症例を検討し、病名を当てる「ドクターＧ」という番組がある。その最近の番組で、１０近くの医療機関に通院し、多種の薬を処方された患者の例が出てきた。診断は、多種類の薬を飲むことによって生じる症状であった。一つ一つは、ごく普通の薬なのだが、それらが折り重なって、新たな病気を作ってしまったのだ。

こうした西洋医学への過剰依存とも言うべき事態が広く見られる。そのなかで、何か一つの症状があれば、それに対処する薬を使うことが一般化し、全体としての自分の身体に対応するという視点が弱まる。医師も専門分野の中に閉じこもりがちで、個々の症状に対応した処置が中心となり、人間全体を見渡した医療行為から遠ざかりがちだ。

１０．自然共生型と自然活用型

前回２つの自然観について書いた。人々誰しもが、片方だけでなく２つの自然観を同時にあわせもっている。といっても人によって、どちらに比重をかけているかで大きな違いが出てくる。

かつての自然共生型自然観にあっては、自然は単なるモノではなく、そこには命があり、時には神が宿り、人間はその自然＝神に従って生きていた。宗教も自然を起原とする要素が高かった。自然は畏怖すべきものであり、祈らなくては人間存在を認められなかったのだ。祈ることで、自然＝神の許しを得て、自然の恵みを受けてきた。その意味で、自然活用型をあわせもっていたのだ。そこでは、自然万能ともいうべき捉え方も存在していた。そこでの生き方は、自然に従って生きることが大前提だった。

そのころは、自然共生型自然観の比重が自然活用型よりもはるかに高かったが、歴史が下るにつれて、自然活用型の比重が高くなっていく。農業成立以降、とくに産業社会の成立以降、それを人類史の時間でいうと、１％にも満たない期間であるが、自然活用型へと大きくシフトしていく。

そして活用どころか自然を克服征服の対象としてとらえ、自然との闘いを演じ、自然活用を越えて自然収奪ないしは自然搾取、自然破壊を展開するに至った。それらがかえって、温暖化・オゾン層破壊、原子力による自然破壊人間破壊に至り、人間存在さえ危うくする段階に至りつつある。

そのなかで、科学技術が、自然認識を深めるにとどまらず、自然との闘いに不可欠の武器となるだけでなく、自然破壊として機能することが目につくようになってきた。そうした趨勢が、人々の生き方における自然観を自然活用型（≒自然収奪／自然搾取／自然破壊型）が圧倒的に高い比重をもつようにしていく。いまや自然共生は、「癒し」のなかで語られるようにさえなってきた。

その点で、再び自然共生型自然観が優位に立つような生き方の模索がなされ広がりつつあることは注目される。それは、レクリエーションや余暇活動として、自然が豊かにある場に赴き、自然との共生を味わい「癒し」を得るというレベルを越える探求だ。現段階では、模索・試行錯誤的ではあるが、自ら生活する場で、自然の回復をはかり自然共生を少しでも実現するような生き方を尊重し拡大するようにする日常的な営みが広がりつつある。

身近なこととして、家を建てて新たに生活を始めることを例にして、考えてみよう。

・木を伐り、斜面を削り埋め戻したりするような宅地造成をやめるかできる限り減らす。海や池の埋め立ては避ける。
・建物周囲の自然をできる限り残す。家を建ててから植林するのではなく、既存の自然をそのまま残す。自然に溶け込むような家にするのだ。
・建築資材調達にあたっては、自然破壊につながるものを避ける。
・風通しや遮光などを考えて建物を作り、居住後のエネルギー過剰使用を避ける。
・建物周辺の過剰な舗装をやめ、緑で覆うようにする。
・生活リズムを、日の出に合わせて起床するなど、自然の流れにできるだけ沿うものにする。
・近隣の人々とつながり、人間関係を豊かにして、共同で自然を保全しつつ自然を享受する。
アパートやマンションを借用する際の選択にも、同じような発想を持ちたい。

今は、住を例にしたが、衣食をはじめとする日常生活のあらゆる面で自然との共生を追求していきたい。こうして、自然活用型よりも自然共生型の比重を高くするようにしていきたいものだ。

９．標準依存症からの卒業　自然との関係

前回述べた「みずから生き方人生を振り返りつつ、みずから修正創造していく」という「再帰的個人」は、何かの権威ないしは権力が指示するモデルとか標準とかに従う個人とは対照的だ。だが、「自己責任」を強調し、その結果を数量的に管理しようとする動きが強く存在することを見ておかなくてはならない。結果的には「あやつられていた」ということになりかねないのだ。
そうした動きは、個人を他者から切り離し、「自己責任」で処理していくことを求める。そのために、各個人がもつ独立志向が孤立志向に陥る危険があることを見ておく必要がある。他者との関係で、心理的な気づかいが強まり、時には心理戦争ともいうべき状態になったりする。受験競争などは、そうした色彩を濃くしている。
私が期待したい「再帰的個人」は、権威権力から距離を置き、既定のモデルや標準に依存して生きていくのではなく、人生・生き方を創造活動として展開する人であり、かつそれを多様な他者との共同関係のなかで築きあげていく人だ。

とはいっても、今日の標準は、実に多様な分野で設定されており、無意識のうちに従っていることをしばしば見かける。標準に依存していることに気づくことだけでも、大きな出発になる。
そうした標準にしがみつき、標準依存症ともいってよい状態から、どのようにして卒業していくかが、今日の生き方・人生の大転換の中心的なテーマになっているといえよう。
こうした多様な分野について、これから見ていくことにしたい。
それについて述べる前に一点。
１９６０年代の大転換は、学校から職場への移行という「青年期」に焦点化して、生き方人生問題を話題にしたことに特性がある。あえて加えるなら、当時５５歳ないしは６０歳であった定年という区切りと「老後」につ

いて話題にした。

対照的に現在進行中の大転換は、青年期、さらに「現役世代」、そして、「高齢社会」といわれてスポットライトを浴びている老年期などをはじめとして、どの世代にあっても話題になるという特性がある。

では、標準依存症から卒業しつつ、多様なつながりをつくりつつ、生き方・人生の大転換を、どのように果たしていけばいいのだろうか。

最初に、自然との関係について考えていこう。

人々の自然観には、対照的対立的な二つがある。その一つは、自然の猛威と闘いつつ、無尽蔵に近い自然資源をいかに活用するかに、人々の叡智を傾けようというものだ。対照的対立的なもう一つは、人々に豊かなものをもたらす自然を壊すことを慎むだけでなく、これまで人間が壊してきたものを回復する営みをしつつ、自然と共生して生きようとするものだ。

別の表現を使うと、自然を消費の対象とみるか、それとも人間を自然の一員として捉え、自然が自らを維持する営みのなかに参加するものとして人間自身を位置付けるか、でもある。

農業社会は、すでに自然を改変する営みであったが、動力を使用して、自然を桁違いに改変してきた産業社会は、自然の危機さえ作りだした。「持続可能な」というスローガンが使われるようになったが、それは、自然が人間の営みで「持続不能」な事態が続出してきたからである。にもかかわらず、自然の持続可能というよりも、「経済成長の持続可能な」というものに著しく偏った動きが展開してきたのが、「持続可能」という言葉が盛んに使われるようになったこの２５年間の現実だ。

８．現在進行中の大転換　「自己責任」「再帰的個人」

現在進行中の生き方人生の転換は、１９６０年代における転換に匹敵する、ないしは、それ以上に大きなものだろう。

１９６０年代における転換は、「標準」が設定され、それに合わせることを求めるものだった。それに対して、今回は、多様な生き方人生があるだけでなく、個人おのおのが、みずから生き方人生を選択創造することを求めるものだ。

それを、「再帰的個人」と表現することがある。みずから生き方人生を振り返りつつ、みずから修正創造していくという意味においてだ。その際、他者との関係を豊かにしつつ展開するのか、それとも、他者への依存をできるだけ避けあくまでも自己責任において展開するのか、ということでの違いがある。後者の意味で「自己責任」ということが流行語にさえなっている。

別の言い方をすると、自分の生き方人生の選択創造を権利に力点をかけて考えるのか、それとも責任に力点を置いて考えるのか、ということでもある。

さらに、国家や自治体などを個人の生き方人生を支え保障するものと考えるのか、それとも個人には介入しないものと考えるのか、ということでもある。後者は、個人の自己責任を強調して個人に介入しないとはいっても、

結果として「個人責任」を果たしているかどうかを問うという形で「間接統治」のような形をとる。それとは逆に、前者は、個人が自分なりの生き方人生を選択創造していけるような保障体制を、国家自治体が講じることを求める。
新自由主義的なありようと福祉国家的ありようとの違いとも言えよう。国家自治体からの教育費福祉費支出を可能な限り縮小し、個人の負担に応じた教育福祉を受け取る体制をとるのと、一定水準の教育費福祉費を国家自治体が支出するのは当然とし、その支えを前提として、個人が生き方人生を選択創造していくのとの違いだ。

こうしたことは国による違いが大きい。教育を例にとると、義務教育段階だけでなく大学まで教育費が無料である国がある一方で、個人が出す金で教育が大きく変わる国がある。後者では、個人の自由といいながら、実は「金次第」、個人の財政力の差異で教育が大きく変わる。生き方人生がうまくいくかどうかは、金を出すかどうかの個人責任ということになるのだ。
日本では、国が支えてきた要素が多分にある標準コースに乗っていけば、「幸せな生き方人生」ができるといわれて、多くの人もそう信じてきた１９６０年代的ありようが崩壊し、自己責任的ありようが急激に拡大してきた。学校を軸とする標準コースが、進学就職を保障してきたこれまでのありようを大きく変え、個人責任を強く求める方向へと移行してきている。キャリア教育といわれるものも、そうした要素を多分にはらんでいる。
だが、「そういわれても」、ということで、人々は困惑し、まだ残ってはいるが「狭き門」になりつつある「標準コース」へと殺到している。結果的に、自己選択といわれながらも、標準コースに依存する傾向が依然として強い。再帰的個人としてやっていける社会的な支えが弱いなかで、個人としてもそれをやり通せる構え・蓄積が弱いといえよう。

７．（続々）１９６０年代高度経済成長期の大転換と次の大転換

１１）女性のなかには、８）９）で述べたような家族で、妻の役割を取り夫を支え、子どもを世話・教育する役割をとることが標準化され、実際そういう人が増えていく。と同時に、正規雇用にしろ非正規雇用にしろ、被雇用者になる女性も増加していく。

１２）選択ないしは創造としての家族という要素が高まっていくなかで、核家族ではない家族形態も作られ、離婚などによる家族再編が広がると同時に、「母子家庭・父子家庭」という用語が広がるなど、単親家族の不利さが作りだされ表面化していく。

１３）寿命の伸びのなかで、高齢になり職業生活から抜けた場合の生き方・生活の仕方が、例外的に長寿である人の問題ではなく、ごく一般的な問題として登場していく。

以上述べてきた１９６０年代高度経済成長期の大転換のなかで、日本経済は「ジャパン・アズ・ナンバーワン」とよばれるほどになり、「先進国」のなかでも「上位」を確保する。それを生み出し支えたものとして、日本の人材つくりが称賛され、日本の教育が発展途上国のモデルとされるまでに至る。そして、こうしたありようと結び

合った人々の生き方・人生が標準化され、例外を許さないようになっていく。そのなかで「落ちこぼれ」「不登校」あるいは「人生の落伍者」「人生の失敗」といった言葉が広がる。

　そして、県民所得最下位とされた沖縄県は、他府県並に追いつくことが、経済面だけでなく人材育成つまり教育においても「至上課題」となり「学力向上運動」が盛んになるのは、１９８０年代半ばからであった。

　ところが、事態は１９９０年代に入って大きく転換していく。世界的転換といえるほどのものであった。そのなかで展開される生き方人生のありようをめぐって日本では、創造的に転換をはかるというのではなく、そうなってきてしまったという受身的性格が強く、模索ないしは混迷状況が広がる。

　そのなかで、１９６０年代型生き方を享受できるものが漸減し、そうでないものは漸増し、両者の格差が広がり鮮明になってくる。

　世界的に見ると、１９８０年代に見られた日本の大量生産大量消費型の産業形態や、それをモデルにした教育のありようは、途上国中心のありようとなり、労働賃金の安い途上国に日本は対抗できなくなる。そのなかで、国内では賃金が相対的に安い沖縄にそうした産業の一部が移転してきて、沖縄は途上国的様相を呈し始める。教育についても同じことが言えそうだ。

　それまで「先進国」レベルにあった国々も、その国の条件に対応した転換を模索し始める。その模索を主導するのは、新自由主義であり、またＯＥＣＤであった。ＯＥＣＤが実施するＰＩＳＡテストは、先進国の教育の大転換をもたらす。また、従来の福祉国家的政策を継続するのか縮小するのかをめぐって、国々の違いがめだってくるが、福祉国家的性格が弱い国では、「自己責任」が強調され、人々の生き方人生のありように強い影響を広げていく。

　こうして、１９９０年代以降の生き方人生をめぐる大転換がスタートした。

６．（続）１９６０年代高度経済成長期の大転換

　前回に続いて、１９６０年代高度経済成長期の大転換について書いていく。なお、沖縄の場合、基地経済などとのからみがあって、時期的にかなりずれる面をもっていることに留意しておく必要がある。

６）子育て・教育の最大目的が、卒業後ただちに、より高い収入が予定される企業への就職で成功を収めることに絞りこまれていく。企業では、整備された年功序列システムで、可能な限り出世することが標準化されていく。そして終身雇用制のもとで定年まで勤め上げることが標準化される。私が１０年ほど前に作った言葉であるが、ストレーターコース、つまり、できるだけ「いい」高校→できるだけ「いい」大学→できるだけ「いい」会社→出世→定年というコースを歩むこと、というよりも走ることが標準とされた。

　沖縄の場合、そのコースを用意できる大企業が少なく、会社の代わりに公務員・教員になることがコースの理想に位置づけられる。

７）居住地の近くに職を得られない時は、居住地を離れて、都市ないしは都市周辺の企業への就職を求める。農村から都市への大移動が起きたのだ。それは、農業を中心とする自営業から被雇用者に移るという職業移動が起

きたということだ。そして、どういう職につくか、どういう会社に入るかが、生き方・人生にとっての最大テーマの一つになる。

８）家族のありようもそれらに合わせてつくることが標準化されていく。典型的には、会社務めの夫、それを支え、家事・子育ての役割を担う専業主婦と、子ども２名内外という核家族化が標準化される。

９）核家族のなかで、家族の教育機能は劇的に低下し、学校が求めるものを下請けのようにしてすすめるのが、家庭教育だということになる。また、学校に限らず、商品のように用意される教育機能を子どもに与えていくことになる。これらに熱心な家族が「教育家族」、くだけていうと、教育ママ・パパになる。
　子育てには金と時間がかかるようになり、少子化傾向が一般化していく。

１０）７）で述べた状況は。地域社会を変貌させる。旧来の農業を軸とするムラ共同体は崩壊し始める。村行事の縮小がそれを象徴する。
　そのなかで、地域子ども集団も縮小し、地域子ども会にかわって、スポーツクラブ・おけいこ事塾・学習塾が広がり、半数以上の子どもたちが、それらに関わるようになるのは、全国的に見れば１９７０年代半ばで、沖縄では１９８０年代後半となる。
　それらには、家庭の財力・余裕の程度が反映し、格差が広がっていく。

５．１９６０年代高度経済成長期の大転換

　戦争期の次の大転換は、１９５０年代から予兆が始まり、１９６０年代をとおして展開したものである。この時期に確立された生き方モデルは、その後も今日にいたるまで、絶大な標準性をもち続ける。背景にある時代状況は、すでに次の転換に入っているのにかかわらず、１９６０年代型の生き方に縛られている人はなお多い、それほどの規制力というか、影響力を持ったモデルだ。
　それは、誰かが提起したモデルというよりも、経済成長の中で、その流れに乗るために「出来上がっていった」という点にも特質がある。だから、人々は、「命令されて」というよりも流れのなかで、「そうなっていった」という感覚に置かれてきた。

　では、その特質を並べてみよう。
１）生き方も、金銭・商品を中心にして思考することになったという点である。それ以前からも金銭・商品の影響下に置かれてきたが、この時期からは、金銭・商品を中心に生活が回り、生き方もその視点から構成するようになった。さらに進展して、健康管理や教育、さらには余暇趣味などの文化さえも、金銭・商品を軸にしていく。親の教育力さえも、教育の商品購入としての外注化をいかに上手にするか、という形が広がる。

２）被雇用者になることが標準化され、雇用という形での職業でどれだけの収入を得るかが、人生・生き方の中心テーマになっている人が増える。というより一般化してくる。農業を中心とする自営業的なありようが減少す

るどころか、例外的なものへと追いやられていく。

３）工場での生産を中心に経済成長が右上がりに進む。工業化社会とか産業社会とかいわれる社会構造が確立し、右上がり成長を前提にして社会が作られる。その右上がりが、７０年代も８０年代も続く。それにブレーキがかかる９０年代以降になると、「失われた１０年」などという表現が登場するが、右上がり成長を前提にしているから、そういう発想が生まれる。

４）人々の生活・生き方も右上がりを前提とする。収入も右上がりに増え続けることを前提にして、生活設計を立てる。そこで、大型ローンを組んで、自動車どころか住宅までも購入することが広がる。リストラなどで、それにブレーキがかかると、「想定外」の事態に至る。それを、社会構造の問題としてとらえるよりも、「自己責任」の問題として捉える人が、ごく普通になる。

５）「努力」とか「頑張る」という言葉が日常化する。「豊かな生活」「ゆとり」といったことを目標にするのではなく、「努力」とか「頑張る」自体を目標にする人も出てくる。「働き蜂」とか「ワーカーホリック」という言葉が広がり、過労死、職場の精神疾患、自殺といったことが大量に生み出されていく。

４．第二次世界大戦前後の大転換

　次は、第二次世界大戦前後の生き方の大転換である。１９４５年前後の１０年近くの中で、ほぼすべての人々が体験したことである。と同時に、戦後生まれであっても、何らかの形でその時のことを引き継いで生きている。あるいは、記憶をおさえこんで、ないしは、引き継がないで生きようとしてきた人もいるだろう。

　その特質を箇条書き風に記そう。

　１）生命、生存の危機。戦闘・「鉄の暴風」・空襲・原爆投下などのなかで、兵士であるかないかを問わず、そのなかで、生き、あるいは死んだ。生存したものも、その体験が深く刻印されて、その後を生きることとなる。

　死生観が否応なしに問われた。「お国のために死ぬ」「命ど宝」などということが問われる。

　２）飢えをも含む、生活物資の欠乏のなかで生きる。「なんとか逞しく生きる」「清く生きる」「戦果をとってでも生きる」・・・などといったことが現実的課題となる。

　３）国家による、生活・生命管理。それには「産めよ殖やせよ」などといった生殖管理・衛生管理や情報管理なども含まれる。それへの「葛藤」「抵抗」の存在。それらからの解放と戦後ベビーブームの展開。

　４）生産の場の激変。所得の激変。極度のインフレ。貨幣経済の縮小・現物経済。農地解放。戦争と基地建設のよって生活生産の場を追い出される。

　欠乏からの脱却願望と「ドサクサのなかでの貪り」

　５）価値観の激変。戦争推進と戦争反省。戦争への学校動員と学校の機能マヒ。学校再生への営み。子どもの

生育環境の激変。

帝国憲法・教育勅語体制から日本国憲法・教育基本法体制へ。民主主義体験。戦前との断絶と継承。

６）異民族との出会い・協同・支配体験。加害者として、被害者として。戦争と結び合ったアジア・太平洋地域での体験。米軍による異民族支配。

７）家父長制を軸とする家制度の激変と残存。家族間関係の多様なドラマとありようの激変と継続。地域の共同体での体験。隣組システム。復興での共同。

これらのほとんどが、一般の人々にとっては初体験であった。個人の判断よりも、国家の指示をもとにした動きであったが、そして、国家の無責任性の顕在化のなかで、国家への対応にもつれが生じ、その中で人々自身の判断に基づく動きが求められる。

その体験・教訓を、どう引き受け引き継いでいくのか、長期にわたる模索となって、その後の何十年か「ひきづっていく」ことになる。体験・判断の集団的共有と個人としての体験・判断との関係の問題。

３番目の高度経済成長期については、次回にしよう。

３．創造が必要な転換期なのに、これまでの延長線上で考え動く人たち

これまでも述べたように、転換期に入ってすでに約２０年たつが、それまでとは異なるありようを創造しようとする人は、そう多くない。むしろ、これまでの延長線上でなんとかしようとする人のほうが多いようだ。

たとえば、１９９０年ごろまで３０年以上にわたって続いた経済成長、右上がりが「当たり前」であるとし、その後の何年かを「失われた○年」とよんで、それ以前の右上がりに戻ることを求める。あるいは、１９７０～１９８０年代に全盛期だった「ストレーターコース」を一生懸命歩めばなんとかなると考えて、それに人生を預けようとする子ども、それを奨励する親は依然として多い。

そうした思考や行動から卒業し、時代が転換してすでに新しいステージにあることを見据えて、新たなありようを創造することが求められている。実際、模索的であるにしても、そうした創造をしている人が結構いる。おそらく、右上がりにすがって考えている人の多くもそうだろう。にもかかわらず、そうとは自覚せず、古い枠組に囚われているといえるかもしれない。

なかには、問題をすり替えて、海外からの移民が問題を悪化させているのだといった考えを持つ人が、欧米だけでなく日本でも広がっているようだ。そうした人は、社会改革や人生創造というよりも、かつて影響力をもった道徳とかイデオロギーとかで何とかしようとしがちのようだ。別のところに責任転嫁して、現実を直視した対処を回避し、問題対処を先延ばししようとする傾向が強いともいえよう。

では、こうした転換期は、現在の時期だけなのだろうか。視野を広げて、日本・沖縄で近代と呼ばれているここ１５０年ほどの時期を振り返ってみよう。すると、今回のような転換期を３つ見出すことができる。

１）まず、沖縄以外の日本でいうと、明治維新前後およびその後の１０数年、沖縄でいうと、１９世紀から２０世紀へと移る１０～２０年ほどの時期は、大きな転換期だった。特徴を大まかにいうと、近世身分制の崩壊、

居住地の自由、職業の自由、金銭・商品経済の浸透（土地売買の自由）、就学と徴兵といったことを挙げられる。
それらのことで、人々の人生は大きく転換していく。
６歳から何年かの就学、修了後の進路は家業を継ぐことだけに限定されない。被雇用者となり、居住地を変える人も多い。さらには、移民・出稼ぎの人も出てくる。生活に占める商品消費の増大のなかで、現金収入の必要が増大してきて、生活のありようを激変させていく。男子の場合、２０歳になると徴兵検査があり、入隊する人も出てくる。
それらは、多産多死から多産少死への移行にともなう人口爆発のなかでの家族・村共同体の大変化と同時進行し、人々の生活と人生を大きく変える。
２）第二次世界大戦前後、３）高度経済成長期については、次回にしよう。

２．人生創造　標準型　個人化

一人ひとりが自分自身の人生を創るといっても、経験がないだけでなく、そのイメージさえ湧きにくいという人が多い。１９５０～６０年代でいうと、「農業をはじめとする家業を継ぐのはいやだ、継げという親父とケンカしたが、ではどんな職業を選ぶか、というとよくわからない」という例によく出会った。
そんな時、自分自身で思考試行してというのではなく、その時代の大きな流れのなかで作られている型に沿って生きることになる人が多い。６０歳以上には、１９６０年代型生き方のイメージ、たとえば、「自営業の父も母も、仕事に追われて子どもの面倒に時間をかけられなかったから、最近話題になっているサラリーマンの専業主婦となって、子育てをはじめ家庭を大切にするような都会暮らしをしたい」というイメージを持つ人が結構いた。そして、５０代には１９７０年代型生き方、４０代には１９８０年代型生き方のイメージがあった。３０代以下には、１９８０年代～１９９０年代型生き方イメージが対応する。
そして、それらの１９□０年代型生き方には、ある種の「標準型」が存在していた。たとえば、１９７０～１９８０年代の子ども・若者たちには「よりいい高校→よりいい大学→よりいい企業→出世→　という流れに乗るストレーター型」人生が標準的なものとして存在してきたことを、私は繰り返し述べてきた。
しかし、その「標準型」でうまくいく人、なんとかなる人は、事実として大多数を占めているわけではなく、かなりの人がそうでない生き方をしていた。そうでない生き方をする人は、「落ちこぼれ」「脱落者」「社会的敗者」とみなされ、あるいは自分自身をそう見なしがちだった。「落ちこぼれ」ることは、けっして例外的ではなく、むしろほとんどの人が、時期はいろいろあるが、どこかの時点でコースから「落ちこぼれる」ことになった。たとえば企業倒産・企業リストラにあう人、あるいは病気休職になる人がかなり存在してきた。にもかかわらず、それらが隠されてきた、ないしは隠してきた。
それに対して、１９８０年代後半でいうと、フリーターという形で積極的に自分なりの挑戦をしていた人々が、変わり者とさえいわれつつも、存在していた。

それらの１９□０年代型生き方は、１９９０年代半ば以降、徐々に影を薄くしてきているようだ。学卒一括正規採用→終身雇用の枠が絞りこまれ、「標準型」の道を歩める数が、それまでより縮小されてきたことが時代背景にあった。そのなかで、潜在していた個人差が顕在化し始める。

そうした事態を、「個人化」とくに「再帰的個人化」という学術用語を使用して述べる人もいよう。その言葉は、１９９０年代にヨーロッパで広がり始めるが、それが、日本でも使用され始める。

これらのことは、たんに「個人」によって異なるというよりも、社会的な変化の中で生み出されたものだという捉え方も存在する。社会的な変化が、個人の形に変えて出現したという訳だ。

個人の努力・選択だといわれても、現実の社会状況のなかで選択できるものの大半は希望外ばかりで、やむを得ず、今の人生になってしまったという人は、ごく普通に存在する。

また、金銭・商品・ルーティン化されたシステムが肥大化し、それらと結びついた情報量が飛躍的に増大し、ヴァーチャルな世界とのかかわりが増えていく。そのなかで、具体的な人間関係が減少し、それゆえにか、反比例的に親密圏での人間関係への渇望が広がっていく。ないしは、個人の内側にこもりがちな生き方をとる人も目立つようになってくる。

その中で、「社会資本」「人間関係」といった用語を使用して事態をとらえ、打開しようとする動きも広がる。

このような「生き方」「人生創造」をめぐる大きな構造的変化は、転換期というべきレベルに達している。日本でも、こうしたことが言われるようになって、１０年以上が経過している。

１　連載スタート

１９９０年ごろより、時代は大きく転換し始めた。社会も個人も。

個人についていうと、生き方、人生のありようが、これまでの歴史の中ではあまり見られなかったような激しい変化のなかにある。しかも、その変化は一様なものではなく、個人によって異なるという多様な形をとっている。それは、２０００年代半ば近くまで私が住んでいた愛知県の都市地区だけでなく、現在住んでいる沖縄の「田舎」にあってもそうだ。海外にあっても、そうしたことが広く見られる。

１０代後半から３０歳前後の若者については、その激動状況はいろいろと語られているが、彼らだけでなく、たとえば４０代の「働き盛り」の世代も、あるいは職業からの「卒業」時期にある６０代にしても、変化は実に激しい。

それには、自分で選択創造したということだけでなく、リストラや非正規雇用の「渡り歩き」のような外的条件、あるいは離婚、病気、介護といったことによって、「やむを得ず」そうなってしまった事例など様々だ。

私が４０年余り専門分野として取り組んできた「生活指導」分野は、人々の「生活」「生き方」「人生」に関わることをテーマにしてきた。「生活指導」という言葉が使用され始めて１００年近くなろうとしているが、当初は、主として教育実践・教育学の分野として、特に子どもたちを対象に取り組み、研究されてきた。

しかし、この３０～４０年の間に、教育分野だけでなく、福祉や医療などの分野でも、子どもに限らず多様な世代を対象としても、使用されることが広がってきた。

そうした多様な方々の「生活」「生き方」「人生」にかかわる対人援助の仕事を生活指導と呼ぶようになってきたのだ。そしてそれは、「ハンディ」をもつ方々に「フツー」のありようができるように援助するというよりも、

その方々に応じたありようを当事者が創りだすことをサポートするものとしてなされるようになってきた。

私は、１９９０年代後半から、そうしたことを「人生創造」とか「生き方を創る」とかの言葉を使用して考えるようになった。詳しくは、次の本を参照。

浅野誠「転換期の生活指導」（青木書店１９９６年）

浅野誠「〈生き方〉を創る教育」（大月書店２００４年）

最初に述べた時代の転換は、それらが、方向や形が鮮明な標準が存在して、それに合わせて進むというのではなく、むしろおのおのが自ら創造するものとして、表れるようになった。カリスマ的指導者や、歴史の法則によってあらかじめ定められているといったものではなく、一人一人の意思と条件に応じて、一人一人が創るというイメージなのだ。

だから、創ることを望むものにとっては、やりがいのあるものとしてイメージされるが、不本意にそうせざるをえなくなったという人も多い。そのいずれにしても、あらかじめ定められたコースに沿って進むものではないだけに、難しいことであるともいえる。

それは、それまでの自分の「生き方」を変える、変えたい、変えなくてはならない、といった面を強く持つ。

本連載では、こうしたことを、実例を織り交ぜながら、探求していきたい。

医師が人間に還る　「神様のカルテ№２」　数年ぶりの映画鑑賞　2014年04月03日

３月の沖リハ謝恩会のビンゴゲームで、恵美子がペア映画招待券を当てた。数年前にも、同じことがあったので、恵美子はビンゴ運が強いようだ。私は、映画を数年に一回ぐらいしか見ない。

どの映画を見に行こうか、迷っていた。「神様のカルテ№２」も候補の一つだった。偶然見た月曜日のＮＨＫ「家族に乾杯」に出てきた櫻井翔が、映画撮影の話をしていた。というわけで、１日、急に見に行くことになった。

３６５日２４時間患者を受け入れる病院に働く医師とその家族が中心登場人物だ。２４時間態勢で働く医師が、とまどいつつ働く中での葛藤を描く。転任してきた医師が、定時に帰宅することへの苦情非難が渦巻く中で、その医師が、娘の保育所への迎えのために定時帰宅することがわかるなかで、ドラマは展開していく。また、ベテラン医師が、「医師の不養生」といいながら、病に倒れ、同僚医師・家族たちとのからみあいドラマが生まれていく。そのなかで、効率性・ビジネス性追求の医師という前に、「人間」であることを訴えるドラマを共謀して作り上げていく。

大変感動的で、泣いた。映画が訴えているメッセージには、長時間労働の医師に象徴される医療の世界、ひいては働きすぎの現代社会に対する、「人間」としての問いかけがある。社会の仕組みの問題であるが、そのなかの一人一人の生き方の問題でもある。働きすぎを受け入れ、我が身を削るような生き方から卒業しなくては、と思いながら、そこに至らないありよう。そのなかで異議申し立てに生きる人を描いたものになっている。

こうしたありようは、私が長くテーマとしてきたことと響きあう。「まじめ」「勤勉」「やりがい」「いきがい」といったことが、実は、働きすぎを増長してはいないのか、という問いかけを、いかに展開するのか。
そうしたありようは、自縄自縛の働きバチを生んではいないだろうか。長時間労働・働きすぎではない形で、こうしたことを追求できないのだろうか。
そうした追求を一人一人の生き方のレベルで展開しないと、ありようは変わらない。こうしたありように耐えうる強い人しか、生き残れないということになっていはしないだろうか。医師たちが、どうやってこうしたありようから卒業していくのか、見つめていきたい。と同時に、医師に限らず、私も含めて専門職にある人たちにはこうした傾向が色濃く存在する。どうやって卒業していくのだろうか。

時間に合わせて行動、それとも、行動に合わせて時間がついてくる　2014 年 03 月 14 日

私たち夫婦は、ケンカをよくしてきた。最近は激減し、ケンカ持続時間も激短になってきた。そのケンカのテーマの代表例は、時間のことだ。
私は、２０歳までに、「時間に守る」ことを徹底的に躾けられてきた。彼女も躾けられてはきたが、私ほどではない。たとえば、３時に会う約束をしたとき、私は５分前には到着するが、彼女は、３時に出発し、何十分かして到着するといった感覚だ。

このことを私なりに考えて納得するには、それこそ４０年余りの時間がかかった。
簡単にいうと、タイトルにあるように、「時間に合わせて行動、それとも、行動に合わせて時間がついてくる」という二つの発想があるからだ。
おおよそでいうと、時計というものが、生活のなかに普及しない前、人々は、自分の「身体時計」と自然が示す時計を参照していた。日常生活の中での活動は、明るさを参考にしながら始めるし、おなかがすいてきたり、暗くなり始めたり、作業に区切りがついたりしたときに、活動を終える。
近世までは、時計に合わせて時間を測るより、日が出ている時間をいくつかに分けて、「四つ」「六つ」というように設定するほうが多かったようだ。だから、時間間隔は冬と夏では異なるというように、伸縮していたのだ。それさえも、お寺で鐘を鳴らすことで時を知らせるという具合だから、自然と自分の体と活動具合で、時間を決める方が普通だったろう。だから、時が先にあるというよりも、時が後からついてくるといった感覚だったかもしれない。
近代になって、工場、軍隊、学校というものが、時計を導入し、人々をそれに従わせる訓練を徹底して展開した。その結果、時計に合わせる感覚は上昇するが、自然・身体・活動に合わせる時間感覚がぐんぐん低下していく。時計に合わせることが正しくて、自然・身体・活動に合わせる時間感覚は間違いやすいもので、避けるべきだとさえ見られるようになったといってもよい。
それは、自然・身体は誤りやすいもので、それをコントロールすることが必要だという発想さえ生んだ。

こんな発想に、私は長く縛られていた。彼女の方は、時計に合わせる感覚ももっているが、自然・身体に合わ

せる時間感覚を根強く持ち続けている。そこに生ずる二人の間のズレが、夫婦ケンカを発生しやすくしたのだ、ということに気づくようになったのは、最近のことだ。

時計によってコントロールしようとする発想は、実は、無理を生みやすいし、過剰に神経質な行動をうみやすい。ということで、私は、玉城のここで生活するようになって、時計過剰依存から卒業し始めた。自然と自分の感覚に合わせるありようを少しずつ身につけ始めた。

そこで、たとえば、定刻の５分前ではなくて、おおざっぱに何十分前に到着するという行動をすることが多くなった。時計には合わせるが、細かく合わせるのはイヤだというので生まれた妥協策ともいえよう。

こんな作戦も含めて、時間に過剰に縛られないで、ゆったりと対応することが増えてきた。単純化していうと、分刻みから時間刻みへというようにおおざっぱになってきたのだ。また、自然に沿った時間経過を味わうようになってきて、明るくなれば起床し、暗くなれば眠くなるという感覚に少しずつ近づいている。

彼女のほうも彼女なりの対応を編み出し、二人のケンカのネタが激減してきた。

沖リハ言語聴覚学科謝恩会　難関を乗り越えた多世代卒業生　2014 年 03 月 11 日

１０日夜開かれた謝恩会に、久々に参加。２年前の私の授業で大活躍した面々と再会。

言語聴覚士への道はなかなか難関だ。進級さえ難関になるほど、卒業・国家試験合格という壁はかなり高い。それは、かなり高度な専門職に向けての学習をしなくてはならないからだ。それを見事に突破した面々だ。

この学年に限らないが、社会人入学生が多いのが、ひとつの特徴で、１８歳入学者は半数いるかいないかだ。大卒―会社務め―退職のかたも多い。やりがいのある仕事を求めて、新たな人生へと踏み込む人が多いのだ。４０代の人も珍しくない。

だが、やりがいがあるし、資格をとれば、就職は売り手市場だ。今回の卒業生もほぼ決定のようだ。

難関突破を指導する先生方も大変な苦労だ。その指導の労苦の積み重ねをもとに、卒業までにこぎつけた喜びが、ビンビン伝わってくる。

２時間、彼らと楽しく語り合う。授業のことだけでなく、我が家で飲み会をしたことなども。物語が多い学年だ。

最後に、多世代の卒業生全員でのダンスがすごかった。カメラ持参を忘れたので、残念なことをした。「エッ・・・そんなに踊れるの！」と驚きの連続だった。

３０代４０代の方々に、なぜか初々しさを感じてしまった。２０代の刺激が大きかったのだろう。他方、２０代に入ったばかりの卒業生も、とてもしっかりしている。４０代の刺激が大きかったのだろう。２年前には、両者の間に多少あった遠慮というか距離が、すっかり縮まってしまい、ハーモニーを作り出している。

新しい人生創造に踏み込んでいる彼らを祝福し、今後に期待したい。こうした創造的な生き方がもっと広がればいいのに、と思う。

いつかの再会を楽しみにしたい。もしかすると、クライエントになった私との出会いかもしれない。

早口で話す人には、気になる人がいる

2014 年 03 月 08 日

　このごろ、スピード感たっぷりに話す人を聴くことが続いた。かなりフーフーしながら、聴いた。よく練られた中味のある話だったからだ。これだけ中身があり、つながりがしっかりとある話をたっぷり話される人は、さすがだと思う。

　私自身も、中味は別にして、２０代まではすごく早いテンポで話した。話すスピードには個人差があることはいうまでもないが、地域差年齢差もあると思う。４２年前、東京から沖縄に移住したとき、ゆったりとした話にイライラさえしたことがある。ついでにいうと、沖縄の音楽のゆったりさにも、イライラ感があった。だが、不思議なもので、数年たつと、そのゆったりしたスピードに馴染み、私自身も以前と比べるとゆっくりと話すようになった。

　加えて、中高年といわれるような年齢になってきた近年、一層ゆっくりと話すようになった。若い人には、エネルギーをためているからか話すことが早い人が結構いる。中高年になると、早口の人は珍しくなる。

　ここまでは、ごくありきたりの話だろう。

　気になるのは、自分のイライラ感や不安感を消そうとして、早口で話す人のことだ。理由はいろいろだろう。相手に話させる間（ま）をつくらないために、他の人に発言権を取られないために、たまっていたものを吐き出すために、思っていることを忘れるといけないから、などといった具合に。

　また、豊かで立派な正しいことに満ちた自分の考えを、聞き手にぶつける感じでまくしたてる人もいる。自分の考えが立派であることを、相手に知らしめるために話し続けるのだ。早いだけでなく大声であることもある。無知で誤りに満ちた相手を説き伏せようとする人もいる。

　権威主義なのだ。自分が上で相手が下だと思っている。残念ながら、教師、研究者、政治家によく見かける。夫婦間でも見かける。タテ関係が強いとそうなりやすい。

　そんな人は対話が下手だ。話すことは、喧嘩だ、戦いだ、と思っている人さえいる。

　そんな方々が、聞き上手、対話上手になってくださることを望みたい。

山崎亮「コミュニティデザインの時代」（中公新書２０１２年）を読む

2014 年 03 月 04 日

　このところのスケジュールの多さ、そして刺激的な読書の多さもあって、書きたい記事があふれてしまっている。ということで、いつもなら、何回かの連載で紹介コメントする本も、一回の記事に絞らないと、掲載が何か月後かになりそうな気配だ。

　ということで、申し訳ないが、一回限りの記事、ないしは、一回の記事に複数のことを書くことが増えそうな気配だ。

　ということで、山崎亮「コミュニティデザインの時代」も、短い紹介コメントになることをお許しいただきたい。

　南城の地域づくりということに関心をもってきたが、最近、地域の有志とか、役所職員とかではなくて、地域つくりにかかわろうとする民間の専門家とかコンサルタントなどと呼ばれる組織とかに接する機会が増えた。こうした方々が、どんな考え方・活動の仕方をしているのか、に関心を持つようになったので、店頭でも目をひかれ購入する関連本が増えてきた。ということで、出会ったのが本書だ。

　示唆的なことが多いので書き出すときりがないから、箇条書き風に記そう。

　１　本書の最初の方で、「現代を生きる人たちにとって、つながりがなさすぎるのは生きにくいが、つながりがありすぎるのも生きにくい」ということで「いいあんばいのつながり」を求めて、「自由と安心のバランスを調整しながらコミュニティデザインに取り組んでいる」Ｐ１１、と述べる。

　２　そこに登場してくるのは、「地縁型コミュニティ」と「テーマ型コミュニティ」という分類だ。Ｐ１３

　これまでの用語でいうと、前者をコミュニティと呼び、後者をアソシエーションと呼んできたから、本書ではアソシエーションもコミュニティに含めて述べているわけだ。そして、次のように、そこに一つの焦点を当てている。

　「いい空間をつくるだけで人々が集うということがほとんどなくなった。」時代に、「屋外空間を使いこなす主体については、地縁型コミュニティに代わってテーマ型コミュニティを集める必要がある。」Ｐ１５と述べ、「そこにマネジメントが必要になる」と論を進める。Ｐ１６

　３　そうしたことの実例として、デパートの各階で、多様なテーマ型コミュニティに活動を展開してもらい、それを目当てに来た人が、買い物をするという「コミュニティとショッピングの掛け合わせ」Ｐ１８，が紹介されている。

　また、大都市のど真ん中の空き地を農地にして、テーマ型コミュニティの活動場所にし、そのまわりの不動産価値を高めるという不動産会社の取り組みが紹介される。

　私は、著者と少し異なって地縁型コミュニティにも関心をもち、コミュニティとアソシエーションの両者のからみに注目したい。

　４．現在の日本の人口が過大であり、「人口が減ることは不幸なことなのか、それとも適正規模に戻ろうとする健全なうごきなのか」と問いかけ、適正規模として、３５００万人を例示している。Ｐ２６

　そして、進行する人口減少のなかで、「昔はよかった」というより「昔は少し無理をしていた」と考え、「長い歴史のなかで適正だった人口規模に戻ろうとする地元の将来像がどうあるべきかをポジティブに考える」Ｐ２７

と提案している。

その点で、「人口が減っているにもかかわらず楽しそうに暮らしているまちにはどんな秘密があるのか」「人口が少ないにもかかわらず住民の満足度が高いまちにはどんなカラクリがあるのか」Ｐ３８と、「人口減少先進地に学ぶ」ことを提案している。刺激的だし、共感できる提起だ。と同時に、それにふさわしい暮らし方・生き方を住民自身が創造することへと向かうレベルにも関心を向けていきたい。

５．コミュニティという言葉に対して、５０歳代、６０歳代には「眉をひそめる人が多い」が、４０歳代は「半分半分の反応」で、「３０歳代以下になると新鮮な言葉として好意的に受け容れることが多い」Ｐ６２という。

つながりを求めている若い世代のことを示唆していて、注目したい指摘だ。

６.「ものをつくってもいいし、つくらなくてもいい。施主から相談された課題を解決するために、必要であれば空間を設計するし、そうでもなければコミュニティを設計する。あるいはその両者を組み合わせることによって、与えられた課題をうまく解決することができる。「ものをつくらない」という方法を手に入れることによって、建築家の解決策は一気に幅が広がるのではないだろうか。」Ｐ７３

興味深い大胆な提案だ。時代の趨勢は、すでにそうなっている。ハードよりソフトというように。だから、建築家も大きく変わろうとしているのだな、と最近感じることが多くなった。

７　以下、具体例や、ワークショップなどを含んだコミュニティデザインの実際の話が展開する。紹介コメントが長くなるので、このあたりにとどめよう。

最後に二つだけ紹介しよう。アメリカで「軍用地から国立公園へ」という取組を実践したブライアン・オニールという人の話はとても面白い。

「コミュニティデザイナー」という肩書で仕事をしている著者がその肩書についていろいろと書いている箇所が面白い。私も「フリー研究者」という訳のわからない、しかも近年では消極的トーンをともないやすい肩書を１０年間使ってきたが、そろそろ積極的肩書を創出するころかもしれないと、思う。

加藤彰彦（野本三吉）先生最終講義　　2014年02月27日

２５日夜、沖縄大学で開かれた。学長任期が残されてはいるが、身体事情で３月末で退任されることになった。

タイトルは、『生活（暮らし）の思想』～野本三吉という生き方～

そして、もう一つのポイントは、「生きること、それが僕の仕事」

お話を聞きながら、私自身と対比させながら、いろいろな思いがめぐった。

まずは、大変純粋純真で、いろいろな人の話を聞き取り受け止め、自分が感じ考えたことで良いこと必要なことと思われたら、可能なことはすぐに行動に移す人だということを強く感じる。いろいろと迷い逡巡が激しい私とは対照的だ。だから、およそ１０年ごとに生きるテーマと場所を変えてこられた。

もう一つは、精神的にも肉体的にも、大変強い人ということだ。すごく精力的で、それを支える体力をお持ちな方だ。今回も、体力的なことがありながら、１時間半お話になり、その後の交流会でも、立ったまま沢山の方とお話なされていた。ドヤ街で働かれた時も、そこに住んで、人々とつながりを広げられている。病名をたくさんもち、すぐ病気になる私とは対照的だ。

だからといって、「いばっている」とか「権力的権威的」とは対照的なところがすごい。

そんな彼の周りには、いつもたくさんの人が集まり、強い刺激を受けられる。沖縄に住まわれてすぐから沖縄で重要な役割を果たしてこられたこともそれを示している。それは、加藤さんが行動力があるというだけでなく、いつも新鮮だからでもある。

東京の下町で生まれ育ち、家父長的な世界が弱く、庶民的な形での自由な生き方をされてきた。数年務めた小学校教師をやめたのも、成績評価がいたたまれなかったためという話だ。

農村のしがらみの中で生まれ育ち、そこから抜け出すような「重く歪んだ」生き方を積み重ねてきた私とは対照的なものを強く感じる。その点で、加藤さんに羨望を感じないわけではないが、ずいぶん異なる成育歴生育条件なので、異なって当然だろう。

それだけ異なりながらも、何度か意気投合することがあり、仕事をご一緒させていただいたこともある。大学のこと、沖縄の子ども・教育などでは、もっとご一緒できればよかったとは思う。私側の事情で、それらはほんの少しだけの共同作業にとどまった。

今後も継続して活躍なさると確信している。

橘木俊詔・迫田さやか「夫婦格差社会」（中央公論新社２０１３年）を読む

2014 年 01 月 18 日

格差社会論を多様な面で追究している橘木さんたちの新刊本だ。内容の要約が「あとがき」に書かれているので紹介しておこう。

「これまでの日本は皆婚社会であったし、夫の所得が高ければ妻は働かず、低ければ働くという夫婦のあり方であったことが、家計所得の平準化に寄与してきた。一億総中流をもたらすひとつの要因だったのである。

ところが最近になって、夫の状態とは無関係に妻が働くことが一般的となったので、かえって夫婦の合算所得である家計所得の格差拡大を助長するようになった。妻が自立的に働くようになったことで、所得の高い妻とそ

うでない妻との格差が、夫婦間の格差拡大の原因となったのである。背後には、高学歴・高水準職業の女性の存在や非正規労働をしている女性の存在があるし、誰と誰が結婚するのかということも複雑にからんでいる。夫婦間の格差を決めるのは女性、あるいは妻の就業次第という時代なのである。

一方で皆婚社会は崩れ、結婚しない、あるいはできない男女が増加し、さらに離婚者の数も増加して、単身者の珍しくない時代となった。夫婦間の格差を論じるときは、一組の男女が夫婦となる結婚、夫婦をやめる離婚がどう進行するかを知る必要があるし、それが地域によってどう異なるかにも興味がわく。これらの話題に関しても突っ込んだ検討を試みたのが本書である。」　Ｐ１９０―１

示唆するところが多い内容だ。

ところで、本書が、次のように述べている個所が、私には気になる。

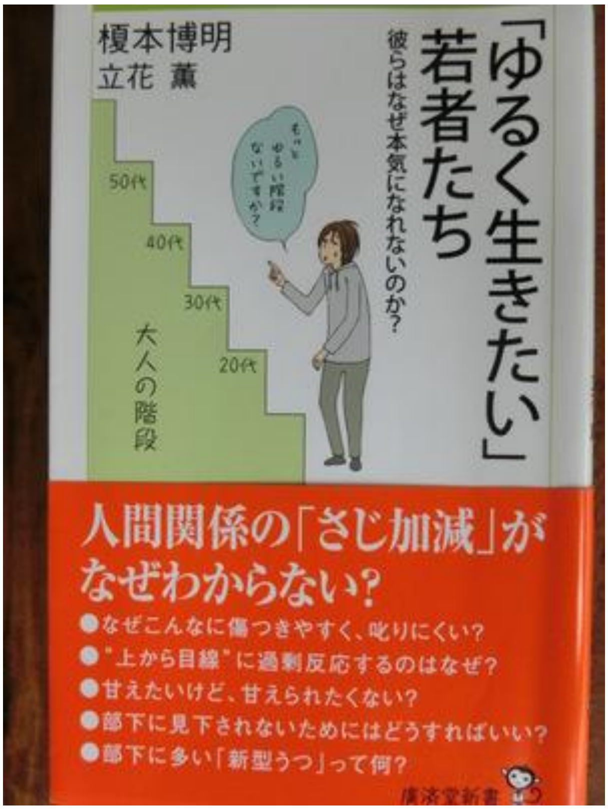
「経済学では、国の経済成長率を決定するのは（１）労働力、（２）資本、（３）技術進歩の成長、以上三つの合計とされる。少子化とは、労働力の成長率がマイナスであることを意味するので、経済成長率をポジティブ（正）にするには、残る二つの要素、資本と技術進歩の成長率が相当高くなければならない。日本の貯蓄率は少子高齢化によって低下しているので資本調達の資金難が予想されるし、企業の設備投資意欲も弱いので、資本の高成長は期待できない。技術進歩も韓国や中国に負けつつあり、新製品の開発は活発でない。両者に過度な期待ができない以上、経済成長率を高めるには、労働力に期待がかかる。そして、その候補は女性、高齢者、移民である。」
Ｐ１３６―７

気になるのは、経済成長率を志向することが前提となっている点だ。生活の質的な豊かさは必要だとしても、今日の日本にあって、しかも人口減少がすすみゆく状態にあって、なお量的豊かさ・経済成長を追求するのだろうか。これまでの経済学では、それが当然だろうが、これからの経済学では、量的には縮小しつつ、質的な豊かさを追求する方向へと転換することが求められているのではなかろうか。格差社会を変えると言う時、そうした点が不可欠だと考えるのが私の発想だ。

「上から目線」　榎本博明・立花薫「「ゆるく生きたい」若者たち」（廣済堂出版２０１３年）を読む

2014 年 01 月 03～06 日

しばらく前、直接出会ったことのない学生と実務的な情報のやりとりをしたことがある。その時、実務上の対



応を実務的に書いたことに対して「上から目線はやめてください」と書いてあった。その書き方が、とても「上から目線」なので驚いた。実務的なやりとりは実務的に書くしかないので、戸惑ってしまった。

それ以来「上から目線」という言葉が気になっていた。学生相互の会話にもたまに登場するが、その言葉を使用する人自身が、相手に「上から目線」で言いがちだという特徴に気づいた。しかし、これが若者のどんな特徴を表すのか、よく分からないでいた。

このことに限らず、近年の若者のなかに、私にはまだよくわからないことに気づくことが時々ある。ということで、ヒントをえられそうな本書を店頭で見つけて読む。

「上から目線」について述べる「第三章　ゆるくだけ生きたい人は、「上から目線」に敏感である」に、次のようなものがある。

「相手の態度や言葉を「上から目線」だと敏感に感じ取る人には、「上―下」「勝ち―負け」のスキーマが過剰に根づいている場合が多い。

絶えず他人と自分を比較して、相手と自分のどちらが上なのか、どちらが勝っているのかということばかり気にしている。」Ｐ８２

なるほど、と思う。そうしたタイプの人は昔からいはしたが、かつては、「勝」って「上」になるために、それなりに対人関係を豊かにして頑張るタイプも多かったように思うが、いまでは、対人関係つくりにぎごちなさを残しているタイプが多いようだ。そうしたタイプの若者は、本書で「ゆるく生きたい若者」として登場する。

いまどきの若者について参考になる記述が多い本書は、企業関係者を中心対象に、人間関係・心理についての業務をしてこられた著者たちによって書かれている。だから、話題は、会社における上司―部下関係が多い。「上下構造」に拒否的でありつつも、自らは上下意識に強く囚われているタイプの若者への対応について、「上下構造」の強い会社のなかでどうしていくかという難題に取り組んでいるともいえる。

他の章のタイトルを紹介しておこう。

第一章　ゆるく生きたい若者たち
第二章　ゆるくだけ生きたい人は、人との距離の取り方がヘタである。
第四章　「新型うつ」はホントに病気なの？
第五章　「甘えの構造」の先にあるものとは
第六章　大人世代は若者に何を伝えるべきなのか

ここまえ、自ら「上から目線」から、相手に「上から目線」だと発言をする若者には、上下勝負といったタテの枠組みが強い点についての本書の提起を紹介した。

そうした若者に限らず、今日の日本の社会全体、そして会社組織の大半がタテ構造にあることをみなくてはならない。さらに若者が育ってきた学校もタテ関係が強い。唯一の正解があり、それへと生徒を導くための授業も、タテ型構造の象徴ですらある。こうしたことが投影して、ヨコ関係でありそうなクラスメイトのなかでも、上下勝負関係が強い。

こうしたことを背景にして、「上から目線」発言が生まれる。タテ関係を批判してヨコ関係を望むのではなく、自分がタテのなかの「上」に位置したいための発言だともいえよう。だから、ヨコ関係への渇望さえ、上下勝負といった歪んだ形で登場するのだ。学校・会社・社会が敷いたレールに即して、そこでの上下勝敗を競う競争社会のなかで生きてきた若者たちには、レールそのものを批判し打破する動きがイメージしにくいのだろう。

近年、そのレールが縮小する動きが強まる中で、「敗北」「下降」しないために必死になるが、レール外には視野をもたないので、そこに登場する戦略として、「ゆるく生きる」が生まれるのだろう。「ゆるく生きる」を自己防衛とするため、それまでのレールとは異なるものの創造へと進まないし、対人関係創造へとすすまない。

そうしたレールを生きてきたタイプに「上から目線」が増殖しそうだ。対照的に、レールから外れて、多様な人間関係つくりを経験してきた若者には少なそうだ。

「偏差値ランク」も投影しているようで、「高ランク学生」に多そうだ。彼らは、大学授業、なかでも伝達型ではなく創造的授業への対応に苦戦する。同じことだが、会社に入って開発創造型業務や人間関係に苦労する。レール型学習・業務なら対応できる。そこに「上から目線」発言が登場する例が本書に出てくる。

それらを別の表現でいうと、レールというバーチャルな世界で生きてきた若者たちが、学習・業務でリアルな人間関係を創造するしかない時にぶつかる課題が存在するのだ。

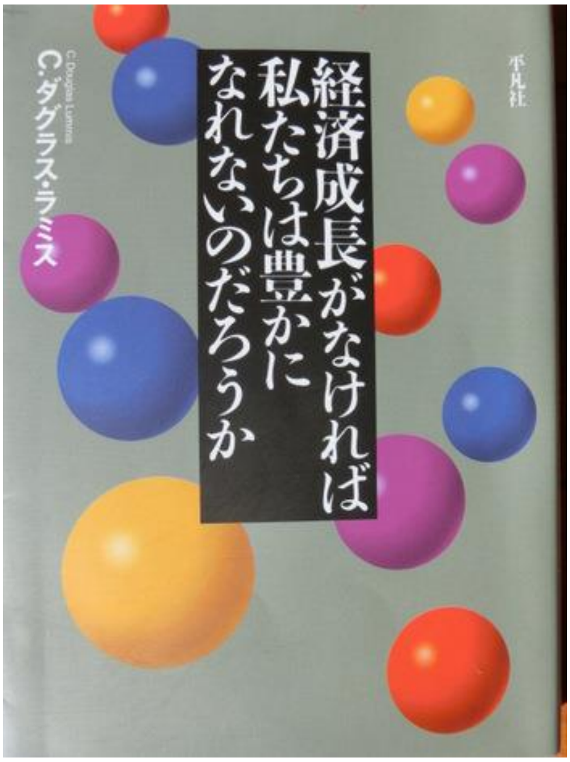
こうした若者の動向が、新しいありようを生みだす可能性はないのか。それを読み取ることが求められる。読み取り、それを組み替えて新たなありようへとつなげていくことが重要だ。

たとえば「上から目線」発言に潜在する、権威主義批判管理主義批判の契機を、創造的人間関係構築、創造的共同をうみだすものへと転化させたい。学校や会社、さらに社会における人間関係を「ヨコ型」へと改造していく方向へと進ませたい。

私のワークショップ型授業は、そうしたことを願う実践でもある。ワークショップにおける人間関係はヨコ型の異質協同型であり、そこで、多様な発見創造を展開していく。そして、新たな他者発見自己発見を並行させ、新たな対人関係を創造していく場として、ワークショップは大変有効だ。

ダグラス・ラミス「経済成長がなければ私たちは豊かになれないだろうか」（２００４年平凡社）を読む

2013 年 12 月 31 日



　このブログ記事でも紹介したラミスさんと辻信一さんとの対談本で知った本だが、最近店頭で見つけて読んだ。

　経済の「定常化」以上に縮小が必要だと言う私の考えの先輩格にあたる論の連続だ。これまでこの本のことを知らなかったことが悔やまれる。

　タイトルにあるように､「経済成長がなければ私たちは豊かになれないだろうか」という問いかけをベースに、社会・政治・経済・生き方のありようの変更を求めるものだ。｢常識｣という ものが『非常識』であることを発見するという論理を分かりやすく提出する。

　タイタニック号で､｢氷山にぶつかる｣という船内放送に繰り返されたにもかかわらず、だれも、それまでの「常識」のなかでやりようを変えず、エンジンも止めず、ついに悲劇的結末になった。それと同じことが現在の地球にもいえるのに、それを避ける動きに出る人はあまりにも少ないのだ。

　では、章タイトルを紹介しておこう。

第一章　タイタニック現実主義
第二章　「非常識」な憲法？
第三章　自然が残っていれば、まだ発展できる？
第四章　ゼロ成長を歓迎する
第五章　無力感を感じるなら、民主主義ではない
第六章　変えるものとしての現実

　２００４年刊行だが、いまでも全く有効な叙述ばかりだ。むしろ一層「氷山に近づいている」タイタニック状態だといえよう。

　いまだに、経済発展・景気回復・大量生産大量消費「常識＝神話」から卒業しきれない人が圧倒的に多い中、より一層多くの人に読まれることを期待する。

「浅野誠人生・生き方シリーズⅢ　社会のあり方と生き方―スローライフ―」をＨＰにアップロード

2013 年 12 月 02 日

　このシリーズの「Ⅰ　人生後半期の人生創造」「Ⅱ　人間関係・家族・移住・多文化」について、今回は「社会のありかたと生き方――スローライフ――」だ。

　個人の生き方暮らし方が社会のあり方に深くかかわっていることは言うまでもない。どのような社会のあり方を期待するかによって、その人自身の生き方暮らし方が異なってくる。

ここ数十年、大量生産大量消費とそれを保障する「右上がり経済」に基づいて、みずからの生き方暮らし方を作ることが「当たり前」のようにされてきた。しかし、今それから「卒業」することが求められている。その一つは「スローライフ」という言葉で表現されることが多い。

そんなことにかかわって、この１０年間に、ホームページやブログに書いたことを年月順に編集した。目次を紹介しよう。

１．２００３～２００６年
「右上がり」「一直線」発想から卒業すること
多忙化のなかで、<いいかげん>にやることを考えてみては
「暮らしぶり」の問題を生き方追求の教育学のなかに位置づける
大胆に休むこと
愛知での雑感と「少子化」論
中村隆一・辻信一「スロービジネス」（ゆっくり堂２００４年）を読む
消費生活－－東京・宮崎・沖縄
「下流社会」に「強者」になることをよびかけるのか
カール・オノレイ「スローライフ入門」（ソニー・マガジンズ）を読む
森岡孝二「働きすぎの時代」（岩波新書）を読む
夢想「人生創造産業」
異質協同論から生き方創造論への私の研究展開－－－階層・格差問題をめぐって
飲酒事故キャンペーン、ストレスを減らす、ライフスタイルを変える

２．２００７～２００９年
「中流」的生活を問う
大人の男性が平日昼間散歩するのはカッコ悪い？
学長になる方々　生き方に思う
ロハスはケチではなく、ぜいたくな生活
<新版モーレツ会社人間>物語――日本経済新聞社編『働くということ』（日本経済新聞社２００４年）を読む
「格差社会」
アウル仕事研究室　興味深い組織
大量生産大量消費　働き過ぎへの疑問　私の環境問題への関心
大和田順子・水津陽子『ロハスビジネス』（朝日新書）を読む
ＯＷＬ仕事研究会のコミュニケーション誌
「経済危機」とスローライフ
辻信一『スロー・イズ・ビューティフル』（平凡社）を読む
Ⅰ．スロー　Ⅱ．目標のために今を犠牲にする「準備社会」　Ⅲ．「問題を生きる」「答えを生きる」
Ⅳ．「時間を省く」　Ⅴ．「疲れ、怠け、遊び、休むことの復権」
Ⅵ．さまざまな時間　体の時間と社会の時間

「過剰」から生じた経済危機を、「弱者」切り捨てで乗り切るな
浜田久美子『森の力』（岩波新書２００８年）を読む
１．感情・森　２．『木の建築を否定した日本の歴史』　３．森の現代史と行方
松井孝典『地球システムの崩壊』（新潮社２００７年）を読む
Ⅰ．「宇宙的スケールで論じる、知的刺激に満ちた文明論」
Ⅱ．人間圏　地球システムの物質循環のコントロール　Ⅲ．右肩上がりから右肩下がりへ
Ⅳ．「人間圏の存続時間あと１００年」にどう答えるのか
瀧井宏臣『農のある人生』を読む
１．「農業体験農園」　２．クラインガルテン　週末農民　３．半農半Ｘ　団塊帰農　企業センス農業の問題
４．「生き方の転換」としての、「農のある人生」
退職できる条件があるのに、退職できない人生後半期の人
忙しく働く人と仕事がない人の二極分化　大学教員の例
モーレツ起業家の「働き方革命」
「発展拡大」神話にとりつかれている人々
『子どもの貧困白書』
１．一人親家族における貧困問題　２．一人親家庭の苦労と自己責任論　３．女性をめぐる貧困
４．教育費と家計　５．若者の経済的困難と高校　６．大学進学と経済力
７．経済上の貧困と人間関係上の貧困　８．「迫られる自立像の転換」中西の指摘　９．学校と子どもの貧困
１０．「貧困」に立ち向かう共同の取り組み

３．２０１０～２０１１年
「ソトコト」初めて買う
好きなことだったら働き過ぎてもいいか
Ｃ．ダグラス・ラミス、辻信一「エコとピースの交差点」本を読む
１．経済成長と「減らす発展」　２．希望と物質的豊かさ　３．動きまわることととどまること
４．環境問題解決と熱狂的経済活動抑制　５．「開発」「発展」とは異なるありよう　６．「定常」
７．経済に支配された「平和」　８．貧困と近代化　９．豊かさを問い直す、手作りの意味変化
映画「降りてゆく生き方」
３５年の変化・・・ＮＨＫ「現代日本人の意識構造［第七版］」を読む
大災害に考える
１．人々のつながり　２．支援でできること　電話は慎重に　３．対抗・克服　しなやかしたたかな対応
４．体験をもとにすることの大切さと心配　５．外国関係の動きが問いかけるもの　６．「復興」のありよう
７．人々の生活・生き方の問い直しへ　２の１．５０年単位思考は、長いか短いか　２の２．災害と生活指導
２の３．多角的な情報収集　２の４．対抗型とやり過ごし活用する型
国家公務員給与の削減　高いのか低いのか
大震災と生活指導　生活指導学会で発見したこと
１．避難移住とコミュニティ　２．避難所のパーティションの話など　３．いくつか

面倒な年金手続き　行政不行き届きに苦労
宮本みち子編著「人口減少社会のライフスタイル」（放送大学振興会２０１１年）を読む
１．ポスト人口転換　人口の高止まりと減少　　２．緩少子化と超少子化　３．少子化の社会的背景
４．少子化とセクシュアリティのあり方　５．一企業に職業人生を尽くす形態の問題と変化
６．新しい働き方　ワーク・ライフ・バランス　７．教員の研修制度休職制度の活用
８．仕事おこし　社会的企業　労働者協同組合　９．家族機能の変化　人口減予測
１０．長時間労働　過剰ストレス　男性の子育て　自殺

４．２０１２～２０１３年
生涯学習と職業能力開発
ワーク・ライフ・バランスというタテマエの実質化
生活の変化がゆきついた　国内モデル不在と欧米基準
繁忙ストレス病気と養生　自己他者社会のケア
坂岡洋子「老前整理　捨てれば心も暮らしも軽くなる」を読む
ワーカーホリックからスローライフへ
１．私の早期退職　２．ワーカーホリック時代の私　３．高熱とオーバーワークコントロール
４．私の仕事・健康計画表　５．ワーカーホリックからスローライフへと進まない社会現実
６．慢性的ワーカーホリックと経済成長　７．お金をかけるスローライフ！？
８．お金に使われないで、お金を使うことが大切　９．人生の前半期と後半期におけるスローライフ
１０．井形慶子「イギリス式年収２００万円で」を読む　１１．西洋医学中心の医療と身体の自己管理力
１２．医療などの情報と身体の自己管理力　１３．薬草・ハーブなどの使用
１４．脇役の生き方　保坂隆「人間、６０歳からが一番おもしろい」（三笠書房２０１２年）を読む
１５．生活指導研究の性格・課題　１６．人生後半期の生き方と生活指導
１７．ワーカーホリック病から卒業できない人々　１８．自然・人々とつながり合う　いろいろな移住者
１９．モノ・コト・カネに支配されない人間関係　２０．大金持ち志向はいいのか
２１．オーバーペースからマイペースへ　２２．競争より共同の、強者より弱者のスローライフ
木暮太一「僕たちはいつまでこんな働き方を続けるのか？」を読む

向谷地生良「べてるな人びと　第３集」（一麦社２０１２年）を読む　2013 年 11 月 27 日

「べてるの家」について、どこかで耳にしたことがあるだけで、何も知らなかったので、本を読んでみる。一言で言うと、興味津々を通り過ぎるほどだ。

精神障がいなど、さまざま障がいを持つ人々と支援者たちが、『当事者研究』ということを軸にして登場してくる。これまでの「通念」とは対照的なありようがどんどん飛び出しつつ、強い共感を呼び起こす物語の続出だ。

まず、「べてるの家」について、同書で簡潔に紹介されている個所をそのまま書こう。

「浦河べてるの家」は１９８４年４月に発足、２００２年２月に社会福祉法人となる。主に日高昆布の産地直送や出版事業などの就労支援とグループホーム等の住居の提供（13 か所）と有限会社「福祉ショップべてる」からなる共同体を称す。さまざまな障がいをもった当事者の社会参加や社会進出のための多種多様な事業を展開し、現在１０代から８０代まで１５０人を超える人たちが参加している。

ホームページ　http://bethel-net.jp/

私が興味を持った点をいくつか紹介しよう。

１）病を隠さない。「べてるの家」の人たちが宮古島訪問の際に、「病気と借金は隠すな」というミャークグチ（宮古語）に出会って、それに大変共感した話。「統合失調症全力疾走あわてるタイプ」「統合失調症感情暴走トランポリン型」など、自分自身で命名した名前で自己紹介する例。

こうしたことは、たいていの人にとって驚きだろう。

しかし、「秘密が流行る」昨今、そのことで、事態を悪化させ、さらには、悪事を増長する動きが加速される。「隠さない」ことで、当人だけでなく周りの人との共同で、物事に取り組んでいくことは肝要なことだ。人を支配しようとする人は、「秘密」が好きだ。支配される人に「秘密にせよ」といって縛りつけようとする。それに対して、できる限り秘密を減らして、協同して物事に当たる事は、弱者に不可欠なことだ。いじめ解決にあたっても、このことが大切になることが多い。　２）これらには、ユーモアに富んでいるが、そのことで、「あれーっ、そうなのか」と物事の新しい見方を発見することを促す。本書全体に、そのことが散りばめられている。

相手が、何かにこだわり過ぎて見えなくなっていることを、軽快に新発見へと促す。チャップリンとかブレヒトとかが使った異化のアプローチと共通する。私なども、授業で学生たちと会話する時、しばしばしている。意識的にそうすることもあるが、自然体でそうなってしまう事もある。著者の向谷地生良は、そのことにすごく長けた人だろう。

ヴィルジニー・レッソン「２０３３年地図で読む未来世界」（早川書房２０１２年）を読む

2013 年 11 月 21 日

店頭で見つけた本。タイトルが示すように、多様な地図が全体の半ば以上を占めている。多様な統計資料も駆使しつつ、２０３３年を中心にした予測が多様に示される。フランスで編集発刊された本で、世界の各地域の動向、地球全体の動向などが、大変わかりやすく描かれている。と同時に、専門研究書といえるほどの突っ込んだ分析が総合的に展開されている。お薦めできる本だ。

私が知らない世界も多分に含まれており、移民動向や農地争奪動向のように、大変学ぶことが多かった本だ。地球環境破壊の原因として、人口増大を挙げることがしばしばなされるが、それに関わって次のような注目すべき指摘がなされる。

「生態系が悪化するのは、決して人口が増加するせいではなく、むしろ消費のしかたに原因があるのである。（中略）

より長期的に見ると、人口増加がもたらす影響はかなり大きくなるものと見られている。とくに、新興国の都

市に暮らすひとびと、たとえばインドのムンバイ、中国の上海の住民のように、現在の先進国と同等の消費レベルになることを目指している場所ではなおさらである。（中略）

結局のところ、地球を環境破壊から守るには、効果があるかどうかわからない産児制限を行なうより、経済とエネルギーに関して抜本的な改革を世界レベルで行なうことのほうがずっと確実なのである。（中略）

中国を除くほとんどの国と地域において、環境への負荷（Co2 排出量）は、人口より豊かさのほうに関係していることがわかる。」Ｐ１２９

大いに学んだ本だが、一つコメントしよう。叙述の大半が国単位でなされている。近現代になってはじめて地球のほぼ全体を覆った国民国家システムの将来予測をするとどうなるのだろうか。この予測はきわめて困難だろう。しかし、だからといって、国単位の分析叙述を使うことは、国民国家システムの永続性を前提にしてしまうことになりかねない。本書でも頻出するのだが、国民国家システムに起因して多くの問題が登場し、かつ国民国家システムでは対処しきれない問題がますます拡大している。

それに代わるものとして、国際機関・国際組織も登場するのだが、それもまた国民国家的発想を引きづっている事が多い。しかし、そうではないありようが、すでに多様に存在しているし、それがより多様に拡大していくことは予想できる。移民問題や農地争奪問題を含め、そこには国単位ではない人々のつながり、また企業・NGO も含めて、国とは異なる多様な組織がひろがりつつある。とくに多国籍企業は、地球環境への負荷を増大させる重大の要因となっている。また、インターネットシステムは、国境を越えた新たな動向を大規模に作りだしている。

こんな視野を持って将来予測をすると、事態はさらに変わるだろう。だが、予測以上に重要なことは、人々の、そして人々がつくる集団の動き方、暮らし方、生き方のありようであることはいうまでもなかろう。

「ソトコト」９月号 を読む　　2013 年 11 月 07～８日

２．「最近のシェアハウス事情」「ミールシェアリング」「参加論」

前回に続いて、興味深く感じた個所を三つ紹介コメントしよう。

まず「最近のシェアハウス事情」について、colish 代表の小原憲太郎へのインタビュー記事。

「人気のシェアハウスですが、最近は、『どこに、いくらで住むか？』よりも、『誰と、どんなふうに住むか？』を重視して探す方が増えています。何かに共感できる仲間や、目指すものが共通する人が集まって住むことで、コミュニケーションや夢に近づくチャンスが広がるからです。『colish』では、そんなコンセプト型シェアハウス

を掲載していますが、希望する物件がない場合は自分で立ち上げるのもアリ。その仕組みは、①web サイトにログイン。住みたいシェアハウスのコンセプトや募集人数、物件の有無、写真などを投稿。②サイトにアップされ、仲間が集まる。物件を探す。③コンセプト型シェアハウスが誕生！　運営は自分たちで。」Ｐ６３

興味深い。新しい形でのアソシエイション作りともいえるし、一緒に住むことから、アソシエイションがコミュニティ的色彩も持つ。こんなサイトができるほど、シェアハウスないしはグループホームが一般化しているのだ。

これは、考えようによっては、血縁関係のない新しい家族の形とさえいえるかもしれない。こうしたシェアハウスが、さらに外の「人とつながる家」となっていくと、ますます興味深い。

アメリカの例だが、「旅先で各家庭の手料理を地元の人々と共有できるミールシェアリング」Ｐ８８というのが紹介されている。

これまた、ウェブサイトを利用しているが、大変面白い。パック旅行型ではなく、手作り型旅、人とつながる旅として展開することだろう。民泊の一つの形としてもいいだろう。手料理だけでなく、畑・手芸など、何かの体験を共有するのもいいだろう。

次の駒崎弘樹「参加論」も面白い。

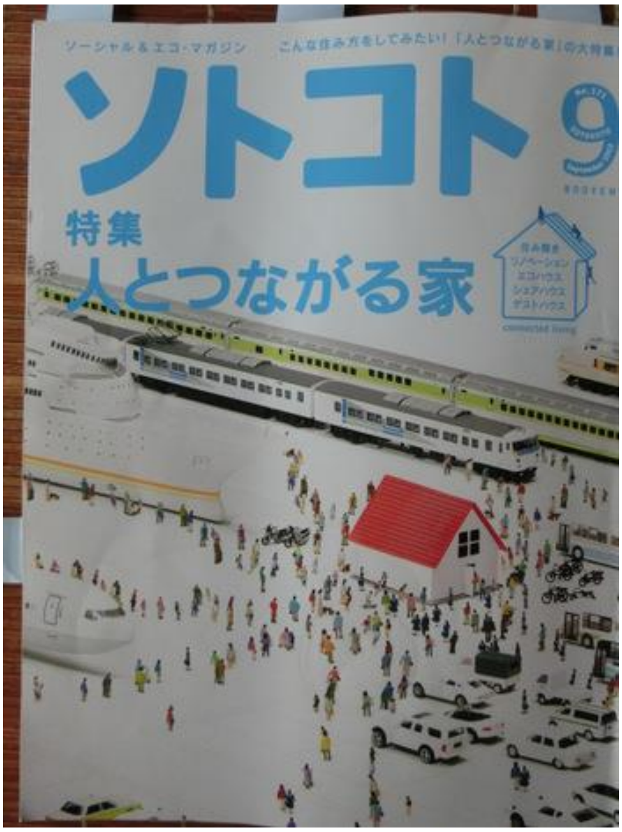
「これまで「議論」の主流は、論破する、つまり相手をやっつけるタイプのディベートでしたが、僕らの世代はどちらかというと、相手を認めたうえでポジティブな意見を引き出す「ポジ出し合戦」になっています。

国家や社会問題の議論は「大文字」の社会の話になりがちですが、それはあまりに僕らから離れている。もっと身近な「小文字］から考えたほうが、社会と接続しやすい。「政治はこうあるべき！」と声高に言っても、結局「今の政治家がダメだから」と大文字の議論に回収されがち。でも、小文字で考えれば、「俺たちがどうすればいいかな」、「じやあ、今度やってみるわ」となり、その積み重ねが大文字社会につながる。

春から『ハフィントン・ポスト』に記事を書き始めています。（中略）記事には読者コメントが付きますが、他のネットメディアのように「脊髄反射罵倒系」コメントではなく、冷静なものが多い。「コメントもコンテンツ」という主義で、編集者がチェックしてリリースしている。うっぷんを晴らし、言いっ放してすっきりの「排泄メディア」に接すると、気持ちや時間が吸い取られる。そんなメディアは、まともな人なら足は遠のくでしょう。」Ｐ１３８

私も、「やっつけるタイプのディベート」「排泄メディア」はもともと好きではないし、「ポジ出し合戦」的なありようは、長く追求してきた。そんなことで興味をひかれる。

１．特集「人とつながる家」



特集タイトルに惹かれて購入した。「こんな住み方をしてみたい！」というキャッチフレーズもある。

１０年以上前、沖縄田舎暮らしを具体化する過程で、このタイトルが示すような家作りを考えていた。グループホームとか今で言うシェアハウスのようなものも視野にいれていて、何人かに声をかけたりもしたが、当時、その機運はなかった。そのころは、高齢者向けの者が主流だった。

しかし、今では若い人を含めて、多様な形が追求されている。授業の未来予測ワークショップで、「２０年後、グループホームがあちこちにでき、何％かの人が暮らすようになる」といった選択肢を出すと、数年前までは、「グループホームって、なんですか」という質問を受けたが、最近では、認知度が高まったのか、若者も知っていることが普通になった。

さて、「人とつながる家」と言うのは、私たちが口癖のように言う言葉で、我が家は多様なつながりを生む家だと自負している。本書では、そんな「人とつながる家」の事例が、「住み開き」「リノベーション」「エコハウス」「シェアハウス」「ゲストハウス」というように、多様に登場してくる。

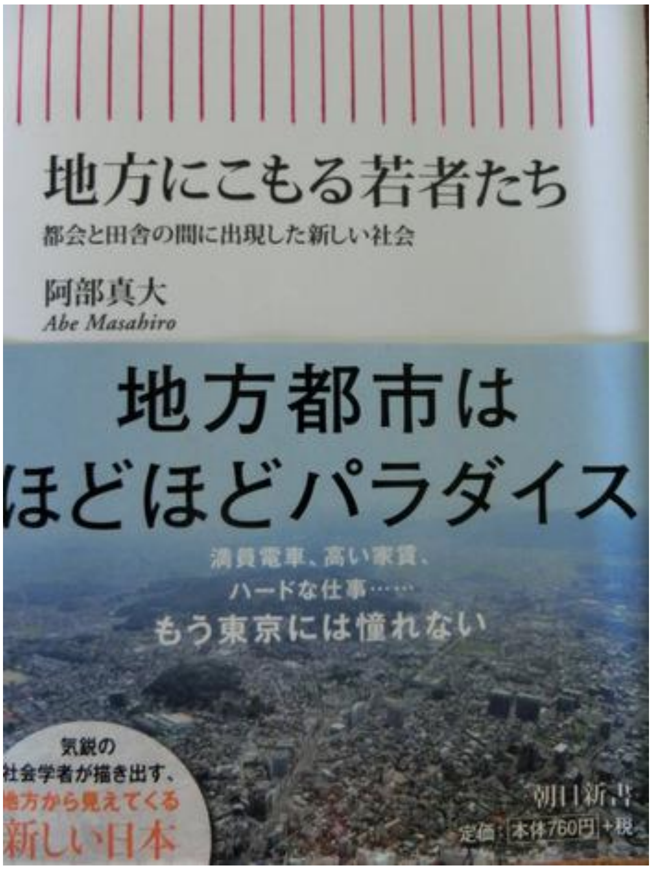
そのなかには、こんな話もある。

「僕らが全部完成させるよりも枠組みだけを造って、あとはその後の人生を歩んでいくなかで、自分たちで造っていけるような家にしました。」Ｐ５２（建築家谷尻誠）

この発想はなかなかいい。日本の建物は、最初に建築した時、すでに完成しているのが普通だ。多少の増改築はあるにしても、最初に造られたものをそんなに変えるわけではない。増改築を前提に建てるわけではない。そして、家の寿命は、３５年とか５０年とか、短い。対照的にヨーロッパの建物には、１００年～３００年以上というのが、ごく普通にある。そうした建物を、居住者が自分に合った風に変化させるというが前提であるように思う。

日本でも、長期間住める家つくりが始まっているようだが、そうしたいなら、最初からそんなことを前提に作りたい。ひるがえって、我が家をみると、実は、枠組みがあって、中を自由に変えられるようなものになっている。簡単に言うと、柱が６本あり、それをつなぐ壁が流し込みコンクリートでつくられ、あとは、容易に変えられるように作られている。一階のセミナールーム兼ライブラリーなどは、大きな箱があるだけの６０㎡ほどの部屋に、書棚が３０余り置かれているだけだ。だから、多様に変化させることができる。

おそらく、建築費を抑えるためもあろうが、建築家の「先見の明」があるのだろう。ということで、あと１０年余りたち、私たちの生活のありように大きな変化を迎えたら、建物の内部構成を変える事も可能だ。この家も建築後９年余りたつが、これから少しずつそんなことを考えていくことになるだろう。いつまでも夫婦二人だけで住んでいるわけではないだろう。



阿部真大「地方にこもる若者たち」を読む

2013 年 10 月 23～11 月 01 日

７.「同化」ではなく「分離」「統合」へ

現代若者について、大人と対比しながら、次のような注目すべき指摘をしている。

「現在こもっている彼らは「同化」ではなく「分離」の段階にある若者たちかもしれない。つまり、社会の多様性を認識したうえで「こもる」という選択肢を選んでいるのかもしれない。その意味で、彼らは既に「統合」に向けた準備ができていると言えるかもしれない。

そう考えると、準備ができていないのは、「こもってないで外に出ろ」と声高に叫ぶような、社会の多様性に鈍感で未だ「同化」の段階にある「大人」たちかもしれないという疑念が生じてくる。つまり「大人」は、彼ら若者と本当に「対話」をする気があるのか、ということである。大人たちは議論をした気になっているだけなのかもしれない。一部、こもる状態からの脱却を試みる若者がいたように、彼らが地域社会にみずからを開き「新しい公共」の担い手であろうとしたとき、つまり「分離」の段階から「統合」の段階へと移行しようとしたとき、「大人」たちは彼らのしようとしている対話の芽をつんでしまいはしないだろうか。大人たちは「ギャル的マネジメント」において示された「人の話をよく開く」という態度で臨めるのだろうか。

実は、「大人」たちは「こもっている」彼らより開かれていないのかもしれない。彼らの姿を通して、「大人」たちは今一度自分たちのことを見直す必要があるだろう。社会に生きる人々の多様性を認識していないならば、大人たちは未だ「こもる」状態にすら達していないのである。」Ｐ１９２－３

「こもってないで外に出ろ」を含めて、何らかの価値観を若者に注入して「同化」しようとする大人たちへの痛烈な批判だ。量的豊かさを求める右上がり成長を「持続」させようとする社会のなかで、努力してガンバレといい、私が言うストレーターコースを歩むことをベストとする「大人」たちのメッセージに対して、新たな生き方を追求しようとする「若者」たちへの強い励ましのメッセージだともいえよう。

だが、「若者」と「大人」を対比させて論じるのは正確ではないだろう。「同化」的生き方に囚われている大人・若者たちに対して、「分離」、さらに「統合」へと、私流に言うと「異質協同」へと踏み出している大人・若者たちへの励ましのメッセージだといえよう。

６．「人の話をきちんと聞く」「ギャル的マネジメント」

前回紹介した、ハイパーコミュニカティブで、集団をまとめる役割を取ることをめぐって、次のように書いている。

「周りの空気をうかがって自分の意見は言わないという「分離」に慣らされている状態では、それで満足しているわけだから、人はなかなか「物足りなさ」を感じることはできないだろう。その状態を「物足りない」と感じるためには、「統合」の状態が実現可能であると、彼ら自身が実感しなくてはならない。そうしてはじめて、「分離」の段階で「物足りなさ」を感じることが可能となるのである。

そのために必要なこと、それは、彼らの話を聞いてあげることである。大学生たちに中学時代、または高校時代にクラスをまとめ、尊敬を集めていたギャルの特徴を聞くと、そのひとつとして「話をちゃんと聞いてくれる」という点が挙げられた。しかも、それにともなって自分たちの意見を変えることも厭わない。謙虚で話をちゃんと聞きながらクラスをまとめ上げてくれるギャルは本当の意味で「頭が良く」、信頼されていたとのことだった（一方、尊敬されないギャルとはうるさいだけで、一方的に自分のやりたいことを押し付けてくる「ヤンキー」タイプのギャルであった）。

つまり、尊敬されるギャルのクラスのまとめ方の秘訣は「人の話をきちんと聞く」という、一見、当たり前のように思えることであった。それが、おとなしい若者たちをぶつからせること、つまり「分離」の段階から「統合」の段階へと引き上げることへとつながっていくのである。」Ｐ１８９－１９０

この叙述を要約しつつ、次のようにも述べられる。

「「ギャル的マネジメント」とは、身近な人間関係の多様性に意識的で、同質的な仲間集団に対する愛着心は強いながらも異質な他者とのコミュニケーションを厭わず、謙虚に集団をまとめあげていくような仕切り方のことを指す。これは、「分離」から「統合」の段階へとステップアップするのに必須な資質であり、つまりは内にこもる若者を外に引き出すコツを導く鍵であり、「新しい公共」の構築への鍵である。」Ｐ１９８－９

前回も書いたが、こうしたマネジメント役をとるのは女性に限らない。著者は、実例は「「まとまっている」と言われている中学や高校のクラス、または大学のゼミを見に行くといいだろう」Ｐ１９０と書くが、受講生が３０～６０人の私の授業で、こうした役割を取るものは、男女を問わず見られ、また授業の進展のなかで、多数の受講生が代わる代わる取っていく光景を目にする。

その点では、ハイポコミュニカティブな若者が、いかにしてハイパーコミュニカティブな若者へとかわっていくのか、についても論じてほしいと著者に期待する。

５．ハイポコミュニカティブとハイパーコミュニカティブ

社会や所属組織における多様性の増大に伴う若者たちの対応についての分析は興味深い。

「①集団の成員の多様性の高まりにより、「空気を読む」ことは次第に困難になりつつある。
②だから、若者たちは「空気を読む」ことに必死になる。
③すると「空気を読める」人間が優れているということになる（均質な集団では放っておけば空気は読めたわけだから、その人が優れていることにはならない）。
④その裏返しとして「ＫＹ（空気を読めない）」が蔑称として使われるようになる。」Ｐ１８１

なるほど、と思わせられる。
こうしたことへの分析枠として、次のものが用いられる。

「多様性への組織の対応の４段階を確認しておきたい。これは、谷口真美がまとめている「ダイバシティ（多様性）・マネジメント」である。
第１段階　抵抗　違いを拒否する　〈抵抗的〉
第２段階　同化　違いを同化させる・違いを無視する　〈防衛的〉
第３段階　分離　違いを認める　〈適応的〉
第４段階　統合　違いをいかす・競争優位性につなげる　〈戦略的〉」Ｐ１８２

異文化接触や多文化について論じる諸論の中では、これに類した整理がよく用いられ、私も参照することがある。
ここでいう、第３段階は、いわば「異質共存」であり、第４段階は、私が長年強調し続けてきた「異質協同」と言う事もできよう。
この枠組みを使用しつつ述べた次の記述は、大変興味深い。

「流動性・多様性の増す現代社会において、若者たちは、「分離」（違う者同士互いに干渉し合わない）の段階のハイポコミュニカテイブ（過小にコミュニケーション志向の）な傾向と、「統合」（違う者同士がぶつかり合い落としどころを探っていく）の段階のハイパーコミユニカテイブ（過剰にコミュニケーション志向の）な傾向とに二極化していると考えられる。前者は男性に、後者は女性に強く見られる傾向であるが、これらはともに他者の違いを認めるものである。」Ｐ１９８

同じことを別の個所では、次のように述べる。

「ハイポコミュニカティブな若者は、地元の友人や家族など、同質性の高い集団への帰属意識を高める。（中略）戦後日本を支えていた超安定社会が崩れ社会が不安定化すると、その社会の成員は流動化し、他者の不透明性が高まる。そこで若者たちは同質的な人間関係に安住しようとするのである（モータライゼーションは、それを物理的に可能にするものであったとも言える）。そしてそれは、（中略）若い男性に顕著に見られた姿と適合する。
一方、積極的に他者に開けていこうとするハイパーコミュニカティブな若者もいる。（中略）他者の異質性を受け入れたうえで、対話を通して「われわれ」をも変化させていくという姿勢をもつ若者たちである。それは、（中

略）若い女性に顕著に見られた姿と適合する。」P183

男女の振り分けについては、ここでいうような傾向があるかもしれないが、男女いずれにも存在するものであり、場によって量的差異というか傾向の違いがあるだろうといえるかもしれない。

いずれにしても、ハイポコミュニカティブな若者とハイパーコミュニカティブな若者が存在することは確かであり、大学授業などでの私の実践の重要な役割は、ハイポコミュニカティブな若者をハイパーコミュニカティブな若者にしていく、ハイパーコミュニカティブな若者の「ハイパー」さをより洗練したものにしていく、といったものだろう。

４.「新しい公共」と「結社」

「新しい公共」に関わって、著者は、次のように、トクヴィルの「結社」概念に注目する。

「トクヴィルはアメリカにおいて「発足するのも発展するのも諸個人の意志次第である結社が無数にある」（中略）ことを発見する。「公道に障害ができ、通行が遮断され、交通が止まったとする。住民はすぐに集まって相談し、この臨時の会議体から執行権ができて、災害を復旧してしまうであろう。関係者が集まる以前から存在するなんらかの機関に頼ることを誰かが思いつくのは、その後である。娯楽に関しても、祭りを一層華やかにし、秩序立って行なうために彼らは相談し合う」（中略）。こうした市民の姿は、非流動的で土着的、排他的な「地域コミュニティ」とは相容れないものである。トクヴィルを読んでいると思うのは、日本がここまで来るのにえらく時間がかかったなということである。」P172－３

私は、トクヴィルについては無知に等しいが、「結社」の重要性を１９８０年代後半から言い続けてきた。たとえば、子どもたちが「学級内クラブ」をつくったり、新しい「サークル」や「部活」をつくる実践をたびたび推奨してきた。また、２００４年に刊行した「<生き方>を創る教育」（大月書店）においても、「結社」を子ども若者が結社をつくりながら、人生創造を推し進める重要性を強調してきた。

ということで、著者がこのように「結社」に注目していることに共感を覚える。その際、私は、「結社」とコミュニティとを対立させずに、コミュニティのなかで多様な結社が渦巻き、コミュニティの新たな創造・活性化へとすすむことを期待している。

その点もからんで、次の調査報告の紹介は興味深い。

「人口 10 万以上の市、人口 10 万未満の市、大都市」といった、「ＮＰＯとボランティアに対する信頼度が高い地域において、「新しい文化や価値観を受け入れる社会」を選んだ人の割合が高くなる傾向があると言えるだろう。このような地域には、多様性を受け入れる素地がある、言い方を変えると「よそ者」を受け入れる素地があると考えられるのである。こうした地域にこそ、今後、多様性を前提とした「新しい公共」が育つ土壌があるのかもしれない。」Ｐ１５８

私が住む沖縄県南城市は、「人口 10 万未満の市」に分類はされるが、つい最近までは「郡部」に分類され、いまでも郡部的要素を多分にもっている。しかし、ＮＰＯやボランティア活動、さらには結社つくりも、盛んになりつつある。
こうした動向が、社会内部で徐々に進行し始めてきているといえるだろう。
その具体的な展望に関わるものを次回紹介コメントしよう。

３.「Ｊポップを通して見る若者の変容」

「Ｊポップを通して見る若者の変容」を述べた第４章の内容は、別の個所で次のように整理されている。

「Ｊポップは、８０年代の反発の時代（ＢＯＯＷＹ）から９０年代の努力の時代（Ｂ‘ｚ)、関係性の時代（ミスチル）を経て、地元の時代（キック）へと突入した。そして現在、「ポスト地元の時代」（ワンオク、ラッド）へと入りつつある。」Ｐ１７０

Ｊポップに全く疎い私には、ほとんど分からないのだが、若者変容分析については興味深い所が多い。たとえば、次のような指摘は注目される。

「管理教育の終焉、地域社会の衰退、労働の脱男性化。この三つの要因によって、地方の若者たちの「敵」であり生きていくうえでの前提であった「大人の世界」は揺らぎ、彼らにとっての社会は不安定なものとなった。」Ｐ１２６
「９０年代のガツガツした自己実現を若者に期待することは、００年代を経た１０年代においては的外れなものであることが分かるだろう。」Ｐ９４
「もはやここに「反発」や「努力」や「関係性」といったかつての若者たちを支えていた「自分らしさ」はない。あるのは壊れてしまった社会とその前で呆然と立ちすくむ彼らの姿である。（中略）
（ラッドの野田洋次郎の歌詞を素材にして）　「上」でも「下」でもなく「横」に行く。この部分だけを見ると、仲間同士でゆるく生きていく「地元の時代」のアーティストと同じく見えるかもしれない。しかし、彼らの言う「横」は、もっと厳しいものであることは、先に見た「きっともっとちゃんと時間をかけて　また　きちっとした計画を立てて」という歌詞からも分かる。そこに予定調和の「甘さ」はない。先に見たワンオクと同じく、目指されているのは「試行錯誤する自分らしさ」だと言えるだろう。」Ｐ１６９

私は、９０年代末から００年代前半に、愛知の大学生、そして００年代半ば以降は沖縄の学生と、授業などを通してかかわり、とくに「人生創造」ワークショップ実践を通して多様にかかわってきた。そのなかで、若者の変容、あるいは非変容と付き合ってきたわけだが、本書が提出するヒントをもとに考えるとどうなるだろうか。機会を見て考察を展開したいと思う。
さて、本書は、こうした把握にたって、次のように提起する。

「もはや若者たちに、そこから外れなくては生きていけないほどに強力に画一的な生き方を押しつけてくる「完成された社会」はない。しかしそこでは、「好きに生きていい」と言いつつ「自己責任」の名のもと若者たちをほったらかしにしている現実がある。その状況を打開すべく生まれつつある「新しい公共」は、まさしく、ポスト地元の時代のアーティストたちのような姿勢を必要としており、だからこそ、「新しい公共」の担い手である若者の共感を得るのであろう。」P170

以前のような形での「画一的な生き方を押しつけてくる」スタイルはないにしても、レールに乗った生き方、ストレーター的な生き方へと若者を追い込む形は依然として残っている。そのレールに残れる人数は絞り込まれ、サヴァイヴァル競争的な様相を呈している。そのなかでそれへの対応に「自己責任」で強迫的に追い込まれている若者がいまだに多いというのが、私のとらえ方だ。だから、著者のとらえ方とは、微妙に異なる。

ところで、ここで述べられた「新しい公共」にかかわる叙述は重要だ。それについては次回以降にしよう。

２．地方若者の人間関係と「地元」

（前回の続き）

「家族関係、友人関係が濃く、地域の人間関係が薄いというのは、地方の若者たちにとって決して例外的なことではなく、むしろ普通のことなのである。」Ｐ４９

そういうかれらにも、「地元」志向があるという。だが、その「地元」感覚は、旧来のものとは大きく異なる点が注目される。

「若者の「地元志向」が強まっていると言うとき、彼らの思い描く「地元」の姿は、旧来の「地元」の姿とまったく違うものになっていることに注意しなくてはならない。彼らがノスタルジーを感じる「地元」とは、モータライゼーション以降の「ファスト風土」、ショッピングモールやマクドナルドの風景なのである（そこは、自分たちの文化を脅かす「大人」がいない、若者たちのパラダイスである）。そして、そんな郊外の姿に若者たちはノスタルジックな気持ちすら抱きはじめている。「地元志向」の問題点について考えるとき、われわれはまず、この前提からはじめなくてはならない。」Ｐ８７

さらに、第四章のコラムでだが、次のように書かれる。

「郊外とはもともと、戦後、田舎のしがらみや都会の喧騒を疎ましく思う人々によって希求されたものでもあった。「ファスト風土」は、その究極のかたちである。だから、若者の愛する地元の姿、ショッピングモールとコンビニとファミレスが立ち並ぶ風景は、戦後日本人の「夢」の集大成とも言えるだろう。日本人は経済成長とともに、田舎でも都会でもない、快適な生活空間として、郊外をつくりだしてきたのである。

しかし、田舎のしがらみがなく、都会の喧騒もないその場所は、同時に田舎のコミュニティもなく、都会のイノベーションもない場所であった。その代わり、その場所には、ただひたすらみずから（とその家族）の生活に

しか興味のない「私生活主義」が蔓延していった。

田舎や都会と郊外の最大の違いは「他者への想像力」の有無である。形は違えど、田舎と都会には、自分とは異なる「他者」がおり、彼らとうまくやっていくことが、そこで生きるうえでの絶対条件だった。しかし、郊外には「他者」がいない。いないというより、むしろそれを「ノイズ」として排することを目的として、同質的な人々が集まって郊外はかたちづくられてきたのである。」P152-3

旧来のものとは異なる新たなコミュニティ作りを期待して、郊外生活を始め、実際コミュニティ的性格の濃いありようの創造が存在していることを見落としてはならないと思う。とはいえ、確かに、本書がいうような流れが強く、主流になった郊外が、特に大都市郊外に多かったとはいえるかもしれない。

沖縄の那覇郊外の西原、名古屋郊外の赤池で生活した私は、その双方を体験した。コミュニティ作りに結構かかわりたい私は、沖縄ではある程度満足し、愛知では、声をかけても反応がゼロに近くて、驚いた経験をもっている。そして、現代の若者の場合について言えば、やはり本書のいう傾向が濃厚なのだろう。

それでも、今私が住む南城市の大里グリーンタウンとかつきしろ団地は、コミュニティ作りに熱心で、つきしろなどでは、若者の熱心な動きがあり、青年会が新たに結成されている。沖縄の地域つながりの象徴の一つがエイサーなのだが、こうした動きは、本書からみると例外的なのだろうか。

さて、地域の人間関係が薄い若者でも、子育てを一つの例として、「地方の若者は、あるライフイベントをきっかけに、地域社会の人間関係を築く可能性がある」Ｐ５７と述べられる。

（続く）

１．ショッピングモールと地方若者

店頭で見つけた、阿部真大「地方にこもる若者たち」（朝日新聞出版２０１３年）で、読みやすい新書本だ。

大変すっきりと書かれているので分かりやすいが,「そこまですっきりと言えるの？」なんて、思わず言ってしまいそうなほどだ。

いずれにしても、ここ２０年余りの若者の変化を踏まえた現代若者の特性と今後について考えるうえで、ヒントを与えてくれる本だ。インタビュー、あるいは人気を得たＪポップの歌詞分析などをもとに書かれた社会学からアプローチした本だ。舞台に登場するのは、岡山県倉敷のショッピングモール周辺の若者たちだ。

ショッピングモールやコンビニ、Ｊポップには縁遠い私には到底できない研究作業に基づいている。何回かに分けて紹介コメントしていこう。

まず「現在編　地方にこもる若者たち」で、「第一章　若者と余暇――「ほどほどパラダイス」としてのショッピングモール」「第二章　若者と人間関係――希薄化する地域の人間関係」「第三章　若者と仕事――単身プア／世帯ミドルの若者たち」だが、各章のサブタイトルが章内容を簡潔に表現している。

とくに、第一章、第二章を中心に紹介しよう。

「商店街とは、若者にとって、地域社会における人間関係を学ぶ場所であるとともに、「よく分からない人」に出会わないと生活必需品を手に入れることができない「ノイズ」だらけの場所でもあった。

だから、９０年代以降の日本において、商店街が前近代の「遺物」として捉えられ、若者が「郊外」へ、「ショッピングモール」へと向かっていったことも理解できるだろう。モータライゼーションとは、そうしたノイズに満ち溢れた人間関係からの解放でもあったのである。

商店街のない地方はこうして、人間関係に関わるノイズの極めて少ない場所＝郊外へと変化した。若者が生活必需品を買うのは、スーパー（中略）や小規模なショッピングセンター（中略）、そしてコンビニとなった。ショッピングモールと同じく、そこに行くのにも自動車が使われ（中略）、着いてしまったら、（大規模ショッピングモールほどではないにせよその人は匿名の存在となることができる。そんな生活環境のもとでは煩わしい人間関係に悩まされることもないだろう。」Ｐ５２－３

「地方の若者の地元の風景にはもはや「商店街」はない。代わりにあるのはきれいに整備された道沿いに広がる自然の風景であり、観光用に開発された名所である。しかし、それらは大規模ショッピングモールやスーパーやコンビニと同様、モータライゼーションの生み出したものなのである。（中略）

彼らの現時点での生活の満足度にとって重要なのは、友人関係と家族関係のふたつの人間関係なのである。」Ｐ５４－５

私が住む南城市付近でも、本書にある岡山ほどでないにせよ、その方向への流れは感じる。このあたりで大規模ショッピングモールと言うと、南風原ジャスコだ。他の大規模スーパ―と比べて年齢層が若いことは感じていた。

ついでながら、我が家近くにはコンビニがない。外からきた若者から「どこにコンビニがありますか」とよく聞かれるが、返事が難しい。そういえば、脱線話だが大学生協の店舗もコンビニ風になっていることが多い。農協スーパーに出かける事が多い私と若者との生活感覚にはかなりの距離がある。

竹内常一・佐藤洋作編著「教育と福祉の出会うところ」山吹書店２０１２年を読む

2013 年 10 月 14～16 日

３.「逃げる」こと　「距離をとる」こと

本文内容とのかかわりは薄いが、最後に一点述べたい。

本書が紹介している諸活動のなかで、関係を築きあげつつ自分なりの前向きの歩みを始めたKさんの次のような振り返りの言葉にかかわって、である。

「人間関係、就職、勉強、どれだけ逃げてきたかおもいだせないくらい逃げてきました。この「逃げる」という習性が原因で、困難に立ち向かい、達成感を得る機会が少なく、その結果として、自信を持つことができませんでした。」Ｐ２１２

私は、「逃げる」ということを消極的否定的に語られていることが気になる。個人レベルで、しかも「心」レベ

ルで、人々を支配することが強力になっている今日、「逃げる」という行為をとおして、ヒト・モノ・コトから一定の距離を取り、それらによって支配されることを避け、自己防衛することは、多くの「強くない人」にとって重要かつ必要なことだ。

にもかかわらず、「逃げるな」「ごまかすな」「まともにぶつかって行け」「挑戦しなさい」というメッセージが強力に与えられ続けられている。そのなかで、必要な距離をとることさえ「逃げる」ことだ、というレッテルが貼られ、「逃げる」自分を否定的にしかとらえられない若者を増やしているのではなかろうか。

こうした論理は、強者の論理でもある。弱者は「逃げる事」「距離をとること」で自己防衛しつつ、他者とのつながりの中で、強者の論理に押しつぶされないように生きているという現実が広く存在しているのだ。

「逃げる」か「立ち向かう」か、というオールオアナッシングな二者択一ではなく、あいまい・ファジーなところがあることを受け入れつつ、関係と自己を築いていくことが求められよう。

そうしたありようも、かけがえのない生き方なのだ、と考えられないだろうか。こうしたとらえ方から、Ｋさんの振り返りをとらえなおすとどうなるだろうか、と私は考えてしまう。

３０年ほど前の私自身、相談された時に、「逃げるな」「ごまかすな」「まともにぶつかって行け」「挑戦しなさい」というメッセージを提起して、多くの失敗をしたという苦い思い出をいくつも持っている。

２．若者たちの人生創造

前回述べてきた歴史過程は、子ども・若者が自分自身の人生創造主体ではなくさせられてきたこと、人生創造が競争的自己責任的孤立的なものとなり、共同的なものではなくさせられてきたこと、という事態と結びついてきた。

それは、竹内がいうように、「社会が「学び」を組織することを放棄して、それを「学び」を欠く学校にまるごと委ねたという問題である。そのことは高校の教育の普及に反比例して青年団による「青年の学習」が消滅した」過程でもあった。

そこで登場してくる「福祉」的要素のある実践の特質について、佐藤洋作は次のように述べる。

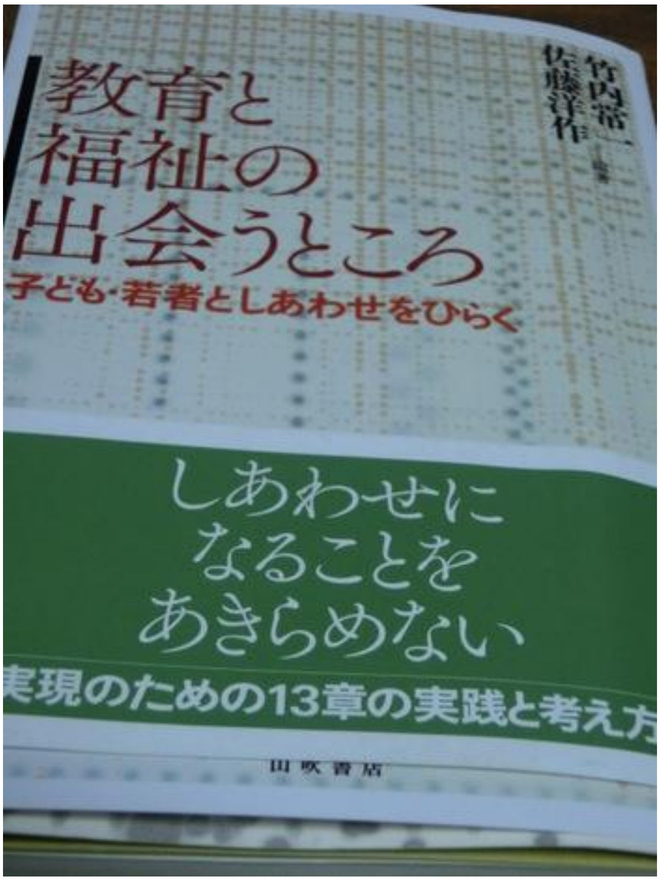
「若者自立支援とは、個々の若者に既存の労働市場への一方的な適応を迫る支援ではなく、だれもが人間らしく生き、働くことができる社会にむけて、若者がその創造主体となるべく教育的アプローチを基底にした支援でなければならない。若者自立支援とは、若者たちが相互応答的で自治的な関係をとおして自己責任イデオロギーを溶かし、他者信頼、自己信頼を形成する居場所をつくりだすことであり、その居場所をベースキャンプにして若者たちが自分たちの社会を創造していくのを支えることである。私たち支援者が、その社会創造のプロセスに若者の協同的他者として参加することであると言うこともできる。私たちの若者支援の現場は福祉と教育と労働か出会う、若者たちの居場所である。」ｐ２３０

ここに書かれていることは、私が沖縄にそくして「沖縄おこし・人生おこしの教育」を主張してきたことと響き合う。

実践例としては、高橋薫「関係性を回復する支援～サポステを訪ねてくる若者たち」、篠崎修「困窮家庭の子どもの学習支援～自治体とＮＰＯの協同事業」を、興味深く読ませていただいた。

加えて、「正規の教育コースからドロップアウトした若者を対象とした職業学校である」「デンマークに発し、ドイツにも広がっている「生産学校」」の事例、そして韓国の「職業高校などからドロップアウトしていく若者などに対して、ワークショップなどの創造的な活動をつうじて、自発的に学ぶことで問題を解決していく若者を育てることがめざされている」「ソウル市立青少年職業体験センター（ハジャセンター）」の事例の紹介は大変興味深い。（佐藤洋作執筆個所　Ｐ２１７～２２３）

また、高橋報告で、「子どもや若者たちの“心”が壊れているのではない、人と人との関係性が壊れているのだ」（Ｐ１７１）という個所に、私はおおいに共鳴する。



１．所有欲求と存在欲求

副題が「子ども・若者としあわせをひらく」とあるように、この世代が生きていくうえでの協同活動を描いている。その際、竹内常一の言葉を借りれば、「財を「もつ」ことを願う「所有欲求」を原理とする」のではなく、「人間で「ある」ことを願う「存在欲求」を原理」Ｐ２３２，とすることを基本的な立場とする。

それは、次の事態と結びつけて語られる。

「１９６０年の安保改正反対闘争の後に登場した所得倍増計画は、「存在欲求」原理にもとづく社会と教育に代えて、「所有欲求」原理にもとづく社会と教育を選択し、経済成長に対応した人的能力の選抜・選別を教育の基本目的とした。ということは、それ以後、公教育は企業国家の要請に応えてマンパワーの選抜と競争の教育を組織するものになったということである。」Ｐ２３２－３

ここでいう「所有欲求」は、金銭と商品の所有という形をとるのが、通常となった。自分たちで自分たちのために何かを作り出すというのは例外になったのだ。

そしてそれまで、地域と家族の教育活動の中で展開されていた時間と内容が、学校に移されてきた。さらに、ある程度は、企業のなかに移された。その結果、地域と家族の教育の時間と内容が著しく減少した。家族について、より厳密に言うと、教育熱心になり教育時間が増加したが、それは学校が指示する教育内容に沿って、子どもたちが努力することを、家族が支持推進する、つまり学校を支えるものとしての家族の教育が登場拡大したのだ。

増加した家計支出の多くは、教育費に向けられた。増加がなく、格差の底に置かれた家族とその子どもには支出できる教育費が少なく、「教育の空白」が生じる。そこに福祉的取り組みを求める要因の一つがある。
また、学校から企業へという流れ（レール）が標準化され、その道を歩むこと、できるだけ早く走ることが子ども・若者も求められる。それを私は「ストレーター」という用語と使って論じてきた。そのレールの上を子ども・若者が確実に早く歩むことを支えるのが教育熱心家族の役割とされた。
だが、そのレールの道から外れる子ども・若者はどうしたらいいのか。レールに「戻す」ことしか正当化されない状況が長く続いた。しかし、そうでない道を歩むことをサポートする動きが、根強く広がり深まってきた。そうした子ども・若者、そしてかれらをサポートする動きは、例外的なものではなく、むしろオールタナティブな流れを創造さえし始めている。
そうした流れの一つとして、本書に収録された興味深い実践報告がある。私にとって、その中の教育にかかわる報告は、すでに目にしたものが多いが、福祉関係のものは、新しく読むものが多い。そこで福祉関係を中心に紹介コメントしていきたい。

人生・生き方シリーズ２　『人間関係・家族・移住・多文化』　ＨＰに掲載

2013 年 10 月 10 日

私たちのホームページ「浅野誠・浅野恵美子の世界」http://asaoki.jimdo.com に掲載した。自由にダウンロードできるので、関心あるかたはご覧いただきたい。
８月に掲載した、シリーズⅠ「人生後半期の人生創造」につぐもの。２００６年から２０１３年にかけて、ブログなどで書いたものを編集した。なお、２００７年春に発刊した「沖縄田舎暮らし」（アクアコーラル企画）と重なりがあるものがごく一部にある。
同書を、移住の参考にした方が何人かおられる。そして、その後も意見交換をする人がいる。移住を自然との交流に力点を入れてする人が多いが、私は人間関係も大切にしてほしいことを繰り返し語ってきた。今回はそうしたことについて書いたものが多くなっている。
目次を紹介しておこう。

１．人間関係・組織
「ネパール教育支援の会」１０周年に寄せて
沖縄の「人間関係資本？」の豊かさ
高齢者のグループ活動参加――一斉型と自発選択型
注目　「まったり」と「緊密」の中間
性同一性障害　社会の側の障害
しゃべりすぎる人
中高年カップルの苦難物語　酒・力の夫と口達者な妻
いじめ・いやがらせに、秘密を守るのか、叫ぶのか

秘密の過剰が心理戦争を促進する場合
「～～だ」と断定的に言ってばかりいる人の問題
よく演説する人は、対話が下手
ミスマッチ解決の方法
真面目な人　距離を適切に保つこと
「幸」と「無事」　異質協同型幸福　「幸福の社会理論」を読む
怒鳴る人から逃げる　向き合うこと
わかりやすくアドバイスに満ちた青木省三「ぼくらの中の発達障害」筑摩書房２０１２年

２．結婚・家族

人々は、職業追求と家族形成をどのように展開していくのか
小貫雅男・伊藤恵子「菜園家族物語」（日本経済評論社）を読む
生涯未婚率増加報道
家族個人化タイプ・・・ＮＨＫ本を読む１
老後の生き方と家族・・・ＮＨＫ本を読む２
５０年前の家族の形を標準とすることの問題性　宮本本３
「皆婚社会」の崩壊　変わる結婚と家族　宮本本１８
平均結婚継続年数　家族のライフスタイル化　宮本本２０
「近代家族の揺らぎと家族の関係のゆくえ」　生活本９
「生活単位のあり方を純化し縮小する」流れ　生活本１２

３．地域・共同生活

ネパール教育支援の会
「チュラサン」アパート　新しい共同生活のありようの創造
シマ（共同体）の神々に個人として祈ること
移行する際にかかわる集団という視点１　大学・会社などの例
新たな生活指導実践　移行する際にかかわる集団という視点２
日常生活の満足度高、身近な人と楽しく・・・ＮＨＫ本を読む４
都市の「過疎化」「高齢者」「人的資本」　宮本本３９
「地域循環居住」　超高齢社会（東京大学）本３

４．世代間

森ぶんめい「詩集　夜のカナリアたち」ゆるり書房２００９年
「今時の若いものは・・」？　世代間のずれと協同
管理職業務　タテ型社会とヨコ型社会　フィンランド例
ベテランが年功序列式に管理職になることをめぐって
ベテランが管理職ではなくて、専門職ベテランが管理職若手を応援する仕組み

５．移住・田舎暮らし

第一回「人生ユンタク」　「田舎暮らし・移住生活」の報告
移住・田舎暮らしへのステップ
大量の「沖縄移住」動向と人生創造
近年の沖縄移住の特質
移住の多様性
玉村豊男「田舎暮らしができる人　できない人」（集英社２００７年）を読む
移住の成否の鍵　人々とともに物語をつくっていくかどうか
移住者だけでかたまることの良し悪し
「沖縄移住＝リッチなリタイア団塊」は本当か
シニアの移住
「都会から田舎・自然へ」という近年の動きについて考える
ヤマトンチュだけでかたまるのは好きではない
移住は、人々との新たなつながりをつくること
放送大学教材（テレビ番組）撮影での話題　「移住・定住」
海の見える家を求める、ということ
人口移動　若者と人生後半期　宮本本３７

６．移民・多文化

移民と生き方創造―――世界のウチナーンチュ大会を見て
卒業生のハンセン病差別問題ＤＶＤを見る
「外国人との付き合い」調査・・・ＮＨＫ本を読む３
困難を「外国人」に押し付ける「日本人」・・・多文化本４
多文化のとらえ方二つ　二つの多文化主義　多文化本５
多文化共生をめざすカリキュラム・・・多文化本６
多文化教育とシティズンシップ教育・・・多文化本７
豊かな蓄積をもつカナダの多文化教育・・・多文化本８
外国人よりも日本人の課題としての多文化共生・・・多文化本９
「外国人として生き抜くことを支援する場所」・・・多文化本１０
「共生社会形成をめざす日本語教育の課題」・・・多文化本１１
「共生社会形成をめざす日本語教育の課題」（続）・・・多文化本１２
学校内外での実践・・・多文化本１３
グローバル化と多文化社会　宮本本４０

過剰な繁忙・ストレスを避ける裏ワザ　2013年10月09日

かなり脱線する。8日までの記事ともかかわりがある。

長時間勤務や繁忙と、そのなかで受ける過剰なストレスを減らすやり方には多様なものがある。今回はその裏ワザだ。公式には認められてはいないが、サバイバルしている人は、結構いろいろな裏ワザを駆使している。それができない「真面目（過ぎる）」人は、途中でダウンし、休職退職になってしまうことさえある。

私が見聞した裏ワザを紹介しよう。

１）外回りの営業社員。昼過ぎのように、訪問しても不在や嫌がられる時間帯は、どこかで休憩する。外回りだからバレないし、誰もがしているから注意を受ける事も少ないという話だ。我が家周辺では、午後１～２時ごろ、農道の木陰で、車をとめて昼寝しているスーツ姿の人を見かけることがある。

２）会議がかちあった時、「別の所用がありまして」と、双方の会議担当者に連絡を入れて、双方とも休む。

３）気分転換の業務を作り、ストレス解消をはかる。今ではどうかはわからないが、９時過ぎに学校訪問すると、校庭の草花の手入れに熱心な校長に出会うことがよくあった。

４）会議で議論が紛糾し、堂々巡りになる時は、「内職」にいそしみ、メンバーが疲れたころを見計らって、解決策を提案する。意外に、提案が通ることが多い。

５）居眠りを上手にやる。同僚に「この人、疲れすぎだから、しばらく起こさないであげよう」という気持ちにさせるように眠る。

６）仕事を早目に切り上げて帰るために、『正当性』がある所用を用意しておく。

こうしたことをうまくやってきた人が、身体をこわさず、時には出世している場合がある。「正直者は馬鹿を見る」というわけだ。

といっても、こうした裏ワザではなく、直球勝負で、長時間労働・繁忙・ストレス過剰をなくす取り組みを、組織としても個人としても行うことが正道だ。

「生活指導研究」３０号を読む

8. ストレスを減らすこと避けること　2013年10月07日

連載２では、「４０代５０代教師のストレス・コーピング」について考えた。その後の連載の瀧澤論文について考えた時にも触れたが、実践者自身が過剰なストレス状態に置かれ、自分自身もケアが必要なのに、その状況を避けたり変更したりすることに向かわないで、ストレスに耐えて頑張るという体質が広く存在していることを問題にしなくてはならないと思う。そこに、私が「人生後半期の生き方」を問う起点の一つがある。

過剰なストレスに対して、自分なりの「ストレス・コーピング」で耐え抜いて、「サバイバル」しようとする人は、個人的にか、あるいは人間関係的にか、それなりの強さをもっている。無論、強さをもちきれずに、「破たん」

する人もかなり存在する。破たん直前で避ける人もいるだろう。私は、その部類だろう。

物質的には、すでに過剰に豊かなのに、さらなる豊かさを求めて、「景気回復」「高収入」を求めて、ストレス過剰の流れのなかに入り込んでいく人たちが、過剰なほどいる、という現状を考えてみる必要がある。無論、最低限の生活の中に居る人も多く、格差社会の様相が強まっている。その格差をなくすのではなく、拡大する方向に動いている流れのなかから、なかなか抜け出さない状況がある。

重要なことは、その流れがレール化され、それに乗って進むのが当然だという考え、あるいは習慣になっている状態があることだ。中毒とか依存症と言ってよいかもしれない。そのレールをなくす社会的な取り組みが必要だが、むしろ強化する動きが強まっている。グローバル経済競争に勝利する必要がある、企業は生き残りをかけた戦いをしている、そこに尽くす個人が必要だ、というわけだ。その中で、数値目標、数字による管理が進行している。それに応えるかどうかは、自己責任だ、というわけだ。それだけに、個人が、レールを避けたりストレスを避けたりすることは、「御法度」になっている。

だが、冷静に周りを見渡してみると、人間関係・組織として、あるいは個人として、ストレス・コーピングし、レールから卒業・脱線しようとしている人はかなり多いし、ごく少数を除けば、若いうちにか年齢を重ねてからかは別にして、そうしている。だが、それに「敗北」「不道徳」だというレッテルを貼りつけて、「やましい」気持ちにさせる力学も強い。だから、それをおおっぴらには語らない。

そういう状況を超えて、ストレス過剰を生むようなレールから卒業・脱線し、さらにはレールをなくすような社会的取り組みをおおっぴらに展開する方向を広げたいものだ。

７．40 代 50 代夫婦の問題　2013 年 10 月 06 日

この連載の２で検討した山岡雅博論文に触発されて考えたことだ。この論文とは直接のつながりはない。山岡論文をよみながら、思い浮かんだテーマ。

人間関係を豊かにもちながら、更年期を乗り切り、充実した人生後半期を迎え始める妻、課題（仕事）中心で生き、おうおうにして精神的孤立状況に陥りがちな夫という組み合わせの、４０代５０代カップルの場合、どうなるのだろうか。

こうした事例は、教員でなくても、双方とも勤め人の共稼ぎ夫婦においては例外的ではなく、かなり存在しているように思う。

この時期は、１）職場では中堅・ベテラン、中間管理職―管理職的業務の遂行、２）子どもの進学就職結婚問題―巣立ち＝夫婦だけ家族へ　３）更年期障害、といった人生ステージにあり、私がいう人生後半期を歩みだす時期だ。仕事を中心にした課題関係では、責任ある行動が要請され、繁忙を極める例も多い。人間関係も、３０代におけるものとは異なる構成になることも多いし、親子関係の組み換えも要請される。

そのなかで、課題関係に人間関係が圧迫される事態がおうおうにして登場する。夫婦関係にしても課題関係中心になり、人間関係が圧迫される例も多い。課題関係を中心に動く夫に刺激され、妻も課題関係中心になる例も

あろう。そこで、夫婦間がギクシャクしたものになり、対立を顕在化させることもある。それを避けるために、対立を表面化させないようにする、あるいは相互間の距離を広げる例も出てくる。その結果、協力関係どころか意思疎通関係さえ築けないまま、時を経過させるだけになる。

たとえば、更年期で悩む妻を理解することができない夫、更年期障害で苦しみ、夫のことを「忘れる」妻、あるいは自分自身の更年期変調に気づかない夫、といった事例が、疎遠な夫婦関係のなかで進行したりもする。

危機的事態をくぐりぬけた場合に、夫婦間で話し合い協力関係を築けている場合、多少の困難は乗り切っていけるだろう。そのように夫婦の人間関係の新たなステージを築ける場合にはよいが、そうでない場合、疎遠なままで、夫は夫の、妻は妻の、それぞれの世界で生きていくという例も見かける。

その中で、いずれ定年退職を迎える。退職後の設計を考えて、早期退職する事例が、とくに女性に多い。退職後の人生についての希望と計画をつくることが早目にできるかどうかは大きい。よく見る例は、妻の方は、自分なりの計画と準備をしているが、夫は、退職にいたるまで何の準備もしていないというものだ。その時、すでに新たな歩みを始め蓄積を作り始めている妻と、これからどうするか、を考え始める夫という形が登場する。そうした際に生まれる一つが、「濡れ落ち葉」関係だろう。

教員男性、とくに管理職の余命が短いといわれるが、そのことで、矛盾状態が早期に「解消」してしまうという不幸な構図をなんとかしなくては、とさえ思う。そのためには、退職してからではなく、人生後半期である４０代５０代から意識的に取り組みたい。

２．４０代５０代教師のストレス・コーピング　2013年9月３０日

山岡雅博「公立学校における『人事考課制度』の問題と生活指導実践者の姿勢」のなかの、「Ⅱ－１．教師のストレスとストレス・コーピング」は、大変興味深い。

要点個所を紹介しよう。

「女性教師は40歳代まで母親として家庭をマネジメントすることが、「女性教員の中年期危機」に陥る可能性を持ちつつ、同時にそのやりくりのために「対人依存型コーピング」を獲得していっているということが言える。女性教師が50歳代になると休職率が低下することの背景には、子育てに関する相互支援を基本にした人間関係の強化が見えてきた。ところが、50歳代・男性教員は孤立化する傾向が見られ、休職率は増加している。」Ｐ４７

「50 歳代の男性教員は生活指導や雑多な校務など、一人で仕事を抱え込み、孤立し、病んでいく傾向がある。逆に、50歳代女性教員の元気の秘訣は、仲間に相談し、頼ることにあった。「メンタルヘルス対策の最終まとめ」でも、「職場での良好な人間関係が十分に形成されず、対人関係上のストレスがある場合には、職場において孤立するようになり、職場における業務やコミュニケーションについて、うまく対応できない状況が生まれやすい。」と指摘している。生活指導や授業研究などの教師としての課題なども吐露し合い、支え合えるような同僚の存在は、教師としての専門性を高めるためにも必須のものである。」Ｐ４７

著者は、こうした状況に対して、同僚性とか、職場での協同、依存関係などを中心に論じていく。

ここでは、男性教師と女性教師との違い、30 歳代、40 歳代、50 歳代といった年齢の違いが注目される。そこには、職場問題だけでなく、ジェンダー問題が刻まれていることも注目されている。

様々な調査データが駆使されているので、是非お読みいただきたい。

私は、これらの指摘に共感する。これらの指摘は、仕事と人間関係、ないしは仕事と協同・依存ということを軸にしている。

共感すると同時に、私の希望としては、関係者当事者がさらに次の点にも視野を広げて考えていくことを期待したい。

「ストレス・コーピング」という言葉は、ストレスの対処、処理、対抗といった意味だが、いずれもストレスに「打ち克つ」というニュアンスをもつ。その際、個人として「強くなる」ことで対抗する、あるいは協同・依存を通して「強くなる」ことで対抗するというニュアンスになりやすい。

そうではなくて、ストレス自体が不可抗力の存在ではないし、適切な量ではなく、過剰なストレスが日常化していることそのものを問題にする、という視野があっていいのではないか。適切な量以上のストレスを受けることを問題にする、ないしは拒否する・避ける、という視点があってよいのではないか。それは、個人としても、共同的人間関係としても、である。

現代社会では、過剰なストレスを当然のこととして受けとめる事が、余りにも普通になり過ぎているのではないか。そのため、自分でも、協同的関係においても、その過剰ストレス自体を拒否し、適切な範囲内にストレスを押しとどめる事が、課題として登場することが余りにも少ないのではないか。ストレス過剰を批判的に見る人自身が、ストレス過剰の中におり、ストレス過剰を前提として行動しているのではないか、ということを検討してみてはいかがだろうか。「過労死」問題が象徴的だが、それに近い状況に多くの人がいながら、それを止める動きが思ったほど大きくならないことを、もっともっと問題にすべきではないか。

こうした状況の中で、自分の、あるいは自分たちの人生の主人公として、自分自身、あるいは自分たち自身がなりえていない状況を問題にしていく必要がありそうだ。たとえば、どうして「そんなに働き過ぎるの」という問題を、社会の問題としてだけでなく自分自身の問題として設定できる姿勢・力量の確保が求められよう。

もう一つ、本論文では、６０歳までに焦点化されているが、この問題を、６０歳代７０歳代までを視野に入れて、あるいはそれらの世代との比較のうえで検討すると、どうなるだろうか。たとえば、日本では、６０代になると、長寿の道を歩む人が多いが、それ以前に短命で終える人がかなりになると言う、国際比較調査の結果をどうみるか、という問題をも視野に入れた議論の展開が活発になることを期待したい。

乾彰夫編『高卒５年　どう生き、これからどう生きるのか』を読む

2013 年 09 月 03 日～８月２９日

３．沖縄の若者たち

２回にわたって紹介してきた記述は、東京の事例をもとにしている。では、私が日ごろ接している沖縄の若者たちはどうだろうか。特別に調査したわけではなく、私の見聞・体験をもとにしたもので、深められてはいないが、今後考えていくうえでのきっかけにでもなるだろうから、綴ってみることにする。

沖縄での若者たちには、全国的に現れている近年の変化と同様なものがありながらも、東京を含めた全国的傾向とは異なる特質がある。しかも、それが長期にわたって継続している。

まず学卒と同時に「（１）仕事への安定的な移行を手がかりに見通しをもつ若者たち」は、決して多くない。人口比率で言うと、１０％もいるだろうか。１０％よりはるかに低いだろう。

対照的に、「（２）「趣味」や「仲間」を「導きの糸」とする若者たち」「（３）移行過程への安定した「見通し」をもつことが難しい若者たち」が圧倒的に多く、わけても（３）が多い。かといって、暗いイメージを濃く帯びている例は多くはない。

「（２）「趣味」や「仲間」を「導きの糸」とする若者たち」という分類でいう「趣味」「仲間」という事例について。いずれも、よく見る例だろう。とくに部活仲間の事例は多いだろう。

また、「仲間」というと、同世代に限定されるイメージだが、同世代に限らない多様なつながりの中で考えてみる必要がありそうだ。転職を含め多様な付き合いの中で、多様な人間関係を生み育み、それらをもとにして、数年～１０数年かけて、職業的安定に到達する例が多そうだ。パートなどの非正規雇用と言う事で言うと、２０代だけでなく、３０代でも女性を中心にかなり多数が存在する。

（１）の事例に近いと思われる公務員や教員でも、数年以上かけて正規雇用になる人が多く、３０代の事例は珍しくない。だから、彼らも、まずは（２）（３）に分類され、正規雇用をえる時期になってようやく（１）に該当するともいえよう。

もう一つの特質として、模索過程に、地域移動を含む比率がかなり高いことがある。本調査では微々たるもののためか、分析対象としては登場していない。沖縄では、半数以上がそうで、地元に残る比率は高くない。

こうした状況の中で、沖縄の若者たちは、どのような「導きの糸」を見出しつくりだしているのだろうか。とくに、職業的なレベルだけでなく、家族形成を含めた人間関係構築が、大きな比重を占めていることに留意していく必要があろう。

最後になるが、この膨大な長期調査には、調査対象者が作り出す物語に対応して、調査者側の発見変化の物語が大量に潜んでいることが推察できる。（１）の流れをかなり有利な位置で歩んできたと推定される調査者たちが、対象の若者たちの物語に出会う中で遂げた変化に、私は興味を抱く。

２．コミュニティと人生創造

そして、次のようにも分析する。

「専門性を媒介としたコミュニティに包摂されることで、比較的安定的なかたちで、職業的な移行や結婚・家族

形成への「見通し」を獲得している者、職場コミュニティが移行過程を支えるものとなっていない状況の中で、趣味や「やりたいこと」、「地元ネットワーク」などを通じてつながっている表出的な関係に依拠しながら、日々の仕事を乗り切り、職業的な移行への「見通し」を得ようと模索している者、結婚や家族形成の課題を軸に、移行過程をまとまりのあるものとして描こうとしている者、不安定で断片化された移行過程において「見通し」を失いそうになりながらも、卒業後も続く地元の友人関係の中で、お互いの状況を「確認」しあいながら、日々の生活を乗り切っていこうとする者……。そこにはかれらがおかれている客観的条件に規定されたさまざまな分岐が存在していた。」Ｐ６６－６７

　こうした移行の現代的特質について、次のように書く。
「旧来の「集合的な社会的アイデンティティ」が「弱体化」する中で、多くの若者にとって「大人」への移行過程は、自らの判断と選択に基づき「一人ひとりが独自に創り出」さなければならないもののように映っている。そのプロセスには、ジェンダーや出身階層など、社会階層に由来する規定や制限が引き続き存在しているにもかかわらず、もっぱら個人の選択や努力の結果、すなわち「自己責任」によるものとして受けとめられてしまう。後期近代に生きる若者からが直面するそのような困難を、ファーロングらは「後期近代における認識論的誤謬」と概念化した。」Ｐ６７－８

　最後に紹介した文は、私流に言うと、「人生創造」である。それを「自己責任」に押しとどめる傾向を批判しているのだ。そうではなく、仲間・組織といった人間関係を豊かに築きあげつつ進める事を、１０数年にわたって私は提起してきた。たとえば、「＜生き方＞を創る教育」（大月書店２００４年）に書き、ここ１０数年、学生を中心に授業の場などを通して、人生創造ワークショップを行い続けている。
　また、学生を含む若者たちが、多様な仲間・組織をつくりだすことを促進してきた。身近な例をあげよう。私の授業では、受講以前は相互関係がほとんどない受講生たちで、グループをつくって多様な活動を展開するようにすることを、ごく日常的にしている。先日、数年前のある受講生が、あの時グループを組んだ人たちで飲み会に行ったが、大学で学科・サークル仲間以外で飲み会をしたのは、あの時だけだった、という話をしてくれた。つい最近の授業では、できたグループでいっしょに、糸満の漁協のセリイチの自主的調査に出かけたという類いの例が続出した。
　本書で示された調査は、大変有意義であるが、それがどのような実践的提起へとつながるかにも、私は関心をもつ。その点で、次の指摘に注目したい。

　「乾と児島は、従来の職場・地域コミュニティが脆弱化し、移行過程の個人化・断片化がいっそう進行しているように見える状況で、若者たちの移行のプロセスを支える「媒介的コミュニティ」の役割の重要性と、その意識的な組織化の必要性を強調している。」Ｐ６８

　ということで、こうしたコミュニティに関する調査にも期待したい。本書のなかでたびたび登場する「地元つながり」もその一例だろう。

１．高卒の若者たちが「大人になる」三類型

執筆者のお一人からいただいた本だ。正式には、「若者たちが今＜大人になる＞とは」という副題があり、この７月に大月書店から出されたばかりだ。

東京の高校卒業した若者数十人を６年間にわたって、東京都立大学大学院の乾ゼミ院生たちが、数回にわたってインタビューしてきた膨大な記録をまとめたあげたものだ。こうした記録が日本では大変少ない中、一定量のデータを蓄積し分析を加えている点で貴重であり、示唆の多いものだ。

年を追っての調査報告書をたびたびいただき、このブログでも何度かとりあげコメントしてきた。それらを含んでまとめた「若者生き方シリーズ」は、私たちのホームページ「浅野誠・浅野恵美子の世界」http://asaoki.jimdo.com でダウンロードできるので、関心をお持ちの方は、ご覧ください。

今回の本は、最後の調査を含んだ全体をまとめ上げたものだ。

これまで同様、紹介コメントをしたいが、長過ぎたこれまでを反省して、今回は、タイトルテーマを包括的に整理している、「第１章　「大人になること」について　木戸口正宏」に絞って、その紹介と、その分析枠組みを沖縄の私周辺の若者たちに即して考えてみたことを中心にコメントしていきたい。

まずは、分析の大枠を紹介しよう。

調査対象になった若者たちを、

（１）仕事への安定的な移行を手がかりに見通しをもつ若者たち

（２）「趣味」や「仲間」を「導きの糸」とする若者たち

（３）移行過程への安定した「見通し」をもつことが難しい若者たち

という三類型に分けて、分析をすすめる。

その「移行の諸側面に対する「見通し」のもち方の違い」については、次のように書く。

「大学・専門学校など、高等教育を経験し、一定の専門性を有する仕事への移行に足を踏み出した対象者たちが、移行の安定性を「導きの糸」に、比較的早期に人生の長期的な「見通し」を獲得する傾向にあるのに対し、高校卒業後、すぐに職業的な移行に足を踏み出した対象者たちは、移行過程の当初には、長期的な展望をもちづらく、どちらかといえば短期的な「見通し」のもとで、「仕事への移行」を乗り切ることを余儀なくされていた。かれらの多くは、仕事以外の領域に、「居場所」や「やりたいこと」をもち、それらを日々の生活を乗り切る「導きの糸」として、なんとか移行過程に対する「見通し」を保っていた。その中で、少しずつ日々の就労を積み重ね、「成長」の感覚をはぐくむことを通して、それを土台に人生に対する新たな「見通し」を描こうとしていた。

これに対して、就職してすぐの離職、非正規雇用での就労など、高校卒業後、職業的な移行の過程の早期に、さまざまな「つまずき」に直面した対象者たちは、短期の仕事を転々とする、あるいは就業と失業とを行ったり来たりする中で「経験」が断片化され卒業五年目の時点でも、人生の「見通し」をもつことが難しい状況におかれていた。「彼女らの危機は、仕事の不安定さ、家族の貧困、家族の葛藤などがただ折り重なっているだけでなく、相乗的に作用している」と乾が指摘するように、仕事への移行の「つまずき」は、家族間葛藤を再燃・強化し、そのことがまた、彼女らが安定的に就労を継続するための、身体的・精神的な条件を失わせるという悪循環をも

たらしていた。」Ｐ６２－３
（次回に続く）

「人生後半期の人生創造」ＨＰにアップロード　2013 年 08 月 08 日

今では読むことが難しくなった、過去のホームページ（２００３～２００７年）とブログ（田舎暮らし・人生創造・浅野誠）に書いたカテゴリー「人生・生き方」を編集し、最新のホームページ「浅野誠・浅野恵美子の世界」に掲載する作業を進めている。

その第一弾として、「人生後半期の人生創造」を完成させた。字数でいうと１３万字を越える結構な量になった。ここ１０年の私の中心テーマだったから当然のことだろう。なお、私の個人史である「私の生き方・人生」カテゴリーの編集作業は来年になるだろう。

お読みになりたい方は「お気に入り」欄にもある「浅野誠・浅野恵美子の世界」http://asaoki.jimdo.com をクリックして、ファイルをダウンロードして下さい。

では、目次を紹介しよう。

浅野誠人生・生き方シリーズⅠ「人生後半期の人生創造」２０１３年８月発行
１．人生前半期
４０代女性の生き方を聞いて
４０歳前後の人々の人生創造
近藤郁夫さんが示した「中年期をどう生きるか」
「人生おこし」に関心をもつ若者が読む　私の新刊本への反応
ライフコース前半期の変化と人生創造・・・・・・・宮本本１１

２．人生後半期
人生後半期の創造的生き方とつながり
人生後半期をどう創造するか
人生後半期向け書籍のいろいろ　　ビジネスマン戦士向け
「人生後半期の人生創造」の自主集会で出された興味深い多様なメモ
人生後半期の人生創造のテーマいくつか
私の今後数年間はどうなるでしょうか？
金と時間にとまどう団塊世代から、人生創造する団塊世代へ　感想「第一回団塊フェスティバル」
第二回「人生ユンタク」　「人生後半期の人生設計」の報告
人生後半期スタートのころ　いかに切り換えられるか
日本生活指導学会での私の提案　　「人生後半期の人生創造」１

「人生後半期の人生創造」2　　働きたい６０代　悩む５０歳
「人生後半期の人生創造」3　　学習・学校と仕事の並行
「人生後半期の人生創造」4　　大量の新しい形の移住
「人生後半期の人生創造」5　　先進国人間の集団的生活習慣病
「人生後半期の人生創造」6　　地域と家族の改革的創造へ
「人生後半期の人生創造」7　　生き方創造と生活指導学会
「人生後半期の人生創造」8　　私個人
ライフコースの後半期　生涯学習　年齢規範　・・・宮本本１２
人生後半期の年齢区分

３．高齢者・老い
アッチェリー、バルシュ「ジェロントロジー　～加齢の価値と社会の力学～」（きんざい２００５年）を読む
老いの自覚　「身の引き方」
「アンチ・エイジング」という言葉にひっかかる
老いの迎え方
老いへの関心　多様な６０代男性・・・・「老いのかたち」を読む１
「新しい年齢イメージ」・・・・・・・・「老いのかたち」を読む２
自然に老いる・・・・・・・・・・・・・「老いのかたち」を読む３
老いのイメージ・・・・・・・・・・・・「老いのかたち」を読む４
祖父母と孫・・・・・・・・・・・・・・「老いのかたち」を読む５
老人と周囲の人間との関係・・・・・・・「老いのかたち」を読む６
人付き合いが下手な日本人男性老人・・・「老いのかたち」を読む７
進歩・発達とは異なる意味を見出す・・・「老いのかたち」を読む８
男女共学風カップル・・・・・・・・・・「老いのかたち」を読む９
段差のつまずき　老人会加入年齢
「長寿化」への疑問　・・・・・・・・・・・・宮本本７
「前期高齢期」　「向老期」・・・・・・・・・宮本本１３
「新しい高齢期像」　逆算式年齢の私の提案・・宮本本３１
高齢期の暮らし方　男女差・・・・・・・・・・宮本本３２
高齢者は誰と住み、どういう介護を受けるか・・宮本本３３
高齢期の経済生活　・・・・・・・・・・・・・宮本本３４
高齢者が働く　「生涯現役社会」・・・・・・・宮本本３５
仕掛ける看護　もう一肌脱ぐ高齢者像・・・・・超高齢未来本２
老人像　社会的弱者と元気で『老いない』活動型・・・生活本１０
西垣千春「老後の生活破綻―身近に潜むリスクと解決策」を読む
老年的超越としての、ボケ＝恍惚的境地　嵯峨座晴夫さんの提起

４．癒し・スピリチュアリティ
「癒し」は、個人の内面にだけ焦点化しないように
魂・癒しと政治・科学
〈いやし会〉にて思ったこと
聖地と王朝支配
フィンドホーンワークショップ
スピリチュアリティと科学
大林太良「日本の神話」（大月書店１９７６年）に触発されて
身体と自然、八光舎主との会話
熊野の神々
初詣はヤハラヅカサと濱川御嶽
我が家の火の神―ヒヌカン
オーストラリアジャズと韓国シャーマンの音楽共振
今年の私のエンジェルカード　Spontaneity
私は感性派？！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 久高での気づき１
エンジェルカード　Power ・・・・・・・・・・・・・ 久高での気づき２
すばらしいドアがどんどん開いてくる夢・・・・・・ 久高での気づき３
身体性　感情性豊かなワークショップ ・・・・・・ 久高での気づき４
みぞおちあたりのチャクラが開いた感じ ・・・・・ 久高での気づき５
個人・人間関係と癒し ・・・・・・・・・・・・・・ 久高での気づき６
聖地の消費と継承創造　コミュニティと個人　・・・ 久高での気づき７
「前世は有名人だった」「ソウルメイトは有名人だ」という人
「ユタとスピリチュアルケア」を読む１
スピリチュアルケア　自然との和解　時間との和解・・ユタ本３
ケアする人自身がケアされる・・・・・・・・・・・・・ユタ本４

５．死
『誇りを持ってわきへどけ』　死にかかわるケストナーの言葉
死　あるがままを受け入れる・・・・・・・・・・　米沢慧「自然死への道」７
葬送の変化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　宮本本３６
『別様な自己』と「自己同一性」　「死は生の一部」・・・　生活本１１
帯津良一さんの壮大で勇ましい死生観
６．追悼
近藤郁夫さん逝く
城丸章夫さんとの思い出
平良勉さんの思い出
愛知の教育での、「当たり前」という異世界の創造――角岡正卿

坂本光男さんの追悼・・・追悼の辞を書くことが多くなった

７．人生創造
「人生創造」ワークショップ
単行本『〈生き方〉を創る教育』の執筆
人生再創造を考え始める人
アンソニー・ギデンズ『モダニティと自己アイデンティティ』を読む
競争・格差社会での「人生選択」から「人生創造」への転換を
名古屋管理職ユニオンの方々との「人生創造話」
第三回「人生ユンタク」　「仕事起こし・人生起こし」の報告
生活・生き方・人生は研究対象か　生活指導学会討論にかかわって
身近なことから歴史を発見する「〇〇さんの人生」ワークショップ
生き方・人生――ブログ記事の振り返り・再発見
宮本みち子編著「人口減少社会のライフスタイルを読む１
「ライフコースの非定型化（脱標準化）」なのか　・・・・宮本本８
工業化時代のライフコース≒ストレーターコース？・・・・宮本本９
「ライフコースの個人化」と人生創造　・・・・・・・・・・宮本本１０
ライフスタイルの主体的な構築　・・・・・・・・・・・・・宮本本３０
生き方の修正か構造的転換か　・・・・・・・・・・・・・・宮本本４１最終回
新たな年齢区分　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・「超高齢未来」を読む１
「生活モデルの揺らぎと生涯像の主題化」と人生創造　・・・生活本７
ベック　「第二の近代」「個人化」「自分自身の人生」
「「する」ではなく「いる」」と「なる」　上野圭一・辻信一「スローメディスン」の示唆

徒然草から学ぶ清水義範「５０代から上手に生きる人ムダに生きる人」三笠書房２０１３年

2013 年 08 月 04～10 日

３．友情は男性の若い時代を起点にするのか

示唆に富む点が多い本書だが、次の個所は、私とは意見が異なるようだ。本文をいくらか紹介しよう。

「一般的に言って、友だちができ、熱い友情で結ばれるのは、若い時ではないだろうか。思春期の頃、青年の頃は、気のあう者、刺激しあえる者、好みの似ている者と大いに語りあい、友情を感じて思わずスクラムを組んでしまったりする。文学について、哲学について、恋について、夜通し語りあってもあきなくて、これぞ友情だなあ、と思ったり。

若い時にはああいう友情が必要である。友だちがあって、ありとあらゆることについて熱く語りあうのは、刺激に満ちていて思想が成長する。自分とは違う個性と才能にぶつかっていくことで、大きな影響を受けるのは貴重な体験だ。友ありて、我が青春は実り多し、ということになる。

しかし、人格はもう完全にできあがり、今さら何物かに変化しろったって無理だよ、という老境に入って、友だちなんて必要なものだろうか。生活していれば知人はできるのだが、今さら人格に影響を与えてくれるような友人はほしいだろうか。完成されてしまった人格は、もう変えてほしくなんかないものである。老人に友は不要、なんて私は考えてしまうのだ。

言うまでもなく、若い人とは考えもおもしろがることも違いすぎていて友だちになろうにも共通点がなさすぎる。ならば、同年配なら友人になれるのかというと、老人はみなもう固まってしまっていて、人との触れあいで刺激を受けて変っていくということがあまりない。双方が別々の個性を持っていて頑固だから、つきあっても生まれてくるものがないのだ。老人会の意見のぶつかりあいによるいざこざを友情とは言うまい。

だから老人に友だちはもういらないか、と私は思う。だが、世の中にはそうでない人がいることを私は知っている。若き日の友情、というものにやけに情熱的になる老人もいるのだ。

そういう人というのは、今新しく友だちをつくることには熱心ではない。昔友だちだった者と熱く交わりたがるのだ。」Ｐ２３６－７

「だが根本的なところでは私は、兼好のように、友だちに多大な期待をしちゃ失望も大きいよ、と思っている人間かもしれない。友だちとは、自分に都合のいい人間のことじゃないよなあ、とか。

若い時には友だちはとてもありがたいものである。未熟な者同士で、しかし少し個性の違う人間が、刺激しあい、思いがけないような考え方を教えてくれる。それによって、理想的な場合には両者が、ぐんぐん高みに登っていけるのだ。若さには、友だちは何よりの栄養剤だ。

だが、年を取って、もう六十歳も過ぎてみると、友だちとは、我々も若かった頃があるという単語のための存在のようでもある。俗に言えばくされ縁でつながっているだけだったりして。

老人になってくると、私もそうだし、友だちのほうも、だんだん元々の人間に戻ってくる。そうそう、ずーっとこの人はこうだったよ、という気がするばかりで、今さら刺激を与えあって変わるはずもない。

人間、誰とも関わらずに黙って生きていたら、孤独と退屈でおかしくなってしまうものであり、そうならないためには友だちがいるといいよ、ぐらいに思うだけだ。」Ｐ２４４－５

私が、これらの文に違和感を覚えるのは、次のような点だ。

１）男性事例に基づいた論だということ。女性の場合、かなり異なるだろう。女性、とくに人生後半期の女性たちを見ていると、若い男性のものとはかなり異なる友情を形成している。

２）友情の起点を、若い時代に置いている。若くない、たとえば、４０代以降、私流にいうと、主に人生後半期に起点がある友情があるのではないか。それは、ここに書かれている友情とはかなり異なる。

３）「人格」が「完成されてしまった」人を対象にしている。人生後半期にあっても、「人格」（私はこういう言葉は使用しないが。なぜなら『人格』というと『完成』というイメージにつながりやすいからだ）は変わるものだ。それを生みだすような出会い・発見がたくさんあると言うのが、私の体験だ。

４）『５０代から上手に生きる人　ムダに生きる人』という書名だが、私なら、それは人生後半期の人生創造と

して考え、その中では、人生後半期でどのような友情を築いていくかは、決定的と言ってよいほど、重要なテーマなのだ。

５）若い男性を起点とする友情が、本書のように有効性をもたない状況が、６０代以降の男性の「寂しさ」「孤立」を生むことが多いのではないか。そうならないように、人生後半期の男性が、友情をいかに創造していくか、が重要なテーマなのだ。その友情は、著者がイメージしているような、１０代２０代における同世代間同性間に成立するものとは限らない。人生後半期における友情は、異性間異世代間にもつくられていくものも結構多いのではないだろうか。

これらは、私の体験に基づくもので、考えの違いは、おそらく著者や兼好の体験とは大きく異なるから生まれるものだろうと思う。

２．遺産　大病　老後以前に好きなことを始める

前回に続いて、共感を持った個所をいくつか紹介しよう。

遺産について。

「遺産も、あんまりないほうがさっぱりしている。子どもたちに何がしかのものを残してやれば、みんな喜んで死後も慕ってくれるだろう、などと考えてはいけない。死んだ人のことなんてみんなすぐ忘れるし、そもそも死後も慕われたいという願いがバカバカしい。それよりは、生きているうちに価値あるものをどんどんやって、ありがとうと感謝されるほうがマシだ。老後は気前のいい爺さんになるべきなのだ。と、ここまでは兼好の説く、財を残して死ぬのは虚しい、という論である。」Ｐ７３

私自身も、この方向にシフトしつつある。

さらに、私自身も最近始めた「老前整理」に関わって、次のように述べる。

「食う寝るところに住むところ、だけあればいいのである。そのほかに、集めたものを置いとくところ、まで持ってどうなるというのか。それはゴミためのの中に暮らす、ということにほかならないのだ。一人で、あっさりと生きよう。」Ｐ８２－３

「老前整理」を始めてまだ１年にもならないが、さらに加速しなくてはと思うこのごろだ。

大病になった時のことの叙述も興味深い。

「もし大病にかかってしまったらどうすればいいのか。その時は、ここが到達点か、とあきらめるばかりだ。できることはちゃんとやり、できないことはあきらめて、運命を受け入れる。そういうことの可能な大人になるために、そこまで、学び、苦しみ、悩んで、迷って生きてきたのだ。そして、あなたは大人としてできあがった。あとの人生の財産は、その大人だってことなのである。この年までまともにがんばってきて、もう失敗や敗北を恐れる気持ちはないよ、というのが逞しい生き方というものなのだ。」Ｐ９０

なかなか逞しい主張だ。興味がそそられる。だが、そんな達観に至ることのできる人はまだ少数派だろう。私も揺れているが、まだ詰めて考えていない、というのが率直なところだ。

次の叙述は、４０代半ばからを「人生後半期」とし、人生の次のステージについて考えよう、と提起した私の「人生後半期の人生創造」と響き合う。

「老後にやることがあって退屈しないですむ人というのは、そうなる前に既に始めているものなのである。いくら仕事が忙しくたって、意欲のある人ならばちゃんと好きな遊びもしている。そういう甲斐性のある人だけが、老後もやるべきことを持っているのだ。定年になったら趣味を見つけよう、なんて考える人は、きっと何をやってもおもしろくなく、続けられなくて、退屈すぎてのたうちまわるのだ。いつか始めよう、と考える人は、結局何も始めない人なのだ。いつか、というのは今ではなくて、この先、ということなのだから、ついに始めるべき時をつかまえそこなう。やる人というのは、やりたいなと思った時にすぐ始めるのだ。時を待ってはいけない、と兼好は説く。」Ｐ１６２－５

「５０代で始めないで、定年後になってから始めよう」という人は私の周辺にも多い。さらに「生涯現役」といってずっと働き続けようとする人も結構多い。

１．老人の学習

書店で見つけた本。発売２カ月で５刷だから、けっこう読まれているのだろう。私がここ 10 数年追求している「人生後半期の人生創造」との関わりも深く、興味深い個所も多いので、いくつか紹介しよう。

徒然草からネタを得た本なので、兼好の話から始まる。

兼好は、「何らかの考えから出家はしたが、寺院や宗派には属さず、山野に閑居し、一人で仏道に精進した」「世捨人」（Ｐ２３）だ。そして、徒然草は、「間違いに気づいている私を見習え、と言っているわけで、つまりは自慢なのである」「お叱りエッセイ」の「元祖」ということだ。だが、「権力の頂点にいる人」ではない世捨人が書いたので、「自慢話に価値がある」（Ｐ２７）という。「日本の随筆文学は、時流から外れた人がうまーく自慢を書く、という伝統の中にあ」るとのことだ。Ｐ２８

定年７０歳の職場で、定年まで１４年残して５６歳で退職し、フリーになり「山野に閑居」、今風に言うと、「田舎暮らし」を始めた私にも、何かつながるものがありそうな気配を感じる。

いくつか注目点を紹介しよう。

まず「老人」、私流にいうと、「人生後半期」における学習について、次のように述べる。

「何かのタメにする学習、欲望のタメにする努力を叱っているのだ。出世したいがために、何かの資格を取ろうとしてみたり、立派だと言われたいために、英検に挑戦したりするのは、老人にはもう似合わないよ、ということだ。（中略）これは、五十代以降の余生をどう過ごすのがいいのか、という話につながる。その年になれば、今さらガツガツ学んでもそう出世はしないだろう、ということを言っているのだ。そういうゆとりのない学習はも

うやめたほうがいい。だから、人間もある年齢になったなら、遊びとしての学習をするのがいいのだ。」Ｐ３３

「近頃の言葉に、自分磨きとか、自分発見というのがあって、若い人などが魅力を感じているらしい。本当の自分の能力を見つけて、磨こう、というセンスだ。あの自分磨きは、つまらないものである。自分にある特別な能力を見つければ、くすんでいる今の人生が突然輝きだし、自信を持って生きられる、という一種の迷信だ。そんな能力はないと思ったほうがいい。能力があるならそれはおのずと現われるのだから。現われない能力をなんとか捜そうとする努力、そんなのは悪あがきというものだ。兼好が、ガツガツ学ばずゆったりしようよ、と言っているのが、自分磨き伝説の否定ならば、私は同意する。自分を磨くなんていうみみっちいことのためでなく、学習は遊びでしょう。」Ｐ４３

刺激的な指摘だ。

私は、３０年近く前、「遊びの契機」と「必要の契機」について提起した（詳細は、拙著『子どもの発達と生活指導の教育内容論』明治図書１９８５年参照）。ここでいう「タメにする学習」が「必要の契機」に基づくもので、「遊びとしての学習」は、「遊びの契機」に基づくものといえよう。学習にしても仕事にしても、この二つの契機がかかわる。「必要の契機」に基づく「タメにする学習」を否定するのではなく、「必要の契機」と「遊びの契機」を関わらせることが重要だという視点を提起したのだが、若者にしても「遊びの契機」が不可欠であり、人生後半期にあっても「必要の契機」があっていいと考える。

そうではあるが、今日「遊びの契機」が過小評価されていること、そして、人生後半期にあって、「遊びの契機」をなくした学習では、すすんでいかないという本書の指摘は、意義あることといえよう。

「私の現在までの人生について発見したこと、考えたこと」　看護大学レポート

2013 年 07 月 22～26 日

看護大学での授業『教育学』の最後のレポートで、この授業を通して「私の現在までの人生について発見したこと、考えたこと」を個条書き風に書いてもらった。

なかなか興味深いので、代表的なものをいくつか紹介してみよう。

※　なお、読みやすくするために、文意は生かして、文に多少の修正を加えたものがある。

※　このレポートでは、次に、「私のこれからの人生で追求したいこと」を書いてもらったが、それは次回紹介しよう。

・自分にとって当たり前のことが、周囲の人とは全然違う場合も多くある。

・人と意見が違うときも、すぐにその考えを否定するのではなく、一度、「そういう意見もあるのか」と受け入れ、自らの意見と比較しながらより良いものにしていく。

・グループ討議での他人の意見は、私の今までの価値観とは異なっていてとても新鮮に思えた。

・討論の場でも討論に参加せずに勝手に自分の中で意見を考え、それを発表するする気はないことが多かった。この授業を通して、自分の意見の重要性や大事な一意見であることに気づいたので、これからは積極的に発言し

ていきたい。

・これまで私は目立ちたくない性格で、自分の思っていることを表現してと言われても言葉にできないでいた。この授業で意見をもとめられるようになって、周囲が喋りづらそうにしていると、なぜか自分の意見はすっと出てきた。

・強く思ったのはいかに今まで小さな世界にいたかということである。私は自分の身近なところしか見ていなかった。

・自分の価値観に固執してきた。

・さまざまな経験をしてきて、今の自分があるんだということを発見できたし、そのことについて考えさせられた。良くも悪くも結局は楽しい人生を歩んでいるんだな、と感じた。

・私は他の人と比較して、何かを特別に大切にしたり、モットーにしたりすることがなかったこと。

・ストレーターコースといわれる人生から外れてはいるが悪くないと思った。

・ワークショップを通して、他の人からの自分に対するイメージを聞くことで具体化する自分の特徴（性格・雰囲気・癖など）

・あまり物ごとを深く考えすぎてネガティブになってしまう傾向が私にはあるから、ある程度は気楽にポジティブに考えたほうがいいということを発見した。

・自分という存在が個人や地域、沖縄のためにどのような役割を担って、どのようなことができるのかを考える機会になった。

・自分の意見を発表することで素敵なアドバイスをもらい、その倍以上に素晴らしい意見となること

・自分がやりたいと思うだけでまだまだ行動力が不足しているところがある

・沖縄から出て、もっと色々な土地で、多くの人と出会う。

・私たちは本当に良い環境に暮らしていることを発見した。国際会議の授業で様々な国の問題について学ぶことができた。治安の悪い地域であったり、発展途上の地域であったり、世界ではそういった環境の中で暮らしている人たちがいいることを知った。

・外国＝先進国として考えていて、発展途上国に目が向いていなかった。

・自分から積極的に行動するということが少なく、誰かがやるから大丈夫という精神でいたが、それだと何も見えてくるものがない。

・ボランティア活動など、外での活動にほとんど参加してこなかった。

・この人が大切だと思っていることに対し、否定しない。でも、自分が間違っていると思うことに対しては、相手に自分の気持ちを伝える。

・看護師を目指しているが、他の職種と連携する必要がある。自分の意見を述べ、他の人の意見を聞き、何がその人にとって最適なのかを話し合わなければならない。そのために、今のうちから意識し、自分と少しでも違う意見があればそれについて深く考え、少しでも柔軟な考え方ができるようにしていきたい。

・外国人と交流をもつようにしたい。

・人に任せっきりにするのではなく、自ら考え行動していけるようになる。

・自分が何を大切にして生きていくかを追求したい。

・自分とは何かを追求したい。これまで自分の考えがあまりなく、人に合わせることが多かった気がするからである。自分とは何かを追求し、自分の考えをしっかり持てる人間になりたい。

・私は物を悲観的に考えてしまうので、どうすれば前向きに、楽観的に考えていくことができるのか、ということについて追求していきたい。

・どうすれば授業が楽しくなるか、教室の配置や自分が学校を建てるならこうゆう学校を建てるとか考えたので、これからの人生でも楽しさを追求していきたい。

・積極的に外での活動に参加したい。

・自分がやってみたいと感じたら、その目標に向かって、自分の最善を尽くす。

・周囲の看護に対する熱意を感じていたが、私自身看護をしたいという気持ちは入学当初からもっていず、どこか反抗的だった。しかし、いい意味で周囲に流されてみたいと思う。否定ばかりでなく肯定していきたい。看護の良さを見出していきたい。

・セルフケア能力を高めたい。

・語学に興味を持って勉強する（特に、方言、英語）

・将来設計が本当に計画通りに進んでいくのか

・健康の大切さやあり方をどのように広め、理解してもらえるかを追求したい。

看護の仕事へと進もうとしている若者らしく、誠実で前向きな姿勢を強く感じさせられる。
彼／彼女らの今後に期待したい。何と言っても、注目すべき若者たちだ。

宇野重規・田村哲樹・山崎望『デモクラシーの擁護――再帰化する現代社会で』ナカニシヤ出版２０１１年　を読む

2013 年 07 月 06～9 日

※　連載だが、1~3 のみ掲載

３．社会の再帰性　個人の再帰性

「再帰性」と言う用語は難しいが、本書では次のような定義がとられている。

「「再帰性」とは、（中略）ギデンズの定義に従い、「社会の実際の営みが、まさしくその営みに関して、新たに得た情報によってつねに吟味、改善され、その結果、その営み自体の特性を本質的に変えていく」こととして理解しておきたい。」Ｐ１９

「再帰性」は、自身による意思決定を不可欠の要素とするが、それは次のように、社会だけでなく個人においても求められる。

「再帰的近代化は、依拠すべきものがないなかでの意思決定の必要性をもたらし、その結果として、諸個人の決定や判断への負担を増大させる。再帰的近代化の下での意思決定の必要性について、ベックは、「かっては家族集団や村落共同体のなかで、あるいは社会階級や集団の力を借りて克服することができた生活歴上の機会、脅威、そして両義性は、ますます諸個人自らによって知覚され、解釈され、対処されなければならない」と述べる」Ｐ２５

そして、過渡期である現代は、次のような特性をもつとされる。

「階級や核家族といった産業社会の諸制度が完全には解体せずに残存している現代社会において、人々は、産業社会におけるライフスタイルと、リスク社会における個人で選択するライフスタイルという、深刻に対立しあう生活リズムの狭間に立たされるのである。」Ｐ１８－１９

ここでも述べられているが、個人にとっての再帰性は、次のようにライフスタイルの選択創造となる。

「ギデンズもまた、「伝統や確立された習慣は、生活を比較的固定的なチャンネルの内部で組織する」が、「モダニティは個人を複雑多様な選択に直面させ、さらにそれは根拠づけられていないゆえに、どの選択肢を選ぶべきかについては、ほとんど助けてくれない」と述べている（中略）。したがって、諸個人は、日々の生活におけるさまざまな事柄について、すべて意思決定を行わなければならない。それは、文字通りの意味での「日常生活」にまで及ぶ。すなわち、

今日、人々は、いつ、誰と結婚するかだけでなく、そもそも結婚するかどうかさえも意思決定しなければならない。「子どもをもうけること」は、ほぼ自然の成り行きと思われていた過去の多くの状況と明らかに異なり、婚姻との結びつきをもはや必要とせず、男女双方にとって重大な、また難しい意思決定となっている。人は、「愛情関係」とは何か、どのようにすればそれを最もうまく構築できるのかをしっかり把握するだけでなく、自分の「セクシュアリティ」がどのようであるかをさえ決定する必要がある。（中略）

ここでのポイントは、このような意思決定は強いられるものでもあり、それゆえ、諸個人にとっての負担が重い、ということである。なぜならば、再帰的近代化の下で発生する諸問題には、「明確な解決方法が」存在しない（中略）うえに、判断・決定の前提として、依拠できるものが存在しないからである。ベックがいうように、「いかなる決定的解決策」も存在しないにもかかわらず、「永遠に意思決定を行わなければならない」のである。」Ｐ２６－２７

このように再帰性は、私がくりかえし論じている「人生創造」に深くかかわる。それは個人が自分で意思決定するという豊かさと困難さとをあわせもつものだ。そこにもかかわってデモクラシー論が登場するが、次回にしよう。

２．若者の人生創造と｢外からの｣枠

前回の引用文のなかの、
「わたしたちに「外から」意味を与えてくれた、かつての超越的宗教や伝統といったものは失われてしまった。わたしたちの行為に「外から」枠を与えてくれるような、確固たる原理のようなものも見出せない。（中略）わたしたちがいかに不安定な基盤の上に、自らの社会を営んでいるか、思い知らざるをえない。」
について、もう一つコメントを加えよう。

この｢外から｣の枠に依存することは、「教育実践の自己展開サイクル」が不成立することだと、私は論じた。それは、当初の論の対象にした教師だけではない。広げて言うと、１９７０年代以降の若者たちも、私がストレーターコースと名付けた、レールのような｢外から｣の枠に沿って歩み、自己展開サイクルが不成立であり、本書の用語を使えば、再帰性が見られるわけではなかった。

だが、近年、レールのような｢外から｣の枠は、その絶対的なパワーを減じてきてきた。その中で不安定で不安な状態が高まり、自己の未来創造・人生創造から｢逃走｣する動向が広がり、それを指して、私は｢未来からの逃走｣と名付けた。（詳細は、浅野誠『＜生き方＞を創る教育』２００４年大月書店参照）

そして、私は、そうした事態に直面している若者対象に、本書がいう「自分たちのことは自分たちで決めていかなければならないこと」ことをサポートする意味で、若者向けの人生創造ワークショップを、この１０数年重ねてきた。

本書の紹介に戻ろう。第一章には、次のような記述がある。

「後期近代は、自明と思われてきたすべてのものが選択性を帯びる時代として、わたしたちの前に立ち現れるのである。わたしたちは後期近代において、｢当然と思われていたすべてのものが選択性を帯びた世界でどう生きていくべきか｣（中略）という課題に直面することになる。従来の慣習によるガイド（導き）は限定的なものとなり、原理的には、将来は無数のシナリオが立ち現れる時間となる。それは人々にとって既存の習慣や伝統、制度、規範などからの「自由」をもたらすが、同時に人為的不確実性が濫造される世界であり、人々は否応なく、より「前向き」で「再帰的（reflexive）」な主体となることを強要される世界でもある。」Ｐ１３

この記述を日本における｢青年期｣の人生創造にかかわらせて考えると、この記述は１９６０年代にひとまずは広汎に見られたことである。その後、上で述べたように｢ストレーターコース｣が「従来の慣習によるガイド（導き)」となっていき、この記述のような事態ではなくなっていく。そして、それらが近年、パワーを減じ、再びこの記述のような事態になってきた。これが私の捉え方である。

ということで、私の論と本書の論とでは、共通性とともに、違いというかずれというか、そういうものを含んでいる。

１．再帰性と教育実践の自己展開サイクル

本の正式タイトルは、宇野重規・田村哲樹・山崎望『デモクラシーの擁護――再帰化する現代社会で』ナカニ

シヤ出版２０１１年である。

私は、次の小論のなかで、教師の教育実践に焦点化して「教育実践の自己展開サイクル」というのを提起した。

浅野誠「沖縄の教育実践の課題」『新沖縄文学』４６号沖縄タイムス社１９８０年

その後も、今日に至るまで、このサイクルを使用して、いろいろと論を展開してきた。そのなかでこのサイクルは、１９９０年代以降日本でも広く知られるようになったギデンスやベックなどによる「再帰性」の構図と共通するものが多いことに気付かされることがしばしばあった。

「再帰性」を論じる分野が主として社会学であり、私が扱った教育実践の分野とは異なるのだが、理論構成は共通している。そんなこともあり、ギデンスやベックの著書をいくつか読み、このブログでも触れたことがある。

また、以前から「熟議民主主義」という用語に出会い、気になってきたが、追いかけてはこなかった。とはいえ、この春に雑誌『高校生活指導』の最近号のなかで出会った田村哲樹さんの「熟議民主主義」論は興味深く感じた。

ということで、書店でこの本が眼に触れ、目次をみていると「再帰」「熟議民主主義」を扱い、興味を感じたので購入読書したものだ。政治学の専門書で、難解なところも多かったが、期待に違わないものだった。

そこで、何回かに分けて、紹介コメントしたい。

本の構成は、三人による共同執筆の［はじめに］「一　共同綱領――デモクラシーの擁護に向けて」に加えて、個人執筆になる３章がある。今回は、３人の共同執筆個所に絞ることにする。

まず［はじめに］での次の文に注目しよう。

「自分たちがなしたことが、自分たちにどのように跳ね返ってくるか、あらかじめ完全に予測することは難しい。とはいえ、自分たちが、いわば閉じられたサイクルのなかにあるという感覚は、現代人に共通したものではなかろうか。それは、「無限の進歩」や「発展」を信じることのできた、近代においても初期の段階とは大きく異なる実感であるといわなければならない。

このような、わたしたちは閉じられたサイクルの内部にある、言い換えれば、外部は存在しないという感覚は、わたしたちを不安に陥れるかもしれない。たしかに、わたしたちに「外から」意味を与えてくれた、かつての超越的宗教や伝統といったものは失われてしまった。わたしたちの行為に「外から」枠を与えてくれるような、確固たる原理のようなものも見出せない。わたしたちは、特定の信念の上に立つこともできるが、それが単に自分たちにとっての信念に過ぎないことも知っている。わたしたちがいかに不安定な基盤の上に、自らの社会を営んでいるか、思い知らざるをえない。

とはいえ、このことは、逆にいえば、自分たちのことは自分たちで決めていかなければならないことも意味する。それは、ほとんどデモクラシーと同義語でもある。よいにつけ、悪いにつけ、自分たちの運命は、自分たちの力でコントロールしていくしかない。もちろん、それを適切にやっていける保証はどこにもない（そもそも、何か適切かを定義するのも、わたしたち次第であろう。しかしながら、時代がますますその再帰的性格を明らかにしている今日、わたしたちにデモクラシー以外に何か、本当に頼りになるものが残されているのだろうか。そのようなものは存在しないし、そのようなものにすがるべきでもない。このような確信こそが、本書を貫いている。）Ｐⅳ－ⅴ

私の「教育実践の自己展開サイクル」の発想の出発点は、デモクラシーの組織なら当然そうしている、「状況（事実）把握→状況分析→活動方針策定→実践→総括→このサイクルのくりかえし」といったものにあった。この文の「自分たちのことは自分たちで決めていかなければならない」以下も、そのことが書かれている。ますます共通性を強く感じさせるものである。

だが、この文は、「後期近代」「第二の近代」のこととして論じている。私の「教育実践の自己展開サイクル」は、日本でいうとその前の「前期近代」「第一の近代」において、理論構成を始めた。このずれ、ないしは違いをどう把握したらよいのだろうか。私にとって考えなければならない課題だ。

合わせて、私の「教育実践の自己展開サイクル」は、直接のターゲットにした沖縄教師たちに受け入れられたとは必ずしも言い難いものだったが、それをどうとらえたらよいか、という宿題も私には残されている。

人生後半期生き方

2013 年 05 月 28 日～2013 年 06 月 25 日

１１．人生の各ステージに、自分なりのテーマをつけよう

連載最終回。

人生の各ステージにはテーマがある、というか、テーマをもちたい。各ステージというのは、人生後半期でいうと、５～１０年ぐらいの区切りで生まれるのではなかろうか。

私の例を書こう。もう少し深める必要があるものだが。

４３～５２歳（９年間）　生活指導の全国的な仕事の追求と大学教育・ワークショップの探究
５３～５７歳（５年間）　新課題追究と人生再編（外国生活・退職・第三の人生への移行）
５８～６３歳（６年間）　エネルギー補給と新人生創造への試行錯誤（田舎暮らしで自由業）
６４～７０歳（７年間）　新創造の展開（新たな役割のなかで）
７１～７５？歳　未定　（以下、いくつのステージになるか、テーマも未定）
７６～　？？？

人生前半期は、社会的に標準化されたステージ、つまり、中学高校──→大学・職場新人──→職業生活（結婚出産子育て）などと言った形で所属組織とのかかわりでステージがつくられ、そこでのテーマも社会的な条件をもとに作られることが主傾向になる。

対照的に、人生後半期は、自ら主体的にテーマを作りだすことに比重が移ってくる。無論、定年とか子離れとか健康・病気、あるいは経済状況という形の条件が存在する。といっても、退職を例にとれば、それに伴ってどういう人生・生活にするのか、というテーマは個人の置かれた条件と主体的意思で大きく異なる。

その際、どれだけ主体的にテーマ設定できるかどうかが重要なこととなる。しかし、退職する際、多少の希望は持っていても、追求したいテーマについて以前から準備し、退職後直ちに行動に移る人は少ないのが実情だろう。しかし、準備していない人でも、２，３年後には自分なりのテーマ設定をしなくてはならなくなる。無論、

身体的条件で困難を抱えると、そうできなくなるが。

連載のこれまでも述べてきたように、レール・システムに支配される生き方をしてきた人が多いなか、とくに男性の場合、このテーマの創造的な設定は重大問題であろう。それまでのレール・システムの延長思考では、頼りになりにくい。

主体的なテーマ設定には、積極的に「生まれ変わる」といった気分を伴うものにもなろう。その意味でも、「人生創造」という気持ちをもちたいものだ。

１０．レール・システム・商品・金銭などへの過剰依存からの卒業

現代を生きる人々は、レール・システム・商品・金銭などへの過剰依存にあることがごく普通になっている。人生の前半期から後半期への移行時期にある４０代は、その絶頂点といえるかもしれない。

システム・レールの「真っ盛り」とも言うべき状態のなかで、過剰なストレスを抱える人は多い。金銭使用をとおしての商品購入と言う形の消費も、金額からいうとピーク期といえるだろう。日常生活品だけでなく、住宅購入や子どもの教育費などの金銭支出がピークになることが多いからでもある。

ストレスを解消するために、金銭支出する人も多い。気晴らし・レクリエーション・リラクセーションを、大金で購入する人も多い。ストレスを減らすことこそ重要だと私は思うのだが、そこに向かう人が多いとはいえない。

激しく忙しく活動し、大量高額消費することが生きていることの証とでも言えるような生活をする人を見かける。「景気が良くならなければ、生活にゆとりを持ち、楽な暮らしをすることができない」という考え方に濃厚に染まってしまい、生活を充実させるために働くというよりも、所得を増やすために働くということになってしまう。「働き動いていなければ」ダメで、「立ち止まったり、休んだりすることは」減らすべきだと考えるだけでなく、実際にそうしてしまう。

しかし、後半期に入りつつある時期になると、そうしたありようでいいのか、と振り返る機会が増えてくる。病気、転勤、子どもの巣立ちなどはそのきっかけとなる。

大量ストレスを抱えても、病気診断が怖くて病院に行くのがおっくうになる、という状態からの卒業が始まり、それまでのありようを問い返すようになる。勤務先で管理職になり「順調」で健康な人は、その問い返しの時期が遅れがちだ。定年退職の時期になることもある。しかし、定年後「空白」への対応に困難を抱える人も多い。

私の年来の主張は、人生後半期に入る４０代半ばには、こうした再検討を始めたい。

その再検討には、レール・システム・商品・金銭などへの過剰依存への問い返しを並行させたい。金銭・商品に支配される生き方から卒業する、つまり依存度を減らすと言うことでもある。そしてまた、商品・金銭使用をあおるようなコマーシャル文化からも距離をとるということである。健康をお金で買う、ストレス解消をお金をつぎ込んで果たすというありようからの卒業でもある。

そうしたなかで、改めて、「豊かさ」とは何かを問い返し、ライフスタイルを改造創造していくことが期待される。人生前半期に、レール・システム・商品・金銭などへの過剰依存をしてきたことに身に覚えがある人は特にそうあってほしい。

９．人間関係を豊かにする中で、自己を豊かにする

連載前回の最後あたりに「自分なりの計画と準備をもって「攻め」でもって向かう人と、「流れに任せる」人、多種多様だ。私が言ってきた人生後半期の人生創造は、「攻め」で向かうことを提起したものとも言えよう。」と書いた。

ストレスフルな生活には、「煩わしい人間関係」を伴う事が多い。好んで人間関係を作ると言うよりは、システム・レールに従属させられた人間関係であり、業務上の都合での人間関係が多いから、そこから距離を取りたい、可能ならその人間関係は捨てたい、と思う人さえいよう。移住などにも、人間関係の「一新」「更新」という願いが反映していることさえあろう。

できれば、匿名的な、あるいはバーチャルな人間関係の方が煩わしくなくてよいということで、人間関係そのものを作り出すことを避けたいと感じている人も多い。

こうしたことは、とくに男性に多そうだ。女性の方が、自分の希望に応じた人間関係を作る体験を豊かに持ち、人生後半期には、前半期とは異なる形で豊かな人間関係を作っている人が多いようだ。男性は、システム・レールとの関係で、業務との関係で人間関係をつくってきた人が多そうだ。だから、そうしたことが消滅ないしは激減する退職後の人間関係構築に戸惑う人が多い。

「流れに任せる」人は、そうした結果を呼び起こしやすい。配偶者との人間関係だけになり、「濡れ落ち葉」になったり、あるいは、趣味とする物相手の関係に入ったり、ペットとの関係に入ったりして、人間関係づくりを避けることになってしまう。

「自分なりの計画と準備をもって「攻め」でもって向かう人」は、そうではなくて、人間関係を豊かにする中で、自己を豊かにするということで、人生後半期を築いていく。

考えてみると、自分なりに豊かに人間関係を築く経験が乏しい人は結構いる。そんな人にとっては、たまたまの趣味サークル、シルバー人材センターのつきあい、近所付き合い、同窓つきあいなど、きっかけはなんでもいいだろうが、システムやレールから距離のある「自由」な人間関係のなかで、新たな人間関係を築いていけるかどうかがポイントになろう。

人生後半期を、「下り坂」イメージ、あるいは「喪失」イメージで描くよりは、新たな創造イメージで描きたい。その中軸に、新たな人間関係の創造を位置づけたい。

例として、私自身の現在の人間関係づくりを振り返ってみよう。それには、ここ沖縄玉城に移住する以前の関係を継続ないしは再構成する一群がいる。研究仲間であり、現在も交流を続ける人との、メールなどの交流だけでなく、沖縄旅行の折に我が家を訪問して下さる方も多い。無論、日本生活指導学会をはじめ、現実に共同作業をすすめている関係者も多い。卒業生の訪問も多い。

ここ沖縄玉城に住み始めて、１９９０年以前の第一次沖縄生活での交友関係が再開発展する例も多い。かつての同僚や卒業生たちだ。またかつての卓球仲間との復活例もある。

ここにきて大きいのは、居住する中山集落および近隣集落の方々との関係が激増したことだ。友人とはいえなくとも知人と言える方は、１００名内外おられるだろう。この地域に住んで、地域行事や共同作業に参加してい

れば、ごく自然にそうなる。

さらに、シュガーホールや学童クラブ、そして半島芸術祭など、南城市のいろいろな行事企画取り組みなどを通しての友人知人は、これまた１００名内外だろうと思う。卓球つながりでも、新しくつながった数十名のかたがおられる。

また、このブログをきっかけにつながり始めた方もおられる。

大学授業などでの受講生とのつながりが、授業終了後も続くことが結構ある。さらに、共同研究も含めて大学人・研究者との新たなつながりもある。

また、我が家訪問者とのつながりも増えている。

こんな風に、私の場合、つながりが結構増えている。数百人以上の方との新たなつながりができたかもしれない。それらのほとんどが、義務的なつながりというよりも、私自身と相手の方の自主的選択の中で生まれ継続していることが特徴的だろう。

８．解放と創造　「青年期」再現を求める人生後半期

現在、人生後半期にある人々は、１９６０年代以前生まれで、青年期を、戦中戦後、そして経済成長期に送った人が圧倒的に多い。農業を中心とする家業を継承するのではなく、転業転職し、その多くは『雇われ人』になった。それは、従来の伝統的な生き方・生活習慣から解放され、自分なりの人生を創りだすという気分をはらむものだった。それは、１９５０～６０年代に一般化した「青年期」を享受したものとされる。

ところが、その後の人生では、勤務先の企業をはじめとする巨大な社会システムに支配され、ストレスフルなものであった。学校にせよ、学校から企業就職へとつながるレールが、競争的に築きあげられており、自ら人生を創造するというより、流れの中でいかにベターな道を歩めるかという性格が色濃くなっていく。

こうして、『解放と創造』は、夢物語になってしまい、ストレスフルな人生後半期に入っていく人が多くなる。生活における文化面も、テレビをはじめとするマスコミ文化による強い影響下に置かれ、自分なりのものを作り出すことに困難を感じる。結果的に、システム・レールへの依存症的になってしまう。

こうした不全感を多少なりとも持つ人がかなり存在していると言えよう。企業社会に距離を置いたつもりの専業主婦層のなかにも、会社に仕える夫・学校に「仕える」子どもへのサービスに追われて、不全感を持つ人は多い。

そうしたことからの解放を求め、自分なりの創造ができるチャンスを求める人生後半期の人は多いだろう。それを転職・起業・定年退職、子どもの巣立ちの機会などに実現しようとはかる人は多い。

若い時に実現できなかったことを、人生後半期に実現しようとしているかの印象さえ受ける。そこにいろいろなタイプが生まれる。定年退職を例にしてみよう。

退職前から考えてきた、自分なりの起業を展開する人。

趣味と実益を兼ねた半農半Ｘを追求しようとする人。

夫の世話から卒業できると思いきや「濡れ落ち葉」的な夫にあいそをつかす妻

繁忙でなしえなかった旅を夫婦でエンジョイする。

田舎暮らしを始める人。

肉体的な無理がたたって、療養生活になり、不全感が取り払われない人。
退職不安があって、再雇用生活をする人
収入減による生活不安への対処に悩む人

それらには、自分なりの計画と準備をもって「攻め」でもって向かう人と、「流れに任せる」人、多種多様だ。私が言ってきた人生後半期の人生創造は、「攻め」で向かうことを提起したものとも言えよう。
それにしても、システム・レールから多少は自由になれることに、「ほっとする」「喜ぶ」「不安」をもつ。それを機に、何かに向かいたい。向かわざるをえないといえるかもしれない。

７．ストレス過剰への対処　ルーティン化した行動　依存

ストレス過剰の時代だ。そのストレスに対してどうするかが、人生後半期をうまくやっていけるかいけないかの大きな焦点になる。
ストレス過剰を減らすために、あるいは避けられないストレスへの対処のために、きまりきった行動を継続するという形でのルーティン化した行動をとるという手段がある。その一つは、生活習慣をルーティン化することだ。
朝６時起床、体操、排便、食事、歯磨き、出勤準備、出勤、７時３０分発乗車・・・といった具合に。あるいは、午後のコーヒー一杯。４０分間隔での休養をはさんだコンピュータ作業。土日に２時間の運動。一日７０００歩のウォーキング。
誰でもと言ってよいほど、こうした生活習慣的な営みをしている。そのことで、ストレスを減らし、安心感と生活の安定が得られる。

※　こうしたものは、ステレオタイプ（常同）的性格をもっている。癖と言われるものは、それを無意識に行っているものだ。「首をかたむける」「膝をゆする」「髪に触れる」など、だれもが持っている。ストレスを強く感じる時、出やすい。ストレスを感じていることの信号のようなものだ。その癖をやめよ、といわれるとかえって混乱を起こしやすい。ストレスが減って行くと、知らぬ間に、癖が消えていく。

私の場合は、１２～１３歳の時に、瞬きを激しくするチックが始まった。当時の医師はよくわからず『顔面神経痛』という診断名をつけたが、今ではありふれたものになっている。田舎から都会の中学校に出て、今までにないストレスがかかったためであることが、１０年もたたないうちに、自分で理解できるようになった。『神経痛』治療の対象ではないのだ。そして、２０代後半、沖縄生活を開始するとともに、頻度が減少していき、４０代５０代ともなって消滅していく。今では、私がチックを持っていたことを知る人も減ってきた。

人生後半期、とくにその前半である４０代後半から５０代にかけて、こうしたストレスが過度にかかる事例が多い。とくに近年そうである。私が経験した大学教員もそうであるし、小中高校教員も、過度のストレスの中で、精神疾患に陥り、休職に至る事例、また突然の重篤な病気に見舞われる事例が増加傾向にあるようだ。生活習慣病も、その多くが過剰ストレスとかかわっていそうだ。
打開策としては、まずは過剰なストレスを減らすこと、または、過剰なストレスを避けることをあげなくては

ならない。にもかかわらず、それらを受忍しなくてはならないことも多い。
　こうしたストレスへの対処として、上に述べたように、生活習慣をルーティン化し、できるだけ健康な生活を送ろうとすることがある。こうしたことで、安定安心がえられるかどうかが重要な分岐点になろう。
　ルーティン化した行動は、何かへの「依存」ともいえよう。依存がすべて悪いというわけではない。むしろ、ストレス解消のために、何かに依存することは避けられないというべきだろう。何かに上手に依存するように、自分自身で対応できるかどうかが焦点になろう。その依存には、事態を悪化させるものとそうでないものがあるように思われる。
　悪化させないで、上手に依存するということは、その依存のありようを自分なりに調整し、よりましなものへとバージョンアップをはかるようにできているということだろう。そうできないと『依存』ではなく、「依存症」と名付けられるものへと移行していく。

６．身体的円熟と精神的円熟のバランス

　身体上も精神上も、加齢にともなう弱化を否定するわけではなく、むしろそれを認め受け入れつつ、両者ともに、その豊かな円熟をはかることを、これまで主張してきた。また、それには、かなり個人差があることも述べてきた。
　その個人差は、両者のバランスの違いに現れやすい。それが、人生後半期の特徴の一つといえるかもしれない。精神力は円熟し旺盛だが、身体がいうことをきいてくれない、という話によく出会う。その結果、働き過ぎが生まれやすい。５０代の私は、まさにそうした事態の中に居た。それだけに、身体力を向上させようと、登山などのスポーツに励み、さらにはアンチエイジング模索に夢中になる例にも出会う。
　逆に、身体上は円熟と言うか、はつらつとし、何も問題がないのに、精神的に「やる気」をなくしたり、自己認識力を低下させている人も多い。
　いずれにしても、自分の身体と精神についての自己認識をどれだけ深めることができるかどうかが、加齢の中で重要なテーマとして浮上する。別の表現を使うと、「マイペース」で生活することを上手にすすめたい。「マイペース」という言葉は、周りからの要請にうまく対応せずにいる人を指して、隠語的に悪い意味で使われることがあるが、ここでは、積極的意味で使用している。「オーバーワーク」や「アンダーワーク」ではなく、自己の身体と精神にそくして適切に動くという意味で「マイペース」ができるかどうかは、当人の意思と力量にかかわっている。

　精神と身体がうまくバランスがとれる人はラッキーかもしれない。大切なことは、バランスがとれていないにしても、その事態を受け入れ、自分の身体と精神に見合って、円熟した動きをすることだろう。
　それは、生活スタイルとしても、また社会的活動としても、そうありたい。自己の身体と精神における円熟は、自分一人に限定せず、生活スタイルとしても社会的活動としても表れる。
　その際の一つのポイントは、それらがどのような人間関係を築きつつなされるか、ということにある。「個人化」の進行の中で、人生後半期における個人化が孤立化という形態を伴いつつ進む人が増加しているようだ。職業や社会的位置で一定の位置を占めている時には、孤立化はいやおうなしに防止できる。しかし、それらは、自らの

意思と力量で築かれたものとは限らない。退職などで、それらの位置から身を引いた時、どのように人間関係を築いているかが問われる。

人生後半期における転居や移住では、新たな人間関係構築が中心テーマとなる。旧来の共同体の消滅が最終局面を迎えつつある今、自ら新たな人間関係を構築できるかどうかは、生活スタイルや社会的活動における円熟がどの程度できるかどうかをはかる試金石だとも言えよう。

それは、当人自身の円熟度を示すだけでなく、当人が生活し社会生活を送っている場(地域)の円熟度にも左右される。その点では、沖縄も含めて日本の都市は、きわめて未熟だといえよう。そうした場（地域）の円熟を増すことに寄与しながら、自己の円熟を進める事が現実的課題になっているともいえよう。

５．精神的円熟　加齢＝弱化とは限らない

精神上の円熟は、身体上の円熟とは様相が異なる。年齢とともに経験や情報などの蓄積が増大していくから、加齢が弱化を意味するとは限らないからだ。無論、脳生理学上の弱化はあろうが、全体としてみると、加齢＝弱化になるとは限らない。

精神のもちようによる個人差は、身体上の個人差よりはるかに大きいだろう。たとえば、若いころの認識・思考を絶対化しがちで、新たなものを取りいれること、あるいは新たなものを創造することが苦手な人には、加齢に伴う弱化が進行すると言えよう。権威に頼ることを好む人で、権威あることを習得蓄積し、それを普及することが中心で、自ら創造することが少ない人もそうであろう。

逆に、それまでに得た経験や情報の蓄積を生かしつつも、過去にすがらず、さらに新たな経験や情報を獲得創造しようとする人は、弱化どころか強化さえして、円熟という言葉がふさわしくなるだろう。

例をいくつかあげよう。

まず私と類似の職業ということでいうと、７０代８０代になっても、新鮮な思考を著書として公刊する人などは、円熟に向かう例だろう。私が見聞した大学教員にも、この双方がおられる。５０代が分かれ目のように思われる。４０代に研究上のピークに達し、５０代は管理的行政的な仕事に比重を移し、研究は「そこそこ以下」と言う人は、６０代に入れば、研究上は「過去の栄光・蓄積」に依存することになる。管理的行政的な仕事を避けられないとしても、そのなかでも研究を続行し、創造的な研究を推進する人は、円熟する６０代以降になっても、なお盛んに研究業務を継続する。

次の例は旅だ。６０代に入って、時間と金銭面の余裕が出て、海外も含めた旅行に出る人が増える。その際、休養的な比重が高い人と、新たな発見・関係創造の比重が高い人とでは、旅の趣が異なる。既製品のパック旅行を取るか、自ら組み立てる個人旅行を取るかの違いもある。パックであっても、旅先で出会う人、旅仲間との関係構築へと向かう人は、女性に多いように思うが、そんな人は円熟に向かうだろう。

同じようなことは趣味についても言えよう。与えられたものを消費することにとどまる「消費型趣味」と対照的に、円熟に向かうのは「生産型趣味」があろう。ガーデニングを例にすれば、テーマ性の強いタイプの人、ガーデニングをとおして人間関係を構築する人と、そうしたことが少ない人とでは、〔円熟〕に向かうかそうでないかの違いを生みそうだ。

４．身体との付き合い方の私の苦い経験

前回書いたことは、私自身の経験に基づくものだ。幼少期の病気などもあって、虚弱であったために、いつもいくつかの病名診断を持ちつつ、歳を重ねてきた私だけに、自己の身体については、人一倍関心を持ち、配慮をしてきたつもりだった。それでも、虚弱であった以上に、身体の自己管理の下手さによる失敗を重ねてきた。

いくつか例をあげよう。

気管支炎

１０代半ばから季節替わりのほぼ年二回、気管支炎で４０度近い高熱を出し、数日寝込むことを４０年続けてきた。全くなくなったのは、５０代終わりになってからだ。高熱なので、医者になかなか行けなかったが、行っても処置や指示は「ゆっくり休み食事をとりなさい」ということで、薬は解熱剤と去痰剤だけだった。

そのうち、医師には行かず、自分で対処する方法をたくさん模索してきた。極めつけは、アロエの鼻うがいだ。効果は確かにあったが、焦点は原因除去だった。季節替わりもあるが、原因である過労状態の赤信号としての気管支炎発症であり、それへの対処がなかなか上手く出来なかった。どうしてもしなければならないことがあるというので、熱が残っている状態で動いて、悪化させたことが何回もある。４０代以降になってようやく、発症したら、「腹をくくって」４日間は寝る、平熱に戻っても丸１日は動かない、という「鉄則」を打ち立てて、徐々に発症回数を減らしてきた。

腰痛・肩痛

肩痛は２０代前半、腰痛は３０代半ば、スポーツが最初の原因だ。これらにもいろいろと対処策を試み、少しずつ上手くなるものの、ほぼ３０年間付き合ってきた。対処法がようやく分かり、痛みから解放されたのは、この１年だ。「円熟」のたまものだが、まだ改善の余地はありそうなので、探求を重ねている。

突然の高熱と業務量管理

１９９９年から２０００年にかけて、突然の高熱（数時間）を十数回くりかえした。最後に診療してくれた専門医師に開口一番『仕事やめられませんか』と、ドクターストップを言われた時のショックは大きかった。それまで、自分の身体容量と業務量とのバランスは、うまくとっていたつもりだったからだ。そのときまでの１０数年、自分なりの記録をノートに取り、業務量が上限を超えないように配慮してきたのだが、その業務量の上限設定が、間違っていたことが露呈したのだ。

医師の宣告の時、「まさか、それほどとは」という気分だったが、あのときから１３年たった今となってみれば、「そうだ」ということが、はっきりと了解できる。しかし、５０代前半の当時、自分の身体にかかわる認識・管理は、かなり未熟だった。健常な人であればそれほどでもないかもしれないが、病弱な私には過剰業務だったのだ。

２００４年からの第二次沖縄生活で、積年の病気のかなりが改善した。しかし、２００７－２００８年のアメラジアンスクール・イン・オキナワ校長の際には、当初の約束の２倍近く働いてしまい、またもや健康悪化が進

行した。思い切って退任することにした。この退任は、過去の苦い経験に基づく判断だった。

そして、その後、徐々に改善が進み、ここ３年、発熱経験は途絶え、ここ２年は風邪もひいていない。こんなことは、生まれて以来、初めてのことだ。

こうして私なりに円熟した自己管理ができるようになったのは、「遅きに失した」感もするが、でも、未熟な自己管理状態のままでいるよりはるかにいい。

３．身体の円熟と身体との付き合い方の円熟

人生後半期で「年齢を重ねる」とはなんだろうか。「老化」「加齢」と言う表現があるが、今の私は、とりあえず「円熟」という表現を使って考えてみたいと思っている。「熟年」という表現にも通じる。身体面と精神面とに分けて、まず身体面から考えてみよう。

「弱くなる」ということに象徴されがちな、身体の加齢に伴う変化を、身体の円熟ととらえる。そして、身体の加齢に伴い変化しつつある自己の身体を、そのまま受け入れ、より深く認識しつつ、自己の身体の持つ豊かさを発揮していくようにすることを、身体との付き合い方の円熟ととらえる。それを短く言うと、身体相応に振る舞うということであり、その振る舞い方に円熟するということだ。

それらは、加齢によって生じる「弱くなること」を受け入れないで、『普通り』に身体を使用するというものではない。また、「弱化」しているにもかかわらず、「弱化」していないように見せかけるとか、自分の現状より強大なパワーを発揮させようとする無理なアンチエイジングではない。

現実には、４０代から６０代にかけて、「実力」以上に過剰に身体を働かせる実情が、今日に生きる人々の多くに見られる。それが、ストレス過剰と結びあった「生活習慣病」をはじめとする病的状態を膨大に作りだしている。自己の身体をそのまま受け入れ、より深く認識して、過剰なストレス・業務を拒否軽減しつつ自己の身体の持つ豊かさを発揮していくようにすれば、避けられた病が多いのではなかろうか。加齢にともない、止むをえず発生するものではなく、身体との付き合い方に円熟していれば避けられたのに、未熟なので病に陥る例が多いと思う。

自分の身体についての認識が未熟なので、外との関係から発生する、過剰な業務やストレスをうまく対処しきれないのだ。その際、２０代３０代の身体「実力」から、こんなことをすることは、『無理』なことではない、という判断をすることが多い。「若さ」を誇るとか、「若さ」を失いたくないということには、実は「未熟さ」が潜んでいるのではなかろうか。

こうしたことが、実年齢以上に、身体を弱化させる。「若さ」で対処する他に、医療対処、あるいは健康食品、サプリメントなどの外的なものに依存して解決しようとする傾向も強い。なかには、ストレスに対して、自己の身体認識をふまえて対処するのではなく、酒やたばこなど依存症的に解消しようとすることが、３０代から５０代にかけて多いこともその例だろう。

ここで書いたことは、実は私自身の苦い体験に基づいている。次回書こう。

２．私は実年齢以上に（＝老けて）見られてきた

私個人は、１０代後半から、実年齢以上に見られる事態を５０年続けてきた。

エピソード１．

高校３年の卒業間近のころ、愛知県立図書館で、同級生とともに学習する日々のこと。良い学習環境だったので、満席になることが普通だった。その際、出場者が出ると、新たな入場者が入れる。それは未成年と成人とに分かれていたが、私が出ようとする時、成人の人が「自分の順だ」と思い入場しようと構えるが、私が未成年であることを知って、がっかりするシーンを何度となく見た。

エピソード２．

大学４年生の時、学科の学生数名とともに、岐阜県恵那の教育調査をしていた。相手方に、私が引率教員だと思われた。

エピソード３．

沖縄に住み始めて、沖縄の教師たちと共同研究を始めた。初対面の教師は、私を見て４０歳過ぎと見立てた。私はその方を２０代後半と見立てた。実際は、全くの逆であった。

こんな感じが、最近まで続いてきた。若いころは、エピソード例のように、１０歳以上年長に見られることがしばしばだったが、最近では、数歳ぐらい年長見られるにとどまったり、ほぼ実年齢に見られたりするようになった。卓球をしている時は、実年齢より若く見られることもある。

こんな風に、実年齢以上に見られることが普通の私だったが、「損」をしたり、「イヤ」な気持ちなったりすることは少ない。むしろ結構「お得」だったのだ。「お得」というのは、実年齢以上に尊重され、丁寧に応対していただけることが多かったからだ。調査の時などは特にそうだ。

私が実年齢以上に見られた要因で、思い当たる二つのことを書こう。

一つは、実年齢以上の「役回り」を引き受けることが多かったことにあろう。たとえば、１９７２年沖縄大学の教員になったのは２５歳だった。当時の沖縄大学には社会人学生が多く、クラスの三分の一以上が、私より年上だったこともあった。自然と「老け役」にならざるを得なかった。

もう一つは、「疲れていた」ためだろう。１０代後半から５０代前半までは、繁忙につぐ繁忙の生活で、「疲れ」が蓄積していた。とくに精神的疲労は激しかった。そのことが、実年齢以上に老けて見えるようにしたのだろう。

そして、年齢以上に若すぎる人と付き合うのは、得意ではなかった。とくにギラギラしている人は、そうであり、「ひいて」しまっていた。実年齢以上に若く見られるタイプの人は、なぜか「未熟な」タイプの人に見えてしまったこともある。

私は、「若く」見えることよりも、「熟」しているかどうかに関心が向いていた。チームで仕事をしている時、若くてエネルギッシュな人と一緒よりは、「熟」して落ち着いている人との方を、好んでいた。

だから、自分自身も、むりに「若く見せよう」などと思ったことはなかった。むしろ、「老けてみられる」ようにさえしていた。数年前、白いあごひげを伸ばして「仙人」風にし、７０歳代に見られていた時など、そんな気分だった。

１．実年齢以下に見られるのがいいか、以上にみられるのがいいか

「人生後半期の生き方」ということを言いだしてから、もう１５年以上たった。私自身も後半期に踏み入れてからほぼ２０年になる。人生を四分して、人生後半期をさらに二分するなら、そのなかの後半期に入ろうとしている。「こうありたい」という人生後半期ではなくて、「こう体験してきた。体験している」ということを語りうる年齢になってきた。

そんなことについて、いずれはまとまった形で書きたいと思うが、今は、随想風にあっちこっちしながら、いろいろと書き散らしたくなった。

第一回目は、タイトルのようなことを書こうと思う。このタイトルにこだわる人が結構いる。二〇代三〇代の時のこだわり方と人生後半期でのこだわり方とでは、様子が異なる。

それでも、実年齢以下に「若く」見られるのを好む人が圧倒的に多い。「若さ」信仰とでも言えよう。アンチ・エイジングばやりのなか、その努力・投資をする人も多い。

と同時に、年長者を尊重する「敬老」信仰とでも言えるものが根強くあり、尊重される扱いを好む人もいる。無論、両者をアンビバレントに共存させている人も多い。公共交通機関の「優先席」に好んで座る人、席を譲られると、「年寄」にみられて、いやな顔をする人。この中間にあって、両者のやりくりにとまどう人も結構いる。「坐りたいけど、年寄りに見られるのはイヤだ」というわけだ。

食事会・宴会で、年長者向けの席に座りサービスされるのを喜んで、あるいは当然のごとく受け入れる人、逆にそれを避け、年少者とともに働きサービスする側に回りたい人。

中には、図々しく両者を使い分ける人もいる。「そんな歳に見えるんですか」とグチを言っているような素振りをしつつ、年長者扱いのサービスを喜んで受け入れる人もいる。素直に、実年齢を受け入れることはなかなか難しいのだ。

五〇代終わりから七〇代初めまでは、こうした境界線の年齢だから、いろいろとある。

だが、このあたりを使い分けるのは難しい。本人も難しいから、この年代と付き合う人は余計に難しい。「空気を読む」のは意外に難しい。とくに、自分の実年齢を受け入れることに抵抗を示す人は難しい。だから、あたりさわりのない対応で「かわしていく」、あるいは、実年齢からマイナス５～１０歳ぐらいとして対応し、無難に済まそうとする。

私の考えは、実年齢以下でも以上でも、それほど一喜一憂せずに、実年齢を受け入れて、自分なりに振る舞えばいいのではないか、ということだ。無理をして、実年齢以下に見せようとする必要はない。実年齢以上にみられても、それだけ『重み』を周りに与えているなら、それはそれでいいのではないか、というものだ。

この時期は、実年齢による違いよりも、個人差の方が大きい。とくに生活上の疲れの程度が反映していることが多い。また、持病が振る舞い方に反映する人も多い。そうしたことも含めた現状を受け入れて振る舞うことが、自然でいいと思う。自然体ということだ。

次回は、私自身の経験をもとに話をすすめよう。

沖縄大学地域研究所『琉球列島の環境問題』高文研２０１２年に触発される

2013 年 05 月 20 日

タイトルにある「琉球列島の環境問題」を多様な角度から論じる２０名以上の執筆者による本だ。多彩な問題・論点が並び、学ぶところが多い。本書から触発されて、少し書いてみよう。

１）サブタイトルは「「復帰」４０年・持続可能なシマ社会へ」とあるが、ここ２０年余り頻繁に使われてきた「持続可能」用語を、「シマ社会」と結びつけるのは興味深い。

原理的に遡ると、『持続可能』は、地球、あるいは地球自然であろう。それが、いろいろな言葉の修飾語へと移し替えられてきた。とどのつまりとして、『持続可能な経済発展』に結び付けられる事例が蔓延するようになり、それは地球・地球自然の持続可能と対立的でさえある。この両者の中間には、持続可能な人間社会というものがあり、「シマ社会」もその一つだろうが、そこには、「持続可能な経済発展」とは対抗的であろうとする姿勢がこめられている。もっとも「シマ社会」をどう規定、構想するかについては、それほどに論じられているわけではないが。

２）人間も実は自然の一部であり、人間の持続可能は、自然の持続可能を前提とする。それはいってみれば、絶対的命題だろう。しかしながら、人間活動が、自然の持続可能を地球規模で危機、ないしは危機を通りこすようになってから、すでに相当の時間が経過している。近年、その危機認識が広がっているが、それにもかかわらず、なお「持続可能な経済発展」を優先する政策展開、人間生活（生活スタイル）展開が一般的であることに、今日の特質がある。それは、琉球列島においてもそうである。その問題を多様に論じているのが、本書だともいえよう。

３）そうした問題について歴史的に論じているのが、本書の特徴ともなっている。第Ⅲ章の諸論がそうである。その中でも、羽地朝秀や蔡温の施策を詳しく述べているのが注目される。統治者として、『環境施策』を展開している、というのだ。

４）環境問題は、その時代の産業のありようが大きくかかわる。近世では、農業生産が大きくかかわる。今日で言えば、農業だけでなく、公共事業という名の「開発」整備事業、そして、観光事業がおおきくかかわる。それらが、「たれながし」的自然破壊として展開され、自然へのダメージは、「環境配慮」による軽減措置をはるかに超え、トータルとしてみると、自然破壊は進行の一方であり、それがひいては産業破壊を生みだしてきている。観光産業がその典型であり、本書でもたびたび論じられる。

５）環境破壊をするもう一つ巨大なものは戦争であり、戦争準備としての軍事展開だ。それらは、自然災害以上のものがあるとさえいえるのだが、それにも触れられている。

６）以上述べてきたことは、統治者の政策展開と直結している。施策展開そのものが、環境破壊をすすめているといえる面が強いのだ。環境保護、持続可能な環境のための政策展開は、それに、全くといってよいほど追い

ついていないのだ。

７）人口増と環境問題との関わりの問題がある。琉球列島に数万人住んでいる時代とは異なり、１０万人以上の人口がある近世以降、この問題が浮上してきた。そのあたりも若干触れられている。
人口の爆発的増加が、ここ数十年の間に生じた。それが環境負荷を増大させ、果たして、持続どころか回復が可能なのか、という論議が必要な時点にさしかかっているのではなかろうか。

８）この爆発的に増加した人口のもとでの人々の生活スタイルが激しい環境負荷を与えており、生活スタイルの変更が求められている。その点についても、本書はいろいろな形で述べている。リサイクル一辺倒ではなくて、減らすこと自体が求められること、大量消費を止めることの必要が述べられる。

９）この大量消費構図は、人間関係でのモノ媒介、カネ媒介の深化と並行している。それは、直接的な人間関係の減少を拡大していく。それへの一つの対処アプローチとして、サブタイトルにある「持続可能なシマ社会」が存在している、といえよう。

「一住宅＝一家族」とは異なるありようを追求する建築家たち　2013 年 04 月 28 日

山本理顕、中村拓志、藤村龍至、長谷川豪『地域社会圏』ＩＮＡＸ出版２０１０年を読む。住や建築に関心があるとはいうものの、建築家が書いた本を読むのは、自分の家を建てる時以外は滅多にない。しかし、住をめぐる新たなありようの追求が必要だろうとは思っていたので、タイトルに惹かれて店頭で見つけた本だ。
まず私が関心をもった主な個所を紹介しよう。

「いま私たちが住んでいる住宅には実は致命的な欠陥があるのだ。あるいはその供給システムには致命的な欠陥がある。（中略）いま私たちが住んでいる住宅のモデルはいつ頃できたかというと、第二次世界大戦後、圧倒的な住宅不足を補うために開発された戦後復興住宅がその起原である。そしていまでもこの住宅モデルが私たちの住宅に大きな影響を与えているのである、基本的にはこの戦後復興モデルといまの私たちの住宅とは地続きである。（中略）この最初の住宅モデルには、いまにして思えばだけど、致命的な欠陥があったのである（中略）。その欠陥とは何だったかというと「一つの住宅に一つの家族が住む」という住み方、それを理想モデルにして住宅を供給しようとしたことである，住宅は徹底して家族のための住宅として開発され、供給されたのである。（中略）住宅だけではない。日本という国家の運営システムそのものが「一住宅＝一家族」を理想モデルにすることによって組み立てられたのである。それはいまにいたるまでそのまま続いている。（中略）その「一住宅＝一家族」そのものが破綻しようとしているのに、である。
住宅を考え直すということは、だから、単に住宅の間取りの問題でもないし、二〇〇年住宅などという高耐久建築の問題でもないし、高齢者用の住宅をつくろうという問題でもないし、バリアフリーの問題でもない。いまの国家の運営システムそのものを考え直すということなのである。「一住宅＝一家族」は既に理想モデルではあり

えないはずなのに、それでもまだ私たちの内なる「一住宅＝一家族」はしっかり私たちを呪縛している。この呪縛こそが、現在の日本の八方ふさがりの病巣なのである。
だからこそ、「一住宅＝一家族」に変わる新しい運営システムについて考える。
住宅の供給システム、エネルギーの供給システム、あるいはそれを前提とした交通システム、そういう都市インフラから介護や看護、医療、あるいは育児といった生活支援システムそのものが「一住宅＝一家族」を前提としてできている。それを考え直す。「一住宅＝一家族」ではなくて、もう少し大きな単位で居住のシステムを考えてみようというわけである。」Ｐ６～７

「多様な家族がみんな「家族」を装うのは何故なんだろう。どんな特異な家族も彼らが住んでいる住宅は実は極めて標準的なのである。同性愛でも異性愛でもお一人様でも住宅はさして変わらない。みんな周辺に対しては極めて閉鎖的である。画一的である．その閉鎖性、画一性は、ここにはフツーの家族が住んでいますよ、というサインである。」Ｐ１８１

「もともと家族というのは「共同体内共同体」という構造を持っているのである。農業共同体のなかの家族であり、あるいはギルドのような職業共同体のなかの家族である。そして住宅というのは、その上位の共同体と下位の共同体との調停装置として働いているのである。（中略）そして、一言でいうとこうした伝統的住宅の構造、つまり「共同体内共同体」という構造を解体することが近代化だったのである。解体の方法は二つある。下位の共同体を解体して上位の共同体を保存するような方法、（中略）逆に上位の共同体を解体して下位の共同体を保存するような方法が「一住宅＝一家族」システムである。ちょっと単純だけど、建築という空間の側から見るとそう見える。「地域社会圏」というのは「共同体内共同体」の新しいシステムをつくることであると言うこともできると思う。」Ｐ１７４

ほとんどの人が、「一住宅＝一家族」と言うのは、遠い昔から続く当たり前のことと思いこんできたのではないだろうか。私もそうだ。そして、できるだけ良質な「一住宅＝一家族」を求めようとしてきた。１０年ほど前、何家族もが、付かず離れずで住むという形を考えたこともあったが、話題を持ちこんだ誰にも相手にされなかった。そのころ、愛知県の長久手で、若い人と高齢者が共同で済むグループホームが話題になったが、グループホームといえば、介護が必要な高齢者向け住宅のイメージが定着しているようだ。それでも、最近は、血縁がない人々が共同で住む話題をしばしば耳にする。「ちゅらさんアパート」などもそうだろう。
ひるがえって、私自身の体験を思い出した。６０年前、我が家には、血縁家族以外の人も一緒に住んでいた。一風変わった中年男性が我が家の倉庫状のところに住んでいたことがあったし、家業が繁忙な何年か、若い女性が住みこみで働いていたこともあった。
核家族を標準とする「一住宅＝一家族」などは、長い歴史の中で、ほんの数十年あるかないか、なのだ。
家族の形の多様化が著しく、「お一人様」のように、家族というカテゴリーでくくるのが妥当かどうか、というありかたも、ごく一般的にさえなっている。それは「個人化」の進行とも重なっているが、それだけに「つながり」を求めて、新たな「共同生活」を求め、その試行をする人たちも増えている。
こうした事態に対して、本書は、４００人規模の住宅を、都市、郊外、農村、といった地域で作る事例を提案している。興味深いが、今の私にはコメントする用意はない。

しかし、いろいろと考えていきたいことだ。
今、私たちは二人で住んでいるが、近い将来、それに変化をもたせる検討が必要になるかもしれない、などとも考えたりもする。

人生後半期の私流の人生創造　　2013年04月16~20日

２．転職などを機に「第二の人生」「第三の人生」へ

前回述べた時代変化のなかで、「第二の人生」「第三の人生」というように、いくつもの人生を経験する人が珍しくもなくなり、むしろ普通にさえなっている。通常、定年退職の際に、その後の人生を指して、「第二の人生」というのだが、それ以前に大転換を経験する人は多い。
それは、職業（転職など）だけではない。家族の変化（結婚出産、さらには別離や再形成など）、居住地の変化（海外も含む)、社会的事件（戦争、災害など）など、人生の多様な面での大転換を経験する人がごく普通に見られる。そしてそれらを契機に新たな人生に歩み出す人が多いのだ。
かつてのモデル的なイメージを、職業についてまとめて書こう。農業など自営業を軸に考えてきた人生イメージは、被雇用者になってもその延長線上で、『就職』をとらえ、一生に一つの職業というイメージで、そこで定年まで「働き通し」、定年でそれを「無事終えて」、「第二の人生」がスタートするというものだ。
家族にしても、離家・独立→結婚・新家族の創出（または、家族の継承）→出産・育児→子どもの離家・独立という流れが、モデルとしてイメージされた。そこでは、結婚前後ぐらいから、「一人前としての人生のスタート」があり、「子どもの離家・独立」で「第二の人生」がスタートするイメージが強い。こうした場合には、職業上と家族上の「第二の人生」のスタート時期がかなり近い。
だが、こうしたモデル的な事例は、実際にはかなり少なく、そうでない方が多数派である、と言ってよいだろう。

職業を中心に、沖縄での最近の３０～６０歳代の見聞事例（含む推理）をいくつかあげよう。
a　軍雇用員（７年）→自営業（職人）（４１年）　現在６０歳代
b　農業（８年）→建築業雇用者（２５年）→農業（５年）　現在６０歳代
c　会社員（３年）→退職結婚・子育て（１０年）→パート雇用（１２年）→有期雇用スタート　現在５０歳代
d　学童保育指導員（３年）→生協勤務（２年）→臨時教員（３年）→正規教員（２２年）　現在５０歳代
e　看護師（１６年）→看護教員養成講座受講（１年）→看護学校補助教員（２年）　現在４０歳代
f　会社員（８年）→職業資格取得のための専門学校（３年）→専門職へ　現在３０歳代
g　東京で会社勤務（５年）→身体をこわし帰郷休養（２年）→起業（５年）　現在３０歳代
h　実業高校卒業→公務員（３３年）　現在５０歳代
i　会社員（３年）→専業主婦・子育て（８年）→離婚・かけもち非正規雇用（１１年）　現在４０歳代
j　協同組合勤務（２５年）→早期退職・起業（１１年）

ｈ以外は、終身雇用型ではなく、いくつもの人生経験を経ている。その転換は、本人希望ではなく、やむを得ずと言うものが多い。そこで、身近に『ありつける』職に就くことが多い。そうであっても、「ころんでもただでは起きない」という気持ちをもち、「禍転じて福とす」ということで、「人生創造」をした人。２０歳ごろの希望を、１０年余りの紆余曲折を経て実現した人。５０歳近くなって初めて、自分なりの選択で人生創造した人もいる。ｊのように、積極的「人生創造」をした人もいる。

このように、勤務先倒産、離婚、病気とかの「禍」に出会う人も多いが、そうした時にどうすればよいか、という『備え』を持つ人はめったにいない。学校でそうしたことを教えてくれたわけではない。実際は、逆境を乗り切る体験、あるいは逆境の時に支え合う人間関係が重要な役割を果たす。そうした人間関係をもてるかどうか、つくれるかどうかが重要な意味をもつ。

こうしたことを見ながら、私は「人生創造」という用語を、１９９０年代後半から頻用し、そのためのワークショップを大学授業などで行ってきた。そのころの大学生の大半が「就活」で「しっかりした企業」への就職をめざし、そこで終身働くというイメージを持ちつつ就職していった。しかし、実際のところ、卒業生たちの多くが５年以内に転職していたのだ。

安定した就職ということでいうと、沖縄ではさらに厳しい状況にある。

今、若者が安定した生活に落ち着くまでに時間がかかり、２０代後半、３０代になって、ようやく落ち着く、ということがよく言われるが、それどころか、３０代後半、４０代、５０代になっても、転職が大変多い。安定して就職している人でも、学校教員のように、病気、特に精神的病気で、大きな転機を迎える例が続出している。

こうしたことを考えると、４０代半ば以降の人生後半期のうちの早期に、「人生創造」が欠かせないといわなくてはなるまい。「定年後に第二の人生をはじめよう」という境遇に居る人は、大変限定されているのだ。

１．『人生後半期』登場の背景にある平均寿命の伸びと職業形態の変化

これまで何度となく書いてきたことだが、人生後半期の生き方について、現在考えていることを連載で綴っていこうと思う。計画して書くわけではなく、「思いのまま」すすめるので、何回の連載になるかわからない。

まず人生後半期が広く人々の関心事になる背景、一つは平均寿命の伸び、もう一つは、職業形態の変化について書こう。

まず平均年齢の伸びについて。

平均寿命が５０歳であった戦前までとは異なって、平均寿命が劇的に伸び、８０歳となった。つまり３０年間も伸びたわけだ。これを「一人前」扱いされる時期で考えてみよう。

かつては、１２～１５歳ころから一人前扱いされたから、正味３５年間余りになる。現在では１８～２２歳だから、正味６０年間近くだ。といっても、２０代半ば以降になって「一人前」がスタートする人もいるし、また、健康寿命と言う捉え方があるので、「健康な一人前」とみなされない時期をマイナスすると、正味５０年ほどになる。戦前期と比べると、ほぼ５割増加したことになる。

その増加分は、ほぼ５０歳ごろ以降であり、私がいってきた人生後半期は、４０代半ば以降だから、それと重

なるところが大きい。

　職業形態でいうと、戦前期までは圧倒的に農業を中心とした自営業が多かったが、今では大部分が被雇用者になっているという大変化がある。それは、職業移動、人生設計としての職業選択が一般化してという事でもある。
　そして、その被雇用者は、最初の一回きりの選択に基づいて終身雇用されることをモデルとするということになった。それはモデルであって、そうでない人がかなり多くいるが、人々の思考がそのモデルにもとづいて、囚われてなされるようになった。
　その結果、「定年後に第二の人生を迎える」という捉え方もモデル化した。退職後を、「拘束から離れて、余生を趣味や社会的貢献に生きる」というわけだ。なかには、それまでやってきたことを続け、「生涯現役」とか、「若さを持続して頑張る」とかの表現に出会う事も多い。そして、政策的にも、「定年延長」「退職後の再雇用」などがいわれるようになってきた。

　そうした事態に対応して、定年後の「第二の人生」をいかに生きるかというテーマが普及し、関連書籍が溢れている。それらの捉え方には、事態の変化を従来のモデルの枠内での微調整で対応しようとする姿勢が反映している。
　それらに対して、私の「人生後半期」論は、異なる視点から提出したものだ。

日銀金融緩和≒バブルとスローライフ　　2013 年 04 月 09 日

　「日銀金融緩和≒バブル」と「スローライフ」の二つのキーワードの組み合わせは、奇妙に見えるだろうし、二つを一緒に論じることができるのかとさえ、いわれそうだ。
　しかし、「スローライフ」が今や私のテーマの中心に座っているなかで、これまた、現在の経済・政治、さらには景気・生活暮らし場面での中心テーマに躍りあがりつつある「日銀金融緩和≒バブル」をどう考えるかは、中心的関心にならざるを得ない、という事がある。
　もう一つ、日銀金融緩和と≒バブルとを「≒」を結ぶことがある。これは、先日の日銀金融緩和が発表された時、ある金融証券マンが２５年前のバブル景気の時と同じ印象をもつと話したインタビュー報道からヒントを得た表現だ。
　そして、バブルとなると、バブル崩壊とその後の「失われた１０年、あるいは２０年」と言う事態を想起する。そして、格差・貧困をイメージする。
　さらに８０年代後半のバブル期の前、働き過ぎ・生活の質といったことが話題になり、その中で、現在につながるスローライフの動向が芽生え広がり始めることも思いだす。

　景気回復を言う人には、人々の消費意欲を高めることを主張する人がいる。たとえば、デフレを脱却して、２％の物価上昇になれば、あるいは、なりそうになれば、人々は今のうちに消費しなくては、という気持ちになり、商品が売れ景気回復へとつながるという話が語られる。

商品金銭経済要素を高めることが景気をよくし、生活をよくする、という発想は、高度経済成長期と似ている。しかし、格差拡大が進行している現在、購買意欲を増すことができるのは、格差の中で恵まれた位置にある人だ。そうでない人は、他人事であり、生活に最低必要な収入を得るために追われる事態が、それほど改善されないまま継続しそうな気配だ。

そんな消費刺激のなかでは、スローライフは悪者扱いされそうだ。そうでなければ、金銭で買う商品的なものとされる。一泊５～１０万円のリゾートホテルに宿泊し、休養するというイメージだ。

今いわれているような日銀金融緩和≒バブルによる景気回復策が、たとえ効果がでても、一時的なものにとどまり、２３年前と同じような、あるいはそれ以上のバブル崩壊と「失われた〇十年」の到来が心配される。その結果、人々の生活が豊かになるどころか、格差・貧困の悪循環になることが懸念される。

そうした方向ではなく、金銭や商品への過剰依存をしないスローライフを、限られた人ではなく、多くの人々が追求することを期待したいと思う